THE JOSEI KAIZO

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年四月一日發行 大正十二年三月十三日印刷納本

女性改造

第二卷第四號

四月號

1923



良品
廉價
ハリキン石鹸
お花見に樂しむ
元氣な人よ！
花の如き美しき
多くの人よ！
益々ハリキン石鹸
の愛用を勵み給へ
五日間用石鹸進呈
ハリキン石鹸本舗
ハリキン化粧品株式會社
日本橋區馬喰町四丁目
良品廉價を以て好評なるハリキン石鹸五日間用下記へ御送附を乞ふ
氏名
住所
一枚ニ付一個
此處ヲ切取二錢郵券同封御送下



女性改造四月號目次

黑人ルネ・マラン作
高瀬毅譯
第參拾版

バツアラ

四六判 布裝

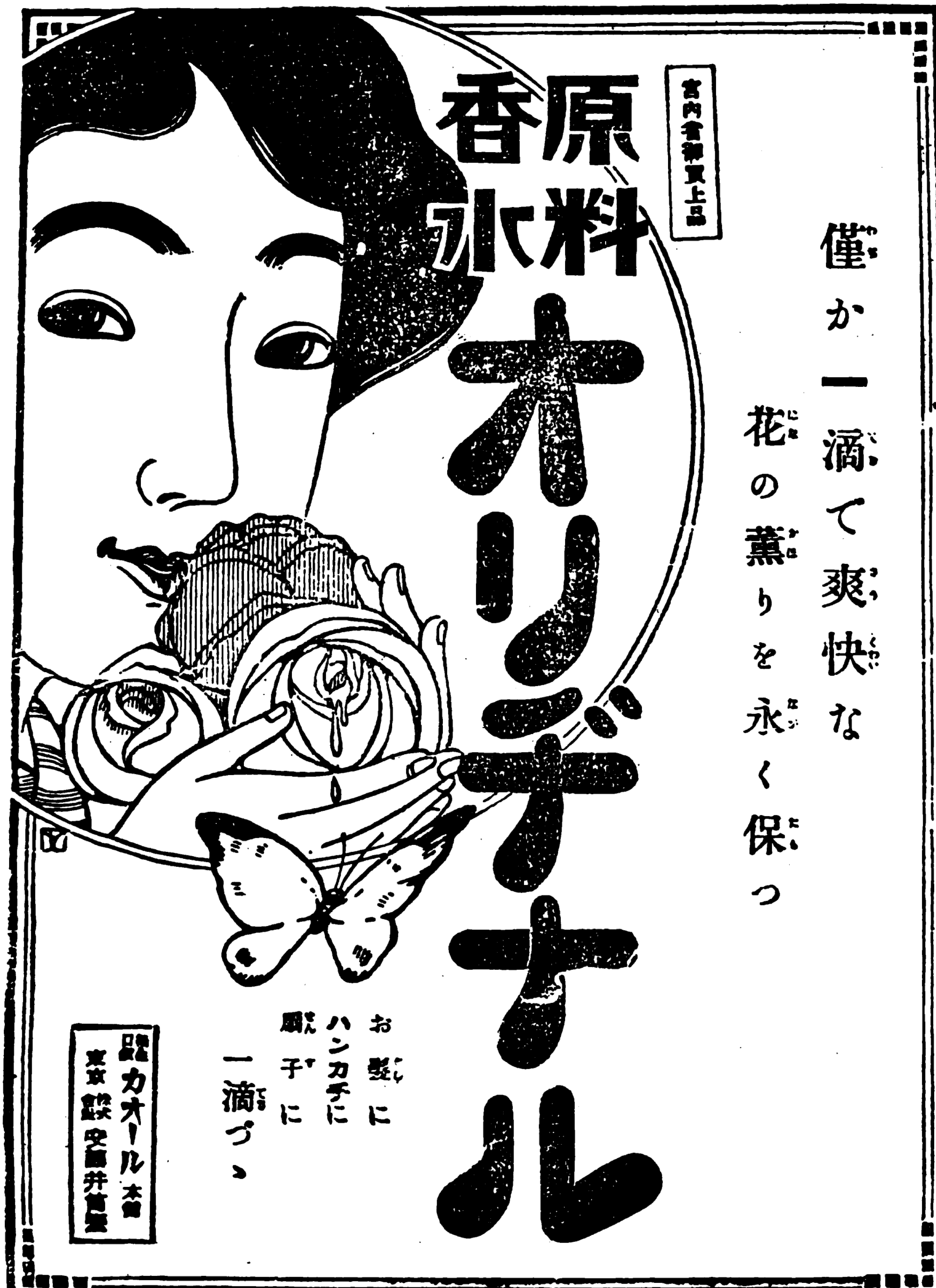
定價壹圓五拾錢 書留送料拾五錢

黑人小說出づ

黑人小說出づ——、灼熱の太陽と、サハラの大砂漠と、かの神祕靜寂の一大空間を背景とした赤道亞弗利加土人生活の赤裸々な原始的愛慾と、復讐とがいかに殘忍であるか、いかに文明の凌辱であるか、ゾラ・モオパッサンの筆と雖、三舍を避くるほどに直寫されたる本書が最近歐米讀書界を震駭しつゝある事實を諸君は知つてゐるか、一九二一年ゴンクール文學賞は本著の作者に授けられた、そして目下佛本國にのみにても三百版を重ねてをることでも本書の價値と聲望とは明瞭する。

と同時に、本書は虐げられた有色人種の白人文明に對する痛烈なる呪咀であり、雄々しき聖十字軍の宣言だ、紐育タイムスは本書を評して『恐るべき國際小說』と云つた、この力强き野蠻人の大藝術に向つて我有識者はいかに當面する。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二


宮内省御買上品
原料香水
オリヂナル
僅か一滴で爽快な
花の薫りを永く保つ
お髪に
ハンカチに
扇子に
一滴づゝ
カオール本舗
東京



小さき戀の神　(モーリツ・フォン・シユウインド)

武林無想庵作

定價二圓卅錢
送料十七錢
四六判上製

長編小說 結婚禮讃

第貳拾版

深刻無比——戀の前にはすべてが虛無だ！

虛無だ、虛無だと軀一つになつて放浪の旅に出たが『遠くへ行つちやいやよ、私は死ぬのは平氣ですよ』と媚びるが如く接吻した奥さんの姿が執拗にコビリついて又鎌倉に舞ひ戻つた。嗜いわれ……と私語くやうに云つて、ホツト熱い溜息をついた。

その息を感ずると私のからだはブル〳〵震へた、女の髮の毛が私の頰に觸れさうになつた、そのとたん……奥さんの眼が燐のやうにキラリと光つた、思はずだき緊めた奥さんの唇の上へ熱鐵のやうに濺いだはじめての接吻より……情緒を描くに天下一品、戀の前には大膽不敵なる無想庵のいつはらざる横戀慕の實錄である。

——本書の一節——

中澤臨川著 小說 嵐の前 （十五版） 定價貳圓 送料十五錢

中澤臨川著 電子說から見た世界 （六版） 定價壹圓八拾錢 送料十五錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四二〇〇

理學博士 石原純著
岡本一平畫

アインスタイン教授講演錄

四六判 上製
定價壹圓八拾錢
書留送料十五錢

最新刊

全宇宙をつらぬく純粋な理路、永劫不變にして絶對の眞理である相對性理論を、彼自らが口づに傳ふべくアインスタイン敎授は來朝された。果して敎授の講演は場所毎に白熱的歡迎を受け、怒濤の如く殺到した聽衆は、時間と空間交錯せる美しき世界を語る彼の理論に醉はないでは居なかつた。本書は敎授來朝の記念として、聽講の機を得ざりし幾百萬の好學者の爲めに、我が科學界に革命の大波を殘した敎授の十數回の講演集である。內容の平易にして整齊完美せる本書の如きは世界の珍れとする處で一讀相對性理論を悉知する蓋し容易である。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

吉田絃二郎作

小説 ダビデと子たち

定價貳圓廿錢

送料十七錢
四六判布製

第八版

時代の要求する宗敎的名著を見よ

神の如き人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗敎的感激より得たる獨特のもので、王者として自己の精神的空虛を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の皇子と或女を競爭したため、老臣からは愛憎をつかされ、又自身も腫物の膿血に惱む人生の愛慾と苦惱を氏一流の感激を以つて綴られたものだ。

識者に清冽の一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

近刊

長田秀雄作

戯曲 愛憎篇

定價壹圓六拾錢
送料十七錢
四六判布製

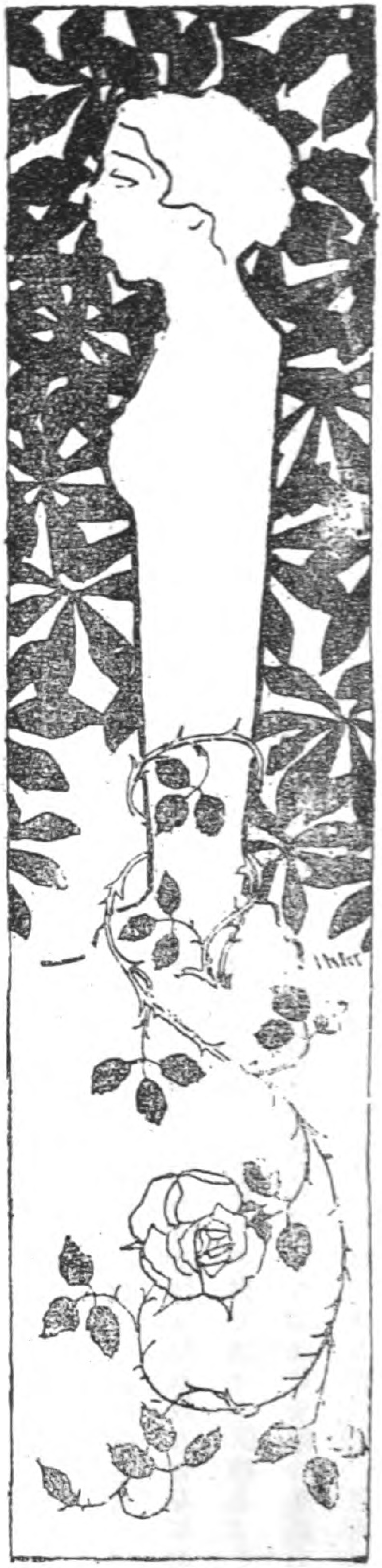
賀川豐彦著

雷鳥の醒むる前

定價貳圓卅錢
送料十九錢
四六判上製天金

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

卑しむべきものに就いて



倉田百三

九　色魔に就いて

色魔は蕩兒と嚴密に區別しなければならない。蕩兒に於ては、前述の如く、その意欲の主なる對象とする處は女の色香と感情のニューアンスとであつて肉慾も此等の精神的要素に依て或る程度迄美化されて居る。そして如何なる意味に於ても其の目的は純粹に色情である。卽ち男性が女性に對して起す處の性的興味の範圍內に止まり、且つ相手に對する意識的な惡意を混へないものである。然るに色魔に於ては、初より意識的な惡意を以て女に對し、且つその意欲の對象に色情以外の利欲を含むで居る。故に色魔に於ては蕩兒に於ける「粹」や「意氣地」や「鷹揚」等の道念が、女に對する人間らし

き愛撫と保護との感情も、その他總て遊蕩をして色情を美化せしむる處の要素が缺乏して居るのみならず、それが利欲と結合してゐる點に於て、その色情は同情すべき純粹性を失ひ、唾棄すべき卑しさとなる。蕩兒に於いては彼は自己の利欲を犧牲にして、女色に惑かれるのである。彼等が利欲に汲々たるものよりも人間として愛すべきものであるのはその爲である。利よりも女を愛するものは或る意味に於ては心情の美くしいものである。彼等が自己の利欲を捨てゝ女に「肩入れ」し、借金に首が廻らず、又初めの眞似事が眞實となつて、遂に情死する過程には愛憐すべき人間らしさを充分に窺ひ得る然るに色魔に於てはその女を求めるのは又利欲の爲である。色と欲との兩道である。己れは何の代價をも拂はず、何ものをも犧牲にせず、徹頭徹尾我慾を貪らむとするのである。彼等は金になりさうな女を狙ふ。愛する女の爲に一本の簪を買つてやる代りに、女から搾り取らうとする。凡そ如何なる遊蕩と雖もそれが純粹に色情であり、且つ常に女に對して男としての誇りを以てこれを保護し、男の方から金品を與へることがあつても、假初にも女の方から此れを要求しないのはせめて男の意氣地である。女に金を出させて、平氣で居れる事は既に男としての誇りを失へるものである。況して女から金品を搾り取るに到つては言語同斷である。自分は遊蕩は許す事が出來るが、色情に利慾を交へるものは斷じて許す事が出來ない。その一事のみを以てその人格の陋劣を致命的に證據立てゝ居る。而も色魔に於ては、初より打算を以て初まる色情であるが故に、如何なる意味に於ても「誠」が現はれる事が出來ない。それは虛言と詐欺と裏切りとを前提として初めて成立し得るものである。而も色魔をして最も卑劣なるものとならしめるものは此等の惡しき動機の他に、それは他人の祕密を利用すると云ふ卑しむべきものゝ中最も卑しむべき手段を用ひる點にある。彼等が女から金を搾り取る最も有力なる手段は女の祕密を握り、此れを種にして脅迫する事である。羊の如く女に近寄り、蜜の如き甘言を以て彼女を誘惑し、その祕密を握るや、自己の假面を脫ぎ狼の如く殘酷に相手の弱點を利用して、色と慾とを貪らむとするのは又一種の强盜であり、强姦であり、而も最も卑しむべき破廉恥である。而も彼等はその用ふる手段が初めより詐欺であるが故に、最も信

じ易き、清き、初心なる女を狙ふ。他人の善良なる點を撰んで利用するものである。又彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て、他人の名譽心を利用する點に於て最も陋劣である。卽ち彼等の所業は既に破廉恥であるが故に、彼等の脅迫の手段は自己の名譽心を捨てる事に依つての外に效力なきものである。而も相手が名譽を重んずる時にのみ效力あるものである。故に彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て他人の名譽心を利用する二重の破廉恥に依つて初めて成立するものである。併も彼等は例外なく卑怯者であるが故に、出來得る限り抵抗力なき女を撰むで狙ふのである。他人の弱味を附け込むのである。正面から力を以て脅迫する強盜や強姦は素より憎むべきものであるが、色魔は憎む可きものたるのみならず、又卑しむべきものである點に於て此等よりも一層惡質である。しかのみならず、色魔に於ては、その罪惡は罪惡なるが故に、一層彼等の興味を惹くのである。彼等は女を欺むき、金をゆする事に依つて、正しき方法に依つて、遂げらるゝ色慾よりも一層快感を感ずる處のサディストである。「弄んでやつた」事、「ゆすつてやつた」事は彼等にとつては手柄である。罪惡に伴ふ特殊の變態的快感と、變態性慾の快感とが結合して彼等の人格を蠱惑し、汚濁し盡くして居るのである。自分は色深かさには同情し得る。それは慾深さよりも遙かに人間的である。併し色魔に到つては、徹頭徹尾惡魔的であり、その何處にも人間らしき心臟の鼓動を聞き得ざる、憎むべく卑しむべき吸血鬼である。

十　賣淫に就いて

賣淫とは何ものかの手段として性的行爲を爲す事である。利慾の爲に自己の身體を他人の肉欲に提供する事はその最も典型的なるものである。それが直接にして露骨なるものに非ざるも、美くしき假面の下に間接に行はるゝものも亦賣淫の一種である。凡そ性慾の衝動以外の動機から性的行爲をなすことは總て此の種に屬する。彼の娼婦の如く職業的となれる賣淫の卑しむべき事は云ふ迄もない。それは女としての人格の矜りを根本的に放棄したるものである。固より彼女等がかく

の如き道を擇ばざる可からざるに到つた事情には多くの同情すべきものがあるであらう。其處には親の責任、媒介者の責任、一般に男子の肉欲の責任、及びその存在を許さざる可からざる社會の責任が大であらう。自分の娘を賣る親は假令貧窮の爲であつても如何に卑しむべきものであらう。まして彼等の中には勞働を厭ひ、娘を喰物にする者があるのである。自分の娘を賣つて自分はぶら〳〵して暮らしてゐる如き親は娼婦よりも更に卑しむ可きである。又賣淫の媒介をなして生活する桂庵の如きは娼婦よりも娘を賣る親よりも猶卑しむべきである。何となれば彼等は己れは何物をも犧牲にせずして、他人に罪惡を犯さしめ、卑しむ可きものに機會を與へる事に由つて、生活するものだからである。更に淫を買ふものは相手をして淫を賣らしめる原因をつくるものであつて、其の行爲が金錢を持つて他人の人格を蹂躪する罪惡であるばかりでなく、相手をして彼の人格の尊嚴を放棄せしめる罪惡を犯さしめる點に於いて二重に罪惡である。加之總べての他人の人格に對する侮蔑者と同じく、彼等は他人の人格を蹂躪する事に依つて、自己の人格を蹂躪する權利を他人に是認するものである。此の意味に於いて淫を買ふ事は又自己侮蔑である。併し乍ら親や、桂庵や嫖客の責任が如何に大であつてもそれを以て賣淫する者の行爲が是認されるのではない。賣淫は根本的に自己の人格の矜持を放棄するものである。賣淫を拒む事が出來なかつたといふ事は如何なる事情に於いても、其の人格の尊嚴を汚辱し盡すものである。我々は死を以つても之れを拒絕せなければならない。假令親や、夫や、兄弟の不幸を救濟せんが爲めに自分を犧牲にして賣淫する事と雖も許さるべきではない。此場合に於いては、犧牲にすべからざるものを犧牲にするのである。それは決して自己の生命を犧牲にするが如き行爲と同一視する事は出來ない。他人の不幸を救濟せんとする善行は自己の人格を汚辱し盡すといふ惡行に依つて全然その光りを失ふものである。此の場合に於いては若し他人の不幸を救濟する方法が賣淫の外にないならばその不幸を他人に負はしめても自分は賣淫すべきではない。自己の死を以ても賣淫を拒絕すべきであるならば他人の死を以ても己の爲めに人を賣淫せしめるが如き罪惡を犯さゞらしむべきである。もとよりかゝる賣淫者は自己の利欲の爲めに賣淫したる

者よりも遙に同情に値する。併し乍ら我々は忠臣藏のおかるや、出家と其の弟子の淺香に如何に人間的に同情し得ても、之れを是認する事は出來ない。

賣淫はかゝる直接にして露骨なるものにあらざるも、凡そ何物かの手段として他人の肉慾に自己の身體を提供する事は總べて此の種に屬する卑しむべき行爲である。利害の爲めに、或は情實の爲めにする結婚は賣淫である。戀愛と性慾とな關じあたはざる配偶と衣食の爲めに離別しあたはざるも亦賣淫である。假令操を許さゞるも、自己を巧みに防衛し乍ら、他人の性慾に媚びて「愛嬌を振り撒く」事に依つて、自己の利益を擴張する者は又賣淫の一種である。他人が自己に對して自己の容色を享樂せんとする態度を以て接觸し來たる事を感じ乍ら、之れを拒絕し得ぬ事も亦賣淫の一種である。故意に異性の肉慾を刺戟するが如き服裝や、姿態をなして、異性の好感と性的撰擇の機會の優越を贏ち得むとする事も亦一種の賣淫である。是等は總べて何物かと引き換へに、他人の肉慾に自己の身體を提供するものであつて、その人格の矜恃を傷つけて居る事は言ふ迄もない。然もそれが他の美しき假面の下に行はるゝ點に於いて一層卑しむべきものであると言つていい。

賣淫は女子が男子に對して行ふ場合よりも男子が女子に對して行ふ場合に於いて一層卑しむ可きである。いはゆる男妾や、貴婦人に買はるゝ或る種の役者の如きは之れである。男子は女子よりも其の本性上獨立的であり、威嚴を重んずべき筈のものである。其の男子が女子の肉慾に仕へ、男性の矜りを棄つるが如きはもはや男性としての面目なきものである。女に養はれて生きる事すら既に男子の恥辱である。況して女性に弄ばるゝに任せ、之れに屈從し、阿諛するが如きは破廉恥の極である。彼等の或る者はおそらく女を弄むでやつた上に、金を絞るのだと思ふかもしれない。然らばそれは色魔の一種である。又媚を賣るものは買ふ者に對して少くとも形式上屈從的位置に立たざるを得ない。內心その顧客を見下して居ても從の態度を取るならば、それは既に立派な自己侮蔑である。否寧ろ內心見下して居る者に對して屈從の形を取る事こそ卑

し分なき自己侮蔑である。若し韓信が金を得むが爲めに、無頼の徒の股をくゞるならば、彼が無頼の徒を見下げて居れば居る程卑しむべき屈從と言はなければならない。自から價を拂つて妾を蓄へ、己れに屈從せしむる好色家も彼等に比ぶれば、尙自からを屑よしとする根據を持つて居る。もとより彼の賭博打ちの親分や、女髮結ひの亭主等が、その妻や情婦に養はれて居ても彼等が女に眞實に愛され、自ら屈從して居ないのであるならば、それはたゞ懶惰であつて賣淫ではない。併し裕福な後家の玩弄に委するのらくら男や、貴婦人に買はれる役者や、その玩具となる美少年の如きは賣淫の最も卑しむべきものであり、全然男性としての矜りを失へるものである。

最後に尙一種の賣淫がある。それは自己が性慾を感じざるに關らず、他人に奉仕せんが爲めに、自己の身體を他人の肉慾に捧げる事である。夫婦の間に於いて往々にして行はれる肉交の場合である。この場合に於いても相手の不機嫌や、立腹を怖るゝためになす事は明かに一種の賣淫である。併し純粹に奉仕の氣持を以つて、何等の報酬を求めず、たゞ相手の性慾を滿足せしめんが爲めに、自から進むで身を捧げる場合に於いても、その行爲は批難に價ひするであらうか。此の場合に於いても、奉仕の手段として、自己の身體を他人の肉慾に提供する點に於いて、依然として自己の尊威を傷つける行爲であることは免がれない。此の場合に於いては、彼女は奉仕すべからざる欲望に對して奉仕するのである。卽ち夫は妻が性慾を感じざる場合には肉交を斷念すべき筈のものである。故に夫をしてその不滿足を負はしめなければならない。相手が性慾を感じざる場合に肉交する事は假令相手の運命に對する責任を持ち、相手が心から身を捧げた場合と雖も、相手の人格を手段となすものである。故に自己の人格を手段として用ひしめる事は妻にとつて自己の尊威を傷付けるものでなければならない。凡そ自己の身體は自己の人格の象徵であつて人格以外の物ではない。身體は特殊な物質である。自己の所有物を以つて他人の慾望の手段となす事と自己の身體を以て他人の欲望の手段となす事とは全然區別しなければならない。凡そ賣淫の卑しむべき所以は自己の人格の象徵であるところの身體を、何ものかの手段として、卽ち一つの物として、

取扱ふところに存する。故に此の種の奉仕は報酬を目的として淫を賣る者とは明瞭な區別を持つて居るけれども自己の人格を手段とする點に於いて同種の卑しむべき行爲に屬するものといはなければならない。

十一　或る種の表出に就いて

我々の感情や意志の表出は我々の人格が如何なるものであるかを直接に他人に印象せしめる機會である。我々の内面生活は自然に肉體的表出を求めむとする衝動を持つものである。併し乍ら我々が他人に對して此の表出を印象せむと欲し、或ひは自然に印象すべき位置にをかれた時、その表出の仕方は對人關係の道徳に依つて制約せられなければならない。その感情や意志やの表出の外に對人關係に於けるその人の人格が特に表出されなければならない。自己の内面の狀態の自然にして僞らざる表出でありさへすれば、そのまゝ表出して差支へないと云ふわけにはゆかない。其處には特殊な或る條件が加はつてゐるからである。此處に於いて我々の意志や感情の表出の仕方は我々の人格の如何を示す事になるのである。表出の仕方が自由であり、自然でありその場所と時と相手とに相應しい――即ち禮に適ふか否かは我々のカルチユアの程度を示す標識であるが、自分は此處では特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない表出のみに就いて云ふのである。即ち我々の人格の尊威を傷つけるが如き表出の仕方のみを撰んで擧げるのである。我々の内面の狀態が、即ち表出せらるるところのものが卑しむべきものである時、その自然なる表出が卑しむべき印象を與ふる事は云ふ迄もない。併し我々の内面の狀態が卑しむべきものでなくても、その表出の仕方が人格の尊威を傷つけるが如きものである時には、それは猶卑しむべきものとなる。例へば我々が食慾や色慾等の生理的必需が充たされない時、我々が飢ゑを感ずることは自然である。併し我々がかの犬の如くにその飢ゑを露骨に現して「物欲しさうな」眼附きをして他人の食膳を覗ひ、或は婦女子に附きまとふならば、それは自己の人格の尊威を保ち能はざるものとして卑まれねばならない。單に生理的必需のみならず、我々

が隣人の愛や、戀愛に飢えたる時に於ても、其の人間らしき孤獨の淋しさや、飢渴をも、餘りに哀願的に相手と時と場所とに對する考慮を費す餘裕なく表出する事は、人格の尊嚴を傷つけないではをかない。總て他人の感情に訴へすぎる、女々しく、未練がましく、愚痴つぽき表出は高貴の德と一致しないものである。それは決して自己の内面の現實を他人に隱蔽する事がいゝと云ふのではない。自己の苦痛や悲哀に堪へ得る事が人格の尊威を構成する重要な力だからである。我々が他人に苦痛や、悲哀を訴へる事は他人の苦痛や悲哀の原因となる。それに對する同情と奉仕との義務を負はせる。而も自己の無力や運命の不可抗力や己れ自らの不幸の爲に餘裕なく、他人の不幸を傍觀する外道がない場合が少くない。寧ろ他人の深き精神的不幸は我等の如何ともなし能はざるところである。故に他人に不幸を訴へる事は他人をして二重にも三重にも苦しき窮境に立たしめる事である。此れ我々が自己の苦痛や、悲哀を他人に表出する事を出來得る限り抑制しなければならない所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關してはストイックな寡默な方が高貴の德と一致する。瘠我慢や負け惜しみの如き不自然さは賞讚すべきものではないが、猶それは卑しむべき感は與へない。然し自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、過剰にして、亂れたる表情を以て、泣き、訴へる事は人格の威嚴を傷つける。而もそれが何等の効果なき愚痴の場合に於て猶更らである。不可抗なる運命を勇ましく負うて忍受する事は人格の尊威と力との靜的な現はれとして尊い感を與へる。單に苦痛や悲哀の表出のみならず、愛や、戀慕や、好意や、怒りや、其他總ての感情の、表出過多にして輕々しき事は高貴の德と一致しない。此の點に於ては自分は西洋風の表出よりも東洋風の表出を好む者である。殊に彼の能樂に於ける表出法は最も洗錬せられ簡素にして、しかも効果的である。固より表情の不自然な抑制も不自然な誇張と共に斥くべきであるが、特に後者の場合に於てはそれは嫌らしさと鬼氣とを伴ふものである。まして嘘僞を伴ふ場合にはそれは醜惡に價する。自分が大食の一種としてあげた感情耽溺のための表出はすべて此の種に屬する。又總ての馴々しさも此の種に屬する。相手が自分の心をアクセプトするか否かを考慮せずに、猥りに自己の感情や意

志を表出し、他人の懐の中に入りこみ、膝の上に上る猫の如き馴々しさは狎褻であつて卑しむべきである。何らかくの如き馴々しさが眞心少く、且つ抜け目なき悧巧さに伴はれてをる時猶更である。素より自分は天眞や、卒直や、人間らしき隔てなさ（オープンハーテッド）をも愛するものである。我々が野原を散歩して其處に出會つた見しらぬ人に直ちに話しかけたにしてもそれを必ずしも間違ひとは思はない。劇場に於て未知の美くしき婦人を見た時に、直ちに交際を求める事をも強ち不正とは思はない。寧ろかゝる態度の何等のわだかまりなくとれるやうになる事を自分の理想の境地となすものである。併しかゝる態度を高貴の徳に反せずして取り得る爲には、我々の內面が淸淨にして無礙でなければならない。其處に馴々しさと、馴々しさと無躾との感じが伴ふ限りはかゝる態度は自他の人格の威嚴を傷つける。我々が理想的人格に達せざる限り、我々のこだわり、遠慮は避ける事が出來ない。自己の醜さを他人に押しつけ、粗野な手を以て他人のヴェールを拂ひのけ、泥足を他人の淸堂に踏みこみ、他人の心の扉をのぞき込み、その靜けさを搖すぶるが如き、縱まゝなる感情や意志の表出は、他人の心情を尊ばず、自己の人格を重んぜざるものとして卑しむべきものである。素より人には樣々の個性があり、從つてその感情や意志の表出にも種々の仕方がある。或る人は內氣に、或る人は無邪氣に、或る人は人懷かしく、或る人は森嚴である。此等はそのまゝの特色を持ち乍ら、一つの高貴なる人格の現はれ方の種々相としてそれぐ〳〵に美くしくあり得るものである。總ての人が同じ仕方で表出しなければならない事はない。又假令種々の缺點は持ち乍らも、その人格の本質が高貴でさへあるならば、其處に善と美とが充分に現はれ得る。むしろ我々が各自の特色を生かし切らない間は、凡ゆる特色は總て缺點を伴つて居るのが常態である。かくの如き場合に於ては我々はその表出を卑しむべきものと感じない。併し乍らそれが如何なる特色であつても、上述の如き不自然と媚僞と過剩と狎褻と不作法とを伴つてゐる限りは、その限りに於て人格の尊嚴を傷つける事は免れない。此の他にも我々の意志や感情の表出が相應しくない場合は猶多い。例へばそれ等の或る種のものを名づけて我々は心なき業と云ふ。それは我々の人格の仕上げと、磨きとに於て我々の所謂カルチュアの重要なる課

所であるが、此處では特に我々が卑しむべきものとして表象するもののみに止めて、他の機會に譲つて置く。我々が感情や意志、表出に於て完全な自由を得る事は、我々の人格の完成の最も明らかなる表徴である。我々は彼の聖衆倶會の繪に於て、祝福されたる人達が互に高貴の德を具へて、傷つけず、傷つけられず、交り合ふ天上の挨拶や遊樂の光景を想像する時に、尊き感に打たれるのである。我々の表出は人間らしさと超人らしさと天使らしさと等の種々の段階がある。より高き階段より見ればより低き階段に於ける表出は高貴の德に於て足らざるものである。超人より見れば人間らしき表出は甘く弱くもしくは哀れに見えるであらう。自己を憐れむべきものとして考へる事は超人にとつては自己侮蔑であるが故に、我々が人間らしき表出として愛し得る或る種のもの、例へば婦人の嬌羞や男子の孤獨の淋しさや、老人の同情や等は猶卑しきものと見えるかも知れない。更らに天使より見れば、超人の氣を負へる誇りや、行者的な硬さは猶自由の點に於て足らざるものとして低く見えるかも知れない。我々は高く登り、遠く願ふに從つて、卑しむべきものゝ領域を擴張する。總ての者は自己の境涯に相應しき表出を求めるであらう。自分が此處に擧げたのは、人間らしさの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしき表出として卑しみに洩れ得るものは神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたるものと成り得るであらうと信ずるからである。併し我々は天使らしき階段より自己の卑しさを省み得る迄に向上する事を願はなければならない。

十二　懶惰に就いて

懶惰とは凡そ活動（タート）に對する忌避若しくは無活動に對する嗜好である。抑々生命は不斷の活動の流れである。生命の中核は常に積極的な活動性（テーチッヒカイト）を帶びて居る。而して生命の外部は此の活動性を觸發する無數の刺戟を以て圍繞されて居る。故に我々は外面的にも、内面的にも不斷に活動的な狀態に置かれて居るのである。故に我々が常に消極的であつて、活動を忌避する事は我々の生命の本性、人格の本質に逆らふものである。自己の生命に忠實なる者は我々の中核を以つて外來の刺

戟に對して鋭敏に反應し、働きかけ、之れを撰擇し、攝取し、或は拒斥して自己の生命を成長せしめなければならない。然るに懶惰なるものは刺戟に對する反應が遅鈍であり、働きかける勞を厭ひ、之を撰擇して、攝取し、若しくは拒斥する氣力を缺き、生命の成長を努めざるものである。又是等の外來の刺戟の中には必然的に我々の人格を害するもののみならず、特に人格の尊威を傷つけむ事を意圖した刺戟も存在する。例へば我等の人格全體を弛緩せしめる官能的快感の刺戟や、不義の名利の誘惑があり、又我等の人格の權威を特に傷つけむことを目的とする侮辱がある。是等の刺戟に對しては我々は常に溌溂として活動的なる中核を以つて働きかけ之れを拒斥し、之れと戰はなければならない。人格の尊威は斯くの如き不斷の精神的戰ひに依つて始めて支持する事が出來るのである。我々が外來の刺戟に對して身を任せ、誘惑を拒斥せず、侮りを防がないならば、如何にして人格の尊威を保つ事が出來るであらう。「諸々の煩惱の賊」を征服しないならば「勝幡を道場に樹てる事は出來ない」「男子門を出づれば」必ず出會ふ「七人の敵」に對してその侮りを防ぐ事が出來ないならば人格の尊威は決して保つ事は出來ないのである。又是等の外面的活動のみならず、我々の人格の内面に於いて、不斷の精神的活動がなければならない。則ち所謂道德的精進である。懶惰の最も厭ふべきは此の内面的活動の忌避である。我々は人格の向上を圖る爲めには、常に自己の現實の相を反省し、之れを克服しなければならない。然るに懶惰なるものは自己の現實を克服せんとする氣力を缺くばかりでなく之れを反省せんとする意志さへも起さないのである。道德的精進の全力を全然起さないのである。蓋し總べての活動の中に於いて道德的精進は最も内面的な活動であつて人格の中核の緊張を要するものであるが故に、最も反射的なる官能的の刺戟に對する反應的活動さへも出來得る限り避けむとする事、例へば眼前の棚の上に在つて、食慾を刺戟して居る牡丹餅に對してさへも、強ひて之れを取る勞を惜み、それが寢轉むで居る口許まで落下するまでは敢へて動かない程の怠け者が、緊張せる精神の中核に於いてのみ、生きた事實である道德意識に關して、努力の念を缺ぐのは已むを得ないといはなければならない。而も懶惰なる者は必ずしも無慾であつて、心が貧しいの

ではない。彼等はたゞ自己の慾を遂げる爲めの努力を厭ふのに過ぎない。努力せずして慾を遂げむとする事こそ懶惰の特質である。怠け者は多くの場合又大食家であつて、その理想とするところは出來るだけ努せずして出來るだけ大飽せむ事である。飽滿して、肥え太り、昏々として眠らむ事である。若し努せずして獲られるものであるならば、官能的快感も名利も彼等の厭ふところではない。たゞこれらのものが努なくして得られないが故に之れを求めないと云ふに過ぎない。若し彼等が富貴の家に生れたならば、その幸運を生かす事能はざる安逸無能の民として、人類の重荷であり、若し貧窮の家に生れたならば、衣食の爲めに働く事を厭ふ彼等は乞食となるより外に道がない。いづれにしても人類の寄生虫であり、厄介者である。我々が一個の生命を享けたる意義は、その生命の内に含まれたる可能性を實現發展せしめる事に依つて、必然的に生ずるところの自己の個性に適する創造的活動を以て、何物かを人類の文化に寄與するところにある。然るに懶惰なるものは自己の天命を全うする事は勿論、創造的活動の如きは尙更忌避するところである。又懶惰は自己の衛生に對してさへ、努を厭ふが故にそれは不潔とならざるを得ない。活動の便宜と能率を慮らないが故に亂雜無秩序とならざるを得ない。自己の服裝や容貌の端正を保たむとする努力を怠るが故に無精とならざるを得ない。殊にそれが女子に於いて表はれる時には女子が此の地上に於いて負ふて居る使命の最も重要なる一つであるところの、地上の美の精として此の地上を飾る事が出來ないばかりでなく、其の不潔と無精と亂雜とを以つて此の地上を醜くし、空氣を沈滯腐敗せしめ、我々をして生きるに堪へざらしめる。活動と創造を喜ばず侮りを防ぐ事能はざる男子と、美と端正とを願はず、容色を飾る事を欲せざる女子とに依つて作らるゝ世界は如何に厭ふべき窒息せしめる世界となるであらう。垢面蓬髮にして犬の如くに食を人の門に乞ひ、或は不潔にして汚塵の中に逸居して、豚の如くに大食し、肥滿し、惰眠を貪る者が卑しむべきであるのは云ふ迄もない。併し乍ら我々が己に或る程度の人格を保ち、地位を得、他人の尊敬を贏ち得たる後に於いても、尙自己の人格の現實を反省する事を怠り、より高き境地に向つて成長する事を努力せざるものは又懶惰として卑しまれなければならない。我々にと

つて最も警戒を要する懶惰は寧ろ此の種であつて、精進に倦む事である。それは我々が次第に高く成長するに從つて、自己の周圍に自己を鞭打つに足る人格者少く、神の外に恐る可き者を持たざるに到るに及び、我々に取つて恐るべき誘惑である。勿論かゝる人には多くの尊敬者や、追從者の群が有るのを常とするが故に、自己の現狀を打破して神の外には知る者無き自己の醜狀を彼等の前に暴露して、自己の名譽ある安固なる地位を放棄する事は困難なる戰ひを要する事となる。又自己の精進が自分の周圍の者の平和と安樂とを破らざるを得ない時に、かゝる精進は又「同情」との苦しき戰ひを要するものとなる。此の時に於いて神の外責むる者なき自己の現狀に停止して、一層鋭き反省と、より高き登攀とを避けむとする誘惑の生じる事は同情に値ひする。又一つの克服と登攀とが他の無限の克服と登攀とを惹起するときに、而も次第にその戰ひが困難となる時に、次第にその精進に倦み來たる事も亦同情に値ひする。併し乍ら此の同情すべき誘惑をも尙我々は懶惰として卑しまなければならない。彼のダンテの神曲の淨罪の山を登攀する靈魂や、又ニーチエのツアラトウストラの不斷の自己超克の戰ひの如く、倦む事と、怠る事とを鞭打たなければならない。ツアラトウストラは懶惰を高貴の精神に反するものとして實に峻嚴に輕蔑して居る。彼は永劫回歸の恐る可き思想を克服して、不斷に繼續するところの、而も決して終息することなき自己超克の旅程を人類の靈魂に課したのである。これこそ懶惰の反極である。故に超人にとつては、一つの克服の勝利に安ずる事は已でに懶惰である。ツアラトウストラは「汝、我が必然性よ、總べての小さき勝利より我れを防護せよ」と云ひ。「我が意志よ、汝が汝の勝利に於いて不撓なるを得む爲めに、汝の最後の爲めに、汝の最後の偉大を愛め。嗚呼、何人か其勝利に屈服せざりしぞ。」と云つて居る。總べて自己の内にあるあらゆる力の可能性を可能性の儘に眠る事を許す事は懶惰である。かの佛教の涅槃と云ふが如き靜寂なる境涯は、リツプスも云ふが如く、總ゆる力の平衡若しくは調和であつて、それ自身積極的なるものである。總ゆる我等の内なる力の可能性はそれ自身に於いては善であつて、尊重されなければならない。從つて實現解放さるべき權利を持つて居る。唯だ是等の總ゆる力が一つの人格の發現として、一つの全體

に統一されなければならない。我々はそれが我々の人格全體の成長に役立つ度に從つて是等の力に上道と下路との秩序を與へて一つの系統に包攝しなければならない。此處に我々の精進の一つの課題として靜的努力が生じて來る。我々が或る場合衆人を離れて孤獨を守り、靜所に閑居し、密室に祈禱し、山中に瞑想し、而黙して坐禪するのはそれが我々の全人格の成長の爲めにその場合必要だからであつて、街頭に出でて民衆の間に奔走するのと同じく積極的精進である。山に隱れる事は或る場合市に現れる事と同じく、自我の成長の爲めに必要である。全人格の成長の爲めには或る場合或る慾望を捨離し、愛する者と別離し、一見消極的無爲と見ゆるが如き生活法をも撰ばなければならない事もある。斯くの如き靜寂、孤獨、若しくは無爲は決して懶惰ではない。併し乍ら當然解放さるべき自我の慾望が内に在るにも關らず、世人の思はくを憚り、周圍に惹起する風波を怖れ、或るひは安逸を求め、面倒を避ける爲めに、その慾望を解放、追求せざる事は懶惰である。或る時は斷念せざる事が懶惰であり、或る時は斷念する事が懶惰である。全人格の成長、自我の向上の爲めに努力する事が精進であつて、その反對が懶惰である。我々は自我の成長の爲めには總ゆる階段の心境を先づ一度把握し、然る後これを超克しつゝ登攀して行かなければならない。是れ絶間なき精進の旅程であつて、把握すべき時に把握せず、超克すべき時に超克せず、現在の安逸を偸む事を懶惰として卑しまなければならない。人格の尊嚴を重ずる者はたゞその尊嚴の感覺の爲めにのみ精進する。その點を刺戟される時恰も駿馬が拍車の打撃を感ずるが如く、全生命の衝動を感じて邁進する。彼のツァラトウストラの如く、此の感覺の鋭敏なる者にとつて、彼が已でに、多くの克服の勝利の後、雲雷を己の脚下に俯瞰する程に向上した時に、彼にとつては已に諸々の卑しむべきものは既に征服されてあるが故に、此の場合尚彼にとつて卑しべきものたり得るものは、たゞ懶惰のみであらう。則ち我々は懶惰を唯一の卑しむべきものとなす程、向上しなければならない。而して此の卑しむべきものは、我々の向上の最後迄我々にとつて卑しむべきものであらねばならない

十三　自卑に就いて

自卑とは自己の人格の尊厳を自から傷つけることである。上來列擧した卑しむべきものは總べて無意識的に自己の人格の尊厳を傷つけて居るものであるが、自卑は自から意識的に自己の人格の尊厳を害ふものである。卽ち人格に對する最も直接な露骨な冒瀆である。謙遜は自己の人格の尊厳を重るずる心の爲めに、止むを得ずして自己の醜さを、良心の痛みを以つて承認するのであるが、自卑は自己の人格の尊厳を重んぜざる心の爲めに、自己の醜さを、良心の痛みなくして、承認するのである。其處には最早人格の尊厳に對する感覺がない。故に其處には一切の恥辱といふものが成立しない。我々は自卑者に對して人格の尊厳の原理を當て嵌めて責める事が出來ない。僞善者は自己の惡を善の假面を以つて隱蔽せんとする旅俗であるが故に、勿論卑しむべきものであるが、其處には尙少くとも自己の人格の尊厳に對する感覺がある。恥辱の念がある。それは人格の尊厳の原理の尙支配し得る世界である。併し乍ら自卑は此の原理の支配以外の治外法權の別世界である。故に我等はたゞこれを輕蔑し得るのみであつて、如何ともする事が出來ない。其處には論議と妥協との道が絕えて居る。愧づる處なく「自分は噓吐きである」として任ずる者に對して、噓をついた事を責める事は無意義である。恐らく彼等は、かく任ずる事に依つて、自から噓を吐き乍ら、噓を吐かずとなす僞善者より優つて居るとなすかもしれない。併し乍ら彼等に果して僞善者を輕蔑する資格があるであらうか。噓吐きを以つて自から任ずる者は噓を吐く可からずといふ道德原理を超越せるものでなければならない。然らば如何なる原理に依つて僞善者を輕蔑するのであるか。それは矛盾であると云はなければならない。僞善者を輕蔑し得る者は「噓を吐く可からず」と云ふ道德原理を承認しながら、噓を吐いた事を認めるところの、從つて此の原理を以つて攻擊し得るところの謙遜者のみである。故に自卑者は僞善者を輕蔑する矜りさへも持つ事は出來ない。然るに事實に於いて、殆どすべての自卑者が僞善者を輕蔑するのは何故であるか。思ふ

にそれは自卑なる者は一つの自から支持し能はざる、矛盾の立場であつて、實際には自卑者と雖も「嘘言を吐く可からず」と云ふ原理を承認して居るのであるが、それを承認せざるが如く自から欺くのである。卽ち自卑は一種の僞惡である、故に彼等は僞善者を批難するとき、無意識的に此の原理を適用するのである。自卑は眞の意味に於いては最早何の矜りも持たざる自棄となるに及むで始めて徹底する立場を得るのである。「我等は極重惡人である」と宣して自から任ずるものが、僞善者よりは稍々優れりとして何等かの矜恃を持つ事は矛盾であるといはなければならない。故に自分はかの眞宗の惡人成佛の教理を救ひの條件として絕對に善を必要としないと云ふ意味でなく、事實として我々が何等の善をも持つてゐないと云ふ意味に解釋する事には反對する。若し然らば、親鸞のあの否定すべからざる矜恃は何處より生じるのであるか思ふに是等は一種の自欺である。自卑は謙遜と正直とが傲慢と虛僞とを憎むのあまり其の反動として自己を誇張したる變態である時、始めて道德的意義を持つところの誤謬となる。多くの自卑者には斯くの如き者がある事を見遁す事は出來ない斯くの如き自卑者は同情すべきものであつて、其處に却つてある正直さが現れ得るが、それが苟くも人格の尊威を認めざる事を標榜する限りに於いて、卑しむべきものである事は免れない。自からを卑しむべきものとして承認したと云ふ事實は人格の冒瀆として牢として消す事は出來ない。

自棄は何等の矜恃をも持たず從つて他人に對する批難の感情をも起す事なく、自己を罪惡と低卑とに委ねるのである。かの或種の幇間が自己の人格を客の侮蔑と戲笑とに任せて、自から恥づる事なく、客の如何なる無禮なる要求にも、唯々として從ひ、其の好笑柄とならん爲めには總ゆる自己侮蔑の行爲を成して恬然たるが如きはこれである。又或る種の娼婦が自己の身體を他人の肉慾に提供して、最早何等の羞恥を感ぜざるが如きこれである。或るひは或る種の乞食や泥棒が自己の所業に對して、何等の恥ぢも悔いもなく、より良き生活に就かんとする意志を全然缺いてゐる如きこれである。此の種の自卑者に對しては、我々は人格の尊威や、道德的の原理を以つて說服する手懸りなく、彼等により善き道を勸進する方法を

絕えて居る。何等の矜恃をも持たざる者を道德的に刺戟する事は不可能であり、より善き生活を願はざる者には如何なる善も無意味である。十人の人も一頭の飮む事を欲せざる馬に飮ましめる事は出來ない。勿論人間が斯くの如き自棄の狀態に陷るとすれば、それが先天的痴呆や、精神病者にあらざる限り、其處に深刻にして悲痛なる事情が存在するであらう。併し如何なる事情が存在するにもせよ、自から意識して自己の尊威を放棄する者は總ゆる卑しむ可きものゝ中にて最も卑しむべきものでなければならない。

最後に尙此處に一つの特殊な自卑がある。それは僞惡である。自棄は道德に對する無感覺であるが、僞惡は道德に對する謀叛である。前者はアモーラルであり、後者はアンチモーラルである。僞惡は惡に對する趣味である。加擔である。僞善も僞惡も共に虛僞として卑しむ可きは勿論であるが、僞善は少くとも善に對する尊重を標榜して居るのに反し、僞惡は善に對する敵意を標榜するものである。故に僞惡の卑しむべきは、それが虛僞であるといふ點のみではなく、又それが善に對する反逆であり、從つて自己の人格に對する侮蔑である點にある。「自己は惡人なり」と標榜する事は自己の人格に對する侮蔑でなくて何であらう。それは實に白晝公然たる自己侮蔑である。然も僞惡者は此の事を矜恃を持つてなすのである。總べての謀叛者が矜恃を持つて居るやうに、かの神に反抗する惡魔が矜恃を持つて居るやうに、善に對する叛逆者たる僞惡者も亦矜恃を持つて居る。此の點に於いて僞惡者は何等の矜恃をも持たざる自棄者よりも優つて居る。併し彼が矜恃を持つのは善人が自己の善に對して持つ矜恃ではなく、又自卑者が心密かに持つ正直に對する矜恃でもなく、自己の惡に對する公然たる矜恃である。善に對して反抗し得る力の自覺に伴なふ矜恃である。それは力の自覺に伴ふ矜恃であるが故に、少くとも形式上人格の尊威の自覺と有緣である。之れ自棄の無緣なるに比して優つて居る所以である。併し乍ら其の力は善に對する謀叛に奉仕するものであるが故に、強ければ強いだけ自己の人格の惡を證しするものである。故にその力を矜る事は驕慢であり、顚倒である。僞惡は善に對する公然たる反抗としては憎むべきものゝ中最も憎む可きものであり、其の以

も悩む可きものと結合した虚僞である點に於いて、及び自己の人格の侮蔑を却つて矜持とする點に於いて、其れは他に比類のなき特殊な卑しむ可きものである。それは佛教に所謂「正法を誹謗する」罪、若しくは基督教に所謂「聖靈を汚す」罪であつて、赦さる可らざる罪とされて居るものである。神佛の憐れみにも洩れる罪とされて居るものである。

併し乍ら尚立ち入つて考察するとき、僞惡とは奇異なる概念といはなければならない。僞惡は僞善と對立する反對概念である。然るに僞善とは善人の假面を被むれる惡人の意味である。故に僞惡とは惡人の假面を被むれる善人の意味でなければならない。然らざれば我々はたゞ惡人の一種と呼ぶべきであつて、僞惡者と呼ぶべきではない。然るに我々は何故に之れに僞の字を附するのであるか。そこには極めて深い意味が含まれて居る。卽ち我々は人間の本性を善なるものと考へざるを得ないのである。人間は人間である限り、本來善を尊び、惡を卑しむものである事を不知不識の間に信仰して居るのである。故に彼の本心から惡を好み、此れを矜るとは考へる事が出來ないのである。それは我々にそれ自身に矛盾の感を與へるのである。故に我々が此處に惡を矜る一人の人間を見る時に、それは僞りであつて、彼の本心からではなく、彼の本性は依然として善を好み善を矜るものであると不知不識の間に推定して居るのである。故に我々は僞善者に對立する反對概念として彼等を僞惡者であるといふのである。故に我々は彼等を惡人の假面を被むれる善人として考へて居るのである。此の事實は實に有難き事實である。而して恐らくはただに我々が之れを先驗的に要求せざるを得ないばかりでなく、又事實として眞理に中つて居るのである。自分は總べての僞惡者は僞りの惡人であると思ふ。若し彼等が僞りでないならば、彼の持つて居る矜持は何處から來るのであるか。假令それが誤謬の上に成立する矜持であるとは云へ、苟くも彼れがそれを人格の、力として矜る以上は、彼の内に人格の尊嚴の意識、善の太源が存在する事を豫想しなければならない。否、一層深く考察すれば、ただに僞惡者のみならず、自棄者に於いても亦彼が人間である限り、全然自己の矜持を棄て去つて平然たり得るとは思はれない。少くとも心に痛み、若しくは蟠りを、如何なる場合に於いても何等かの抵抗を感じるであらう。すら

すらと水の低きに就く如くなす能はず、何ものかに逆うてなす感じを持たないわけには行かないであらう。然らば自卑者も亦偽りの自己侮蔑者である。また自卑者が偽悪者の一種である事は我々の既に考察したところである。然らば此の三つの概念は本來自家撞着の概念であるといはなければならない。即ち彼等は自から偽つて居るのであつて、自己侮蔑者の如く粧うて居るのに過ぎない。故に彼等の卑しむ可き點は眞正に自己侮蔑者であるところにあるのではなく、自己侮蔑者と偽るところにあるのである。若し然らずして斯くの如き順逆の顛倒が人間の本性から行はれ得るものとすれば、我々は人間の概念そのものを根本的に改約しなければならない。自分は人生に對する信仰を失はなければならない。故に自分は總べて此の種の罪惡を虚偽の一種に還元する。唯だその虚偽が神の律法と自己心内の聖靈の聲に反逆するものである點に於いて、且つそれを公然と標榜する點に於いて特殊な深き罪惡となるものであると思ふ。虚偽を厭ひ乍ら、虚偽に陷つて居るところに其の同情すべき謬があり、それが人性の最深の罪惡を賭して居るところに悲壯なる冒險がある。併しそれは實に恐るべき事である！

以上自分は卑しむべきものを檢査し、その性質を吟味し、その由來を闡明し、その卑しむべき度を測量した。人性に卑しむべきものは尙之れを以つて盡きないであらう。併し恐らくは同樣な由來と、性質とを持ち、同樣の原則に依つて量定せらるべきであらう。卑しむ可きものは總べて人格の尊嚴の感情の缺乏より生じる。それは畢竟自己に對する罪惡である。他人に害惡を與ふる場合に於いても、それが卑しむ可きものとなる所以は自己に對する尊敬の不足にある。一層適切に云へば自己の内に嚴存するところの、自己ならぬ公なるもの、萬人に普遍する道、之れを宗教的に云へば、神の屬性が個人に内在分有されて居るところの、聖靈に對する反逆である。我々は卑しむべき行ひを爲す事に依つて、憎む可き行ひを爲す事以上に、自己の内なる神に叛くものと云はなければならない。（一九二三、一、三〇）

再び人間相愛について

石原純

私は曩に人間相愛を論じて、それが人間相存なる現實的事實に根據をもたなくてはならない私たちの理想であり、そして之と矛盾するやうに見える自我の主張はこの理想に順應するやうに制限せられなくてはならないことを論じました。この自我の制限の認識は、たとへそれが理想的自我に取りては最も自然的のものとしてゆるされるものでありませうけれども、しかも現實的なる私たちに於ては、そこに最も深刻なる闘爭が内在しなければなりません」この闘爭が悲痛を體驗し之に堪へ得るもののみが、理想的道程への自我の歩みを全うし能ふものなのであります。私たちは斯やうな苦驗によりてのみ理想的自我の具體的内容を探し求めることが出來ると私は信ずるのです。

「教育論叢」の記者は一月號の同誌に於て私のこの文を紹介せられ、且つ意見を附加せられたことに就いて、私は多くの感謝をもつものです。只私はそこに附せられた評言を見て、尙ほ私の說かうとした論旨の眞髓が、恐らく私の言葉の足りなかつた處もあつたでせうが、本當に捉まれてゐなかつたやうに感じましたので、私は尙は一般にあの文を讀まれた方々にも同樣の見解あるのを慮りて、もう一度、之に言ひ及ぼさせて頂きたいと思ひます。

私は前文に於て單に私たちの「理想と現實との矛盾に惱む」心を叙して理想への路を「進めるやうに」說いただけではありませんでした。理想と現實との矛盾が何故に起るかと云ふ判きりした理由を私たちの現實の心に納得させて、それに

よりて本當の理想への方向を判斷するのに資せしめようとしたのでした。若し人間相愛の理想がそれ自からに於て正しいものであり、從つて私たちに取りて究極的に希はしいものであるならば、之れと現實との矛盾は只現實のなかに於ける缺陷の除去によりてのみ避けらるべきものでなければなりません。けれども人間相愛なる標示がそこに立てられたとしても、單にそれだけではどんな内容が果して之に協ふものであるかどうかを知るわけにはゆきません。從つて現實の行ひのなかにどれを選びどれを棄てなくてはならないかは輕々しく定める事は出來ないのです。私たちが現實に苦しまねばならないのはこの爲めであります。併し私たちの究竟の判斷は遂に人間相愛の理想と自我の制限の認識とに依存しなければならないことを、私は指摘しようとしたのでした。

この意味では私は寧ろ理論的の立場からして現實の行ひのあらゆるものに對して深い省察を必要とすることを說いたのに過ぎませんでした。教育論叢の記者が「この論文は處世の方針、修養の規範を示すものとして結構なものであると思ひます。これを理論的のものとして考へたら、どんなものでございませう」と言はれるとき、私はそれ故に私の言葉の不充分でありはしなかつたかを疑はずにゐられませんでした。

「人間相愛といふものを初めから定めてかゝるといふことは如何なるものでございませうか」と質されましたけれども、私はどんな行ひが人間相愛に順應するものであるかを少しも具體的に示さなかつたばかりでなく、却つてその判斷の極めて困難なことを示すに過ぎなかつたのです。それでは人間相愛は一つの空虛な題目に外ならないであらうと云ふ批難が寧ろ豫期されてもよかつた程です。併し固より私はそれだけでも空虛のものであるとは思つてゐません。只そこではこれが具體的内容を或る模型的の行爲によりて塡充することの不當なのを強調したかつたのでありました。それが謂はゆる道義者らの陥り易い弊であると思ふからです。けれども之を離れて云ふならば、人間相愛それ自からは私たちの理想の一つで

なくてはならないと思ひます。私は理論的にその根據を人間相存の事實におかうとしたのでした。多くの人間がこの地上に相存する限り、それらが相依り相援けて始めて一つの大きな理想への進みを現實になし、又永遠の仕事を殘しこ神の樂園を建設することに與かり得るのでありませう。私が既に述べましたやうに、たゞ一人の人間の力がどんなに惠まれてあらうとも、その限りある生命をもつてどれ程の理想が完成され得るでありませうか。これらの事情を少しく考察したならば人間が或る理想を究竟的に高めようとする場合に、彼等がお互に共力し合はなくてはならないことは餘りに明らかなことです。そして彼等が共力の目的を遂げ得るために先づ相愛の心を準備しなくてはならないことは恐らく私の言葉を待つ必要もありますまい。それ故に私は人間相愛をその究竟的理想から取り離すことの出來ないものであると信じます。そして斯やうな理想に到達する必然的階段として　人間相愛はその理想境それ自からに於ても至美の心のあらはれとして保持せらるべき價値を有することを私たちは當然認容したいと思ひます。これ私が相愛そのものを亦理想の一つの内容として肯定する所以であります。之に反して相愛の否定が理想としての價値を有しないこと、並にそれが他の理想内容の到達を不可能ならしめることは謂ふまでもないと思ひます。

論議記者は更に「理想的自我と云ふものが人間相愛といふことの別名であるとすれば、何も言ふことはないのでありますが、これを發展して止まざるものと見る時に初から人間相愛などと定めてかゝることを如何かと思つたのであります」と論じて居られます。私の用ひた言葉がこゝでは異つた意味で解せられてゐるやうですから、簡單にそれを説明して見ませう。

私の意味する處では、個性的自我は固より發展して止まないものです。併しその發展の究竟のあることを私は信じて、これに理想的自我といふ名を與へたのです。それ故に理想的自我の内容は、個生的自我の理想そのものと必ずしも一致しな

いかも知れませんが、その理想の發展の究竟と同一のものでなくてはなりません。そして一方に人間相愛が、その理想の究竟的内容の一つであることは既に述べた通りです。この意味で人間相愛は單に個性的自我の理想に屬すべきものではなくて、寧ろ究竟たる理想的自我に屬すべきものであります。

この上の誤解を避けるために私はもう一言之に附加したく思ひます。人間相愛は謂ふまでもなく現實の私たちの個性的自我の理想としても既に存立し得るものであり、又存立しなければならないものです。只缺陷ある各の個性的自我はその具體的行爲の何れがこの相愛の理想に眞に協ふものであるかの判斷に於て必ずしも至當であり得ないのです。この判斷それ自らが發展して止まないものであり、そして理想的自我の究竟に於て始めて絶對であり普通であるところの唯一の判斷に歸し得るのでありませう。私たちはそこに始めて人間相愛の何であるかを具體的に知悉することが出來るのです。私たちが深刻なる悲痛を體驗して苦しまなくてはならないのは、之に到達する道程に外ならないのです。

私は以上に於て極めて抽象的に人間相愛について述べました。ともかくも人間相愛が私たちの理想に屬すべきことを明らかにし、これと矛盾すべき自我主張は個性的自我の現實的缺陷に歸せなければならないことを論じたのに過ぎません。私がその上で人間相愛の具體的考察に立ち入らうとするためには、先づ人間相愛の種々のあらはれを考慮し、その一々について詳密な考究を費すことの必要であるのを感じます。

私たちは人間相存の事實を認めると共に自分一人の立場から、之を見ますと、他の人間の自分からの隔たりに應じて、相愛の程度と種類とを差別しなければならなくなります。そこに謂はゆる異性愛、親族愛、友情愛、集團愛、並に人類愛などを生ずるのでありませう。この愛を更に延長したものは自然愛（生物愛をも含めて）でありますが、私が人間相愛に

求めた根據は自然愛に對しては及ぼすわけにゆきません。自然愛が單に美の理想と結びついて成立の理由をもつに反し、人間相愛は美の理想の外に、人間共存の事實からも歸趨し得るのです。そしてこの人間共存に依屬する相對的理想價値は卽ち私たちが通常言ふところの道徳的善でなければならないのです。ともかくも人間相愛の種々のあらはれは極めて複雜錯綜せる相對的關係によりて連繫するが故に、私たちはその具體的發現としての行爲に當りて困惑苦惱するに至るのであります。道徳的善の内容がどれ程愼重に考慮せられなくてはならないかは蓋し想像するに餘りあるでありませう。

之等の問題は固より俄かに考へ盡すことは出來ません。私が特に言ひ及ぼしたい極めて僅かの範圍に對しても、之を他の機會に讓らなくてはなりませんけれども、私はこの稿を終ふる前に、更に一つの注意を言ひ添へたいと思ひます。それは上に擧げた愛の種類の或るものに對して存する特殊の事情のために私たちのまへに再び稍々困難に見ゆる理論的の問題があらはれることです。卽ち異性愛が私たちの性慾的本能と密接に關聯することによりて、そこに性交なる行爲が之と相伴つて生じます。性愛が人間相愛の一つの特殊の場合としてゆるされるならば、そして人間相愛が私たちの理想の一つとして肯定されるならば、何が故に性愛に伴ふ性交が屢々卑しめられて私たちの間に話されるでありませうか。私は尙ほ人間の食慾的本能から結果する肉食なる行爲、若くは菜食すらも、それが何故に自然愛と矛盾して、人間の生存を保證するものであるかと云ふ問題をも指摘したいと思ひます。之等は人間相愛竝にその延長たる自然愛に關して横はる理論的の問題でなければなりません。私は之等に對する私の現在の意見を稿を改めて述べて試みたいと思つてゐます。

婦人の職業

東京女高師高等女學校主事　藤井利譽

婦人問題の大きいものの一は、婦人の職業問題である。婦人が一定の職業に從事して、經濟的に獨立することの出來るやうになることは、婦人自身のためにも、若くは或る場合に負擔せねばならぬ家族的義務を果たすためにも必要である。特に之によつて自然と婦人の位置も高まつて來るのであるから、婦人も事情の許す限り職業に從事するがよい。少くとも職業的陶冶を受けねばならぬと。これ今日の普通の意見である。中にも婦人の眞の解放は、婦人が一定の職業に從事して經濟上の獨立を謀るにあらざれば能はぬ。もともと婦人が自由や權利を喪ふやうになつたのは、經濟上の獨立を失つたからであるから、女權を取り戻さうとするならば先づ經濟上から行かねばならぬといふのである。

至極尤の論とは思ふが、男子と相對抗して職業の爭奪戰までもして、利權の擴張の爲めに職業を執るといふ強硬な態度には今直に賛成する勇氣がない。況んや解放の悲劇はぢつとして見ては居られぬ私の性分からはこの事は別の問題として婦人の職業觀を述べて見ることにしたい。

私は婦人に職業に就くことを勧める一人である。其の理由はかうである。

活動するとに依てのみ、進歩もすれば發達もする。人は職業に依て人格が試練され、琢磨され、完成される。彼の一技一能に達した人は皆それである。政治に從事して眞の政治家となり。實業に從事して眞の實業家となる。社會事業に働いて見て眞個に社會教育の貴さが知られる。唯何もせずに徒に自己を見詰めて居つたからとて、自己が進むものではない。却つて自己に對する意識が確實性を缺いて、動もすれば一人よがりの自惚が増長したり、妄想狂に走らぬとも限らぬ。

これまでの歴史で見ると或る特別の場合の外、婦人が職業に從事せないのは普通であつた。多くの職業は皆男子の創造したもので婦人には殆んど無關係であるが如く見られた、かうした事實は婦人をして仕事の能率の上に於て甚しく男子に後れをとるに至らしめたではあるまいか。精神活動には徑

殊な素質を有つて居る婦人でも、これを客觀的に活動させ鍛錬させる機會が與へられない爲めに全人格の發達を鈍らしたのであるまいか。男子が職業的活動によつて其の特異性を發揮し居るが如く、婦人も婦人に應はしい職業に從事し若し人は職業的訓練を受けて眞劍に自己の力量の活躍を圖つたならば必ずや明確に女性の特徴を發現するに至るのである。自己の職業を遂行成就し自己の生存を主張し、如何なる困難の前にも退かない力の鍛錬され、屈從より自立へと進んで強い人格が完成される、先づ有爲有能であらねばならぬ。さらば第二は繼いて來るであらう。

さて、婦人の選ぶべき職業は如何なるものであるべきか。職業を單に經濟的獨立の手段として見るならば、苟も生活資料を與ふる上に於て效率の多きものを選ぶこととなり、さうして男子の創造したものでも、爭奪してまでも取つて行ふも敢へて憚るところがないことになるのであるが。更に之を精神的方面から考察して婦人の性格の陶冶に資せようとするならば、婦人は婦人に最も應はしい職業を求めて之に從事するがよい。寧ろ自ら自己に適應する職業を創造して活動するとが重要である。さうして之によつて自己の表現を計り修練を遂げて女性の特異性を構成すべきであらう。從つて男子の造り出したものを追ひかけてをるのみが能ではあるまい。

女性に應はしい職業は何か。經濟的に産業的に各方面に之を發見することも出來やうが、精神的勞働の方面には大いに推奬したいものがある。現在に於ても社會事業に、教育事業に、婦人の活動を待つて居る職業の分野は廣く展開されて居る。

歐米の婦人が大學を終はつて更に二ケ年前後も各種の社會問題を研究し、出でて社會事業に從事する意氣と努力とには敬服せざるを得ない。さうした結果は或は家庭生活の改善を促し或は社會風教の善導となり、或は弱者を保護する等文化の進歩に貢獻するところ頗る大である。更らに婦人に最も應はしいものは家政に關する業務である。入つては家政を眞劍に管理するも、出でて多くの家政を管理する婦人の指導者となるも可である。今日衣食は勿論住宅問題の如きも婦人の力に待つて解決すべきものが多くある。

特に育兒や保育等家庭教育の事業に至つては研究を要するもの多く、婦人の精神的活動の領域であるといつてよい。しかも最もよく女性の試練の機會を與ふるところである。然るに現在多くは唯々傳統的な考と方法とで徒らに舊慣を機械的に反覆するに止まつて、更に何等の新しい創造を試みることをせない。漫然たる其の日暮しであるか又はこの尊い業務を他人の手に委ねて何等爲すところのない徒食者である。これでは家庭の業務は却つて婦人の發達を妨げ滅亡に導くのみで

あらう。唯「ありのまゝの世界」に住するのみでなく「かくあらねばならぬ世界」を追うて行かねばならぬ。

今日家庭生活の根柢からの改善は、本當に人間を幸福に導くところの改造である。西洋人はエライといはれる。しかし彼等のエライのは金の澤山あるためでもなく、頭の素質が優れて居るためでもない。頭の比較をしたら彼我に大した差はないであるまいか。けれども彼等が毎日樂に働いて多くの仕事をして、良い物を食べ、丈夫な衣物を着け、世話のかゝらぬ家に棲んで、しかも割合に安價な生活をして居る點は敬服に値する。西洋人は良い道具を使つて、上手に仕事をして居る。日本婦人が終日かゝつてすることを半日で仕終はつて十分の餘裕を有つて居る。其の間には本も讀めれば他の仕事をする暇もある。日本の婦人が位置の向上を計る爲に參政權を獲得する前に先づ家庭生活の改造を行つて、婦人に有用の仕事をする暇を造ることが急務である。今のやうに朝から晩まで家事に追はれて新聞を讀む暇さへないやうに不規則に業務をして居るのでは、家政が婦人を磨く機會を與ふるとしても極めて能率の低いものとなつて仕舞ふ。まづ衣服なり住宅なり什器なりの改造を行ひ仕事をする方法を新にして家政の能率の上る樣にせねばなるまい。かうして初めて家事が婦人に應はしい業務となり。又家庭外に働く餘裕を與へて、こゝに婦人の眞の向上を齎らすことも出來るのである。

職業に從事するを可とした時に繼いで起る問題は、婦人の職業教育の問題である。教育は人間の陶冶である。陶冶は知識のつめ込を主とするのではない。知識を獲る力を培ひ仕事をする能を養ふことが必要である。陶冶は精神の構成であらねばならぬ。知識を自ら獲得し、工夫し、構成し、創作し、研究する力を鍛練することである。知識の量の如きは末である。然るに今日までの學習といへば、書物上からのみ得るものであつて、自ら經驗した知識でなく自ら獲得した、活知識でない。恰も障子に塗つた封蠟の如きものである。學校を出ると直ぐにボロ〳〵に落ちて仕舞ふやうに忘れて仕舞つて、活世界に立つて役に立たぬものである。

こんな教育のみを受けては職業に從事しようとて何等の準備ともなるものではない。眞に社會生活と接觸し職業活動と結合した教育によつて、社會生活を經驗し職業上の知能を獲得するやうな、自己構成をするやうな學習でなければならぬ。今日の高等女學校の教育の如きも漸次この理想に近きつつあるとは思ふが尚考究すべき餘地が多い。さうして女學校の教育の終つた後に於ても更に進んで職業的教育を受けることは將來に於て職業的生活に入るためにも又自己の修養の爲めにも餘程大きな意義のあることと思ふ。教育と職業との關係について論ずべきことが多いが問題外になるから、省いて置く。（大正一一、一一、一七）

小作爭議は何故に喧しいか

田川大吉郎

一

先づ身勝手な事を申上げて濟みませんが、此の頃の私は目の廻るほど多忙で、いづれの方面の事も滿足に辨じ兼ねて居ります。

然るに此のお問ひは極めて重要で、仔細に答へるためにはかなり多くの時間を要します。それを僅に一時間か一時間半の間に答へようとするのでありますから、簡單に、或一二點を、然も此の大要を摘んで申上ぐるだけに止めます。どうぞ其の疎略な、屆かぬ所をお赦し下さい。

それで結局の要旨を初めから申上げますと、私は食へないのが原因である。食へないから爭ひが起る、食へないから其の爭ひが喧しいのであると答へます。卽ち現在の收入では、我が多數の小作人は、到底現代の生活を營むに堪へません。故に爭ひを起すとも無しに爭ひが起つて來ました。たゞ其れが食へないといふ行き詰つた原因から起つて來たのでありますから、之は死活の爭ひである。洵に讓歩の餘地、妥協の餘裕が乏しいと謂ふべきものだ。と、略ぼ此の如く視て居ります。それだけ其の爭ひは益々激烈になり、深刻になる、現に日に〳〵其の激しさの度を加へ、且其の數を加へ、容易ならぬ事態形勢を釀成しつゝあることは固より申上ぐる迄もありません。

二

小作人の爭ひの相手は申す迄も無く地主である。然らば其の地主に讓歩の餘地があるかと問へば、それも有りません。理論は兎も有れ、實際には其の餘地が有りません。若し有れば解決の途は面倒で無い、地主に讓歩させて、それで解決を告ぐるまでゞありますけれど、私の見る所、私は大體に於て地主にも其の餘地が無いと見てゐます。それだけ其の解決が極めて困難で、殆んど其の見當がつきません。洵に厄介千萬な、殆んど人間の思慮分別に餘る程の難問題であると思ひます。

三

其の理由は何であるかと申せば、それは土地が少いから、それに百姓の數が多いからであります。

念のため、現に作る我國の耕地面積はいくらであるかと申せば、

田、三百一萬四千二百三十六町
畑、三百十一萬八千百四町
計　六百十三萬二千三百八十町

となつて居ります。それで百姓の數はいくらなるかと申せば

概算、五百四十八萬戸

約二千七百五十萬人でありませう。これでは一戸平均一町そこ〳〵であります。田畝を合せて一町そこ〳〵であります。足る筈がありません。足らないから食へないのであります。爭ひの起つて來る所以は最も單純に最も明瞭であると存じます。

然らば一戸平均にいくらづつの田畝を有たせたなら足るだらうかと申すに、私はざつと二町平均を與へたらと思ひます。然し今日の日本ではそれは贅澤の標準でありまして、殆んど計畫の見込がつきません。因て一歩を讓つて田一町に畝一町づつ、合せて二町づつを各農家に有たしめるとすれば、全國の農家の數は、約三百萬戸になるのであります。其の約三百萬戸に相當すべき田畝を、五百四十八萬戸に分けて居るのでありますから、其の困窮するのは無理も無いこと、爭ひの因て起る所以、其の爭ひの激烈を極めて、其の恨みが日に〳〵深刻に成り行く所以であります。

然も五百四十八萬戸の農家を、どうして三百萬戸に減じますか、其の方法は誰にも考へ出されますまい。これが前に申しました通り、殆んど人間業には工夫の出來ない難問題たと申す所以であります。これをどういたしませうか。

私は日本の歴史を讀むごとに、日本に政治家が居なかつたことを悲みます。上下二千年、實に政治家らしい政治家が一人も居なかつたことを思ひます。其の筈である、日本人の求めた英雄は軍人である、たゞ軍人である。戰爭上手な人が、即ち日本人の尊敬する英雄であつて、其の外には英雄は無つたのであります。日本は其のために大へん損をしました。歴史はそれを證明して居ります。何事ぞ、其の二千年來の舊夢から未だに醒めないで、日本人は今に至つても軍人を求めて居る、たゞ軍人を求めて居る。明治以來の歴史も亦其の事を果も確實に證明するものである。其の軍人で、此の問題の解決が出來ますか、日本人は實に知慧の足らない、見識の足らない、遠謀の無い、大志の無い、又勇氣の無い國民であると私は嘆息に堪へないのであります。

四

但、左樣に憤慨したばかりでは、此の小論文はまとまりがつきません。それで此の爭ひは遂にどう成り行くかと申せば私はそれが遂に小作人の勝利に終るだらうと思ふて居ます。地主は負けてもいゝと申すのでありません。地主にも餘裕は無いのです。地主も食へないのです。故に地主も負けられない爭ひであらますけれど、私は結局の所、遂に地主が負けて小作人が勝つだらうと思ふて居ます。

其の理由はと申せば、小作人が土地に着いて居るからであります。小作人は土地に着いて居る。故に其の收益は小作人の物であります。名義上は勿論小作人の物で無いにしても、其れが地主の倉に搬び入れられるまでは、小作人の庭に在り小作人の納屋に在る。小作人の手許に在る。これが大切である。商工業の資本家に對する勞働者の關係に較べて大切の相違であります。商工業家は賃銀を以て勞働者を雇ふて居ますから、其の賃銀は資本家が拂ひ出すまでは資本家の手に在る。勞働者はこれを如何ともすることが出來ない、頭を下げて、身を屈して、讓り難いことでも讓つて、それを資本家に拂ひ渡して貰はねばならない。それを拂ひ渡して貰はないと勞働者は食つて往くことが出來ず、妻子は其の日からして路頭に迷ふことになる。これぞ勞働者が資本家に抵抗することの出來ないで、資本家を增長跋扈せしむる原因と爲つて居るのでありますが、小作人には此の弱點が無く、地主には此の強味が無く、地主と小作人との關係は、資本家と勞働者との關係の反對に、小作米を納入するまでの權利は寧ろ小作人に在る。小作人が小作米を納入しない場合の地主の位置は、丁度資本家が賃銀を仕拂はない場合の勞働者の位地に類する。其のやうな關係に類する。それで地主は弱くして、小作人が強いのであります、小作人はいつまでも爭ひをつゞくることが出來て、地主は反つて爭ひを持ちつゞくることが出來ないのであります。別な言葉で申せば、小作人は此の爭ひに於て永劫不敗の位地に據つて居ります。地主の位地は必勝の位地でありません。其の終局の勝敗は、此の自然の狀勢から略ぼトすることが出來るのであります。

私は以上のやうな觀察からして、今日の地主と小作人間の爭ひは、結局小作人側の勝利に歸するものと思ふて居ます。これは大體の觀察であります。局部〳〵にはいろ〳〵な變つた事が起りませう。又結局の觀察であります。その中途には種々な曲折と波瀾がありませう。私どもは、其の全體に關しても、又其の局部に關しても、又其の中途の曲折に關しても更に細かい研究と觀察を要することは勿論であります。

五

然らば小作人が到底勝ち、地主は結局負けることになると申す私の觀察は、小作人が土地に着いて居る、土地を耕やして居る、其の苅入れの結果を取り込んで居る、それだけの關係に止まるか、たゞそれだけの關係に止まるかと申せば、ただそれだけに止まりません。私はそれに別分の理由を今一つ附加して置きたいと思ひます。

それは外でも無い、小作人の地主に對する義務の負擔が、米を以て測られる、昔ながらの米納制度になつてゐて、金納制度に變つてゐない事であります。私はこれを小作人側の爭ひに有利な一原因であると思ふてゐます。

これだけ申せば諸君は直ぐお氣づきでありませうが、添へて申述べますと、御承知の通り、昔は地主の大名に納むる所は米納法でありましたが、明治以後それは金納法に變りました。此の金納法に變つた結果として、今日の地主は昔の地主に比し、大へんな利益を得ることになつて居ります。例へば昔は五公五民と申し、或は六公四民と申しました。假に日本の米が一年に六千萬石取れるとすれば、五公五民の場合には其の二千萬石が政府に上納せられ、殘りの三千萬石だけが地主の懷ろに殘り、六公四民の場合には、三千六百萬石が政府の倉庫に入り、殘りの二千四百萬石が地主の懷ろに殘る勘定でありました。若し此の制度が今日まで行はれて居るとすれば、今日の三千萬石は一石當り二十三圓として七億五千萬圓であり、二千四百萬石は六億圓である。今日の地主はそれだけを政府に納めねばならない筈であります。然るに今日の農民はそれだけを政府に納めて居りません。それは何故かと申せば、明治以後、右の金納の制度に變へたからであります。明治以後の地主はそれだけ多大の利益を受けて居る計算であります。

所で、地主は其の利益を小作人に分けましたか、米納の制度か金納の制度に變り、地主は幕府時代に較べて莫大の利益を受くることになつた。其の利益を小作人に分けたかと申せば、地主は之を小作人に分けて居りません。地主は自分たちだけ其の恩澤に浴し、其の利益を占有して、小作人には依然として昔ながらの米納の負擔を課し、其の關係を金納に變更して居りません。こゝに地主の大いな弱味があり、小作人の主張に若干の強味があります。

地主は此の道理に充分氣づいて居られないとすれば、それは非常の不覺であります。私は直に其の熟慮を求めたいのでありますが、兎も角も、私は政府と地主との關係の變じた、此の明治以後の德澤を、地主だけが占有して、小作人に其の利益を分つてゐない。言ひ換へれば、政府と地主の關係は變つたけれど、地主と小作人との關係は變つてゐない。此の不合理な狀態を、小作紛議の由つて起る一大原因に數へて且此の理由を、小作人側に強味があり、地主側に弱味のある一理由といたします。

爭ひの激しい所に、又其の容易に片づかない所以、それが日本の最大の社會問題であり、社會問題であるのみで無く、經濟問題であり、政治問題であり、日本の盛衰興廢の由つてかゝる至重の問題である所以はこれだけでも略ほ領解せられませう。私は其の解決の策を未だ有しません。遂に其策を發見するに至り得るか否やを知りません。たゞ心配いたして居ります。憂へ懼れて居ります。世に實際家並に學者、八方の御教示を仰ぎたいと希ふて居る所であります。



大切な賣り物

堺利彦

箱入娘論

凡そ大切な物は箱に入れて保存する。娘は大切な物である。故に箱入娘がある。

然し娘といふ物が、何ゆゑに色々の女の中で特にそれほど大切なのであらうか。賣り物だからである。親の下に在る娘は、遠からず、大なり小なり財力のある、或男に買ひ取らるべき、愛翫奴隷、若しくは臺所奴隷の候補者である。其の買主の定まるまで、蟲のつかないやうに保存する事が必要である。それが娘の大切な所以である。

けれども總ての娘が皆それほど大切ではない。總ての娘が皆な箱入になるのではない。箱入娘は特殊な一部分の娘である。先づ第一に、可なりのキリヤウよしといふ條件がある。キリヤウがよくない娘は愛翫用に適しない。善い買ひ手のつく見込がない。特に箱入として大切にする必要がない。

但し、キリヤウのいゝわるいに拘はらず、娘は皆な賣り物である。一生涯、買ひ手がつかないでは、當人も困り、親兄弟も困る。キリヤウがわるくて賣れが遠いとなれば、猶さら賣り方に骨を折らねばならぬ。其の意味に於いて、キリヤウのよくない娘も箱入になる場合がある。キリヤウのよくない上に、蟲がついたり疵がついたりしては、いよ／＼賣り物にならないからである。

尤も、初めから純粋の臺所用として棄て賣と極めた以上は、別だん桐の箱に入れる必要はない。紙袋にでも押しこんで置

けばよい。或はむきだしで放つて置いてもいゝ。放つて置いてもいゝどころではない、態とむきだしにして手當り次第の買ひ手を引つかける必要もある。下層社會に於ける十人並以下の娘は大抵それだ。只、中以上の社會になると、面目上、まさか棄て賣といふわけに行かない。そして實際、臺所用にも適しない。そこでキリヤウはわるくても、矢張り立派な箱入にしてせめて、其の箱で實質を引立たせ、無理にも愛玩用として適用させようと努める。これは最も氣の毒な箱入娘である。

所が、キリヤウは大いによくても、下層社會の娘になると、其の身分上、矢張り好い買ひ手がつかない。家庭の愛玩用としては、キリヤウの外に相當の教養の必要がある。其の教養が下層社會にはない。彼等は中以上の愛玩奴隷（卽ち奥様、令夫人）の候補者になる事が六かしい。そこで彼等は家庭以外に於ける特殊の愛玩奴隷に向けられる。但しそこにも特殊の教養が必要である。乃ち彼等は遊藝、閨房術等の教養を施されて、謂ゆる賣笑婦になる。この賣笑婦の候補者と定められた娘等は、矢張り一種の箱入である。彼等に蟲のつく事は大禁物である。彼等は大切なる將來の賣り物として、嚴重に監視される。そして或る時、財力のある或る男に、初物として提供される。此の意味に於いて、彼等も亦た一種の箱入娘である。

そこで要するに、箱入娘とは、中以上の社會に於ける、家庭的愛玩奴隷の候補者か、或は中以下の社會に於ける、賣笑的愛玩奴隷の候補者かといふ事になる。いづれにしても大切な賣物だ。

箱入娘から箱入息子へ

生方敏郎

上

箱入娘といへば、誰もそれは親たちが非常に可愛がつて大事にして秘藏してゐる娘である事を想像するであらう。

娘を見れば他人の娘でさへ仲々可愛い。私も一人の娘を持つてゐるが、それは〳〵實に可愛い。實に可愛いと口で言つ

てみせても、子を持たぬ人、否娘を持つた經驗の無い人々には、娘といふものが如何に可愛いものであるかは分るまい。子を持つたものでなければ子の可愛さは分るまいといふ事を常に聞くが、同じ子でも女の子の可愛さはまた格別で、男の子なんか何人持つたとてそんな人に到底私の娘の如何に可愛らしい女性であるかが分る筈がない、と云つても決して誇張でないと信じるほどにまで、實際私は私の一人の娘を愛してゐる。

　それはとても言葉だけでは人々に分るまい。

「私はあなたを心から愛してゐる」

　そんな事は三月もたたない中に別れてしまふ男でも、女に對して常に言つてることだ。

「私はあなたを愛してゐます。若しあなたと結婚することが出來ない位なら、私は死んでしまひます。本當に私は死んだ方がいゝ」

　この位のことは、男は誰も朝飯まへに言ふのである。私がここにこんな事を書けば、何處かで赤い舌を出して笑つてゐる女があるやうな氣がする。といふのは、實を申せば、かくいふ私とても、矢張そんな甘つたるいことを言つたものだからである。そのくせ遂にその婦人と結婚することも出來ないのに、相變らず斯の如く今日まで生きてゐて、而かもその生きるや、こつそり生きてゐるのでなしに、月々の雜誌日々の新聞に堂々と名宣りを上げて文章なぞを發表し、生きてゐる證據を見せて平氣でゐる。まさか、あの時あの婦人と結婚出來ねば死ぬといつたから、本當に死なねば申譯なしと思ひつゝ臆病故に生き永へてゐるわけではない。正直にいへばあの婦人を愛した心にいつはりはないのだけれども、そして不幸にして結婚することは出來なかつたけれども、遂に一度も未だ曾て死なうといふ氣が起らなかつたのだ。

　だから、男が口の先で愛してゐるの何のいつたても、そんなことはアテにはならぬ。冬の夜の塀の上の雄猫が妙な聲でゴロンニャアと力むのと同じ程度の興奮にすぎない。だから、私は口の先で私の娘が可愛いといふのでなしに具體的の實例を以て示せば、私は剃刀で娘の生えぎはだの眉なぞ剃つてやる時には、まづ男の子供をつかまへて菓子の一つもやつてその顏を拜借し、剃つても痛くないか痛いか、その切れ味を試してみて十分プルーフした上で、娘に剃刀をあてるのだ。こないだ西洋の友人から安全剃刀のいゝのを送つてもらつたが、大變上等だといふ折紙付であつたから、たとへ安全剃刀にもせよ、そんなに上等ではまた何んなに切れるか分らないからと思つたので、まづ自分の顏をあたつてみて安全なことは分つたけれども、尙ほ安心せず、勇敢にして大和魂を持つてゐる

さうな私の三男の頭をつかまへて、更に試しぞりをして一銭銅貨位の毛髪を落してしまつたのを細君に發見されて大に立腹され、子供を無差別に待遇しないとてまくし立てられたが、そんな屈辱を忍んで迄も、安全剃刀の更に實際に當つてみて本當に安全なのを確かめた上でなくては、之を最愛の娘に向つて用ひる心に成れない。勢ひ斯くの如くであるから、萬が一にもこの娘が寢小便でもした日には――この娘に限りいまだ曾て左樣な粗さうは致しませぬが――寢小便したと假定すれば、その時の小言の尻はまつすぐ私のところへ持つて來られるだらう。

「あなたがふだんからあんまり可愛がるからですよ」

斯う細君はいふであらう。可愛がるが故に寢小便をするといふ論理は何處の國にもないけれども、最愛なる娘のためには勿論この理不盡なる文句をも忍ぶであらう。そして細君が若し、この濡れたる蒲團を乾かす爲めに二階の屋根までそれを擔ぎ上げることは、當然私の爲す可き賠償的勞役であるかの如き口吻を洩らすとも、私は唯々諾々として之に應じ、自分の蒲團すら自分では敷かぬ我儘者なるに拘らず、この時ばかりはあまり騒ぎの大きく成つて お隣り近所へ聞えぬ樣にと、そのしみのある厚い蒲團をエンヤラヤツと二階の屋根まで持ち上げることすら否まぬであらう。

私の娘は片言でやうやく物を言ひ初めた位であるのに、此通り可愛いのである。まして、洋裝のよく似合ふ、女學校へ通ふ位の年頃の娘を持つた親たちの鍾愛は何んなだらう。桃割れに結つても耳かくしにして、派手な流行衣裳を着せて街を通れば、美の何者たるを解せぬかの如き運送引の男までが道をよけてくれ、ましてオールバツクべつかふ眼鏡の青年學生が秋波を拂つてくれることは云ふに及ばずといふ年頃の娘を持つ父親の悦びと誇りとは、何んなだらう。誠に掌中の珠とは娘のことだ。

さて、そこで、珠はゴロ出しにして置いたものか？ それとも孔子さまの言ひぐさではないが匱に藏して價を待たうか？ 勿論誰しも大層な寶をむき出しに投げ出して置く虚栄はない。寶の影には常に盜兒がうかがつてゐる。若し娘を寶と思ふなら、之を綿にくるみ函に入れ更に外から袱紗で包んで神棚へ上げて置く可き筈だ。

此心理を惡用して日本の商人は左程大切な物でも貴重品でもないものまでも、無やみとくる〳〵幾重にも包んで、さも貴重品らしく見せかけるくせがある。菓子なんかつまらぬ菓子でも非常に立派な箱に入れる。人からお土産を貰ふ。商店の名を印刷した平絲で十文字に結へてあるのをほぐすとハトロン又はいゝ西洋紙に又も菓子屋の名を印刷した大きい

紙包みで。それを解くと恭しく紅白に水引を懸けのしをはつたのもあればハイカラに斜にリボンを結んだのもあり、とにかく立派な化粧函が現はれる。そのリボンを解くと薄いパラピン紙で箱が蔽つてあるから、それを破つて漸く箱を明けると薄い白い紙が双方から蓋をしてゐる。その蓋を開けばピカ〳〵光る銀紙で丁寧に包んである。その銀紙まで達した時には、子供たちおパパの周圍を取り巻いて、一刻も早く食べ度さに口腔によだれを蓄へ、顔をほてらせて待つてゐる。ややうやくにして西洋菓子が出れば、又その菓子を一粒々々が銀紙で包んである。

「これはありがたい。チヨコレートクリームだ。」

その他マシマロウだのグーノーだのメツキスだの樣々出て來る。

だが、こんないゝ菓子の出ることは稀で、田舍のお客が持參するのとなれば、包みこそは八重九重の奥深けれど、中はもなかの皮のしんねりむつつりしたものやら、時にはカビたあんパンが出る。菓子は一重の、底は上げ底一寸三分と來てゐるのだ。

近來、書籍を函に入れることも亦た獨創的な日本人の名譽ある發明。うやく〳〵しく箱に入れられパラピン紙に包まれ甚だ巧みに裝幀せられて、而して頗る拙劣に書かれた愚劣な話。それも頗る流行る相だ。

かう一口にダークサイドばかりを數へると箱入もすつかり値打が無くなるわけだが、箱入必ずしも胡麻化し物と限らない、天賞堂のダイヤも函に入つてあれば、三木本の眞珠も函に入れられてある。

そこで、娘の箱入は何うだ。箱に入れてもカビたあんパンはカビたあんぱんだ。ダイヤモンドはダイヤモンドだ。私の最愛の娘の如き函に入れても外に置いても秋毫もその光輝を減ずる憂ひはない。私は之を匱に藏して價を待つ。估らん哉、估らん哉。我は賈を待つ者である。今からその眞價を認めた人々はもう十四五年したならば遠慮なく求婚することが出來やう。

だが、娘は箱に入れて袱紗に包んで藏つて置きたいほど大切に思はれるけれども、娘たちは果して箱の中へチンと納つて大人しくゐるだらうか？　これが甚だ疑問である。お雛さまさへ、近頃は久しく箱に入れて置くと、いつの間にやら樟腦か消え失せて、そしてあちこち蟲が付く。でもまだお雛さまには樟腦といふいゝ藥があるけれども、娘にはこんなうまい藥が無い。本でも讀ませればと思ふと、本から蟲を呼び込んだり、學校へやれば往復の電車を不良少年につけられたり、教會こそはと氣を許してゐれば、教會内にもオールバツクの

べつかふ眼鏡がうよ〳〵ゐる。樟腦は餘りに發散し易く、雛には蟲が付き易い。

ただそればかりでなく、之れからの娘たちが、親たちの作つてくれた箱の中に大人しくぢつとしてゐるだらうか？　京人形ぢやあるまいし、箱に居ろとはバカにした話。私たちは解放されてる。何を考へやうと何を讀まうと何所へ行かうと何をしようと、私たちの自由だわ。と娘さんたちは仰言るにきまつてゐる。

他所の娘さんたちは兎も角も、私の家の娘なぞは、決して私たちのこしらへた箱に入つてゐる氣づかひはない。髮を七三とやらに分けて洋裝でもして歩くやうに成れば、もはや蛟龍池中のものに非ず焉。

下

大正の聖代の有り難さ。鉦太鼓で探し廻つたとて、娘の箱入といふものは一寸見當るまい。百姓娘は早乙女としてお尻を田圃に並べる頃とも成れば、家に置くより野良へ出して稼がせねばならず、商人の娘は店に出して招き猫、貧乏人の娘は工場へ通ひ、腰辯の娘は會社へ出かけてタイプライタアを打てば、ブルジヨアの娘は踵の高い草履でも携帶して鶴見の舞踏會へ行く豫定であらう。大正以降、一人の娘も箱の中に入つてはゐますまい。

だが、こゝに男兒には却つて箱入が多く見出される。と云へば詭辯か皮肉かそもそも反語か、敏郞の例の癖油斷ならずと思はれるかも知れぬが、決してさうでなく、男の息子の箱入こそ本當に昔からある話。而かもそれがビールを中毒する迄呑むといふ、そして世界列國を向ふへ廻して散々叩きのめした豪傑揃ひの、マッケンゼンだのヒンデンブルグだの名からしてゴツ〳〵喧嘩腰であるやうなドイツ聯邦の盟主、プロシアの國に實際あつた話。

セーニヨーボーと云ふフランスの歷史家の語るところに依ると、プロシアの王樣フレデリックは無暗と世界の一等國に成りたがり、一等國に成るには強國と成らねばならぬ。然り而して強國と成るには軍國主義を採らねばならぬ。と其れが將來自分の孫子の代に及んで國を亡ぼす基とは神ならぬ身の氣が付かれぬも道理、軍備に莫大の國帑を費し盛んに兵隊を集めようとするが、仲々兵隊に成る者が無い。「私はお嫌でがす」と來る。徵兵係の士官たちは田舍へ行つて青年を腕力に訴へて脅したり奸計を以て欺いたりして一人でも多く兵隊を集めようとして苦心した。或時、格幅の好い指物屋の青年を發見したので、是非とも之を兵隊にしようと考へ、

「何うぢや、貴樣、國家の爲めぢや、兵隊に成らんか」

と說いたが仲々承知しない。

「私こと兵隊に成つたらば、貧乏な親父お袋は何うするでがす。食ふ事も飲むことも出來ましない」

などと云つてゐる。誠に毛唐は始末が惡い。歐洲一の軍國主義の國民だのと云はれトライチユケだのモルトケだのカイゼルウイルヘルム二世の樣な軍國主義のアドボケートを產出する本家本元の樣に見えた時分でも、矢張夷狄は自分や自分の家族の生活問題を考へたり權利を主張したりしてゐて仲々始末が惡い。そこへ行くと日本人は實に話が早く付く。

「國家の爲めぢや。兵隊に成らんか」

なぞと相談するに及ばず。一錢五厘の端書一枚で一人の兵隊は直ぐ出來る。一太郎やあい、と來る。

「一太郎、やあい、おらがこたあ心ぺいせずと國家に御奉公申せえ」

と來る。年頃日頃ドイツの軍國主義を罵り日本の軍閥を敵のやうにして惡口ばかり云つてる東京の大新聞が、オイ〳〵隨喜の涙をこぼす。一太郎やあい、は内の新聞の特種だ。と誇る。年頃軍閥を罵つたことを氣はづかしく思ふ樣子も反省も無いほどに、一太郎やあいを有り難がつて、宣傳する。貧しくして老いたる父母を家に置いて、兩親はたとへ餓死するとても、シベリアを占領するとて出懸けて行く。誰の爲に？　勿論貧しい彼自身の爲めではない。一太郎がシベリアを占領してみても後の始末に困る。又兩親の爲めでもない。又故郷の貧しい友人、貧しい親族の爲めでもない。

「そんな事、分り切つた話だ。國家の爲めだい」

實に頭がいゝ。之だから日本人は矢張西歐文明國の夷狄とは違ふ。平生軍國主義軍閥ばつこを筆誅してござる東京の大新聞記者諸君が一太郎やあいに隨喜渴仰するのは一寸我々が考へると如何にも矛盾してゐるやうだ。たが、こいつも、

「分り切つた話ぢやねいか？　國家のためだい」

と極めて簡單明瞭で、何う考へても新聞記者諸君は頭が惡くない。この分なら彼等が普選で空騷ぎをすればとて、必らず國家安康だ。軍閥萬々歲だ。實にお目出度い。實に安心出來る。私達頭の惡い者は暫く考へた後、何としても微笑まざるを得ない。

さてお話前に戾つて士官は指物屋の若い衆を樣々に瞞すかすが仲々分りが惡い。そこは夷狄の悲さだ。とても一太郎やあいと來ない。第二の一太郎やあい出現すと新聞記者諸君をずゐきかつがうせしめない。

「私はあ兵隊に成るなあいやでがさあ」

と突っ張る。是に於いてや、士官は謀を帷幕の内に廻らせて、こんな土ン百姓をだまくらかすのも國家のためと思つたか何うかそこ迄はセーニョーボーも云つてはゐないが、兎に角、

「よし、よし、ではその話は止めよう。時に話は違ふが箱を一つこしらへてくれ。ずゐぶん大きく」

「何の位大きく」

　野郎たうとう慾に釣り込まれてしまつた。そして人が一人入れるほどの大きさの箱を作る可く註文を受け欣々然として歸宅した。それからセッセと箱を作り上げて、早速士官の宿所まで運んで行つたところ、士官はそれを一目見て「こりや餘り小さい」と云ふ。指物師は「えへへ、旦那、そんな筈はありませんよ。この通り私のやうな大男がゆつくり入れますがな」と中へ入つて見せた。すると士官は「〆た」とばかりに直に上から蓋をして、その箱を軍隊へ輸送した。軍隊では早速その箱の蓋を明けて見ると、指物師は氣が遠くなつてゐた、といふのだ。これ即ち箱入息子の由來話であつて、ドイツの軍國主義が遺した頗る面白い逸話なのだ。だが、日本ではこんな箱入息子なんぞにしないでも、葉書一枚で無數に兵隊は出來るから、安心だ。

　何だか政府こそ少し箱入政府の方で浮世の事情に通ぜずヘマな外交ばかしやつて心配だが、軍國のことなら日本は世界の例外といふほど兵隊を容易に得られるから、一將成レ功萬骨枯の割合で三井三菱を初めとして百將功成る事は有つても、まづ／＼兵に不足はない。三太郎やあい、俺はホンヤクの安原稿でも何でも書いて一家八人の露命をつなぐから、國家さに御奉公しろよ。箱入息子を持たるる讀者諸姉、あなた方も大方その覺悟で。（終り）

愛の夫婦生活

私共を結びつけるもの

伊藤野技

此の頃、大杉の行方不明について、ちよいちよい新聞記者の訪問を受けます。そして、いろんな事を實によく聞かれますが、何よりも、出てから少しのたよりもないのによく心配せずにゐられると不思議さうに首をかしげて歸ります。尤もこれは新聞記者ばかりでなく親しい知人の人達からも同樣のお言葉を頂きますが、實際は私としてはたよりがあつてもなくても、とにかく大して心配せずとも濟むものを持つてゐるからです。別に何んの不思議もありはしません。

彼は、どんな計畫をする時でも非常に周到な用意を致します。しかし、どれ程綿密な注意をし、どれ程周到な用意を以てして、その成功に十二分の自信をもつ事が出來ても、彼は決して其の自信にはたよりません。常に其の失敗に際しての用意をする事を怠らないのです。彼はいつも人間の計畫の邪魔をする「偶然」を勘定に入れる事を忘れません。彼は其の點では、私の且つて見た事のない「實際家」です。私が彼の一身に就いて安心してゐられる重要な信頼は、其處にあるのです。

二ケ月間、或は三ケ月も一度も便りがなくても、私には其

の間に彼の計畫がどういふ風に進行してゐるか、と云ふ事は容易に察する事が出來るのです。彼は其の計畫にとりかゝる前にとにかく此の推定に必要な材料を充分において行きます。そして、其の失敗に際する彼の處置についての或る確信があれば、私にはもうそれで充分です。もしそれ以上の不幸が來れば、それには私はもう一切の未練氣はない筈なのです。何故なら、彼が私の爲めにいゝ良人であり、子供等の爲めに慈愛深い父として自家の疊の上に寢ころんでゐる時にでも、思ひがけない災が來ないと云ふ事は決して豫想の出來ない事ではありませんから。

或る新聞記者は私にむかつて、私共の家庭が不安定であり、子供や私や大杉は不幸ではないだらうかと云ひます。主義主張のみが全生活ではあるまい、大杉も私を愛し子供を愛し、私もまた大杉を愛し、子供も父を慕つてはゐないだらうか。大杉の生活が我々の生活と別物だと思へない、と言ひます。勿論別物では決してありません。また彼の主義主張が勿論その生活の全部ではありません。或る時には、世間普通の人達以上の家庭生活の享樂者であります。彼は大抵の場合子供を連れて歩きまはります。子供と一しよに玩具をあさり、食物を撰び、其の着物、シャツ、靴足袋の類までも世話を燒きます。彼が格別の用事を持たずに家にゐる時には大部分子供と一しよです。出るにも入るにも子供を連れてゐます。同時に亦私の相手もよくしてくれます。私が夕飯の仕度でもするときにはお芋や大根の皮むき位は引き受けます。七輪のそばにしやがみ込んで、はじめからしまひまで、見物してゐます。御飯を炊く火などは大よろこびで燃します。よく、出入りをする御用聞きや職人が呆れてゐた位です。要するに家庭では實に善良な父であり良人なのです。足掛八年間の同棲生活の間に私は省みて彼に持つ不滿は一つもありません。折々の不機嫌も、殆んどすべて、と云つていゝ位に私の我まゝな感情のこぢれに基くのです。

が、此の甘い幸福な、他から見ては實にお芽出たい生活が彼にとつてどれ程の値打ちがあるのでせう？　私は其處に彼の爲めにも私の爲めにも、充分の値打ちは認めます。しかしまた、彼の家庭外の生活が、彼にとつてどれ程重要なものであるかも、十二分に認めて居ります。そして此の、彼の懸命な對社會的の仕事がなかつたら、どうして私共がいつも〳〵家庭生活の幸福を享樂することが出來よう？　といふ事もよく知つて居ります。

新聞記者某氏の、妻子が可愛くては思ひ切つた事は出來ない、と云ふ考へも或一面から云へば眞理でせう。またさういふ觀方をすれば、私共の生活は不自然と見えるかも知れませ

んが彼がもし此の家庭の甘い空氣にひかされて大事な仕事を阻まれる事があるとしたら、彼は決して何時も屈托なくその家庭生活を享樂する事は出來ません。彼が或る人々から此の享樂についての多少の非難のある事を知りながらそれを意に介せずに享樂することの出來るのは、寧ろそれ程彼を引きつけてゐる家庭をでも、必要の時になれば未練氣なく離れる事の出來る覺悟があるからだと私は信じて居ります。けれども彼は本當に私共を愛して居ります。どれ程思ひ切つた態度で家庭を無視してゐるやうに見えても、決してさうではありません。彼は私共を愛する爲めに、臆病にも卑怯にもなりはしません。しかし、愼重になり周到にはなります。彼は自分の心の底から湧き上つて來るアムビションの赴くまゝに、計畫し企圖して躊躇なく其の實行に移ります。しかし、其の自分の滿足と同時に私共の上に深い注意を拂ふ事を怠らないのです。私の、彼の妻として、子供等の母としての、彼に對する信頼も、感謝も、あきらめも、たゞ其の彼の態度にあります。他所目にはどれ程不安定な家庭らしく見えやうとも事實私共には決して不安定でもなく、私も大杉も子供達も、決して不幸ではないと私は信じてゐます。

　更に、私一身の上から云へば、彼は足掛八年の間變らぬ愛で我儘な私を包んでくれた寛大な愛人であり、思ひやり深い友人であり、信頼すべき先輩であり、同志です。

　私共は最初お互ひに非常に不利な狀態の下に結びつきました。私共は其の時に、より悧巧な方法を知らなかつた譯では決してありませんでした。むしろ私はその方法を取らうとして一ケ月もの間苦しんだ位です。しかし、私共はお互ひに世間體を繕ふ事を恥ぢないではゐられませんでした。また、世間體を繕ふ事が、自分の心の中まで繕ひおほせない以上、最後まで繕ひとほせるといふ事も考へられませんでした。で、私共は進んで自分達を世間の惡評の中に投げ込みましたので、何が私共を結びつけたかと云ふ本當の事を他人に知らす機會も別にありませんでした。當時の私の最も親しい友人にすら私はそれを話す氣になりませんでした。

　其の友人は其の時私に忠告して、私がつまらない戀愛にひかされる事を極力批難しました。當時私は、自分に知的教養の足りない事を痛感してゐましたから、學生のやうになつて勉強したいと思つてもゐましたし、云つてもゐました。私の希望はうんと本を讀む事だつたのです。其の友人はそれに贊成しました。けれども、實際には其の時既に私には社會運動に對する熱情が確かに燃え上つてゐたのです。私は自分でそれに氣がつかなかつたのです。或は氣がついてゐても、もつと自分をえらくしてからでなければならないと思つてその熱

情を重く觀てゐなかつたのです。が大杉は決してそれを見のがしませんでした。彼の熱情が私の其の抑へられた熱情を搖り動かしたのです。斯くして私は私の單純な知識探究の道をかへました。友人はそれを批難したのです。その人は、私がたゞ戀のたはむれに惑はされたと思つたのです。で、やがてはまた、私が戀の報酬として、自分自身を束縛する家庭と、愛人かの子供の爲めに一生を棒にふつてしまふのだ。あなたは第一の牢から出て、また少し形のちがつた第二の牢に入るのだと云ひました。その人は第一の牢と稱する、私の第一の家庭生活に於ける私の惨めさをよく知りぬいてゐました。

表はれた形の上から云へば、私は正しく第二の牢にはいつたと云へます。が、それは私には牢と云ふ意味のものからは全くかけ離れたものとしか思へません。私は其處で自由にのびのびと育てられました。先づ私は活きた社會的事實を觀る眼をあけて貰ひました。私は其處に力強い事實を觀、熱情を煽られはしましたが、もう決して無知を悲觀しませんでした。私は其の事實から多くの力強いものを學びました。次に私は大杉によつて實に多くの糧を得ました。彼は私の唯一の親友でした。彼は友人として、私の感じたこと、考へた事、饒舌つたことの全部を、深い理解と同情を以て受け容れてくれました。彼には遠い私の些細なものずきな趣味に渉つてまで、とにかく話相手になれるだけの理解を持たうと努力するのです。私の生活のどれ程下らない部分に渉つてでも、彼は些しも干渉がましい態度には出ないで、しかもその全部を知つてゐます。私の心の底にうごめきわだかまつてゐる苦痛も煩悶も不平も不滿も私の言をまたないでも直接に感じて、いつも實にデリケエトな心づかひで先きまはりをします。裁縫の話でも料理の話でも、洗濯の話でも、彼は私が興味を以て話すときに、その私の興味を外すやうな下手な話し相手ではありません。彼はいつでも臺所や井戸端にしやがんで、料理や洗濯に自分の興味をさがし出してゐるのです。ミシンの働きにも、着物のデザインにも、興味を見出すのです。最初は何んの興味もなかつた音樂に對しても、少しも退屈を感ずることなしにいゝものとつまらないものとを聞き分けるやうになり、やがていろんな批評をするやうになつた位眞面目に興味を見出すのです。家庭は決して私を束縛しませんでした。

私共二人の友人としての話題は實に多種多樣なものなのです。ですから私共は一緒にゐれば絶えずしやべつてゐますけれど、話に退屈することは先づありません。そして大抵の場合私は其の友人としての會話の間に教育されてゐるのです。多くの知識を授けられ、鞭撻され、警しめられ、訓へられるのです。

同時に又、彼れは何時でも私を一人の同志として扱ふ事を忘れません。私は彼と一しよになる時には、常に運動の第一線に立つことを辭せぬ覺悟でした。今も其の覺悟は棄てはしませんが、そして必要の場合には飛び出しもするつもりですが、それでも今までの處では引つこんでゐます。が、彼は私に對しても他の少數の同志と變らぬ嚴肅なコンフイデンスを何時も示してゐます。そしてこれはいつも私共の生活に對する最も眞面目な反省を促す一番重大なものです。從つて、これが私共の生活維持の基調であることは勿論です。私は、彼の妻としてよりも友人としても、より深い信頼を示された一同志として、彼れの運動に際して、後顧の憂をなからしめる事につとめなければならないのです。其處にまた私を教育する重大な種々の事實が横はつて居ります。

私共の生活は、世間の人達の眼からは全くノルマルな生活だとは思へないかもしれません。しかし、私はそれ故にこそ世間の人の眼からは牢屋とも見ゆる家庭の内でいぢけてしほむ筈の處を兎に角も、自分を一人の人間として信ずる事の出來る處まで育つことが出來たのだと信じます。が、これは、決して世間で觀てゐるやうな私共二人の甘い戀愛の實ではありません。尤もそれなしに成就したとは云ひませんが、しかしいつも私共の生活を結びあはせ、向上さしてくれたのは、たゞ生命をかけた、同志としての信頼と、深い理解を伴ふ友情です。

「戀はよき刹那を必要とする。走る火花だ、ぐづ／＼してゐるうちには消えて、よき刹那は永久に飛んでしまふ」といふ人間があるかも知れません。そんな戀なら消えてもいゝ筈ですね、又そんな戀まで欲しがるのはドン・フアン宗の安價なエピキユリアンです。あなたはその人々の如く戀愛を一生の大事業に數へますか。」

これは先きに云つた私の友人の、私に對する忠告の言葉です。當時私は此の言葉を夢にも忘れる事が出來ませんでした。世間の人はともあれ、私のあれ程理解ある友人が、私をその安價なエピキユリアンの一人に數へるのか？　私は自分が何事もその友人に話さなかつた事は考へないで口惜涙を流したものです。けれども、もう年月が流れました。今では、私には此の言葉も何んの感情をも煽りません。たゞ私が此の年月の間に學んだ事は「戀は、走る火花、とは云へないが、持續性を持つてゐない事はたしかだ。」と云ふ事です。が、其の戀に友情の實がむすべば、戀は常に生き返ります。實を結ばない空花の戀は別です。實が結ばれゝば戀は不朽です。不斷の生命を持つて居ります。その不朽の戀を得ることならば、私

は一生の大事業の一つに數へてもいゝと思ひます。

私共の戀はずゐぶん呪はれました。が、空花ではありませんでした。大きな實を結びました。新しい生命の糧が出來たのです。エピキユリアンの欲しがる戀は決して實を結びません。それは本當に甘い安價な戀です。空花です。それは本當に走る火花です。それは戀の眞似事です。戀のたはむれです。それは仕事ではありません。そんなものが何んで二人の人間を結びつけておく事が出來ませう。火花が消えれば眞暗です。何にもありません。もうすべてが終つたのです。また新しい火花をさがさなければなりません。「ねえ、あなたの友達は馬鹿でなかつた事が分つて下すつたでせうね。」私は何時かさういつて友人の信用をもう一度とりかへせるやうになつたのです。そして、それは此のまる七年間一日もかはる事のなかつた私のもう一人の、たつた一人の友人であり、同志であつた愛人の思慮深いたすけによるのだと云ふ事を、誇らして頂きます。

——一九二三・二・二——

生きてゐればこそ

若山喜志子

生きてゐればこそ

私は悲しみの時、苦しみの時、または非常な困惑の起つた時、その時々に、しみ〴〵として生きてゐる事の有難さを感じる。そしてそれが除ろにやがて極まりない歡喜に移つてゆく。

「ああ、生きてゐればこそ此のよろこびを味はふ！」と叫ぶ。何といふ有難いことであらう。

「どなたにしても自分は生きなければならない！」この感じは、むしろ悲しみや苦しみの深ければ深いだけ一層色彩鮮やかに映つてくる。

誰れも悲しみや苦しみの來るのを期待するものはないはず

だけれど、それを全然知らないで過せる人もあるまい。苦しみも悲しみも吹き過ぎる風のやうなものだ。暴風もあれば春の風のやうなものもある。が、それの過ぎ去つたのち、あの靜かに澄んだ魂の歡喜はどうだらう。

非常な困難に逢つた時、あゝ神樣！　とつぶやいて祈りの心となる、その祈りの聲はただ神樣！　の一語であるけれど神樣はどこにもおいではない、その言葉は山彦のやうにすぐ自分自身にかへつて來て「しつかりしなくては！」と囁く。

自分はまるで灰色にかきくもつた空を見るやうな智慧のもち主だ、といつもなげいてゐる。たゞ、燃えるやうな情熱とまさかの時に狂人にならないだけの意志とをもつて生きてゐるだけで、かりに他人と爭論をする場合があつたとしても從者たるべき雄辯ももち合せなければ、揶揄するやうな才氣もない、また人がするから自分もその眞似をしたいとも考へたことがない。

結婚生活に入つてから十二年、自分といふものを多方面に意識しなければならない時代に入つたのはそれからだけれど一家の主婦として妻となり母となりもう一つぱし世間なれた女であらねばならないのに、まだ曾て、かうするのが妻のつとめだとか、主婦のつとめだとかいふ事を對他的に考へて見たことがない、世間並みといふことから見たら、なんといふルーズな女であらう、けれどもくどくどと愚痴をこぼし猜疑だとか怨恨だとか、さうしたことは比較的無智に等しい、ただ妙な潔癖のために大きな聲を出して子供達をたしなめる事がある、これは實に自分でもいやで、なほしたいものだと常に心にかけてゐる。そこにゆけば夫はえらいと思ふ。これが或ひは、男性といふものの美點かも知れないが決して夫は子供たちを大聲で叱るといふことはしない。自分がいつも散らかしたものを片付けないと云つて大聲で子供を叱つたあとで「ああまたこんな大聲を擧げてしまつた！」と悔いを感じ愧ぢながらもつい叱つてしまふ、たしかにこの叱る聲は「母の聲」に相違ない、と苦笑する。

「母の聲」と云へば、「父の聲」のもち主、また「夫の聲」のもち主なる夫は私に對しても實に溫厚な友情の深い諒解をもつてゐてくれる。そのために私は今までにはどれだけ內省し鞭撻されてほんとの人間味を知るやうになつたかわからない。

不耗の大地

此のはてしない人生の曠野を踏みわけてゆくのに、通じるべとてない夫婦の生活ほど哀にいたましいものはあるまい、私たちは實にそれに選ばれたともいふべき可憐な彷徨者の夫

婦である。が幸ひに生命があつて死なないかぎり共に手をとつて歩いてゆかれる。

人の妻となるのに何一つ準備してゐるのではなかつた、不純の大地そのまゝの自分であつた、言ひ知れぬ謙讓の心をもつて人に添つた。

「殆んど食ふや食はずで、この怠惰けものの俺を扶けていつてくれるか」と最初に訊かれた時、無條件でそれを承諾したほどの自分であつた、で實際に食ふや食はずの生活をも敢てして來た。私が理想してゐた結婚生活には靈魂の淨い光りが輝いてゐるばかりであつた。現今の娘たちからみれば、それは愚かしいことだと笑はれるにちがひがない程全くまのぬけた娘心であつた。

實際、性の問題云々、など考へてゐる餘裕など見出すことのできないほどその頃の私の思想は、周圍のそれとちがつてゐて、唯々重苦しい壓迫を感じてゐた。どうかしてこの恐ろしい壓迫から逃れねばならない、一刻も早く逃れ出て、眞の自分の自由な魂の生活を營みたいものだ——さうしてこの心のなき魂の饑餓を救つてくれるもののまへにひざまづきたい——と身も心も熱と力に充ち滿ちて暗く息づまるやうな父母の家にゐた。

そのなやみの中にゐて或時殆んど偶然な機會に、しかも必然的に自分の魂は一人の友を見出して歡呼の聲とともに一切の物を振りすてて眞實の人間生活に足を踏み出した。

そして、

あなやこはゆくても涯ても氷のわが世なりけり何踏むべしや

かうした述懐もした、けれども、

——「晶玉のかなしみ」と云つたやうな吾等の戀でありたい、吾等が一生でありたい、夫婦(いやな言葉ぢやないか)といふものを、あんなゴミだらけのザラ〳〵したものたらしめたくない、結晶して玉のやうなものであり了せたい、それを汚すとき吾等は吾等の生命を自から擲ちたい！

この言葉は私たちの生活に入つた最初の誓言であつた。

戀愛を生命として生活してゐる私たちには、「結婚は戀愛の墳墓」との言葉の意味がつひに解されずに終ると信じてゐる。いつでも私たちは新らしい廣遠な力をお互に見出し合つて生きてゐるから。

自己の魂の生活を唯一無二と念願してゐる人を夫にもち、それをまた生きてゐる最上の目的と信じてゐる妻をもつたこの二人の戀愛生活は幸福そのものでなくて何であらう、藝術とか宗教とか名づけ、それに依つて生活する、その形式的な生活には、肯定し難いものがある。

私の生活に對する希望は、たゞ、よりよく幸福を求めて生

きたい願ひである、賦與されて來た自分の生命を自分の力で出來るだけ光輝あらしめたい、そのためには生命の全部を捧げる。夫も妻も子たちも隣人も、たゞ一つの圓の中にをさめて潤澤な靈の光りを浴びて生きたい、生き生きしたこの光りの世界に私たちは疲勞を覺えないであらう。

自己を目がけて

此頃殊に頻々として起りつゝある、あの特に私たちの友ともいふべき階級の人たちの離婚問題を聞く度毎に、悲壯な心を起させる。その動機がどんなであるか第三者の立場ではたゞ憶測に止まるのだけれど、別れねばならなくなつて別れるのだらうから勝手に別れるがいゝ、一時的に別れてもまた歸つてゆく人もあるだらうし、新らしい相手を目がけてとんでゆくのもあるだらう、が、それもいゝではないか、たゞ願ふのは、それがどうかその人個々の生命にもかへがたい眞個の努力であつて欲しい、ほんとうの人間の强さ弱さをほんとうに戰つてゆくには、一生をかけていろ〳〵の犧牲を拂はねばならないにきまつてゐるから。

現今のやうに、女の人が無理をして骨身をけづつて政治運動に奔走する時代もすぎ、勞動爭議も靜まり、平和ないゝ世界になつて、眞實神の意志である愛の生活が人間の個々にあてはまる時代が來て欲しいと願ふ。私は女であるだけに尙一層現今あの政治運動に骨身をくだく勇壯な女の人たちを氣の毒に思ふ、疲れ患つてゐる現在のその人たちに何と云つて慰めはげまして上げたらいゝか、たゞ、忍んで下さい！　疲れたら休んで、また立つて下さい！　と叫びかけてはみるけれど、あまりにいたましい。私自身としてはさうした矢面に立つて働くだけの自信も勇氣も有つてゐないから、たゞ希ふは一旦さうした意志のもとに起たれたのだから、どうか疲れたふれないで下さい、一生を懸けてそれに殉して下さい。あせらずに、たゆまずに！　と。

生命の寂しさ

人間個々、人間個々に生命を持つてゐるかぎり、自分は自分、他人は他人、といふやるせないしかも嚴肅な孤獨がある。その孤獨にはたとゆき當つた時獨りのやるせなさに堪へられないで友を求める、私は常にこの感が深く心の底に動くのを見る。

一つもの二つに割きて食ふべする妹背とは云へどさびしきは獨り

孤獨をなげき君にすがるもはてしなきまぼろしに似てすべなかりけり

君がなげき止むるすべなし地のはてに今かあるらんゆかはまた

去なむ
あはれ君われのゆくてに一すぢのなげきとなりて光り終せな
さびしき時物言ふためのひとりなる友とたのめど君は語らず
しみじみと物も語らず君は君のなげきまもるかせんすべもなし
わびしとて泣かんに君は酔ひてあり何によすべき吾がなげきぞも
酔ふてかへり物も語らず朝となれば陽にいそしまれ君いく世ふる
夜にもかへらぬさびしき人よありわぶるいのちいとしや吾れもさびしや
何か知られど淋しげに家を出でゆきし君故けふのなやましきことよ
神に出でて祈りする人の妻かあはれ朝な朝な君を門に送りて
にこやかに門はいづれど七人の敵に遇ふときく君もますら夫
疲れはてゝ眠れる人の顔のさびしさまづ何事に口をひらかん
いかにかして慰めんものと眠れるひまをあわただしくも香焚くなりけり
すべてを奪ふ美しさもがなすべもがな淋しき人を驚かすべく

夫婦が築いた生活の上に、たとへそれが及びもつかぬ想像若しくは見當ちがひの解釋であつたにもせよ、それがためにさまざまのいきさつの起るのは止むを得ないことであらう。

若しさうした場合の心持を人に問はれたとしたら、
吹きすぎし風か悲しきもの思ひゆくへも知らずになりはてにけり
と云つた事になつてゆくと答へるであらう。

祈りの心

私はほんとうを云へば、夫婦の生活云々を筆にすると所謂告白めいたものになるのを恐つつここまで筆を運んで來た。そして自分はただ默つて歌つてさへゐればいゝのだと思つた。

おもひ立てばげに足元の鳥よりもあわたゞしきぞ君が旅立ち
明日ゆくとふ旅の衣は裁ちもあへずつくろひいそぐ袖のほころび
汝が夫は家にはおくな旅にあれば生命光るとまたの人もいふ

お互に自由に、自然に、と希望しつゝ家庭の生活を營んでゐても、其處には何とも云ひ難い煩瑣なわづらひが絡まつてゐるもので、いつしらず耐へがたい壓迫を感じるのは、夫のやうな生活狀態の人には無理もないことであらう、さうした時私は無理をしても、望むがまゝのひとりぼつちの旅に立たせてやる。

たつた一人、自分自身に向つて親しく言葉をかけ、生命を

愛撫し休養させる時とでもなつてゐるかのやうに、

　君がゆきながきまにまに枠居ばりつめしわが心なるかも

自分の一番近しい、そして親しむべき愛の對照の第一である夫が旅に出てゐる間は、何とも云はれない寂しさ物足らなさを感じる、そして心の底にはいつも「晶玉のかなしみ」といふことがみちてゐて淨らかなほゝ笑となり「玉とするも瓦とするも一つに君の力にありといふ……」言葉が今更らしく囁やかれる。

　さうだ、ほんとに玉のやうになりたい、一生をかけて磨きあはねばならない……。食ふや食はずでもいゝ、この浮いすがすがしい靈魂の憬を捧げて生きてゐられゝば……。

「あなたが旅にあつて愛撫なさるゝ御自分の生命は即ち私のものではありませんか、私はかうしてゐて、できるかぎりの慰安を送つてあげなければならない、安らかに眠り、安らかに目ざめて來るべき御身の心靈のかゞやきを見出して下さい！」と祈りに等しい心を持つて留守居をばする。

　ため息はもらすまじいぞと誓ひゐるみづからはよも石とはならじ

　君がため吾がとり向くろ影膳にいのる心もその日忘れず

　君がゆきいまは幾日ぞまきておきし二十日大根は疾立ちにけり

　二十日大根は赤き玉根のつつましく君が來る日をまちがてにみゆ

　今日は十月中の五日ぞ立ちわかれ百日は經たりさても百日は

　秋風になびく門田の黍みれば君がうすでの袖をしぞ思ふ

　君來ずばわれは野天のやもめ鳥郷に風吹けば吹くなべに戀し

ある旅のたよりの端に

　砂濱の濱晝顔のしよんぼりと咲ける心か涙ながるる

といふのに和へて

　君が目に涙とぬれて映る身のうらはづかしささしぐまれゐる

　君が目に涙とうつるあはれさを負ふとは思はずさびしけれども

　君が目に涙とうつる晝顔の日の矢面に咲くはうれしき

或る秋の日信濃燒岳の頂上より、

　登り來てここゆのぞめば汝が住める東の方に富士のみれ見ゆ

とあつたのに和へて、

　走り出でて富士は仰ぎぬ君が目に映りしといふ富士の高嶺を

　ゐましげに見ゆとものかな君が目に逢ひにしときく富士の高嶺は

　私は別に特殊の、これぞといふ專門の智識も技能も持つてゐないので、威張ることは出來ないけれど、ただ形而上に惠まれたる夫婦生活を營んでゐられるために、すべてに滿足し一致して生を樂しんでゆかれるのを、至上の幸福と思つてゐる。

やよ教がこころかよはせ静らかさ山櫻の花に似ると云はずやしとまでに讃美されては、これに増した幸福と矜りはないやうな氣もする。

まへにも述べたやうに、夫婦の愛の生活などといふものを其當事者自身が書くのは實に辛いもので、讀む人には何の興味も呼び起さないものになつてしまつたのを深く悔いながらこの稿を終ります。幸に、萬が一にも誰かの笑ひの種にでもなつてくれたらと思ひつつも……。

夫は米の飯

武林文子

お互ひに厭になつたらいつでも別れやうといふ約束で成立つた私達の結婚も、小さなイヴオンヌの齢から數へるともう足かけ四年になります。もと〱大した素ばらしい愛とか戀とかから出來上つた夫婦でない私達には、「戀の夫婦生活」などといふ問を出されると、一寸面喰つてまご〱とさせられます。

「女性改造から愛の夫婦生活といふのを書けといつて來たわ。」

「結構だね、大に書くさ。」

「ところが少々困るのよ、これがイボ公のことなら私は早速私の母の愛の分析がどんなに複雜だかといふことを大に書きたてゝやるんだけれど、相手があんたの問題ではね、少々閉口さ。」

「なぜ閉口だね？」

「だつて餘り書くことがないからさ、何しろ結婚して以來のべつ一緒にゐて、お互ひにゆつくら手紙の遣り取りをするほど別れてゐたことなんぞ殆んど無いんだから、あんまり慣れすぎちやつて、愛なんぞといふことをいまさら改めて考へる餘地が無いのよ。」

「へえーさうかね。」

「まあさうね、私に云はせればあんたは私の米の飯よ。」

「どうして俺が米の飯だい。」

「どうしてつて、大抵の女にとつて亭主はまづ米の飯よ、大して珍らしくもない代りに、毎日お目に懸つても別に厭きもしないで、その癖もし、ひよつと無くなられでもするやうなことがあつたら、これで少々大事件だからね。」

「ふーむ、それぢや何んだね、テメエは俺をその米の飯にして、自分は他で好きなご馳走を喰ひ荒さうといふんだね。」

「ところがまあ私のいふことをお聞きなさい、申上るまでもなく私はもと〳〵浮氣者よ、毎日お米の御飯にばかりお目に懸つてゐるよりも、稀には外でいろんな變つた男の人と喋つたり一緒に御飯を喰べたりすることは、一寸目先きが變つて面白いには違ひないさ、けれどもそれは要するに猫のちよつかいのやうなものよ、毎日お鰹をかけた同じ御飯ばかし喰べてゐると、ちよいと目先きの違ふおすしやおそばや洋食にちよつかいが出してみたくなることは事實だけれど、そのおすしやおそばや洋食は、毎日大びらで喰べ慣れてゐる御飯と違つてまかり違へば猫イラズも一緒に丸呑みにする覺悟でかゝらなければならないからね、そこでいろんなちよつかいは出してみても、いざとなると猫は上手に香箱を作ります。」

「ところがさうは不可ないよ、そのちよつかいをぐつと引寄せて巧く香箱を作らせないのが男だからね。」

「ところが女も三十になるとこれでちつとは思案の外に智慧も算盤もあります、さう造作なく米の飯から三くだり半を突きつけられるやうなことはし出かさないわ。」

「それぢや何んだらう、テメエは米の飯を巧くちよろまかして置いて內證で宜ろしく口をぬぐはうといふんだらう。」

「どうもさうあんたのやうに氣が早くては厄介ね、まお聞きよ、こゝに新らしく米の飯以上の好きなのが出來るとするわね、そして一切の打算も情實も踏みにじつてその相手のところへ行くとするだらう、その結果はどうなると思つて？　やつぱり二年三年と經てば巧く行つて結局それが第二の米の飯になるだけよ、そして別に珍らしくも何んともなくなるに定つてゐるわ、それなら何もわざ〳〵危い橋を渡つて米の飯を米の飯にとりかへる必要はないと私は思つてゐるの、いろんなことを口でいふけど、結局戀とか熱情とかいふものは裸にむけばずゐぶん嘘や無理やお體裁が澤山に轉がり出すものなんだもの、面白いには面白くてもとても窮屈で、いくら女が嘘やお體裁が好きでもさう〳〵長く紅や白粉をつけ流しにはしてゐられないわ、結局米の飯にするか喧嘩もの別れになるか二つに一つよ、ところがこれで世間には女がほんとうに米の飯に出來る男はさうざらには無いものよ。」

「どうも有難い幸福せだね、さう云つて我儘勝手が大びらに出來りや俺も今度は女に生れて來るよ。」

「だつて世の中に何が氣樂だつて、ちつとも嘘やお體裁なしにのんきに我儘の出來ることほどお互ひにいゝものは無からうと思ふわ、さうなるまでには夫婦もこれでお互にいろんな關所を通り抜けて來なければならないからね、米の飯になるまでには相當に月日もかゝるわけよ、だからうつかり外にちよつかいを出したりして折角ありついたものを棒にふるやうなら、私は浮氣の蟲を一切殺してやつぱり一生香箱を作つて暮すわ、まづそのはうが差引勘定得だからね。」

「へん、巧く云つてらあ、見ないことは俺には一切信じられないよ。」

近頃のある夜、私達は寢ものがたりにこんな會話を繰り返しました。

私達の夫婦は世間の夫婦に比べると割合に時間を多く一緒に暮す夫婦のやうです。結婚すると間もなくフランスへ行つて去年の春歸るまで、二人は殆んど離れて暮したことは無いといつて可いほど毎日一緒に居りました。何よりも讀書の好きな私のご亭主は、巴里に住んでゐる間も、皆からムッシウ、エスカルゴとか、カザニエーとかシユールノンを附けられる程、家にばかり引込んで朝から晩まで讀書三昧に耽つてゐました。私はとき〴〵私のご亭主にとつては書物以外に一切の物は平等にしか考へられてゐないんだらうと思ひました。けれどもまた、ムッシウ・エスカルゴは小さなイヴオンヌや、薄つぺらなお喋りのその細君も相當に可愛がつてよく世話をしてくれました。まだ巴里へ着いたばかりに、言葉も何も解らないメーゾン・サンテで赤坊を生んだ時なぞ、それはとても普通の人には眞似も出來ないほど、平生ぶつきら棒の私のご亭主は心細がる產婦の世話をよくして呉れました。それから小さな手數のかゝるその赤坊を連れて、歐羅巴を旅から旅へ廻つて歩いた折なども、不器用なエスカルゴ氏は見得も外聞も構はないで、何處までも赤坊を抱いて歩いてよく面倒をみてくれました。ピカデリーへ行つて自動車から降りる時、扉に赤坊の頭を打つけたといつて、ふたりで喧嘩を始めたりユングフラウへ昇る汽車やエズーヰオへ上るケーブルカーで、赤坊を連れて山登りをするジャポネーの冒險に皆の眼を丸くさせたり、ベネチヤのミユーゼで「日本人はべべにも美術が解るか」と冷かされたり、ローマへ行つて名物のカタコンブを見る時でさへ、暗い〴〵土の底まで離さないで抱いて廻つたほど、小さな者をよくいたはつて可愛がりました。文藝を愛する人に芝居は何より見のがされないものゝ一つでしたけれど、イヴオンヌのパパはとう〴〵イギリスでもドイツ

でもオペラの本場のイタリーでも、つひに芝居といふものを一度も見ずにしまひました。心細い旅の宿に小さな赤坊と細君とを殘して夜おそくまで出てゐる事は私のご亭主にはとても氣の毒で出來ない藝なのでした。

ぶつきら棒な私のご亭主は無言のうちに人を愛するほんとうに人間らしい人間です。何も相手が私だから、私の生んだべべだから、それで特別に可愛がるといふわけではなく、少くとも自分の傍に來るものは、人間でも猫でも犬でも一切のものに不憫をかけずにはゐられない性分のやうです。

長い月日の間にすつかり亭主の性格を呑込んでしまつた私は、いつの間にか我儘に横暴になつて、遠慮なんていふことは爪の垢ほどもしなくなつてしまひました。江戸つ子で皮肉屋のエスカルゴさんは、儀式とかお行儀とかすべてわざとらしい事が大嫌ひでした。私逹の間では結婚以來只の一度も朝起きて「お早う」と云つたこともなければ、夜寢る時に「おやすみなさい」といつたこともありません、すべてそれに類するやうな儀禮的の言葉や行動は、私のご亭主には一切禁物でした。齒の浮くやうなことを云ふとすぐに揚足をとられます。そこで私は單刀直入思つたことは思つたまゝに何んでもずん〳〵云つたり爲たりしてしまひます。言葉使ひなどもいつの間にかぞんざいになつて、二人だけの折は相手が俺といへば私も俺といひます。相手がテメエといへば私も負けずにテメエと云ひます、萬事その調子で私は自分が欲しいと思へばご亭主のものでもさつさと取つて喰べたり、買物でも買ひたいと思つたものはお金の許す限り、亭主に相談なんぞしないで大抵のものはどん〳〵買つてしまひます。まるで彌次郎兵衞北八のやうな生活が、私逹の間にはもう長い間馴れつこになつてくり返されて居りますが、その割には大して喧嘩もしません。すべて收入の三分の二（亭主のも私のも合併して）は何んだかだと云つて私がみんな使つてしまひます。殊近階い神經衰弱になつて醫者から好きなお酒と煙草を厳禁されたエスカルゴ氏は、廣い世界に樂しみと云つては書物を讀むことゝ、原稿を書くことゝ、妻君を可愛がることよりほかに何んにも無くなつてしまつたかたちです。ところがその細君は近頃自分の仕事が忙がしいと云つて、淋しがるご亭主を家においてきぼりにしては東京へばかり出かけます。

「俺は鬼神のお松の亭主の德兵衞だよ。」

ある朝エスカルゴさんはふと床の中でこんなことを云ひ出しました。

「どうしてあんたが德兵衞なの？」

「さうさ、俺は德兵衞さ、金はみんなテメエに使はれてしまふし、いまに見てゐろ、「草葉の陰で德兵衞さん、妾の出世を

みておいでッ」ていふやうなわけで、後足に砂をかけられて、田圃のなかへ投り込まれるのがおちさ。」

「でも可いぢやないか、誰かの説によるとあんたは巴里でとつくにさうなる筈だつたんぢやないの。」

朝日の一ぱいにさした離れで、親どもがまだ寝そべつたまゝこんな蔭口をきいてゐる時、向ふのはうの室ではイヴオンヌが

（雨だれほつつりさん、ほつつり／＼／＼さん——）

ともう例によつて大好きな蓄音機を幸福さうにはじめ出しました。

丘の上より

原阿佐緒

おゝ、今日はよく海が和いでゐますこと。あの、樫の葉の艶を消したやうな暗緑色の海の色、それが軟らかに煙つて、水平線をぼかしてゐます。まだ、一月も末と云つたばかりですのに、何といふ春らしい感じを湛へてゐることでせう。

斯うして枯草の上に坐つてゐても、土の冷たさが感じられない程暖いのでございますね。マントを着てゐてさへ陽のぬくみが肌に透りますのですよ。こんなに髪ぎわが汗ばむで……。

私は、今日こゝに連れて来ていたゞいて、大變よかつたと思ひますわ。ほんとうに落ちついた氣持ちになれましたの。いつもは私、思ふやうに仕事をしてゐないので、ひとりでいらく／＼してしまつて、散歩に出るのもいやになつたりして、ついぐづ／＼云つて、すまなく思ひますけれど、これからは平常に精一杯仕事をしておいて、あなたが散歩に行かうと仰有るときは快よく出かけられるやうに用意しておきませうね。

それにしても、今日はちつとも波の音がないので御座いますね。白い波がひとつも見えませんわ。あの二ツ三ツ見えてゐる帆さへ動いてゐるのか、ぢつとしてゐるのかわからないくらゐでございますのね。

ほんとうに靜かですこと。おゝ、小鳥が啼いてゐますよ、あの陽のあたつてゐる木のあたり、すぐ向ひの、その山ですね。何鳥で御座いませう、あの魅惑的な可愛らしい聲、誰が耳をかたむけずにゐられませう。私たちはやがて、朝夕に、この技巧を交じへない純眞な、自然の音樂に慰めを得られることでございませうね。斯うした平和な情景に、しみじみ浸つてゐますと、まるで現實の境を超えた世界にゐるやうな氣がいたしますのね。おゝ、私も歌はずにはゐられません。

海見ゆる丘の斜面にひた坐り光被りてしまらくは居ぬ

海和ぎのけふはしろしも潮騒もこゝにはせなく晝靜もれり

陽のあたる枯芝山のはだら木に小鳥啼くもよ春あさき日を

ほんとうに、私たちを襲ひ惱ました嵐はすぎ去つて了つたので御座いますね。私たちの今の生活、それは、この周圍の自然が表示してゐるやうなものでございませう。けれどもこの平和な、靜穩のなかには、決して私たちを脅やかす性質の不安や、退屈と云つたものをひそましてはならないのでございます。この靜かさ一杯に力がみちてゐることを感じなければなりません。私たちは幸福に馴れ弛むではならないのでございます。ごらんなさいまし。土にはもう、枯草に交つて青い草の芽が萠えて居ります。あちら側の日蔭の畑すみにはまだ雪が見えて居りますのに。よもぎの芽でございますね。伸びようとする生の力は、この堅い土を突き破つて、相を現はしたのでございますね。

私は思ひますの。私の現在はこの一莖の小草の芽にひとしい自分だと云ふことを。しかも、いく度かふみにじられ、虐げられして、枯れかかつた草だつたので御座いました。それをあなたが見出して、陽あたりのいゝ、そして肥えた土壤に移して下すつたのでございました。そして私は、やうやく幽かな芽をふき出したのでございました。あなたはそのかすかなものを被護ひながら、心ゆくまで伸ばさうとして下さいます。私はいのちのかぎり伸びたい意志を今こそ果すことが出來るやうになつたので御座います。

その一莖の草に似た私の運命。私は素直に、自らのすべてに於ける成長をもつて、あなたに報いる感謝のすべてだと思ひませう。

あなたはいま、あなた自らの手によつて生命を與へた一くきの小草のために、あなたの心づかひに滿ち充ちた溫室をさへ作らうとしてゐられます。そして、そこには、私のいのちになくてならない、あなたの愛、いえ、日光と露とは、あなたの生の限りあたへられるでございませう。私はそれを信じて居ります。

かにかくに寄せつくしたるあが一生
君がまにまに生くべき吾はや

おゝ私のいぢらしい小草よ。

おまへの現在の相をかへりみてごらん。

あの、痩せ細つた肉にひそむでゐた、おまへを苦しめた病ひは、または、虐げられたあの昔との面影はどこにあらう。

　ほんとうにいぢらしい小草よ。

おまへの純情と愛とが、おまへ自身を救つたのであつたことを思はないか。おまへのかたくなな、おまへのひがむだ、そしてそれを理性とおまへ自身がひとりぎめに考へてゐた小さな殻のなかに、あまりにおまへは囚らはれすぎてゐたのだ。おゝ、おまへはいま、ほんとうの愛を知つたのだ、おまへの眼はいま、眞直ぐに天に向いて輝いてゐる。

　おまへのその腕に、またその胸に流れてゐるその血の音をきけ。それはさながらに私自身の血が盛られてゐるのだ。そしておまへの聲は小鳥のやうにのどかだ。この堅い土に芽ぐむだ草のやうに生き／＼してゐる。

　おまへは力と自由とをもたなければならない。おまへはいぢけてはいけない。おまへは過去をかなしむ必要はない。新らしい土に新らしく生れた草、おまへはその自覺を忘れてはいけない。おまへのいたみ易い心は、たまたま衆俗の誹謗によつて傷つけられる。

　おまへを理解し得る唯一のものによつてのみ慰められる、おまへのその愛の殿堂、それは絶對なものである。それが滅びる時私たちの肉體は滅びなければならない。

おまへは怖れてはならない。もしも再び私たちを襲ふ嵐が來たとしても、私たちは恐れてはならない。私たちはいのちをもつて鬪ふまでゞはないか。

　おゝ、おまへは涙を流してゐるのか。それでいゝ。おまへは愛の値を知つたのだ。おまへの苦惱、悲しみ、それはみんなおまへに愛の値を知らしめたのだ。

　おまへの涙にぬれたその眼をみはつて、おまへの周圍を見まはしてごらん。

　おまへを抱擁するすべては、あまりに美しく嚴に、純眞ではないか。

　あの海の上に、久遠に變りを見せぬ富士の姿、それは敬虔な愛の象徴として見てもいゝではないか。

　私たちは、いまさらに湧きあふれる力と力とをあはせて、世の相を極めようではないか。

　おゝ、おまへも進むのだ、より高い處へ、さあ、おまへの手を。

　おゝ、私に祈禱らして下さい。私のこの幸福が、感謝が、私たちの周圍のすべてに幸福であるやうに。私の子も親も、また、あなたを忘れぬ人たちの上にも。

　私たちのこの深い愛の生活。

それを完うしたい希ひを持つことを、やましいと思ふことのないやうに。

　私に、私に祈禱らして下さい。

哀な妹殺の仁愛裁判

妹殺事件の所感

法學博士 辯護士 堀江專一郎

去る二月三日東京控訴院刑事第四部に於て浦田裁判長高井判事の係で新潟縣人安達某なる者の妹殺事件が開廷せられた事件の概略を述ぶれば當年二十一歳になる被告には十六歳の妹があり生後間もなく腦膜炎に罹りし結果全くの白痴で身體の自由さへ利かず爲めに家庭に風波の絕間なく現に母は五人目の繼母である樣な事情なので被告は十數年來此不具な妹の起居飮食から汚物の世話迄一手で仕末し來つたが「マヽ」と云へば食事を含ませ「タヽ」と云へば扶け起す程度のものであつたと云ふから如何に被告が子供の時から此妹の爲めに盡したかは判るであらう恰度犯行の日にも妹が汚物の粗忽から繼母の憤を買たのを被告は靜かに見て居たが自分が兵隊に取られ入營でもしたら後は如何に成行くであらう妹は果して何の樣な憂目に逢うであらうと考へては一大決心をせずには居られなくなり其日は出來る丈け親切に世話をなし近所からビスケットを買て來て三つ喰はせた後遂に絞殺したのであるが苦しむ顏を見るに堪へないで袢天を頭に被せて頸を締めたとの事である夫れから靜かに其筋へ自首して出たのである又彼の小學校時代の教師であつた野田逸三氏は第一審裁判所で特別辯護人となつて彼の資性操行に付悲痛な辯護をしたとの事であるから彼は蓋し模範的の青年であるらしい斯くて第一審では懲役に處し執行猶豫を與へたが檢事は刑が輕過るとて、控訴を申立て夫れで東京控訴院の公判となつたのである

此の如く第一審裁判所に於ては懲役に處し三年の執行猶豫を與へて其猶豫期間を他の罪を犯さずに無事經過すれば恰かも罪を犯した事が無いのと同樣に殺人と云ふ履歴は帳消になるべき判決をしたのに同裁判所の檢事から刑が輕きに失するとの理由で控訴を申立て東京控訴院で再び審理する事と成たのであるが掛檢事高井實三氏は假令殺人罪にせよ斯かる狀況の下に犯した罪であるから實刑を科すべきものでない原裁判は相當であるから檢事の控訴は棄却せらるべきものであると

論告し裁判官も傍聴者も暗涙を呑まぬ人はなかつたが裁判所も終に論告通りに檢事控訴を棄却し刑の執行は猶豫せられる事に成たのである。

此裁判に對し世に或は不滿を訴ふる人が無いとも限らぬ蓋し假令如何なる事情あるにせよ苟くも人命を絶ち殊に同胞の妹を絞殺した者に對し實刑を科せぬのは果して正義に叶つて居るであらうかと云ふ考を持つのも一概に無理と云へぬ樣にも見えるからである又法律なるものは果して斯程迄に融通の利くものであらうか裁判官や檢事は或は特別の恩惠を以て法律當然の適用を避けたのではあるまいかと不審を抱く人が無いとは限らぬ乍併此不滿を訴へ又は不審を抱く樣な人は全く舊思想の持主で近世の法律思想から置去られた人であつて先以て其頭を改造する必要があるのである新刑法に於ては假令殺人罪にせよ情狀の如何に依りては實刑を科するの必要は無い事に成て居て前記の事件の如きは完全に執行猶豫を與へらるべき情狀を具備して居るのであるから裁判官も檢事も全く法律の註文通りに行動した迄の事であつて特別に恩惠を施した譯では無いのである唯併し兩者の態度に對して自ら敬意を表せざるを得ないのは法律の眞精神を完全に理解し執行猶豫の如き寬典を與ふるは我財產を惠與すると同じ樣に吝み阻かるの態度に出でないで氣前よく此寬典を與へ而て裁判所は厭な場所檢事は恐ろしき役人と云ふ見ず嫌な感を持て居た天下民衆をして裁判所も檢事も血もあり涙もあり生きたる人間の實際生活は善く理解せられて居るから、是は充分信頼するに足ると云ふ一大覺醒を與へられた一事である。

元來刑罰の目的は何であるかと云ふ問題は學理的に述ぶれば非常に面倒であつて一片の短文では其概略すら盡す事は出來ないが學說を大別して新舊兩學派とする事が出來る而して舊學派は刑罰を以て犯罪なる原因に對する惡果であつて所謂因果應報に外ならぬとし犯罪は種を蒔くに均しく刑罰は之に實る果物の如きものと考へ自分達で犯罪の大小輕重を獨斷的に定め之に應じて刑罰の質と量とを豫定し苟くも自由意思で何れか一の犯罪を犯す時は直ちに豫定せられた刑罰を之に科し犯人の身邊に如何なる事情が伏在するも眼中に置かず刑罰を科する事夫自身が刑罰の目的で其又結果が果して如何にならうと一切構はぬと云ふ主義であつて唯眼中罪あるのみで人あるを知らず頗る人間の實際生活に遠いものであつた近代の學者此間の消息を譬へて恰かも搖籃時代の醫術が風邪には、「ルバーブ」の「シロップ」一匙を與へ肺炎には「ルバーブ」の「シロップ」三匙を與ふる事より知らなかつたと同樣だと笑て居る斯かる次第であつたから刑法に仁とか愛とか云ふ分子は存在せず全く人間味を缺て居たが而かも之を以て正義主

義などと稱して居たのは誠に矛盾の沙汰であつて今日から之を見れば正義の名に於て如何に多くの殘虐が行はれたか〻偲ばれて實に無量の感慨に堪へぬのであるローランド女史は狂死に臨んで『自由よ汝の名に於て如何に多くの罪惡が行はれたるよ』と絕叫したとの事であるが移して以て舊派學說の刑罰觀を評し度いのである。

之に反して近世の學說に依れば刑罰は社會の生存發達を阻害する害惡に對する防衞手段であつて犯罪人に刑罰を科するのは社會が崩潰を免れぬ爲めに自らを保護する所以であるから此必要の範圍內に於てのみ刑罰に意義があるのである故に單に過去の罪惡に對して報復し膺懲するのみに甘んぜず犯人を是正し改造し救治し將た再生せしめて囚はれたるセタンの手から同胞を取返し以て將來有用なる社會の一員たらしめんとするのである。之が爲めには彼が犯罪を敢てするに至つたのは果して如何なる事情と境遇とに因るか彼は果して刑罰を科するの外匡救の道が無いかを遠く深く探究するに或は人類學の助を借り或は社會學心理學倫理學等の助を借り一度其眞相を探り當て必ずしも之に刑罰を加へず共彼は能く前非を悔ひ善良なる社會の一員たるの望確實であるならば强て之を罰せず卽ち罪は罪として又人の如何にも深き注意を拂ふと云ふ主義であつて此主義を採て始めて人間社會の實際生活と刑法とが密接な交涉を有するに至つたのである元來犯罪者と雖も愛する同胞の一人である以上之を空しく葬りて可ならんやである又產みの親と雖も時には其子を打つべく餘儀なくさるゝ事があるであらう而かも之が爲めに子の根性が僻み曲らないのは何の爲であるか是は情に於て打つには忍びざるも子の爲めに打たざる可らざるを悲しむの心を以て打つからである多くの繼親が繼子を打の心は之と反對で子を惡むが故に必ずしも打たざるも可なるに拘らず之を打つのであるから子は打たるゝ每に益々僻み曲るのである國家が犯罪人を罰するには實親の心を以てして始めて眞に改過遷善の實を擧げる事を得るのである我刑法の如きも刑の執行猶豫、假出獄、刑の減免、酌量減輕等の制度を設けて殺人放火の大罪と雖も尙ほ場合に依りては實刑を科せずして止み得る程に人間味を發揮して居るのである犯罪人の性格と境遇と犯罪の動機緣由と將た又慚愧悔恨改悛の情等精密に之を探究して苟くも助くべきの理由あらば此等種々の寬典を利用して必ず之を助くべしと云ふのが刑法の精神である是が情にあらずして何であらう仁愛の遺憾なき發露であると謂はずして又何とか謂はんやである故に此刑法の運用を司る人達は實親が子に臨むの心を以て心となし苟くも打たずして止み得るならば打つ可からず淚を呑で且つ打たざる可らざれば最輕の打擊

を以て最大の効果を擧ぐるに努むべきである本問被告の如きは之に苦痛の伴ふ制裁を加へて果して何の得る處があらうか自首する位であるから如何なる制裁も辭するの心はないのである犯罪の動機が既に愛其物であり一點の私心もないから刑罰を加へて矯め直すべき何物も存在せぬ絞殺と云ふ行爲其物は或は人之を眞似得るかも知れぬが十數年來不具の妹の爲めに彼程の犧牲を供する眞似は出來ない是と同一の事情の下に殺人行爲を爲す者が續出し得る道理はないが萬一一人にても出て來たら同じく執行猶豫を與へて毫も差支はない私恩に非ず特別の御詮議にあらず刑法の精神其儘であるのだ吾人が係り裁判官と檢事とに大なる敬意を表する所以は此精神の完全なる理解と實行とに存するのである。

終に臨んで一言を附加したい我國に於て婦人が法律を學んだと云ふ事は未だ耳にしない是蓋し職業的法律家たるには男子に限るからでもあらうと考へるのである　乍併法律を學ぶ必ずしも職業的法律家たるが爲のみならんやである既に婦人參政運動さへ起て居る今日愛を以て生命とする婦人が先づ愛を以て精神とする法律を學ぶに何の躊躇する所があらうか羅馬衰亡史の著者ギボンは有名なるユスチニアン帝の法典編纂に成功したるはテオドラ皇后の忠言に待つ所頗る多かりしと云て居る又英國の大法理學者オースチン氏の夫人サラーは夫の死後遺稿法理學講義を整理出版して此不朽の名著を學界に貢獻し之に附したる序文は夫人の貞淑と忠實と奉公の赤誠とを遺憾なく物語る千古の名文にして眞に壯烈鬼神を泣かしめ穗積博士は之を諸葛孔明の出師表に比し之を讀で泣かざる者は人にあらずと云はれて居る僅に此二婦人のみを以てしも其功績は實に偉大にして其名は赫々として萬世を照すに足るのである我國婦人社會に於て誰が果して先鞭を著け此方面を開拓するであらうか馬を都門に馳せて驕兒の態を學ばんよりは眞個人類の福祉に貢獻すべく靜かに修養を積む方が何程ノーブルであるか判らない切に諸姉の發奮を望む次第である。

刑法と人情

檢事としてどんな態度で論告した？

高井賢三

法律は恐るべきものではない
寧ろ親しむべきものである

法律と言へば、如何にも冷酷であり無情であるやうな感を懐くものがある、けれども、それは法律の精神を諒解しないからである。或人が、

「裁判所は恐ろしい所、又氣味の惡い所であるとばかりに思つて居つたが、一度び其の門を潜つて、法廷の樣子を見たり公判を傍聽して、多少内部の事情が判るやうになれば、別に恐ろしい心持もせず、寧ろ力強い感を懐いて、裁判所の存在が自分等の生存を安固ならしむるやうな心持になつた。」

と言はれた事がある。恐らく一般の人でも同樣の感想を懐かれるものが多からうと思はれる。

法律の共同生活者に對する關係も亦之れと同樣なもので共同生活者の保護を以て其の目的として居るものである。法律の精神の中には、血もあり、涙もあり、同情の心もあるそれと共に一面には又權威もあれば、威嚴もあり、強制力も伴うて居る。恰も子に對する父の如く、恩威並び存して居る。法律の中でも特に刑法に至つては、如何にも冷やかで、人情を顧みないやうに思はれて居て、恰も吾人の怨敵であるかの如き感を以て接せられて居るのは、刑法の精神、眞諦に觸れて居らぬからである。此の點は甚だ遺憾に感ずるのである。茲には刑法の中に潜める仁愛(或は人間愛)の觀念に就て話して見よう。

刑罰理論の進化

刑罰は如何なる觀念であるか、又如何なる目的で之れを科するのであるかの問題に就ては、古來から專門學者の間に盛んに議論せられた所で、詳しき事は專門の學問に屬するが、茲には簡單に、平易に其の沿革を述べて見よう。之は刑罰理論の進化が、如何に個人の保護充實と、社會秩序の防衛との調和に貢献せられたるかを知る事が出來るからである。

刑罰理論に關する主義綱領は、大體新舊二個の學派に別つ事が出來る。舊學派は十八世紀に勃興した個人思想の影響を受けて發達したものであるが、此の學派は斯樣に主張する。即ち人は元來理性の命ずる處に從つて、是非善惡を識別し、惡を捨て、善に從ふ事の出來る意志の自由を有するものであるから、殊更善に從はず、惡を犯すが如き犯罪人に對しては正義の觀念に基いて惡報を科するが當然である。即ち因果應報の觀念に立脚して善因善果を産み惡因惡果を招くものであるから、犯罪を犯して社會の秩序を破壊するが如きものに對

して刑罰を科するは正義の要求に適合するものである。之れを罰するについても處罰の根據を客觀的に定め犯したる罪の大小輕重とか、社會に與へたる危險の多少等專ら外形に現れたる犯罪的表徵を標準として之れに相當する刑罰を科し以て應報の目的を達し一般世人を警戒せんとするものである。此の意味から客觀主義とも稱せられ居る。素より社會の秩序を維持する爲めには、正義の觀念に基く事の必要なる事は云ふまでもないことであるが、惡因惡果即ち刑罰を科するのは、正義の要求を充す爲めで、刑罰を科する事それ自體が最終の目的である事になる。新學派は十九世紀の中葉に至り彼の有名なるダーヴヰンの進化論を基礎として犯罪を科學的、實證的に研究するに依つて一新生面を開いた。此の派の主張によれば凡そ人が犯罪を犯すのは種々の原因に誘發させられる爲めである。その原因が犯人自身の事情に基くものもあれば、社會的事情に基き餘儀なく罪を犯すものもある。又等しく罪を犯したものゝ中にあつても强烈なる惡性を帯び改悛不能のものもあれば一時の感情にかられ偶發的に犯すものもあつて其の犯人の心情は自から異るものである。此の故に外形に表はれた犯罪的表徵のみに依つて一律に處罰せんとするのは全く無意味である。從つて舊學派の如く處罰の根據を客觀的にのみ求めずして寧ろ犯人の主觀的事情に立脚し其の性格の善惡、犯罪性の大小、環境の影響等に鑑み犯罪性の大小强弱に適應する刑罰を科するものである。又刑罰を科するのは舊學派の如く處罰それ自身を目的とするのではない。社會の秩序を防衞する爲めに罰するので其の目的は寧ろ犯罪性を矯正し撲滅するのにあるのである。

刑法上の人格主義

前に述べた此の舊學派が犯罪を抽象的に研究し且つ之れを客觀的見地から處罰し以て刑罰の目的を達せんとしたのであるが、社會の組織がます／＼複雜となつて生存競爭が旺んとなつた結果、罪人の心情は勿論罪を犯すの原因も從來の如く單純ではなく必ずしも犯人のみを責むることの出來ない事情も含まれ千態萬狀殆んど犯罪毎に其の心情、原因の異なるもので、恰も人の顏の異なる如きものがある。故に同じく殺人罪を犯しても舊學派によれば人の生命を奪つたといふ點に於て何等異なる處なしとの論據から其の犯罪の原因動機性格の如何に重きを置かず同じ樣に刑を科する事となるが、新學派に依れば其の罪を犯すに至つた内外の原因事情犯人の性格等を考察してその酌むべきものは之れを酌み、其の恕すべき事情は之れを斟酌し、罰すべき犯罪性を秤量し、之れに適應する刑を科する事となるのである。後者は犯人の主觀的事情を

主とし、其の人格に重きを置いて處罰の當否を決するのであるから、一に之れを人格主義(主觀主義)と稱せられて居る。最近の刑法學が舊學派の殼を脱して人格主義に傾いたのは、個人の利益を尊重するに至つたもので社會學上の一大進化である。最早犯罪を單なる法律的現象として眺むる事なく、生きた潑剌たる社會的現象として、心理學、生物學、社會學、經濟學乃至刑事政策學の上から縱横に討究せねばならぬ事となつた。刑法の仁愛の觀念は、人格主義に於て始めて光輝を放つのである。唯一言せねばならぬのは、刑罰の眞使命は一人の犯人を罰して、再び罪を犯さしめない事、即ち改過遷善に存すると共に、又一面世人をして犯罪の忌むべく、恐るべき事を知らしめて、之れを警戒するにある。即ち勸善懲惡の目的を含んで居る。社會を威嚇し、世人に警戒する爲めには、容觀的觀察を怠る譯に行かぬ。主觀主義ばかりでは刑罰の眞の目的を遂する事は出來ない。然し犯罪の一般的豫防は漸次他の社會政策に依り企圖し得るものであるから、犯された犯罪其のものに對しては、犯罪を中心として取扱ふよりも、犯人を中心として其の個性、人格に重きを置いて取扱ふのが正當な措置である。

刑法上に於ける仁愛の觀念

刑法が人格主義を採用した結果として、法典の上に、博愛仁恕の觀念を一層廣く容認するに至つた其の重なるものは、

(一)刑罰の範圍を擴くして、裁判官の自由採量の餘地を多からしめた事。

例令ば以前の刑法では、人を殺せば死刑又は無期懲役を出でなかつたのであるが、現行刑法では懲役三年より死刑迄での間に於て自由に刑を定める事が出來る。窃盗罪ならば一月から十年迄での間で刑を量定する事が出來るのである。是等しく同一の犯罪を犯した者なりとしても、其の罪を犯すに至つた動機、情狀犯人の性格等から見て、大いに恕すべきものゝある事を、刑法自體が豫期して居るのである。よく人を殺して三年の懲役で濟んだと云ふ言葉を聽くが特に昔より一般的に處罰の輕くなつた譯ではなく、左樣な場合には之を殺すに至つた尤もなる事情の存在する時で、刑法の仁愛の精神の躍動した時に外ならぬのである。

(二)酌量減刑を認めた事。

右の如く刑の範圍を擴くし、其の一番輕い刑を選ぶの自由を與へながら、尙ほ夫れ以下の刑に下す事の必要あるを認め、更に事情を酌み法定刑を半分に減刑する事が出來る。前の例によれば、殺人罪でも短期三年の半分即ち懲役一年半迄でに下す事が出來るのである。如何なる場合に、此の特別なる輕減を施すものであるかは、抽象的に定める事は出來ない、各犯罪に伴ふ幾多の事情に鑑みて、裁判官の自由に決すべきものであるが、假令ば對手方に非常なる侮辱を加へられ、憤怒の餘り傷害を與へた場合、畸形の兒を產み成育の見込なく且世間體を恥ぢて之を殺害した場合の如きは、社會通念の上から見て、其心情に酌むべき點あり同情すべき價値ある動機に出て居るのであるから、此の輕減を與へても宜からうと思ふ。刑法と雖も決して人情を顧みない譯ではないのである。

(三)刑の執行猶豫を認めた事。

刑法中人格主義の光つて居るのは主として此の點である。眞實の發見は刑事裁判の生命であるから、假令如何に氣の毒であり、同情に堪へない犯罪としても、其の犯した事實は飽迄で嚴正公平に調査し事實ありとするならば、其の責任を認めねばならぬ。即ち事實の認定と犯罪の情狀とは、嚴に區別せねばならぬ。既に犯罪事實は因として認めらる、然し犯人の心情や、其犯罪の情狀から見て、最早實刑を科し監獄に入れて、強制懲戒を加ふるの必要なしと認められた時に於て始めて此の恩典を與ふべきものである。即ち犯人の性格素行善良であつて改悛の狀顯著なる者、犯罪の動機原因が道德的に、又倫理的に是認し得られて、之れを犯すに至つた心情の憫むべきものゝない場合に於ては、刑罰の對象たるべき犯罪性の存せざるが故に之れに對し實刑を科するの必要はない。斯かる犯罪人に對し實刑を科すゝに於ては、吾人の道義的觀念に背反するのみならず獄内の惡因に化せられ其道德觀を低下せしむる虞ありて、刑法の目的に添はないのである。然し犯罪の存する以上は全く無條件で許す事は出來ない、二年乃至五年の期間其の宣告した刑の執行を見合せ、其の期間中犯罪を再びせざる時は始めて宣告刑の拘束は消滅し、當初より何等罪を犯さなかつた人と同樣の狀態に復するのである。刑法上仁愛の精神は炳乎として輝いて居る。嚴めしい法廷に感謝の涙を流し嗚咽して面を上げ得ざる人情の美は實に此の恩典の與へられた刹那に發露するものである。孝經に『過而能改、善之大者』と云ふ語があり、論語にも『過則勿憚改』と說いて居るのは、矢張り此の意味に外ならぬ。執行猶豫は二年以下の刑に處せらるゝ時でなければ言渡す事が出來ない事になつて居る、然し假りに殺人罪を犯したものであつたとすれば、犯情の如何に依つては法定刑の最短期即ち懲役三年を選び、尙ほ特別の斟酌すべき事情のある時は、更に前に述べた酌量減刑を施し、其の刑を半減し二年以下の刑を定め、其の上は尙ほ執行猶豫の恩典に浴せしむる事が可能である。斯の如く刑法の仁愛の精神が活躍すれば、三階段の宥恕を敢てして犯人を救ふ事を許して居る温情、泉の如きものが潜んで居ると謂ふべきではない歟。かの新潟縣下の妹殺し犯人安達安次郎に對し執行猶豫を求めたのも此の刑法の精神を體現したのに外ならぬのである。

裁判と人情

人格主義が具體化すれば人情と裁判とは、極めて接近して來る。素より犯罪の情狀を考察し、刑を量定する上に於ての意味である。事實の認定は前に述べた如く、嚴正公平のものである事は言ふ迄でもない。犯罪の情狀や刑の量定に就ては其の時代に於ける美くしき人情を透して、そこに處罰的價値の存否を決するのである。蓋し法律は共同生活上、人の外形的行爲の規範であるが人情は共同生活者の守るべき内面的規範であり、道德的批判の上に立脚して居るのである。故に法律と人情とは眞の隣同士である、双互相關聯して社會的秩序を保持するものである。法律が人情を無視すれば惡法たるを免れず又人情が法律を顧みざるに至れば道義的觀念の頹落である。而して法律を具體化したのが裁判である。故に裁判と人情とは表はれ方は違つて居るが實質上の價値判斷に於ては變りはない。

(一)犯人の性格と犯罪との關係。

犯罪の犯された場合に於て、最も考慮すべきは犯人の性格である。犯した犯罪が輕微であると雖も、犯人は所謂改善不能のもので、徒らに社會を毒するものであるならば、之れに嚴刑を科すべきは社會防衛上當然の措置である。世人亦之れを怪しむものはなからうと思ふ。之れに反し犯人の性格素行善良で毫も惡性を保有せず、共同生活者として何等の危險を感ずる事なきものであるならば、偶々一時的の事情に依り犯罪を犯すと雖も罰すべき犯罪性なき故に、刑法は特に之れを嚴罰して懲戒を加ふるの必要を認めて居ない。寧ろ刑法の仁愛の精神を發揮し、之れに國家的制裁を與へて善に遷らしむるのが相當である。世人必ず迎へて以て欣ばざるものはないと思ふ。

(二)犯罪の動機原因。

刑事裁判官の最も苦心努力する犯罪の動機原因の探究に存する。新學派が犯罪を以て、一の社會的現象として科學的に研究せんとするのは、犯罪の原因は多く社會的事情に原因する事を考察したからである。犯罪の原因は、犯罪人自身に存するものと、社會的事情に存するものとある。犯人自身の原因は身體的事情に基くものもある殊に婦人に付ては月經、妊娠は犯罪と重要の關係がある。中にはモルヒネ中毒に罹つた婦人が其の中毒の苦痛を逃れんがため、注射料に充せんとして窃盜罪を反覆する者の如き者もある。又心理的原因に基くものもある。怠惰意志の薄弱、放縦、又は窃盜罪、賭博罪を常習的に犯す犯罪習僻の如きものである。社會的原因としては千種萬態一言に盡す事が出來ない。假令ば家庭の不和、生活の壓迫環境の惡化、思想の動搖、經濟界の激變の如きものである。又是等三者も原因が互に競合して犯罪を犯さしむる事も免れない。然し何れにしても其の原因と犯罪との關係が、現時の社會通念の上から見て、眞實なる人情の上から見て、無理からぬ關係のあるものと批判せらるる時、即ち何人も犯罪人の位置に置くも猶同樣の態度、行動に出ずるの止むを得ざるものありと肯定せらるゝ如き場合に在りては、其の犯罪の處斷に就て相當の斟酌を加へらるべきものであらうと思ふ。即ち其の時代の國民の道德的見地と社會的考察とに處刑の標準を求むべきものである。唯、注意せねばならぬのは、一時的に昂奮したる輿論感情なるものは中庸を欠いて居るから、之れを考慮し斟酌する事は出來ない、常に嚴正なる國民的意識と調和を保つ事が肝要である。

(三)犯罪後の事情。

如何に惡性の者でも一度犯罪を犯した後、良心の悶えに苦しみ改悟の狀に著しく犯罪後其の者に接する時は、眞に別人の如き感あるものがある。或は改悟の極遂に自殺を企つる者さへある。刑事政策の理想は寧ろ刑せずして能く刑の目的を達するにある故に斯の如き自悛の念強き者に對しては十分の斟酌を加ふべきである。又財產的法益を犯した犯罪人に在りても、直接被害者の下に謝罪して其の損害を賠償したり、或は又被害者の宥恕を乞ふて被害者の道德的滿足を充し若くは過失殺傷の場合に治療費を負擔し慰藉料を給し弔慰金を贈るが如き者にあつては、刑法が人格主義の下に於て犯人を處罰する精神の上から見て、斯樣な事情の存するものに就てはその心情を洞察し相當の宥恕を與ふべきものである。是等は刑法が人情を酌んで國民の道德的感情と、調和を保つ事を認めて居るものと言ふ事が出來るのである。

以上は只雜感を述べたに過ぎないのであるが、陪審制度でも實施さるゝに至らば、國民が裁判に對し一種の責任と興味とを抱く樣になり、國民の道德的感情は一層緊張せられ、裁判との調節融和を期することが、容易であらうと思ふ。

政治に志し高等學府に學ぶ女學生の主張

政治に對する私共の希望

東洋大學社會事業科 行川仲子

婦人が政治でも云々すると人は直ぐ新らしがりで男に反感を持ち、亭主を下敷にし侮蔑して家庭に於ては何等女らしいことをしない所謂「新らしい女」と直ぐ傾くのが通例でありましたが社會の變遷、時代の推移に連れ近頃は大分婦人と政治と云ふ事を多くの人が考へる樣になりましたのは何よりもよろこぶべき現象であります。女とは家庭にありて臺所の事は勿論裁縫したり洗濯したり子供の世話と家庭の色々細い事をして居ればそれでよろしい。女に學問は要らぬ、あると却て惡い、社會の事などは全然知る必要なしといつた樣な工合で女といへば唯封建時代の遺物を踏襲して、女大學式を金科玉條として居ればよろしいと云つた樣な風でありました。現在もまだ／＼さう云ふ人があります、殊に頭で頑固一點張の男子は云ふ迄もなくさうした婦人のある事も事實であります、然も現代の教育を受けた立派な紳士達でも隨分古い苔の生えたやうな頭を以て婦人を解釋して居る人がありますが何も新らしい婦人だから家庭の事を放擲にして置くといふわけでもなし、亦政治を談ずる婦人だから男子を下敷にするといふわけでもありません、或る點に於ては新しい女舊い女と區別はないと思はれるのでありますが、男子でも婦人でも新しい知識を有して居るものは何うしても現社會制度を論じます、從て社會的新知識を欲する、社會的新知識を欲する者は從て社會や政治の事もいひませう、云はなければ此社會の進歩發達を見る事は出來ません、尤も社會生活は言ひ換へれば政治であります、社會生活のある所必ず政治があります、社會生活は男のみでは出來ません勿論女のみでも出來ません、男女協力して初めて此社會生活を營むことが出來るのであります、でありますから必ずしも男のみ政權に參與することの特權を認めることの不當なる事は識者間にはいはずもがな識者と思はれない樣な人でも相當考を廻らして居る人は漸時增えて參ります、之は取りも直さず社會に對する見解及婦人に對する理解ある人が增える實證であります、之と同時に吾々婦人も社會的知識政治的知識の發展に怠らず又今迄等閑にして居た者は今後充分の修養をしたいものと思ひます、如何に社會は進歩し、政治は革正さ

れ何婦人に對する理解は充分あるにしても、吾々婦人が春の暖い日に終日居眠りを續けて此急激なる進歩の潮流を觀ること能はざれば天秤棒は愈々平均を失して必ず一方は再び上ることの出來ない谷底に死を待つより外ないと思ふのであります、でありますから愼重熟慮して確固たる精神を以て吾々婦人は現代社會に臨まなければならない事は云ふ迄もありません。

よく婦人の自覺を疑ふ人のあるのは男子の罪のみでなく婦人の罪も大きいのであります。斯くいへばとて私は婦人も男子の樣に内を外にして歩けといふのではありません、男女協同して此の社會を成して居る以上男の子供も女の子供も女が産んで大部分は其家庭に於て其の母親が敎育する、してみると其の敎育の方法は婦人の知識より出でたるもので何うしても婦人は家事の事のみの知識にては到底これからの子女敎育は不可能であります、兎に角子女敎育の點に於ても男よりも寧ろコンモンセンスの必要を感ずるのであります、それなのに從來婦人に對しては其の發達進歩せんとする自然の性質に壓迫ありし爲め男子同樣の進歩を見ず、如何にも彎曲した床下の筍の生立ち見た樣に普通の大地に自然に任かせるなら立派に成長すべかりしを大分迂廻して太陽の面を覗かねばならぬ不幸な境遇に置かれたので男子同樣の發達を見ることが出來なかつたのであります、少くとも同じ自然の儘に抛つておかれるならば其の性質能力の差異を麗々しく言ふ者もなかつたかと思はれます、婦人の實行力は確に力強い一の能力を持つて居るのであります、昔を顧みて歐洲の女王を觀察しても王妃や王女の實績を觀ても王と同樣の政治を施し却て其女王の實績が王のよりも見るべき點が多々あるのであります、此點から見ても必ずしも女性は能力なしといふ斷定は下されません、歐洲のみならず我日本に於ても女帝のあらせられたるは申上げる必要もないが婦人が政治に參與する事は強ち不適任でない事は事實であります。世界の文治國は大抵婦人の參政權を認めて居ります、最も保守的國民と見られて居る彼の英國でさへ一九一八年三十歳以上の婦人にして一年五磅以上の家賃を拂ふ者及地方自治體に對し選擧權享有者の妻は選擧權のみならず被選擧權迄も有する事になりました。我が日本に於ても男子と同等に納税をなし滿廿五年以上の婦人なれば男子と同樣選擧權位は與ふるのが當然の事でありますが普通選擧實施の曉に於ては婦人は納税の義務を果しながら選擧すら有し得ないことになる、さすれば如何に識見卓越せる人格者でも亦男子の手にてよく爲し能はざる婦人特有の技能を認められても婦人は低劣なる證明を與へらるるわけであります、普通選擧は久しからずして實施の日の來る事は何人も疑はざる事實でありますが、現在男子は代議士にも出られる辯護士にもなれる官吏にもなれる資格を有しながら吾々婦人は其政治に干與する代議士ですら選擧する權利を享有する事が出來ないといふ事は誠に情ない譯であります、何れにしても現在の選擧制度は其の選擧權享有者が少數なるが爲め弊害のある事は誰しも認める所でありますが、選擧資格ある者の態度が一向に覺醒の感がないからであります、現在の制度では理想選擧の行はれる筈はありません、戸別訪問に多く來た者に投票する傾向傾向と申すよりも事實それなのでありますから人間の感情を餘りに暴露し過ぎた感があります、之に依て知らず識らずの内に少數寡頭政治の維持に勉めて居る樣なものであります、我國に於て理想選擧

を擁護して立てば彼は確に好適任なりと多數の人が認める立派な候補者でありながら必ず落選するのは彼は政治家として理想的なりと考へながら一方左程理想的とも思はぬ候補者に投票するのは全く情實にかられた人情の缺陷なりといふより外ないのであります、或は又何れが立派な政治家であるか亦は如何に理想的候補者であるかを知らずに選擧するものあるは誠になげかはしい次第であります、今少し政治的社會的知識があつて欲しいのであります、私達を支配する政治に干與する者を選擧するに當つて何れが候補者として適任なりやを知らず或は之を知りつゝ感情的投票を爲すが如きはあまりに放漫過ぎる、或者は言ふでありませう『どうせどちらへ投票しても吾々に大した影響はしない誰でもよろしいのだ、』と斯る言を弄する人はチヨイ〳〵聞く事でありますが斯る類の人が多い樣に思はれるのは遺憾に堪へない次第であります、でありますから議員の質が惡くなつたといふ聲は益々盛になるばかりであります、斯る事は選擧に際し大に意を用ゆべきことであると同時に普通選擧の實施や婦人參政權を認めれば此弊害を除くには困難の事であります、戸別訪問が出來る樣な選擧權享有者の少い事では益々此弊を助長させる樣なものであります・戸別訪問が不可能になる程の選擧權享有者がなければ從つて立派な理想的代表者の出ないのは分り切つた事であります。立派な代表者が出ないで良い政治の行はれる筈もなく、立派な代表者を出さずに居て良い政治を望むのは愚の至りであります、今度第四十六議會に婦人側より二三請願書を提出されて居る樣でありますが、先づ第一に普通選擧及婦人參政權の通過を見なければ從て外のものも困難を感ずる譯でありますから普選によりて男子を解放するのみならず婦人參政權をも認めて女子を解放し七千萬の同胞一致協力して新文化の建設に奮鬪努力する時代が來なければなりませぬ。

無産婦人は何を語る?

日本大學社會科二年生　佐藤智慧子

一切の人は人として生きればならない、『或人の生活が他の人の生活の手段として犧牲とせらるべき道理はない』といふこの當然な眞理を、凡ての弱者は覺りはじめた。かくて生存を脅かさるゝ兄弟は唯一團結へと急ぎつゝある。この時に當り半數である女性の覺醒なく、協力なくば到底達成し得ざる事とも知つた、あのレニン氏は『革命の大成は唯婦人の協力によりて初めて期待し得る』とて、女を善用し教育する事を忘れなかつた。大方の革新の維新の裏には、女性の血と涙の塗られてないのはまれである。今や我國に於ても農民大會は婦人全員を認め、一切の社會運動は、女性の助力を促して居る。

さて、普選は國體を無視する危險思想である、我國は建國以來家族制度を以て立國の基本として居る。しかるに個人主義なる普選などを叫ぶとは、亡國論も甚しいと途方もない默譯を洩らすドラック商會主有田音松氏は、更に其目を婦人に向け、女性が社會問題をかつぎ出したり、女權運動などといふことに[illegible]ともない、我國には婦德なるものがある。斷じてかゝる行動は許されぬと力んで居られる

ドラック商會主から見れば、家族制度は、不變不動の原則であるが社會學、經濟學は、民族制度家族制度はいづれの社會にも共通に存した事實であり、只近世文明に於ける國家組織の完成と個人主義の發達は、家なる觀念より次第に離れ、一方宗敎的權威に對する否定的傾向は、祖先の偶像化を退ける。次で產業革命により經濟生活が變化して、個人的企業、個人的勞働卽ち資本主義經濟組織完成の結果、この綜合家族制度は必然の結果崩壞したのであると。我々は常に社會拘束力を感じ、社會制度、經濟組織が生活そのものを、强く動かしつゝあるを知るのである。『生產力の變化が生產關係を定め、生產關係は又凡ての社會生活を決定する』とは六ケ敷い唯物史觀の見方で、そこには全部の肯定をなし得ないとしても、明に經濟生活が吾々人に及ぼす眞理を物語つて居る。貧しきが故に、何等の敎養も、科學や文明の恩澤にもあづかり得ないのみか、寒るに衣服なく喰ふにパンなく、自分の生命をさへ斷たねばならない。せまり來る飢ゑの苦しさ、寒さのふるひはその倫理觀さへ打すてさせる、犯罪の約八割は利欲犯卽ち貧の窮餘の罪である。不景氣が如何に犯罪を增すかは、昨年の統計が明示してゐる。一昨年より不景氣な昨年は、其犯罪總數が前年の三倍弱で、殺人旣遂未遂共二千件、自殺千二百十六件の物凄さを現はして居る。生活不安の爲に、親子夫婦相抱いて複數自殺を遂げる、發狂する、かうしたいたましい現象の裏には經濟の力が動いて居るのである。

病める夫を、泣きわめく我兒を見ては、夫婦は相互に扶養の義務を負ふといふ民法を知らずとも、立つて己の勞働を賣られねばならない。親の飢ゑの爲に、夫の藥の代に、悲痛の涙を呑んで、己の魂ひを賣り肉を賣る姉妹を、誰か淪落の女と冷評し得るか。野獸の如き異人に、己の貞操を貨幣と交換する所謂娘子軍に、深刻なる社會制度の影響を思はずに居られやうか？實に『近代の工業的勞働は、近代に於ける資本に對する服從は、――一切の民族的特徵を剝ぎ去るのであらう。有田氏如何に憤慨せらるゝとも、此經濟生活、社會制度の改正なくば、婦人運動はますく火の手をあげて行く。獨り日本婦人のみ空氣を吸つて生きられぬなら、それは當然過ぎる事實であるかくて東洋の特殊國の女性にも、女政治家が女飛行家が現はれ、次で婦人勞働問題、廢娼問題、參政問題、が漸く識者の注目を集めて來た。かゝる時に無產婦人に目を轉じ、耳を欹てゝ姉妹の聲を聞くなら、そこに溢れて居るのは、生命犧牲の苦惱であり、機械化された生活の疲ではあるまいか。パンを追ふて勞働を賣り、己の全能力をあげて、國家社會に貢献をはげみ乍ら、何處からも生活の保障なく生存の必要品さへ得がたく、骨を削り、肉をそぐ死なず居る狀態にある。手から口へ、其日々々の糧を得る爲には、或は人々が休養する眞夜中も働かねばならず、地下何千尺の穴の中にも働かねばならない。石原修氏の斷案は、工場生活から歸省した者の中滿十二才以下では其死亡率普通人の七倍、二十才から二十五才までは三倍以上で、歸鄉して其年に死ぬ者が千人の中三十人であると。更に子供の死亡率の多い事、結核に冒されて居る事を說かれてあつた。石原氏の統計は極最新のものではないが、如何に生命犧牲を拂ひ、企業家に搾取されつゝあるかを知り得るのである。約七割の輸出品はかゝる姉妹の血と涙の中から生れる。しかも婦人勞働者の唯一の光明である子供は、幼い時から生活の波にもまれ、雨が降つたり、寒かつ

たりする毎に、小さな心を惱まして居る。然しかるべき子供時代を學校以外に工業へ行つたり、自暴自棄な父母の爲に殘忍な取扱ひをされる。『一旦緩急あれば義勇公に奉し以て天壤無窮の皇運を扶翼すべく』、其生命を捨てるさへ惜しまぬ小國民が、教室では注意散漫、元氣なく營養不良に惱んで居る、御菓子を食べないから齲齒がないのが何よりとは、何といふ悲慘事であらう。學用品なく、豫習時間なく、室なく營養不良で、おまけに叱り飛ばされる此子達に、如何にして天才を、個性を發揮する術があらうか。境遇が人に及ぼす影響の如何に大であるかは、總ての學者の認める所であり、殊に幼時に於て然りである。

成程學者先生の敎へる所によれば、個人主義經濟制度では、企業の動機は營利の欲望から來て居るときく。消費者からは極端に高い價格を取り、勞働者には出來るだけ、廉い勞働力を提供せしめて、不勞所得をば、より多く搾取せんとするが目的であると、一切を利益から打算すれば、女工が如何に死なうが、まだ／＼生活程度の低い農村婦人を移入すればよいと考へて居るかも知れない。勞働者が如何に勞働を費さうとも、其等勞働者の費した勞働が犧牲として觀念されるのでなくて、たゞ其等勞働者に向つて支拂はるゝ所の勞賃のみが所謂生産費として計上される』と河上博士は說く。だからこそ寒さにふるへやうが、飢死しやうが、其實に購買力なき限り、それは一の顧慮をも要しないといふのが本分であらう。かくて至純至高な人情は、友誼は單なる手段方法と化し去り、人格の光、良心の影は何處へか消えはてたのである。天道人を殺さずも早空言となり了つた。

しかもそれが如何に國家社會を傷つける事か、人類の將來を害する事か特に工場法は不完全、夜業はするといふ特殊國日本に於ては歐洲に於て最も營養不良で、戰前より約六十パアセントの肉を減じた獨逸、其死亡率は一九二一年に人口千につき一三・五の割合なのに、日本は人口千に對し、二十二・六九といふ數字である。高松惑三氏の言によれば、大きい原因は保健衛生施設の不完全からであると云はれるが、見のがす事の出來ないのは、生活難と營養不良がより多くの原因ではあるまいか。しかも法治國は無産者には至つて氣がつかれないのか、割引に割引をした第一回勞働會議可決事項、一日九時間半の勞働、一週一回の休日、婦人及少年勞働者の夜業禁止産前産後の妊婦の休養も否決した。支那が長足の進步を遂げたから之と競爭する爲といふ口實で、大多數の婦の生命をば見殺してもよいであらうか。生物界には相互扶助が行はれ、社會は成金の協働によりてのみ成立して居るのに――。かうした社會にあつて、若しも婦人はより多く平和を望み、愛に滿てる者なら、このどん底の生活に呻き、生もならず死もならず、見るもの聞くものに一種の悲哀と反感を抱き乍ら、無限の苦痛を兩肩に荷ひ、生存その事の爲に、戀も愛も藝術も科學もない程苦しんで居る我等の爲に、何故その手をのばさないのか。女性運動とは、裾模樣を着て政黨に參加する事でもなく、六法全書を片手に、參政權を云々するのでもなく、花柳病男子に拒婚同盟の示威運動を試みるのみでもなく、大多數の無産婦人の生活と相容れぬ良妻賢母のミーラを粉飾する事でもあるまい。誤られたる社會生活をば打破り、人格に無限の尊嚴を置き、『人格ある人としての總ての能力を自由に發展し得る』社會に向はんとする

一運動であるならば、外國人を妻にして居る人や、女は弱きが故に同情してやれといふやうな代議士をまつりあげて、馬上ゆたかに參政行列をするのみでなく、その大膽さと情熱とをば、同性夜業撤廢の爲に、時間の短縮、男女同一能率には同一賃金、子供の敎育費生活費の保障の問題でも强要していたゞけたらと私は思ふ。急迫不正の侵害に對しては、自己又は他人の權利を防衛するために、正當防衛の許されて居るから、同性の生命を脅かし生活不安を感ぜしめる制度への正當防衛を、時にはやつていたゞきたいと思ふのである。露西の知識階級は『民衆の中』に飛びこんで來た。然し我々は、『××××××』といふ學者や『××××××』に醉ふ程の御目出度さが、否呑氣さがないのだから、決して音樂會の切符賣や花賣をして人生無上の勞働と心得たり、憐れな細民の爲にといふ御芳志で天降り遊ばす才媛の出現のみを期待して居る者ではない。却て我々はその汗と血と涙の中から生み出したる强い人生觀、社會觀を以て胸に燃ゆる猛火と共に何をか社會に、人類に寄與せんとして居る。『民衆の中へ』ではない民衆の中から、其惰眠と沈滯をば打破するであらう。必要ならば自ら知識をも獲得しよう。そして苦い體驗と强き情熱とを以て、『萬人は一人の爲に、一人は萬人の爲に』といふ社會理想に向つて無產婦人は今や準備しつゝある。

補缺選擧の光景を觀て

東洋大學社會事業科 草郷仁子

元來私は政治問題に就きましてそれ程に深い知識は持つて居りません。むしろ門外漢と申した方が適當であるかも知れません。然しまた其の門外漢の人間に現在の政治殊に議員選擧の狀態が如何に觀察されて居るかと云ふ事をお話し致すのも一興かと思はれます。然し自分は今少しばかり多忙な爲めにゆつくり落着いて考へを纏めて居ります隙も御座いません故思ひうかべました事どもを少しばかり述べさしていたゞきます。

然し考へと申しましても私のやうな淺學菲才の者が政治問題などに就きまして申しあげる事で御座いますから、或は間違つた事もあるかも知れません、其の點は豫め讀者の御指摘と御寛しをお願ひ致して置きます。

近來しきりに見うけます事は近頃の人々が非常に、自己主義に謀れてゐるやうに思はれます。甚だしいのは殆んど健全の思想が全く消え失せたかと思はれます、之は時代思潮の影響かも知れません、無論營利を目的と致します商賣人のやうなのは致しかたないと致しましても、相當の地位もあり、人格も無ければならない方々で往々そのやうな傾向があるのを見だします事は誠に歎はしい事で御座います。殊に政治上の問題の中にまでも、往々其のやうな個人的營利を目的とする行動を見出す事が御座います。

先頃の本郷區で行はれました、衆議院議員の補缺選擧に致しましても何故にあのやうなお祭り騒ぎをしなければならないので御座いませうか。果してあのやうな事を致されば當選する事が絶對に不可能なので御座いませうか、まるで選擧なのか看板の陳列會なのか政

治知識の無い私共にとつては、その理由が判らぬやうな有様で御座います。殊に其の立看板の類の多い方が優勢でゐるのだとか、まるで眞實とは受取り難い事が云はれて居ります。

然し一歩退いて考へてみますと現在の狀態に於ては、無理も無い事かも知れません。實際現在の選擧の大部分が全く情實や何回もの戸別訪問を受けた事に依つて、其の候補者に投票するのが一般の傾向とされて居りますもの、其のやうな輕卒な事は是非ともお互同志に注意し合つて、一日も早も無くなすやうに致したいもので御座います。或方はそのやうな事は今更申すまでも無い事といはれるかも知れませんが、事實は改善どころか却つて惡い傾向をしかもますます深めてまゐります。

愚かな立看板のやうなものよりも何故に一度でも多くの政見發表の演說會を開催したり一枚でも多くの自己の政治に對する主意書を有權者に發送なさらないのでせうか。單にそのような立看板に依てばかり御自分の御名前を諸人の念頭に止めようとするやうな事は心ある者にはあまりに愚かなやりかたとしか思へません。面白い事には本鄉區の選擧の時に或る店頭に某氏の（御名前は申し上げずに置きますが）立看板を見ました。それから三日程してまたその店の前を通りますと、某氏の立看板はとりさられ反對に敵派である方の立看板がれいれいしく立てられて居りました。或は後者の運動員が故意に夜中にでも某氏の立看板と取り換へてしまつたのかも知れませんが、然し其の御店の御主人もそれとしますれば隨分寛大な方でゐらつしやると感心致してしまひました。

諸所の電柱などに選擧の爲めのビラが亂雜に貼られてありますのを見ると何故ですかあまり好い氣持を持つ事が出來ません。電柱其他の公共物に貼札する事は選擧の場合ばかり特別に許されてゐるので御座いませうか。殊に敵派のビラの上に自派のビラを貼り附ける事は如何考へましても心快いものでは御座いません。無論貼札する者が臨時雇の車屋連中であるからかも知れませんが、首腦者の主意も到らないと思ひます。

選擧には必すつきものゝ所謂運動屋と云ふものの存在も決して感心出來るものでは御座いません。眞實に其の人物を信じ其の政見に共鳴して自己の利益を度外視して、運動される方は別で御座いますが、それを一種の職業として居る者の中には各候補者の間を渡りあるいて、甚だしい者は甲に行けば甲の都合の好い事を云ひ乙に行けば乙に都合の好い事を云ふやうな者を自己の運動員として、行動さして置く事は如何なる理由で御座いませう。

或はさうした人々が妨害する事を恐れて、餘儀なくさうしてゐるのなればあまりに弱いものではないでせうか。それ程までに恐れる理由は何處にあるでせう。

本鄉區の補缺選擧の運動の中で其の一候補者が學校關係者であつた理由からして其の學校の學生の一部分が、學校の授業まで缺席して運動員として行動した事はあまり鐘ばしい事では御座いません。別の意味からでは御座いますが、御家庭を持つた御婦人がたが周圍の者から奬められて運動者の數に加はる事も熟考すべき事だと思ひます。

何故にそのやうに人手がいるのかと考へますのに、それは一回でも多くの戸別訪問、別に政見を述べるのでもなくたゞ印刷屋喜ばせ

の大形の名刺を置いて行くのに過ぎない事の爲めでは御座いますまいか。少くもそのやうな事が廃止するならば半數位の人手は充分に當く事が出來る事と思ひます。殊に日暮時の多忙な時などそのやうな無意義な訪問を受ける事は少くも知識階級の家庭では、一度ですむものなと思ふ事も少くは無いと思ひます。

また選擧の當日はまるで運動員の行列を作り區役所附近に立つて投票に來る者に候補者の名刺渡をしたりする事は、よく政教の五分間と云ふ言葉を耳に致しますものゝ、此の場合にはあまり好ばしい事では御座いません。

誰に投票するかは既に決定してゐなければならない筈で御座います。少くも眞實に其の人物や政見に賛成して投票する者にとりましては、現在そのやうな事が實行されて居ります事は候補者ばかりでなくその罪は有權者の一部が眞に自覺しない事にも歸することゝ思ひます。然しそのやうな人の投票を得たい爲めにする行動が眞に理解し援助されなければならない有權者を失ふと云ふ事を當然考へなければならない事であらうと思ひます。

比較的知識階級の多いとされて居ります、本郷區に於てさへも今申上げたやうな現象が見出されるのは如何が致したもので御座いませう。

また近頃は選擧ばかりとは限りませんが、種々の事がらに婦人が活動し始めた事で御座います。從來一部分のみに限られて居りました婦人の活動が次第に擴げられて參ります事は、尊ぶべき事で御座います。寧ろ當然さうなければならないので御座います。然し其等の多數の婦人の中で眞實に自己の立場を理解し自覺して居る方がどれ位あるかと考へますと聊か心細い感が致します。

多くの場合浮薄な婦人を一層浮薄に親しみ易くさせる事が多いやうに思はれます。

一種の賣名政策とでも申しますか、自分の家庭の事も打捨てゝ或る運動にと申すよりも自分の名を世間の者に知つて貰ひたい爲めに熱中される方が多いやうに思ひます。然し決して全部そのやうな方ばかりと申すのでは御座いません、中には眞實に涙の出る位に感動されられるやうな方も御座います。亦御家庭の内も相當に處理され御さうした社會的の利益の爲めに活動される御婦人方を拜見致しました時には及ばずながら自分もと思ふ事も度々御座います。

或程度までは選擧の如きも婦人の手で改善する事が出來る事と思ひます。殊に來るべき第二の國民に眞實に誤らない政治思想を養ふ責任の大半は婦人に在ると申しても差しつかへ御座いますまい。

婦人の參政權等に就きましてもまだ申し上げたい事も御座いますが御約束の紙數も盡きかけて居りますのでこれで擱筆致します。



情熱の戀愛詩人サプフオ

村松正俊

　古から文學者藝術家の數は實に算へきれないほど多い。しかしその中に女性の名を見出すことはきはめて稀であるといつていい。たまにそれがあつても、これはせいぜい女であるが故に、「女としては」といふ條件で通つて來たのである。實際、イギリスのジョージ・エリオットの心理小說の如きは平凡な男子も及ばないものがあるかも知れない。しかもあの位のものは男性藝術家一般の標準からいへば、さして驚くに足りない。それ以下の連中は推して知るべきであらう。フランスのジョルジユ・サンドの作物にしても、當時の批評家がそれほど騷ぐ必要のないものだと思はれる。彼女のむら氣な戀愛事件、ことにミユッセとの事件などが彼女をして高名ならしめたといつても過言でない。それはどこの國でも同じである。多くの批評家が男性であるために、女性の藝術家に對してはことに意識して寛大に見たり、或は無意識にでも知らず識らずのうちに寛大になつたりすることは當然なことであらう。それで、女性であるといふ條件をさし引いて、純然たる藝術の見地から判斷すれば、多くの女性作家は男性に及ばないのを常とするし、またその數も少いのである。嚴密にいつて、男性の藝術家に拮抗し得るものは、例へば紫式部とか、或は少し低めていへば、和泉式部とか、一葉女史とか位ものであらう。さうしてわれわれがギリシャの文學史を探つて見ても同じ現象に出あふのである。

　しかしながらこゝに唯一の例外がある。それは女詩人サプフオである。元來ギリシヤ人はホメーロスを尊敬すること甚しく、單に「詩人」といへば必らずホメーロスを意味してゐた。太閤が秀吉であつたりするやうな工合である。さうしてそれと對立して「女詩人」といへば、必ずサプフオのとにきまつてゐた。彼女の名譽はそれほど高かつたのである。それ

は男性の批評家の寛大さから發した者であるとのみいひ切れないところがある。今日彼女の詩を當時の他の男の詩人の詩と比較して見ればよく分るのである。それで例へばアリストテレースの如きは彼女を目してホメーロスやアルキロコスと同じ位置にあるとなし、プラトーンの如きも彼女を以て第十番目のミューズとなしてゐる。さういふ批評がいくらかそれまでの傳説にわづらはされて出來たとしても、それは彼女のすぐれてゐるところを否定しはしないであらう。ストラボーンといふ古代の地理學者のいふところによれば、彼女は實に驚くべき質であつて、歴史をすつかり調べて見ても詩に於て彼女に匹敵するものはないといふことである。またソローンといふ賢人は彼女の詩をきいて、それを覺えるまでは決して死なないと嘆じたさうである。さういふふうにサプフオは古代から多くの批評家によつて最も秀れた詩人であると認められてゐた。

　ところがサプフオは一面道徳の上からいつて、可成非難されてゐるのである。彼女を最も有名ならしめてゐるものは、彼女が水夫のフアオーンといふ少年を戀して、拒絶されたので、レウカディヤの岸から海に飛び込んで死んだといふ傳説である。しかしこの傳説は全く傳説であつて、事實でないらしい。この傳説はアイリアノスといふ著述家の書いたもののなかにもあるが、その前メナンドロスといふ喜劇作者が「レウカディヤの女」といふ喜劇を書いてサプフオをモデルにしたといふなどがはじめてであらう。メナンドロスはアリストフアネースに匹敵する喜劇作家であるが、惜しいことにはその作で完全に殘つてゐるものはない。右の「レウディヤの女」も斷片だけである。當時の喜劇作家はみな同時代や神話中の人物を皮肉つたもので、アリストフアネースの現存してゐる劇で見ても分るとほり、アリストフアネースはソークラテースや悲劇作家のエウリピデースなどを小氣味よく皮肉つてゐるのである。メナンドロスのこの作もまたさうである。このサプフオとフアオーンを主題にした喜劇は右のメナンドロスの外に六つか七つある位である。

　傳説はさうであるが、サプフオは情熱の女として有名である、それが彼女を道徳上から批難する根據を與へてゐるらしい。サプフオはレスボス島の生れなので、レスボスの女はみんな不品行な仕方のないものといふ考へさへ與へてゐる。婦人の同性愛にもサプフオの名がついてゐるのでも知れる。事實當時のレスボスの婦人は、外のギリシヤ人が婦人を輕蔑して殆ど單に物品同様に扱つてゐたのに反して、非常に自由であつた。ギリシヤ人は婦人を宗教的の偏見から重んじてゐなかつた。ことに戀愛などは全く無視されてゐたのである。そ

れで日本の藝妓に類する一種の職業婦人などが現出するに至つたのである。レスボスの婦人はひとりその反對に社交に耽つたり、特に文學や藝術に志すことが出來た。サプフオの如きはその一人に外ならないのである。さうしてサプフオ自身も女の弟子を養つて、詩などを敎たりしてゐたのである。さういふ點が同性愛の非難や、また彼女の情熱がいろいろな彼女の操行點の非難を生んだものらしい。彼女はある人にいはせれば、娼婦であつたといふし、またある人にいはせればいろいろな人と關係したともいはれてゐる。とに角眞相は容易に分らないらしい。ただ近代の女の藝術家が、ジユルジユ・サンドのやうに、また日本で此頃輩出する女繪師や女文士や女樂師などのやうに、品行上で保守的な社會を驚かしてゐるのと併せ考へると、さう不思議とするに足りないであらう。

彼女の生涯についてもまた漠然としたことしか分つてゐない。彼女は普通のギリシヤ語ではサプフオーといはれてゐるが、彼女の生れたレスボスの方言ではプサプフオーであり、また愛稱としてプサプフアともいつてゐた。彼女はレスボス島の一都市なるエレソスに生れた。しかし大部分はミチユレーネーといふ大都市に住んでゐたので、また「ミチユーネーの女」とも呼ばれてゐた。その年代も詳しいことは分らないであるが、當時同じレスボス島のアルカイオスといふ詩人がゐて、二人の間に戀の詩がとりかはされたことがある。その斷片は今日でも殘つてゐる。アルカイオスはサプフオに詩を寄せて曰く、

　菫の髮なせよ、やはらかき笑の淸らかなサプフオよ
　わたしは何かいはうと思つてゐる　しかし恥ぢらひはわたしを止めてゐる。

サプフオは之に答へて

　君もしも善と美ののぞみを持つならば
　さうして君が舌が惡いことばを決して動かさないならば
　恥ぢらひは決して君が眼を蓋はないだらう
　さうして正しく君の考へをいふだらう

といつて拒絶した。この話から推すれば サプフオはアリカイオスより少し若いがしかし同時代と見ることが出來る。また歷史家のヘロドトスが彼女の兄弟とエジプトの娼婦のことを記してゐることから推すれば、彼女は紀元前六世紀の始め頃生きてゐたといふことが出來る。

彼女の家はレスボスの貴族の家であつた。父をスカマンドロニユモスといひ、母をクレイスといつた。しかしスイダスによれば彼女はケルキユラス又はケルコラスといふアンドロスの富な市民と結婚してやはりクレイスといふ娘を擧げたといふことである。そはこの名は彼女の友達の名といふ說もあ

つて、一定してゐない。しかし彼女が結婚して一人の娘を生んだことは事實であるとされてゐる。

彼女の家が貴族であつたために、彼女も政治上の出來事から外國へ逐はれたことがある。それはやはりアリストクラシーとデモクラシーの爭からであつて、レスボスの島もこの二者が相互に爭つてゐたのである。彼女はシシリー島に流されたらしい。その年代は不明である。しかしピッタコスといふ王が流人をよびかへしたとき、彼女もかへつて來たことは事實である。さうして彼女の死については、前に述べた傳説以外に正確なことは分らない。

然らば彼女は美しかつたであらうか。この興味ある問題についても殆ど何等知るべきより所がない。マキシモステユリオスによればサプフオは「小さくて黒い」とある。恐らく思ひ切つて美しかつたとはいへないのであらう。アルカイオスの戀歌に「紫の髮の毛」云々とあるのも彼女の色がむしろ黒いことを示してゐるのではないかといふ説もある。しかし黒いといふことは今日の日本人からいへば美しくないことになるかも知れないが、當時のギリシヤ人にとつては却つて反對であつたかも知れない。で人がサプフオを美しい、美しいといつてゐたのは、さういふ考から出たことであるか、或はさうでないとすれば、彼女の詩の美しさをほめたゝへた言葉にちがひないのである。

サプフオは特に戀愛詩人として知られてゐる。それは彼女の詩の内容が大部分戀をうたつてゐるからである。その詩の中に戀の悲しさや樂しさや、また若い男の美や若い女の美などを歌ひ、しかしそれが非常に熱情的なので知られてゐる。しかし後人の研究ではそれらの詩の全部が必らずしも彼女の實感といふわけでもなく、アナクレオンやアルキロコスのやうに彼女も自分の個人的經驗以外のことも歌つてゐるらしい。彼女の詩の中にしばしば女の名前が出て來るので、前述の如きいろいろな問題の種子となつたのであるが、その名も多くは彼女の弟子の名であつたのである。サプフオもレスボスの婦人として、しかもすぐれた詩人として女弟子を多勢もつてゐたからである。その關係は丁度ソークラテースの周圍にアルキビアデースやカルミデースやクセノフオーンが集つた如きものであつた。しかも彼女の詩の句はあまりに感傷的で、戀人に與へるごときものがある。それを友情といふのはまだしい。戀愛といつても當らない。それらの混じたものと見るのが至當である。しかも彼女自身ある詩と中で自分の德について述べてゐるし、またミテユレーネーに於て彼女は非常に尊敬されてゐたし、なほエレソスの貨幣には彼女の像が刻されてゐた。この間の矛盾をどう解いたらいいであらう

か。近代人が考へるやうに、戀愛がすべてに打ち勝つたのであるか。或は彼女の才が彼女のあらゆる惡德と考へられるものを蓋ひ去つたのであるか。いづれも正しいであらう。しかしむしろ當時のレスボスの一般の風習、ことに婦人の習慣などを眼中に置くときは、道德の點に於て彼女は必ずしも普通以上でもなく、また普通以下もないといへる。さうして彼女がその天才を有してゐたがために注目されたといふのが最も平凡な解釋であつて、しかも可成正しい見方であるといへるであらう。

　然らば詩人としてのサプフオの位置はどうであらうか。多くの批評家のいふところによれば彼女は明かに眞の完全な抒情詩人としての資格をもつてゐるのである。さうしてなほ一個のギリシャ人として、またギリシャ的な技巧を以てその思想をよく表現してゐるといふのである。さういふ批評は成程今日われわれがサプフオの詩を讀んでもたしかにうかがへることである。しかしここに一言注意しなければならないことは、彼女はギリシャ人で　こにはちがひないが、同時に同じギリシャ人としてもやはりレスボン人であるといふことである。それにはギリシャ文明に於けるレスボン島の位置から考へて來なければならないのであるが、一言にしていへば、レスボン島はギリシャ國民のなかでも可成進んでゐたのであつて、ことに東方文明を吸集して新思想などをどんどんとし入れたのである。從つてこの島はギリシャ中でも先づ最初に文明國となつてゐたといつてもよかつた。また島である關係上、住民は海に出るし、冒險心にも富み、商業も盛であつた。さういふ富かな國に生ずる氣質なり、またそれの藝術なりがどんなになるかはいかにも明かであらう。それがサプフオや、前に述べたアルカイオスなどの詩に反映してゐるのである。それはことに肉感的感情の力づよい描寫に示されてゐる。さうしてサプフオはそこに特長があつたのである。次にそれを實際について調べて見よう。

　サプフオの詩は最初九巻に分れてゐた。しかし今日殘存してゐるものは、そのなかの斷片だけで凡そ百七十種しかない。その形式は千差萬別で、エンジーやエピグラムやイヤンブスやその他種々の詩形をとつてゐるが、その内容は結局戀愛と美をうたつたものに過ぎない。彼女はアフロディーテを歌ひ、エロースを歌つてゐる。またその美は優美な微笑せるごとき美である。

　星は美しい月のまはりで
　すぐにその輝いてゐるかたちをかくす
　地が全く光で充される時

……………

　　…………銀色の。

此間は缺けてゐる行があるが。それでも充分に描寫としての歌つてゐる美しさは分るであらう。

　夕暮れよ、お前は輝ける曉が流したすべてをつれてかへる
　お前は牝羊を牡羊に、またお前は
　子供たちを母の許につれかへる

といふ句の如き、かすかな情がひらめいてゐて愛すべきものがある。その外サプフォの歌つたものにはいろいろあるが、特に薔薇が好きであつたらしい、多くの句の中にバラのことがよく歌はれてゐる。またヒヤシンスなどを愛に充ちた春のごとき氣持でうたつてゐる。さうかと思ふと衣服のひだを歌ひ、美しい衣服を誇り、或はにほひを題材にしたり、寶石を主眼にしたりしてゐる。さういふものはみな時にはやはらかな時にはなやましげな美しさをもつてゐる。それを讀むと、流石に女らしい詩情があふれてゐるのである。

　しかしさういふものは結局彼女の本領ではない。彼女の本領はむしろ炎えるやうな肉體の叫びや、心の慾望をうたふところに存してゐる。「わたしは欲しまた炎える」といふやうな句がちよいちよいある。

　月とプレイアデースは消えた
　夜は眞中で、時は過ぎる、わたしは
　ひとり孤獨の床に休む

とか、

　戀はわたしを苦しめる、肢體を顫らすものよ
　あまくまたにがく、うち克ち難き怪物よ

とか、

　戀はわがたましひを燒く、樫の木を
　打ちつける山の風のやうに

とかいふ句はいたる所に見出される。次の句の如きは特に著名なものである。

　此のものは君が前に坐して
　わたしには神の如く思はれる
　さうしてすぐ近く、かくもあまき
　　君が聲を聞く
　さうしてうるはしく笑ひ、わが胸の
　心を打つ
　君をちらと見てから、聲は
　　未だ來らない
　わが舌はかわき、ほそい火は
　すぐにわが皮膚の下をかけめぐる
　わが眼は何物も見ない、耳は

狂ほしく鳴る
さて汗はわれをめぐる。そのゝきは
わたしをすつかり囚へる。わたしは
草のやうに蒼く、まるで死んだやうに
　わたしは、さうして
すべてを敢へてする（貧すらも）
…………

この句もあとが缺けてゐるから、終りの方は分らないが、これだけでも充分彼女の情熱がうかがはれると思ふ。これだけ大膽に戀の肉體的感情を描いたものは少いであらう。後にテオクリトスがこの句を模して詩をつくつたことがある。カトルルスによつてラテン文學に飜譯された位有名なものである。

　かういふ戀の熱情は何にかはるであらうか。それは恐らく嫉妬の情であるにちがひない。實際サブフオの詩にやさしい、ふるへるやうな魂の嫉妬があらはれてゐるのがある。さうかと思ふと、自分を信ずることがあついがために自らにして誇りとなるものがある。彼女自身でその藝術と天才を自慢してゐる。またミユーズの神が彼女に光榮を與へたことを歌つてゐる。

　お前は死ぬであらう、さうしてお前には
今にそのときも決して何物も殘らない
お前はピエリヤの薔薇をしつてゐないから
お前はハデースのくらい住んで
知られない死人たちの中に立ちまふだらう

　この詩は詩才のない若い娘を笑つたものである、ピエリヤはミユズ神の住處の地名であつて、ピエリアのバラとは即ち詩のことである。

　かういふ工合にサブフオの詩才は多くの形式の下に内山にその才が發揮されてゐる。さうして情熱も優しい美も充分に認められるであらう。單に女詩人とのみいへばサブフオを指すことになるのも當然である。

終りにサブフオの詩の殆ど唯一の完全な例となるべきものを示すことにする。

七色雜ぜたる座の女神、不死のアフロデイタよ、
ゼウス神の子、たくみなる神、わたしはいのる
わたしの心を苦しみと悲しみに
　打ちまかさせ給ふな
だがここに來給へ、かつての時のごとく
遠くからわが聲を聞いて
君が父の黄金の家をすてて
　來給へ

車に馬をつけて、さて迅き美しき
すゞめは君を導いて、黒い土の上に
むなしき翼を打ち、大氣の空から
　眞中を通つて、
すぐに來た、さうして君よ、幸ひな。君、
不死の 唇 もて微笑みつつ
君はたづねる、わたしがなやめることを
　また何故にわたしが君を呼んだかを
またわたしが眩惑のこころのうちに
ねがつてゐることを、「汝は誰れをねがひ」
戀のなかに何人を得んとする、おおプサプフオよ
　誰が君を苦める
もしゝ去るならばすぐに求めに來るであらう。
贈り物を受けないならば、彼女は與へるであらう
もしも彼女が愛さないならばすぐに汝を愛するであらう
　たとひ願はなくともと

故に今すぐに來れ、このつらい苦しみから
解いてくれ、わが心ののぞむことをかなへさせよ
わたしにかなへさせよ、汝は
　わがたすけとなれよ

募集事項

之から毎月短歌と、童謠と、短詩の三つを月々順を追ふて募集してゆきます。そして、優れた一篇を本誌の詩歌壇一頁に掲載いたします。何卒奮つて御投稿下さい。五月號には先づ童謠を發表いたしますから、左の募集規約に從つて多數の御投稿を待ちます。

募集規約

一、應募者は婦人及び兒童に定めます。
一、原稿は十行以內のこと、
一、原稿には住所氏名を明記すること
一、封筒に「童謠」と朱書すること
一、〆切日三月廿五日
一、當選者一名に薄謝金拾圓進呈致します。

女性改造編輯部



モダーン・ガールの表現

―日本の妹に送る手紙―

北澤長梧

一

S子、私は昨夜ストランドのゲイテー座で、モーリス・メーテルリンクの「ベトローザル」を見た。同じ作者の「青い鳥」は、お前も東京で讀むか見るかして知つてゐると思ふが「ベトローザル」は其の後篇とも云ふべきもので、「青い鳥」の主人公テイルテイルが大きくなつて、お嫁さんをさがしあるくと云ふ筋の象徴劇だ。

私は今芝居の話をしようと云ふのではない。此の芝居の中に現はれてゐる、或る表現に就てお前に話したいのだ。第一幕目でミレットと云ふ娘が、テイルテイルの小屋へ訪ねて來た時、こんな會話がある。

テイルテイル（熱心にミレットとキッスしながら）『さうだ、さうだ、私達は何度でも何度でも、キッスがなくなつて終ふまで、キッスをしよう、……、何と云ふ素敵なんだらう。……私は今まで誰にもキッスをした事がない。そしてキッスと云ふものがどんなものだか知らなかつた。……私は何時までもあなたとキッスをしてゐたい。私は一生あなたとキッスをして暮しても好い。』

ミレット『さうして私も、私もさうよ。……私だつて誰ともキッスをしなかつた。お父さんとお母さんの外は。けれどそれとはまるで違ふわ。……ねえ話して頂戴、テイルテイル、あなたは本統に私を、私だけを愛してゐるの？ ……だれ？其處へ來るのは？』

すると壁の中から、赤い着物を着て、腰に肉屋のナイフをさげたベルラインと云ふ娘が這入つて來る。そしてテイルテイルに飛びついてキッスをする。暫く話をしてゐるうちに、

傍にミレットのゐるのを見付けて、挨拶をするのだが、其の二人の會話が面白い。

ミレット「今晩はベルライン、あなたもテイルテイルを愛してゐるの？」

ベルライン「えゝ、さうよ、勿論。あなたは怒つてゐる？」

ミレット「いゝえ、ちつとも。寧ろ喜んでゐるわ。私達は二人ともテイルテイルを愛してゐるのですもの。」

ベルライン「あなたは今夜何て綺麗でせう、ミレット。」

ミレット「美しいのはあなたよ、ベルライン。あなたがこんなに美しいのを、私は見た事がないわ。……」

テイルテイル（妖婆に）「二人は大へん仲が好いぢやありませんか……」

妖婆「勿論さうだ、二人はそれがお前のとがではないと云ふ事を知つてゐるから……」

芝居ではそれから、三四人も同じやうな娘が出て來て、同じやうなスヰートな會話が續く。其處へ集つてゐるのは、妖婆の力に依つて呼び寄せられた、娘達の魂、それ自身であるから、みんな魂の思つてゐるまゝを喋舌べる。遠慮や技巧と云ふものは少しもない。彼等は自分の愛する男を見ると、其の兩手をひろげ、燕のやうに飛んで行つてキッスをする。そして外の娘の前でも、自分の戀を語るのに少しも躊躇はしない。娘達は喜びに堪へかねて、蝶々の如く踊り狂ふ華やかな場面である。

私はモダーン・ガールの戀が、ミレットとベルラインの如く、一人の男を二人で愛する時さへ、少しも爭ひのないやうな、そんな生やさしいものだと思つてゐるのではない。けれど彼等の如く何人の前でも平氣で自分の戀を語り得るものはモダーン・ガールである。また何人の前でも平氣で思ふ事を云ひ、思ふまゝに振舞ふ事の出來るものは、矢張りモダーン・ガールである。彼等は誰の前でも自分の感じを隱さうとはしない。

「ペトローザル」の作者が此の象徴劇を書く時、將來のモダーン・ガールの表現を想像しながら、此の場面を書いたか何うか私は知らない。然し私の知つてゐるモダーン・ガールが傳統も習慣も持たない點に於て、魂の要求するものを其のまま表現する點に於て、此の娘達と似てゐる事はたしかである。

二

S子、私は表現なしに女性の美しさはないと思ふ。美しさのみではなく、人生もまた表現なしには存在しない。

私は日本にゐる時、よく人生は表現だと云つて話した事を

お前はまだ覺えてゐるに違ひない。人は各々異つた天分と才能とを持つてゐる。それを表現する事が人生だ。詩を持つてゐる者は歌へ、野心を持つてゐる者は働け、愛情を持つてゐる者は戀をしろ、力を持つてゐる者は戰へ。そして敎養はよく歌ひ、よく働き、よく愛し、よく戰ふ爲めの方法に過ぎないのだ。

純眞な心から出た表現は、何時でも美しい。それを敎養に依つて磨けば、もつと美しくなる。然し其等には絕對に誤魔化しがあつてはならない。唯自分の持つてゐるものを、如何に正しく如何に自然に表現するかと云ふ事である。意見の相違や、趣味の相違や、それから個性の相違は全然問題にはならないのだ、さうだ。個性がある爲めに獨創があり、それが正しくそして力強く表現される時、初めて個性の尊さが生れて來る。

おづ／＼して歌ふ者の歌は聞きにくいが、歌ひたくて堪まらなくなつて歌ふ者の歌は、たとひそれがまづくても、聞く人の心持をよくする。心の底から出る要求と、自然な表現とを誰が拒み得よう。若し惡魔的な要求を持つてゐる者があつて、俺はさうしなければ生きてゐられないと云ふ時、其處にも少しも誤魔化しがなければ、私達はそれをば認める事か出來る。時としてそれが快感をさへ與へるのは、其の表現が純眞だからである。

此の點に於て獨特な表現を持つてゐるものは、モダーン・ガールである。モダーン・ガールの出現は傳統に二十世紀の驚異である。

前の時代にも、前の前の時代にも「新しい女」はあつた。それ等の「新しい女」は、聰明な點に於て、其の時代より進歩してゐる點に於て、或は奇拔な點に於て、何れも特別な階級に屬する女性であつた。けれど私の茲に云ふモダーン・ガールはそんな特別なものではない。又前の時代には女權擴張論者だの、婦人參政權論者と云ふやうな、其の時代の婦人を導いて行かうとする、優れた階級の婦人もあつた。然し私の茲に云ふモダーン・ガールは、そんな優秀なものではない、何處にでも見出す事の出來る、町をあるいても、家庭へ這入つても、見出す事の出來る、普通の女性である。

彼等は特に優秀でもなければ、特に聰明でもない。唯絕對に自然で、氣取つてゐないばかりである。あらゆる傳統と因襲とから解放されて、自分達の魂が要求するまゝに、生きようとしてゐるばかりである。何處にでも見出す事の出來る、又特に聰明でもない點に於て、モダーン・ガールは如何にもありふれたものゝやうに見えるけれど、然し山からでも來た娘のやうに魂の要求するまゝに生きようとする女性の大群を

然も最も進歩してゐると云はれてゐる、文明的都市の眞中に、曾て誰が見たであらう。それに似てゐるものさへ、今まで誰も知つてはゐなかつた。

以前の時代の娘は、戀をしてゐても、なるべくそれを示さないようにした。けれどモダーン・ガールは、自分の好きな男を見出した時、私はお前を好きだと云ふ事を、ハッキリ相手に告げる機會を、決して逃しはしない。昔のお孃さんは、男のする事を女がするものではないと思つてゐたけれど、モダーン・ガールは何故女が男のする事をしてはならないか、そんな事は初めから考へてはゐない。或は考へて見たかも知れぬが、遂に其の理由を發見する事が出來なかつた、と云ふやうな顔をしてゐる。だから男が煙草を吸へば煙草を吸ふし、男が酒を呑めば酒も呑む。男が運動をすれば、彼等もまた運動をする。突然として、彼等がさうしてゐるのを見れば、古い人達は異樣に思ふかも知れぬ。それは傳統的精神から來る偏見に過ぎぬ。「女なるが故に」と云ふ言葉に傳統的な道德の強みを持つてゐた時代には、其の言葉にも權威があつたけれど、傳統を持たぬモダーン・ガールの爲めに、それは全然無意味である。「女の癖に」と云つて見た處で、「何故？」と反問された時、自信を以て、煙草を吸つたり、酒を呑んだりする事の出來ぬ理由を、明かに說き得るものはもうなくなつて終つた。其處には一つも根據がないのだから。

三

S子、私はモダーン・ガールが酒を呑んだり、煙草を吸ふからと云つて、それをしない者はモダーンでないと云ふのではない。モダーン・ガールだつて酒や煙草を嫌ひなものは、呑みもしなければ吸ひもしない。

モダーン・ガールは好きな事はするけれど、嫌ひな事はしない。それが彼等の特徵である。そして私の云はうとするのも、彼等が如何に自然に、如何に自分の要求するまゝに生活してゐるかと云ふ事である。そして彼等が少しも氣取らずに、自分の心持と感じとを表現してゐる事である。彼等は何時でも本統の自分を見せる。だから私達がモダーン・ガールと相對する時、さぐりを入れて見たりするやうな、卑しい手段を用ふる必要は絕對にないのである。

私が恁う云つたらお前は、それならモダーン・ガールは獸のやうだと云ふかも知れない。さうだ獸のやうな處もある。然しお前はそれを敎養のない下等な女の、ぶしつけな表現と一緒にしてはいけない。モダーン・ガールに傳統的敎養のない點は、それ等の下等な女と似てゐるけれど、彼等には自覺と知識とがある。だから主張すべき事と主張すべからざ

る事とを知つてゐる。從つて自分の個性を尊重すると共に、他の個性をも尊重する。そして無智な女が其の我儘から、野卑を通して自分勝手に振舞ふ時、モダーン・ガールは、其の魂の要求から、理解を通して自分勝手に振舞ふのだ、其處に根本的の區別がある。

たとひその中心が何であらうとも、女性があるがまゝにその正體を示すと云ふ事に對しては、いろ〳〵の議論があるであらう。私はそれに就て、別な機會を利用して論じて見たいと思つてゐるが、兎に角餘りに長いあいだ、殆んど因襲のみに依つて支配されて來た女性が、囚はれてゐた鎖を斷ち切つて、自由になつた事は、何の方面から見ても、大きなエポック・メーキングである。そして自由と獨立とをしつかり摑み先づ人間として歩み出さうとする處に、彼等の新生命がある。たとひ其の過渡期に於て、或る種類の醜さを暴露し、又其處に多少のワイルドネスがあるとしても、私達はそれを許さなければならぬ。彼等は其處から出發するより外に、新しい生活に向つて出發する事が出來ないのだから。

然し、私は今それを云はうとするのではない。彼等が自然にする表現の美しさを云ひたいのである。彼等の美しさは幼稚、その發達した時代にゐるけれど、それを益々美しくするものは、その表現の自然と自由と、それから純眞とである。

モダーン・ガールは自由である。だからその眼は喜びに輝いてゐる。彼等は何物にも拘束されてゐない。だから、のびのびとしてゐる。彼等は何でもする事が出來る。だからその顔は何時でもほゝ笑んでゐる。彼等は遠慮と云ふ事を知らない。だからその動作は飽くまで生き〳〵としてゐる。

彼等は動いてゐる。動いてゐる者は靜かなものより美しい。彼等は笑つてゐる。笑つてゐる者は沈んでゐる者より美しい。彼等は潑剌としてゐる。潑剌としてゐる者はぐづ〳〵してゐる者より美しい。

キビ〳〵として町を行く彼女達の後姿を見ても、喜びに充ちて始終スマイルしてゐるやうな彼女達の顔を見ても、私は本統に美しいと思ふ。昔も特權階級の仲間には、少數の美しい人があつたかも知れない。然し若い女性全體として、こんな生き生きした、動いてゐる美しい顔を見得られるのは、多分私達が初めてゞあらう。

四

S子、お前の顔だつて、目鼻立の揃つてゐる點から云へば美しい顔である。然しそれは人形の美しさだ。お前達の顔の筋肉は、千古傳來固まつてゐる。笑ひたくても、思ふやうに

は笑へないのだ。

お前だつて時に嬉しさうな顔をする。けれど試みに笑つてゐる顔を寫眞に撮つて見るが好い。笑つてゐるのか泣いてゐるのか、よく分らないやうなのが出來上るから。然し前の妖婆の言葉をかりて云へば、それは「お前のとがではない。」のだ。

一體日本人は英國人などに比べれば、もつと感じ易い國民だと私は思ふ。古い文學に現はれたものを見ても、或は「萬葉」などに現はれた戀などを見ても、豐かな情緒を思ふまゝに表現する國民であつた。その時分の私達の先祖は、今の人人よりも自由に笑ひ得る顔の筋肉の所有者であつたに違ひない。然し佛教と儒教の思想が輸入されて以來その消極的道徳が日本人のあらゆる方面を支配して、何事も内輪に、何事も謙遜に、すべてを控へ目にする事が、中世以後に於ける日本人の道徳になつて終つた、賢者は愚かなるが如く見せかけ、富者は貧しきが如く振舞ひ、深く藏する事と、忍從する事とが日本人の美徳となつた。そして生活と云ふものを享樂するのは不道徳であり、濫りに喜怒哀樂を面に表はすものは、下賤の者のみさるわざと思はれた。やがて日本人の顔の筋肉は何時の間にか固くなつて終つた、だからお前達に向つて、俄かに美しい顔をして笑へと云つたつて笑へはしない。嬉しい時はほゝ笑みもするし、可笑しい時は笑ひもするけれど、笑つてゐる自分の顔が美しくないのを知つてゐるから、直に袖を以てその顔を隠さうとする。私がさう云つたら、お前は、きまりが惡いから無意識にさうするのだと云ふかも知れない。笑ふ事が何うしてきまりが惡いのだらう。笑つた時の醜い顔がきまりが惡いのだ。それを意識してゐないならば、無意識に知つてゐるのだと私は思ふ。

お前達の顔は笑へば笑ふほど變な顔になるけれど、歐洲に於けるモダーン・ガールの顔は笑へば笑ふほど美しくなる。之は一體どう云ふ譯だらう。笑ふと云ふ事が嬉しい感じを現はす一つの表情であるならば、笑ふ時にその顔が喜ばしく、美しく見えるのは當然ではないだらうか。それだのにお前達が笑ふ時に醜くなるのは、何處かに缺陷があるに違ひない。さうだ、矢張り顔の筋肉が固まつてゐて、思ふやうに動かないからだ。

お前達はもつと笑はなければならない。そして固くなつた顔の筋肉を、もつとフレキシブルにして、笑ふ時には笑ふべき正しい位置へ持つて行かねばならない。さうすれば笑ふ事に依つてその顔はもつと〱美しくなるのである。端然としてゐる時だけ美しく見えても、その筋肉を動かせば、それを破壞するやうな顔は、もう時代おくれである。

顔ばかりではない。日本の娘には之を概括して肉體それ自身の表現と云ふものがない。それは何千年の間日本服と云ふもので肉體を蔽つてゐて、手や足の表現を要さなかつたから、次第に退化したのである。私はその點に於て裸體論を唱へたい位であるが、それは別な機會にしよう。

五

ふ子、お前達の顔の筋肉が固くなつてゐると同時に、もう一つお前達の爲めに氣の毒に思ふ事は、感情や情愛を現はす万面から見た、日本語の貧弱さである。それはお前達の爲めに氣の毒であると共に、私達男の爲めにも少しは氣の毒である。

例へばお前が親しい友達から、美しいオペラバックを貰つたとする。お前は屹度云ふに違ひない。

「まあ何て綺麗でせう、好い柄だわねえ、有り難う、本統に有り難う。」

それからお前は恁う付け足すかも知れない。

「あなたは本統に親切ねえ、遠慮なく頂くわ、そして大切にしますわ。」

お前はその美しいオペラバックを褒める爲めに、又自分の嬉しい感じを現はす爲めに、言葉さへあればもつと云ひたいのだ。然しお前は英語の beautiful にあてはまる綺麗と云ふ字と、nicer にあてはまる「好い」と云ふ字を使つて終つたら、あとを知らないのだ。lovely と云ふ字も splendid と云ふ字も、又 wonderful と云ふ字も日本語にはないのだから。強ひてさがせば是等の言葉にやゝあてはまる「立派」とか「素敵」とか云ふ字があるけれど、英語の方が其の感じを現はす爲めに、もつと表現的である。勿論漢字の中からさがしてくれば、外にいろ〱な字もあるが、例へば華美だの優雅だの壯麗だの、種々の字はあつても、それをふだんの會話に用ゐる事が出來ないから、結局日本の娘達は、何時でも「まあ好いわねえ」「何て好いでせう」と云ふやうな漠然とした表現をしてゐるばかりである。そんな時こつちの娘はもつとデリケート――之も日本にはない言葉であるが――な意味を持つ處の、異つた澤山の言葉を使ひ分けてゐる。そして言葉だけで足りなければ、其のオペラバックを抱いても見るし、頬ずりもして見る。

そんな形容詞などは何うでも好いとして、愛情を現はす言葉の貧弱なのは、殊に女性の爲めに氣の毒に思はれる。日本では親しいもの或は愛するものに對して呼びかける時、「おい」とか、或は「ねえ」と云ふやうな原始的な間投詞を使ふ。英語ではそんな時 dear と云ひ dearest と云ひ、又は darling

と云ふ。是等の言葉には親しさと表明がハッキリ出てゐる。然し日本語にはそれに似た言葉さへ無い。

英語と云ふものを全く習つた事のない日本人でさへ知つてゐる I love you と云ふ言葉も日本にはない。「私はお前を愛する」と云つても、「俺はお前に惚れてゐるのだ」と云つても、此の言葉の意味は分るけれど、然し日本人がその愛する者に向つて、自分の愛を告げる時、決して此の言葉を使ひはしない。廻り遠く外の方から持つて行く。此意味に於て日本語には I love you と云ふ言葉はないのである。極度に愛情を現はす時、英語には odore と云ふ字がある。それは愛情が尊敬になり、更に崇拝になつてゐる感じを明かに示してゐるが、日本にはそんな字もない。

此んな言葉の例を挙げたら幾らでもある。私は自由に英語を話す事は出來ない。然し私のやうな貧しい英語で話す者でさへ、自分の感情を云ひ現はさうとする時は、日本語よりも英語の方が、却つてハッキリと表現する事が出來る。それは言葉が豊富だからである。日本にゐて日本語ばかり喋言つてゐる時は、別に不自由だとも思はなかつたが、此處へ來て日本語には類のない言葉を使つて見ると、私達の持つてゐるエモーションは、もつと明瞭に表現し得られる。さうすれば私達でさへ、私達固有の言語では表現する事の出來ない感じを沢山持つてゐる事が分る。

勿論、日本語のみにあつて英語にない言葉も沢山ある。然し少くとも、感情や情愛を現はす言葉で、日本語のみが有する言葉は滅多にないけれど、英語のみが有する言葉はかなり多い。之は一體どう云ふ譯だらう。

六

Ｓ子、私は喜怒哀樂を面に表はさないのが、私達の先祖の道徳であつたと云つた。そしてそれ等の感情を面に表はさないと同時に、言葉に現はさないのも、私達の先祖の道徳だつたのである。

だから私達の先祖は、なるべく感情を表現する言葉を使はなかつたのである。殊にお前達の母や祖母や曾祖母は、その夫に向つてさへ、「どつさりキッスをして頂戴」と云ふ代りに「私はあなたのお云付ならばどんな事でも聞きます」と云つてゐた。愛情を表現する言葉は要らなかつたのである。不要な言葉は亡びて行くばかりで發達しはしない。然し言葉は亡びても感情は亡びなかつた。心で感じてもそれを表現しなかつたばかりである。然しその感動が激しくなつて高潮に達する時、何等かの形に依つてそれを表現しずにはゐられない。彼女達が之を表現する唯一の途は、ある時は「うれし泣き」

であり、或る時は「すゝり泣き」であつた。

古い道徳は女性からあらゆる表現の方法を奪ひ、長い長い間徒らに忍従を強ひた。男は更に女性の前に一枚のヴエールをかけて置いて、交際しようとした。そして女性は永久に諒解し難きストレンジ・クリーチュアだと云つた。古い日本の女性が表現のなかつたのは無理がない。その娘達の顔の筋肉が固くなり、その娘達が如何にして自分の感情を表現して好いかを知らぬのも無理がないのである。彼女達はその母からも、その祖母からも、此の方面に於ては一つも遺産と云ふものを承け継いでゐないから。

然しお前達はもう、表現するなと云つても、表現しずにはゐられない。然も新しい社會はそれを求めてゐる。けれど其處には舞踊を踊る時のやうな定つた手と云ふものは一つもない。それはみんなお前達が創造しなければならぬ。

S子、お前はそれをむづかしいと思ふか。私はさうでもあるまいと思つてゐる。モダーン・ガールの表現は獨創的である。誰からも教はりはしなかつた。唯本統の要求を最も自然に表現してゐるばかりである。髪を結ふ事が面倒だと思ふ者はボブドヘアにした。外で働きたいと思ふ者は外で働いてゐる。愛が胸に燃えてゐるものは、私は燃えてゐると云ふ。それで好いのだ。さうすればお前達も、お前達自身の要求が何であるかを明かに知る事が出來る。私達もそれを知る事が出來る。お前達は一度赤裸々になつて。お前達の所有する総てのものを見せるが好い。私達もそれを見たいのだ。

モスコーの藝術座では生徒を養成する時、傳統的の手と云ふものを一つも教へずに、まづ生徒に音樂を聞かせて、その感じを思ふまゝに踊らせて見るのが、その第一歩であつたと云ふ。それこそ自然であり獨創的である。お前達も其處から踊り出せば好いのだ。洗練と教養とはそれからである。

感動すれば肉體はおのづから動く。たゞ日本の女性はそれを動かすまいとして、ぢつとがまんしてゐたのだ。感動が自然に表現されゝば、それ自身が美しい。顔の筋肉も次第にフレキシブルになり、顔全體が表現的になつて來る。それと同時に、思想と感情とが動けば、人は何等かの形式に依つてそれを表現せずにはゐられない。言葉が足りなければ、おのづからそれを表現するにふさはしい言葉が生れて來る。

S子、お前達はもつと顔と言葉とで表現するが好い。さうすればお前達の顔はもつと美しくなり、お前達の言葉はもつと豐富になる。

活動寫眞が藝術的に「向ふ方向に就て」

久世昂太郎

活動寫眞は種々の立場から見ることが出來る。社會研究家はこれを民衆娯樂の立場から見ることが出來るし、敎育家は通俗敎育の一つの方法として見ることが出來る。事實現在に於ては活動寫眞は民衆娯樂の王者であり恐らくは如何なる興行物よりも廣く一般民衆に直接の交渉をもつてゐる。これは世界を通じての現象であり、そのもつとも盛なアメリカのことはしばらく措いて、日本に於いても大都市の常設館の數は數年來驚くべき增加を示し、今や人口一萬の田舍町にもその常設館を見んとするに至つて居る。我々は新聞でしばしば活動寫眞に暗示された犯罪の報導を讀み、一部の人々に活動寫眞は犯罪の醸母として戰慄を與へてゐる事實を知つてゐる。しかしまた活動寫眞によつて善心に立ちかへつたといふ人の話も私は聞いてゐる。何れにしてもその自由な表現と獨自な心理的世界とに於て、その刺戟は强烈で影響するところが深いから、あらゆる方面に、——社會敎育的、犯罪學的、兒童心理的その他——關心を結合することが出來るのであるそれに最近學校敎育、通俗敎授の方面で、科學的知識を活動寫眞にすることが可成に效果を擧げてゐる。進化論的知識、動植物の發生等に關するものを私はかつて見たことがあるがそれは書物や圖解によるより遙かに端的に理解し易いと思つた。先頃の相對性原理に關するものは、ものがものだけにあまりに通俗的にしか解說しはられなかつた様であるが　それでも同じ事實を書物によつてあれだけ說くとしたならば、——そしてそれをあれだけ頭に入れることが出來るためには——尚は一層の時間と勞力を要するであらうと思はれた。ともかく活動寫眞は、小中學校の先生達が興業物としてのそれを生徒に禁じてゐるにも拘はらず、それは尚ほ彼等小中學校生徒の偉大なる娯樂であるばかりでなく、それは一方からは理科敎授の一つの進歩した方法として學校の中へ入らうとしてゐる。つまり活動寫眞と一口に言つてもそれ程多方面で範圍が廣いのである。從つてそれは種々の立場によつて、種々の見方を許し得るのである。

ところで敎養ある人々は活動寫眞といふと一般に輕蔑をもつて見てゐる。それは高々中學の三年生徒位が喜ぶものであり、大人でそれを見るものは無敎養であるか低劣な趣味をもつてゐるか何れかであるとしてゐる。しかもそれは十年前の活動寫眞をもつて現在のそれをはかるものである。否五年前の活動寫眞をもつて現在のそれをはかるものである。勿論今だつて下らないものが九分を、九分九厘を占めてゐるのは事實である。しかし殘りの一分若しくは一厘のために私は活動寫眞の援を濺ぎたい。小說といつたつて讀まなかつた方が好かつたと思はれるものが大半を占

め、演劇といつたつて低級なものが過半なのに、たまたま活動寫眞につまらないものが多いといつて、その全體を貶し去るのはやゝ酷であらう。私はむしろ小數の秀れたものに於て、同情と希望とをもつてそれを見るのである。

この新來の民衆娯樂、成上りの藝術ともいはれないかも知れない藝術を、立派な一つの領域を有する藝術であるとして、その心理並びにそれに基づいた美的考察によつて、兎も角理論化したのが一人の哲學者にして心理學者であるのは興味ある事實である。ドイツ人でハーバートに長く教授をしてゐたフーゴー・ミュンスターベルヒ(二三年前死んだが價値の哲學や實驗心理學で有名だつた)がそれである。彼の著フオトプレイ(一九一六)は第一部が活動寫眞の心理學を第二部がその美學を取扱つてゐる。

それで今私は種々の立場から見ることの出來るこの活動寫眞を、それが藝術的に向ふ方向に於て見たいのである。活動寫眞を藝術としては多くの人が否定してゐるが、そしてそれが藝術に價するかどうかは實際一つの疑問であるが、その問題はしばらく措いて、今はそれが藝術的に向つた方向——つまりそれが教育資料を目差しても居らず、また所謂民衆の娯樂の爲につくられた淺薄な活劇やくすぐりの喜劇にもならない方面、ある人達が藝術映畫と稱してゐるもの——について考察したいのである。その方面に於て可成多くの人に誤解せられてゐる事實、映畫を寫眞にせられた演劇と思つてゐることの間違ひなのを示したいのである。私はかつてアメリカで著名な女優エルシー・ファーガスンがイブセンの『人形の家』を殆んど芝居通りに映畫したのを見たが、役者が皆かなりうまいにもかゝはらず、映畫としては實につまらなかつた。その時つくづく思つたことである。舞臺と映畫面とは全然異つたものである。そしてまた異なつたものでなければならないと。

ミュンスターベルヒは活動寫眞を心理的に基礎づけ、あのそれ自身としては支離滅裂な映畫面のあつまりが、人間心理の世界に於て、その注意作用、記憶、想像、觀念聯合、情緒移入等によつて、如何に意味ありまとまりあるものになるかそしてそれが如何に生々した一つの獨自な世界を示すかを說いてゐるつまり活動寫眞は心理的投寫の藝術であつて、この心理的基礎なくしては活動寫眞の藝術的方向は拒まれるのである。各々の藝術はそれぞれの仕方に於て自然若しくは現實をはなれて、一つの獨自な境地をつくるのであるが——それ故一面からすれば現實をはなれる程、より藝術的であるといへる——映畫は實に心理的投寫によつて、獨特の藝術化を行ふものであり、その心理的投寫の心理を最も巧にとらへたものが映畫に於てより藝術的になり得るのである。勿論同じく心理と言つても人間の多面複雜な心理に於ては、主として低級感情にのみ訴へるものも出てくるわけであり、——活劇やくすぐり喜劇などはこゝを覘つたものである——斯ういふものは決して藝術的とはいへないが、同一事實の表現に於て、人間の心理の洞察の深淺巧拙によつて、映畫はその效果を全く左右せられるのである。この點も映畫がそれ自身の獨立性を有することの少い證據になり、觀者その他外部的條件に拘束せらるゝことの多いわけになつて、映畫を藝術として否定する人々がその理由とするところの一つとなるのであるが、それは在來の藝術に對する見方に偏するものであつて、新らしい藝術の新らしい境地と立

場と同情しないものであるとミュンスターベルヒは言つてゐる。

兎もあれ、活動寫眞が心理的投寫によつてその世界を支持してゐることは事實である。で映畫のすべての考察は、その美的考察も、この事實の上に基くべきである。ではそれは舞臺劇と如何なる點に於て相違してゐるか。

一、第一に舞臺劇は物理的現實にあるものである。生きた人間が所作をして聲を出す。しかるに映畫の世界はスクリーンである。幕の上に走り、泣き、笑ひ、決鬪し、人殺しする人物も、心理的投寫なくしては意味なきものである。それは全然心理的世界である。

二、それが心理的世界であるから、物理的現實の制限をうけることは少い、卽ち時間や因果律などを超越することが出來る。同時にそれぞれの場所で起つた事件をそれぞれにうつして、それを一つの事柄に結びつけたり、現在の中へ突然過去の追憶が夫々の場面としてうつし出されたり、また未來の空想がひろがつたりすることは映畫に於ては普通の技巧である。しかし演劇に於てはこの樣な自由は得られない。古風な三一致、卽ち、筋が一貫してゐること、時や場所がかけ離れていないことは近代の演劇に於て殆ど無視されてゐるが、それにしても舞臺の樣場面に物理的制限があるから到底映畫の樣に自由には行かない。

三、映畫に於ては場面の急速な轉換が演劇に於ける言葉の代用をする場合が多い。祖父が孫に自分の若い頃のことを話す、その思出話すかはりに幾つもの場面でそれを見せるのである。從つて表現は一層自由になる大寫しの場合などに於ては全注意をある一人の顏、その特殊の表情に集中せしめることが出來るのなども、映畫獨特の效果ある仕方である。

四、しかしながらそれにもかゝはらず言葉がないといふことは——後に述べる樣に辯士なるものは活動寫眞の藝術的に向ふ方向に於ては邪魔物である、その他字幕も映畫の純粹を保つためには最小限度にすべきであるから——たしかに活動寫眞の表現を稍ともすると型にはめる。といつてキネトフォンの如き發聲はやはり後に說く映畫の獨自性と純粹性とを破るものであるから嫌忌すべきである。で、結局活動寫眞は活動寫眞としての境地を守つてゐるのがよいのであつて、この言葉のないといふ點に於てはたしかに演劇に及ばないとあきらめるのである。第一それによつて性格の發展といふことが表はし難いし、行爲のみによつては心理の微妙な變化があらはし難いから、性格は一段に類型的になる。從つてまた演劇に於ける性格の深い葛藤の表現は映畫に於ては望まれ難く、たゞ行爲の統一若しくは行爲とプトットの一致統一によつてのみ、表現のまとまりと調和を得なければならない。この點に於て仕草や表情は近代の劇より一層誇張される。

五、映畫に於ける興味の分割と演劇に於ける興味の集中とは面白い對立をなしてゐる。つまりこれも映畫が場面の數多い變化に自由なところから生ずるのであるが、たとへば一つの事件(場面、行爲)がまだ結果を得ないうちにまた外の一つが始つてゐるといふ樣なことは普通の技巧である。(たとへば一人の男が一軒の家に盜みに入るといふ一つの事實を取扱ふに、始め見すぼらしい風をした男が腕組みをして物思ひにふけりながら出てくる、その場面のだんだんうすくぼやけて行くにつれて、病の床にある一人の女と泣いてゐる子供とがうつされる、その男の頭の中にあることが一つの場面となつて出て來たのである、と今度はいよいよ決心した樣に男が闇の中に消える。次には闇の中に一軒の宏壯な家が見える、そこへ

黒い影がやつてくる、一つの窓の中へそれが入らうとする。すると次にはその宏壯な家の一つの室がうつされる、そこに一人の若い妻が夫の遅い歸りを待つて編物をしてゐる、そこにまた追憶の場面がひらける、すると今度は暗い階下の燈火にさつきの男の顔がうつされる、男は最初の悪事の恐怖と恥と良心の苦痛とで歪んだ、緊張した表情をその燈火によつて見せる——そんな風にして時間の順序は無視され、一つの行爲はその半ばでうらぎられ、全く緣なく見える事柄がその半ばに飛出してくる。しかも之等がだんだん一つに織合はされて行くのである。つまり興味と關心とが非常に細かく分割されてゐる。

六、この點に於て映畫は演劇より遙かに多くの背景を必要とする。自然的社會的背景若しくは環境の適宜な按配なくしては映畫は不可解に終るか味のないものになつて了ふ。古風の三一致の方則に於ては劇に一貫した本筋のみを要求して副筋を許さなかつたに見ても、たとへ近代に於てそれは無視され、ゴルキーの『どん底』の如き筋のないものが見事な效果を收め得たとしても、結局一貫した筋の發展と興味の集中とは演劇の本質的なものである。その點に於て映畫の自然的社會的背景を多く必要とすることは、むしろ敍述的小說に近い。私はアメリカの映畫の潑剌たるところのあるのはそれが新らしい社會的環境を自由に映畫の中へとり入れるところにあり、それに反してイタリア映畫が藝術的匂ひを多分に持ちながら生々したところのないのはこの背景の取入れ方が拙いのだと思ふ。また劇を——それが劇としては非常に秀れたものである場合にも——映畫化したものがしばしば成效せず、小說を映畫化したものがより多く成效してゐるのを見てもこの間の消息を知ることが出來るであらう。勿論それには脚色者や監督の腕前によることではあるが。

以上で演劇と映畫との對照は略々明かになつたと思ふが、それであるからといつて、劇若くは劇的が活動寫眞に無關係なものだといふのでは勿論ない。それどころか劇的であることは映畫を藝術的にするもつとも重大な要素の一つである。たゞ多くの人が誤解してゐる樣に、映畫は寫眞にせられた劇ではないといふ迄である。ミュンスターベルヒは映畫の三つの要素を數へてゐる、曰く繪畫、曰く劇曰く光りの音樂。

活動寫眞の本質的要素は一々場面が繪畫的であることである。したがつて繪畫としての純粹性を傷けるものはことごとく拒否されるべきである。中の人物が聲を出す必要はない、物音もいけない、梯子段から落ちたり雨が降つたりする音は繪畫には不必要である。辯士のしやべるのは映畫の獨自の心理的內部世界へ現實をそのまゝに這入り込ませることに至つて邪魔になること夥しい。字幕も出來るだけ少なくすべきである。色彩もそれが繪畫的效果を出し得る限り排斥せらる(安つぽい色版りより色のない方がいゝ場合は普通の繪畫についてもざらにあることである)それらは畫、一つの藝術が己れの境地以外を要求することであり、大理石像に油繪具を塗らんとすると一轍である。映畫の基本をなすものはどこ迄も繪畫的性質である。しかしそれだけでは寫眞とかはりがない。それが一貫した意味をもつために劇がある。ともかくもその劇的な筋の運びが如何に舞臺劇と異つた仕方に於て發展せられなければならなくても、劇的な筋は必要である。それのないものはムービング・ピクチャアではあつてもフオトプレイではない。從つてそれは當面の藝術的考察の對象とはなり得ない。さて第三に光りの音樂とは何であるか。活動寫眞は今迄幾度も言つた樣に元

來心理的描寫の藝術であるから、それの獨自性は人間の心理に依存し、注意、記憶、想像觀念聯合等が重大なものになるのであるが、最後にこれらを統一して一つのまとまつたものとするに最も與つて力あるものは情である。そしてその情緒を助けるために實際音樂を——最も望ましいのは特にある特定の映畫のためにつくられた如き音樂、でなければ情緒氣分に於て相似たるもの——伴ふのは必要なことであるが、あのめまぐるしい明暗の交錯、非現實的な光線が、映畫の獨自の世界へ人間の心理をひき込んで行くことも見逃せない事實である。活動寫眞に於て光線の問題が重要になるのはここにである。それは情緒と全體の統一とに非常な意味をもつて來る。

ミュンスターベルヒの數へたこの三つはたしかに映畫の主要要素である　場面々々に繪畫的の美しさがなかつたら第一見てゐられない。場面々々に繪畫的の美しさがあるものは全體の筋がつまらなくても兎も角も見てゐられる。モーリス・トウールヌールの監督したものの魅力はこゝにある。一　無字幕映畫として問題になつたチャールス・レイのオールド・スウイミン・ホール（懷しの泉と譯されてゐたもの）はこの繪畫的抒情的方面に於て可成の成效をしたものである。これは詩などれだけ映畫化し得るかの問題に一つの解答を與へたものであり、そして映畫が特に劇的でなくても充分魅力と效果を得ることを證明したものである。實際映畫に於て小說的乃至物語的要素は取扱方によつて充分所謂劇的なものゝ代用をする。しかしこの自然的並びに社會的背景に於て小說的要素をうまく用ふることは、作者の地位が未だ定まつてゐない今日の映畫界に於てはむしろ主として監督の腕前によるものであり、從つて監督は實に總ゆる點に於て映畫に最も重大なるものとなるのである。この點ミュンスターベルヒが映畫の創作に與る人を映畫作者と演出者にしたのはこの特殊な藝術に於て重大なるものを見逃してゐるといふべきである。近代演劇の著しい特色の一つは舞臺監督の重要になつた點であるが、これを映畫劇に比すればその重要さは比すべきものにならないのである。

今一度以上の大體をまとめていへば、映畫劇は外部世界の諸形式、空間、時間、因果律を超越した獨自の仕方によつて卽ち內部世界の諸形式、注意や記憶や想像や情緒やによつて出來事を調整して我々に示すものである。したがつてその心理的事實の上に成立つてゐる點に、劇場の演劇とのあらゆる相違が生れて來る。そして演劇に於ける效果は必ずしも映畫に於ける效果にならず映畫に於ける技巧は演劇の技巧とその種類を異にしてくる。映畫の基本は繪畫であり、映畫の內容である劇的發展も行動も一つの場面に於てはその繪畫的表現と完全な調和を示さなければならない。從つて演劇的としては要求せられる如きことも繪畫的としての純粹を保つために拒否される、たとへば言葉の如きである。

私は今數ヶ月前に見たセシル・ド・ミーユの『愚か者の樂園』といふ映畫を思出してゐる。その主人公が病める眼を夜掛花火のために盲目にするくだりに於て、その眼がだんだん見えなくなるのを、主人公が一生懸命に見てゐる舞臺の漸次に朦朧としてゆく數回の映寫面によつてあらはしてゐるのを興深く見たが、これらは實に活動寫眞獨特の自由な境地であつて觀衆の眼を主人公の眼にまでして、その事實の感動を深くしようとしたものである。觀者をしてあらゆる立場からその事件を見させることに於て、自由な興味の分割に於て、場面の急速な轉換に於て、自然と人事の背景を豐富に取入れることに於て、映畫劇は演劇よりむしろ小說に近いと共に實にその何れでもない獨自なものである。

江戸心中異聞

佐々木味津三

第一話

正保年間のことである。

江戸吉原角町並木屋源左衛門が局女郎に佐香穗と言ふ女があつた。尾州者の小娘で、十四の年に廓へ沈んで十八の三月突き出し女郎で佐香穗の名を繼いだが、器量の割に出世がおそかつた。

遊女で十八と言へば、番茶のお出花以上に、色々と又實意のある年頃であるから、客の數から言つたならば、年嵩でこなすお情太夫のぺいぺいなぞには、遙かにぬきん出るものがあつた。

それでゐ乍らいまだに局女郎の圏内をうろついてゐると言ふのは、評判以上に薄情だからであつた。尾州女の薄情は古來それが通り相場で、かてて加へて彼女には客を客と思はぬ樣々な人を喰つた振舞があつた。

ろくろく首のまねをして夜中客に氣がつくやうに油を甜めるいたづらをするかと思ふと、眠つてゐるお客仁の鼻さきをいきなり濡手拭でなすつたり、寧ろそれらは尋常茶飯のことであつた。

初見世を當て込んで勇敢にうつつをぬかさうと心掛た客仁でも、二度三度と重るとたいていはいたちの道を極め勝ちだつたのである。

その缺點に自身氣がついたのは、おほ方廓の水に馴染切つた彼女が十九の年の秋であつた。その頃とみに客の數が減つて今ではどんなに、腕によりをかけようと焦つても、徒らに惡名をとつた後のことだつたので、流石に佐香穗もそぞろに秋を身に知つたと言ふかたちであつた。

それはまだ對他的の問題であるから、自身の心掛け次第に依つて又さかんなる春に遭はないとも限らなかつたが、それ以上の眞劍な事實として、ふんだんに彼女を惱ます一つの古瑾があつた。

名實共に實際の古瑾で、女にはいのちより大切な髮の毛に

少しく足りない箇所があつたのである。右の小びんの一寸うへで、大よそ一錢銅貨大のはげがその古瑾であつた。

七つの時に、過つて母親がお座敷の火桶をひつくりかへして、そのとばつちりで燒いた終生の瑾であつた。三十二相裏表完全なものが美人の條件とするならば、斯く共彼女のその古瑾は特筆大書すべき缺點に違ひなかつた。たくみに入れ毛の技術を以而うまくかくしてはゐたもの丶たへず彼女にはそれが氣になつた。

殊にこの頃のやうな秋風落魄としたうら枯れた、狀態に立ち及んでは、氣のせい故か、その古瑾迄も世間に知れでもしたかのごとく灼きがまはつて、身に沁む程に氣になつてならなかつた。實際又彼女にそれをさう考へさせる程、彼女の客足は斷たれた。名ざし客は勿論のこと、殆んど只一人のうかれめさへない晩が大よそ五晩ほども續いた位であつた。

しかし中秋名月の宵である。

珍らしくその晩に限つて、特に彼女を名ざして登樓したお客仁があつた。西國方のさる御大名の御家中と言ふ觸れこみで、しかしお客は只一人であつた。

戌の刻頃からちやんと端座したまゝで、何故かお客仁は一言も口を切らなかつた。酒は勿論に筋一つ動かさならで、終始靑ざめてなにか浮かぬけな顏つきであつた。

あらぬ惡名に發憤したこの佐香穗であつたので、いつになく彼女も神妙に座に待つたまゝで、平素のやうな茶氣漫は一つもなかつた。

一つは容子が全體として氣味わるいかけんもあつたが、流石の佐香穗もなんとなく息詰るやうな壓迫をかんじて、茶氣漫どころの餘裕がなかつた。

果して亥の刻限半時ほど下つた時分である。唇を痙攣させて、眼をひき吊り乍ら、

「おことに折入つてお願ひがムるが、心よく聞いてたもるか？」

吃り吃りそのお客仁が初めて彼女に口を切つた。全體の容子からなんとなく彼女も一種變な氣味わるさを直覺したが、しかし又その只ならなさそうな勢ひに壓せられて、つひに彼女も、

「はい！」

と答へざるをえなかつた。

「なにより重疊でムる。」

言ひかけたがしかしお客仁は又口ごもつた。釣り込まれるやうに彼女も口ごもつてゐると、殆んどそのとたん、

「おことのいのちをくれえい！」

叫び乍らお客仁がいきなり彼女の、のど輪を押へたのであ

はツとし乍ら一應身體を横にそらしたが、つひに彼女は完全にお客仁の片手の下に押さへられた。

秋風落魄、ものの哀れも相當身にこたへてゐる時であるから、思ひ切つて死んでもよささうな所迄ではあつたが、しかし彼女にはまだ漠たる未練があつた。大切に使へばあと四五十年は充分費へさうないのちに思つてならなかつた。

男の力で完全にのど輪を押さへられ乍らも、しかし彼女は身を以而拂ひのけようと焦つた。

「いのちを呉れえい！　みどもに呉れえい！」

吃り吃り叫び乍ら、決してお客仁はその力をゆるめなかつた。

つひに彼女は窮策を案じて、理由によつてはさしあげやうと言ふ逃げ口上のもとに、辛じてその力から逃がれた。聞いてみるとその理由は至極尋常茶飯なものであつた。

藩主がつい先達而急死したので、お近侍頭と言ふその位置から、當然殉死しなければならなかつたものを、つい時を失して死におくれたために、今になつて家中一統からの、爪彈じきうしろ指に堪らえかねて、どうでも死なねば顏の立たぬと言ふだけのことに他ならなかつた。

聞いてる乍らしかも彼女は、よく田舍侍にあるやつだと言ふ風な考へを以而先づ心に嘲つた。大方金でも費ひ過ぎてどうでも死なねば身が立たない所を、侍氣質の匿名にかくれて、つじつまの合はない小刀細工を一寸借用した迄と言ふ風に考へたのである。

あり樣次第は斯くの通りと言ふ考へはまとまると、こんな御し易い田舍侍がと言ふやうな大膽さを以而、彼女はすぐと例の手で先づ對手を呑んでかゝつた、あまつさへ滿身に媚をふくんで、平然とお先にぬしが死なまんしと、言ふ言を吐いた。

その一言に佐香穗一流の人を喰つた茶氣漫があらうとは夢にも知らずに、果してお客仁はもろ肌をぬぐと、かくし携へた腰の物でいきなり、自身の脇腹に突ッ立てたのであつた。

半ば座興に、半ばは手管と心得乍ら、流石に彼女もおのれが座興の一言はつひに人一人のいのちをあやめたと感づくと、正氣を失はんばかりにうろたへ上つた。しかし最初から死ぬ氣でなかつた彼女にとつて、勿論心中など思ひも寄らぬことであつた。

うろたへ乍ら前後の始末を考へてゐたが、突嗟の間に又一策を案ずるといきなり、彼女は客仁の手から血に染んだ腰の物をうけ取るや否や先づきつさきでのどを突くと刄を逆手にとつて返へして、右の小びんの、禿げた古瑾を、心持大きく傷つけたのであつた。

とたんにわざと大聲で、

「あッ！」

と叫び乍らたへ入るやうに打つぶした。上を下へ廓全體が騷ぎを大きくしたことは、勿論のことで、角町並木屋佐香穗太夫の相對死といふ評判は卽夜讀賣りになつて大江戸八百八街にひゞき渡つた。

一局女郎なる佐香穗が、一躍太夫に昇進させられて名を賣つたと同樣に、その評判が出たらめであることは言ふ迄もなかつた。

のどを突いたとは言ふものゝ、彼女は最初から例の一流な筆法を以而、あまり澤山血の出ないやうに、たとへ血は澤山出やう共、いゝいのちに別條ないやうに、承知の上で一寸芝居氣をふら舞つたに過ぎなかつた。

あはよくばと言ふ考へで、右の小びんの禿げた古瑾を、甘く刀瑾でごまかさんために、逆手に刄をかすらしたに過ぎなかつた。又あはよくばと言ふ考へで、廓一流の評判を賣らんための茶氣漫なるお芝居に過ぎなかつた。

果して彼女のおもはくは、二冊三文の讀賣り迄、その名をうたはしめた。果して彼女の塞の目は、八百八街大江戸のいか物喰ひを唸らした。實績とみに上つて、並木屋佐香穗は一稀代盗に近い醜名をほしいまゝにしたのである。彼女もそれが又天下御免の賣り物にして、心中女郎の一枚看板を得々と人前にかゝげた。

往昔鏡に向つて、ひそかに親の過失を身にかこちつづけた右小びんの禿た古瑾さへ、今は立派に心中瑾として通つた。誰れにかくすべき苦心も遠慮も今は昔のそらごとで、わざと彼女は右小びんの刀瑾を目につくやうにさへ髮を上げた。

いかもの喰ひにはまるで眼のない大江戸の結構なお客仁達は、又やんやとかつさいを拍し乍ら、その禿げちよろなる古瑾さへ、遊君にはなくてかなはぬ實意を示してゐるものと言ふ感ずべき評判さへはやしたてた。

――同じ西國方のさる御大名なる同藩家中の者によつて、つひに並木屋佐香穗がその人を喰つた僞りの面皮をこつぴどく剝がれたのは、その翌年霜月のことである。例の手で一流な茶氣漫から、田舎侍の一人や二人あやめる位はなんでもないと放言した言葉尻りを手ひどく詰られて、つひに一切を打ち明けたからであつた。

一たびそれと馬脚を現すや否や、八百八街凡てを擧げて、佐香穗ひとりを非難する點に於て又、向ッ氣なる大江戸のかれめたちは、誰も彼も決して人後におちなかつた。

一人どころか半分も對手にする者がないためにつひに佐香穗が髮を切つて、暗夜ひそかに吉原脫出を敢て餘儀なくさせ

られたのは、その一月とたたない間もなくである。
　のち、長谷川町本立寺で型通り完全に剃髪、比久尼の群に投じたと言ふ噂さは傳つたが、元々遊君佐香穂のことだから尼達の間に交つてゐても、男故の心中立てに髪を切つた位の一流な出たらめをつくろつたかも知れなかつた。
　又對手が尼ゝことだから男故の心中立てと言ふ咄しだけで自身身につまされでもしたかのごとく、ぞくぞくと背筋をむづがゆらせて、本氣で問にうけたかも知れなかつた。

第二話

　飛んで四十年、世は貞享の頃である。
　將軍綱吉、生類御憐みの令を敷き、犬公方樣の令名愈々繁昌、神州四民の生命、輕んぜられること此時より甚だしきはなく、野犬の價隆々萬物の靈長を凌駕せんとして、天下擧けて暴令に惱やまされる頃のことである。
　麴町富士見高臺に旗本八百石小室なにがしと言ふ者があつた。性來剛情我慢三河流の頑固一徹で、時勢に降らず權門に阿ねらず、飽く迄門戸閉鎖主義で、一種奇怪な義憤兒であつた。
　渠に一人幼なくして母を失つた娘があつた、芳紀二十歳、眉目殊の他の秀麗で、立居振舞に又一點の打つべき非難なく本名おみねと言ふれつきとした呼名があるに拘はらず、しかも人呼んで室咲きの山吹と言ふ仇名があつたのである。
　依而來るゆゑんは彼女が男ぎらひの臆説から發したもので、小室の家の實を結ばぬ娘から一轉して、小室の室を利かした室咲の山吹と言ふ語呂合せのやうな仇名が産れたに過ぎなかつた。
　彼女が男ぎらひと言ふ臆説は元々本人のおみねには無關係なことで、そのあり樣實際は、正直言ふと父君小室なにがしが自ら例の一徹心で、勝手に娘を男ぎらひに吹聽したやうなものであつた。
　當世輕薄才子ななまくら武士に、わしの娘はやられないと言ふのがつまり渠の主張する理由で、理由は理由で至極尤も千萬であるが、渠のいはゆる當世流な若侍が、果して輕薄才子のなまくら武士か或は鈍重非才子な、頑固體がそこに、眞際の見識も了解も一つとして出來てゐるのではなかつた。
　只徒らにおのれのやうな時流に媚びない頑固一徹の、一種奇怪な義憤兒のみがまことの武士といふ一本氣を抱いてゐたのである。
　當時柳澤吉保式な時勢に於ては、若侍と言へば舞の一手か能樂の心得あるを以而天下に屑しとする時勢風潮にあつては渠のごとき三河流な野武士に悉くが義憤の種になるのは當

り前な咄しで、從づて又若侍と言へば十把ひとからげて一切合財渠に向つてなまくら武士に映じたのも至極尤もなことに違ひなかつた。

しかし莫迦を見たのは渠の娘のみね女で、又大いに莫迦を見たのはみね女に緣談を申し込んで頭から輕薄才子な當世流のなまくら武士と一蹴された多くの奇骨ある眞個の若侍達である。

眉目秀麗百人に擢んずる程のまな娘であつたので、その緣談も降るやうで、已に十六歳にして七人の要求を受けたと言ふ位前途有望な歴史があつたに拘らず、十八十九はたちに及んでいまだに一人の戀侍さへなかつた。

百夜はおろか、ちよろづ迄も通ひ詰めようと言ふ程に感ずべき潛熱を内に抱いた一種奇骨ある眞個の若侍もおそらくは十指に餘つたであらうに、しかも一人としてなまくら武士以上の厚遇をうけた者はなかつた。

父親の嚴命とは言へ、しかし彼女とて年頃ざかりなはたちの處女である。内心寂寥に堪らへかねて暗夜ひそかに身をよぢり乍ら低聲嗚咽することも幾夜かあつたに違ひなかつた。

その頃小室家に於て、端しなくも一人の仲間小者を必要としたことがあつた。手蔓をたぐつて八方可然若者を探したうちで、淺草馬道新右衞門がうちの若い者と言ふ觸込みで、一見甚だ脆弱さうな、二十四五の若者がやつと一人お目見榮に上つたことがあつた。男と言へば筋骨飽く迄逞しくして、眼光炯々平生にして已に怒髮冠りを衝くの概あり、怒り肩に武骨なかいな、と言つたあんばいのいかにも男らしさうな人間に限つて、よろづ男子の待遇を與へうべきものと思ひ込んでゐる渠小室なにがしの、見識に從へば、目見榮の若者は一見いかにも貧弱、めめしさに餘る箇所があつたので、最初暫くは決して首をたてに振らなかつたが、一日二日使つてゐるうちに、不思議なことからいたくその若者が氣に入り出したのである。

お目見榮翌々日のことで、當家のあるじ渠小室なにがしがつれづれの餘り、最近に上州から取り寄せた四匹の金魚を泉水から水盤に掬ひ移して、緣先でひとりぼつねんと眺めてゐると、どうしたはずみか中の一匹が何かの拍子にひよいと緣側へはね出した。

とたんにどこからか隙をねらつてゐたものと見えて、飼猫のみけが、いきなり身を躍らして間一髮を許さない間にはね出た金魚をがぶりとやるや否や、横ッ啣へで庭の木立へ逃げ込んだのであつた。

と思つた次の瞬間ヤッと！言ふ氣合もろ共、電光石火で飼猫のみけがその場にころりと倒れたのである。最前から木

立の向ふで四ッ目垣の手入をしてゐたお目見榮の若者が、猫が金魚を奪つて逃げ出したと知るや否や、その場にあり合せた四ッ目垣の竹切れで以つて、習ひおさめた手裏劍の一手に及んだからであつた。

見かけによらぬ由緒ありげなその手の內にすつかり惚れ込んで、その場に渠が若者の採用を決定したのである。

由緒ありげな手の內と言ふも元より當然なことで、仲間小者のその若者は、實の所松平備前少將御家中なる千五百石取りなにがしかのれつきとした、嫡男が、天機洩らすべからざる大望のために自ら身を下民にやつしたものであつた。

洩らすべからざる大望と言ふのは、室咲の山吹なる娘みね女にあつたのである。長い年月をかゝつてならぬ辛抱も重ね積んで、いつかはみね女を完全にわたくししようと言ふ大望があつたからであつた。

しかしあるじの小室なにがしに向つては、その大望を出たらめな親の讐と言ふ風にうまく吹つかけておいたのであつた。親の讐の一言で、小室なにがしが手を打つてその心根を賞歎したのは勿論のこと、敵は本能寺にあらうことなぞ夢にさへ考へなかつた。

流石に娘のみね女にとつては、若者の本心が奈邊にあるか親の讐はいづこにあるか。薄々乍らも見當ついた。どこにどう言ふ素振りが明瞭に現されたと言ふのでもないのに、その若者の本心を直ちに私ゆゑと言ふ風に見破つた眼力は、その神韻微妙なる眼力は、蓋し天下の處女のみに限つて、許されたる特權に違ひなかつた。

斯く共、男心になづまない、風にもあけず、雲にもめげず只ひたすらに春を待ち待つ乙女心にとつては、若者の本心を私ゆゑと言ふ風に考へたかつた、想ひたかつた。

無理にも想ひ考へることによつて、處女のみに許されたる慰めと滿足を持ちたかつたのである。

若い同志のその神韻微妙なるまなざしでひめやかなる心根が、いつかはぴつたり合はないでゐる筈はなかつた。

とは言へしかし、流石は天下のお直參旗本のまな娘であつた。若者戀しさに珠玉の肌を暗夜ひそかによぢらして堪へ入るごとき術なさを想ふ幾夜は續いても、眼づまを忍んで迄そのあやかなる心根を打ちあける勇氣がなかつた、打ち明けかねる傳統のたしなみがあつた。

若者とても同樣であつた、戀ゆゑには棄て身になつてお歷歷嫡男の格式と位置とをかなぐりすてる迄の思ひ餘つた潛熱はあつても、虎穴に入つて猶は目前の虎兒を完全に手中するだけの勇敢さがなかつた。

その年暮れて、翌正月のある日である。

何んのはずみか、生後三月位の子犬が一匹小室家の門外で端しなくも横死をとげたことがあつた。御法通りの御定目に從へば、犬に變事のあつた場合、かゝり合つた、家敷うちのあるじは、その趣を逐一のこらず御番所に訴へ出て、何分の御沙汰を仰ぐべきの所を、しかし、小室なにがしなる渠に限つて、性來一途なる例の義憤ゆゑに、無斷若者に命じて子犬のむくろを、不淨門そとの溝溜に打ち棄てさせた。

公威を瞳つくること甚だしき故を以而、不合理極まるお咎めを蒙り、渠小室なにがしが、旗本本役を剝奪されて、甲府勤番小普請入りを命ぜられたのはその翌々日のことである。ていのよい蟄居閉門の小普請入りに、頑固一徹なる渠小室なにがしが、おめおめと服する筈がなかつた。

渠にとつては、その誤られたる、生類お憐みの威令そのものが已に眼の上の瘤であつた、親の讐以上であつた。凡ての義憤のみなもとであつた。出來ない迄も、その義憤故に三河流の意地と無鐵砲で遮二無三反抗して見たかつた。罷り間違へば割腹と言ふ一徹なる覺悟を以而つひに、渠は頑として、その甲府勤番を斥けたのである。所定の七日をとうに過ぎても悠々渠は家をたゝまなかつた。

しかのみならずその旬日が閲みして、ある日一匹の犬がその門前を徘徊してゐたのを發見するや否や、渠は直ちに同じ若者に命じて理由なく一擊のもとに刺しころさした。

公儀お咎めの爆發は豫想通りで、つひに渠小室なにがしは即日閉門翌々日の朝御法通りの死を賜つたのである。直接下手人と言ふ理由を以而、件の若者が傳馬町上り屋入りに處せられたのはその同じ日であつた。

若者の入牢を知るや否や、一意心に思ひあまつた小室みね女は、その夜同じく自刃して相果てた。珠玉のごとく純眞限りない全無垢なるみね女の肌は、つひに一度さへ春に遇はずに、空しく散つてしまつたのである。

その二十日過ぎ小石川常念寺の小室菩提所の墓表の前で、腹一文字にかッさばいて相果てた一人の二十四、五なる若侍があつた。

死してのみ猶ほ握りつめたる、腰の物の金具に、刻みつけられたかたばみくづしの紋所から　その若侍が松平備前少將御家中のみよりなることは、すぐと知れ渡つた。先の小室家仲間なる若者であつたことは言ふ迄もなかつたのである

一端は上り屋入りの處刑は受けたもの、松平備前が將軍家御連枝の見識を以而、旬日にして彼は、特別なるお慈悲を蒙り當分江戸お構ひの名のもとにとにかく處刑だけは免がれた。

とは言へしかし、その彼にして尙一命を輕んずること君主

の馬前以上なる思ひ詰めた振舞のあつた所から察するとなまなか特別のお慈悲など蒙むるよりは、ことの序でにすぱりとやられた方が寧ろせいせいしてゐたに違ひないのである。

第三話

その同じ頃神田お玉ヶ池のほとりに、錺屋仙吉と言ふ一家があつた。生えぬきの江戸ッ兒で、金銀象眼の錺りにかけては、殆んどそのわざ、名人の域に近い位な腕前かあつたに拘らず、性來の變屈故に常住不斷、貧に迫られ勝ちであつた。型通り氣に入らないと斷じて仕事にかゝらないたちて、よし！と決心がつく迄は、てこでこぢてもうんと返事はしない男であつた。

前年加州侯前田百萬石が天下諸侯頭の威權を以而、もののためしにと言ふ口上を述べ乍ら彼仙吉に腰のものの錺り方を命じたところもののためしにと言つたその口上が氣に入らぬと言ふ所から、天下の加賀が百金を積んで賴み奉つても、つひに彼は頑として最後迄つむぢを解かなかつたことさへあつたのである。

こと程左樣に彼のつむぢ曲りは、町内名うてで、それでゐてしかし、二人の子供には驚く程甘かつた。

姉は今年十三歳で、妹はちやうどの十歳であつた。二人共瓜二つの器量よしで、早くから姉は町内のお師匠さんに就いて、さす手引く手になかなか味な出來榮えがあつた。

妹は又大の姉思ひで、姉のすることとなれば、一から十迄見習つて、踊りに就いても相當の稽古を積むことは積んだがなにしろ、十歳と言へば年が年であつた。

親の氣質は爭はれないもので、どこかこの二人には手筋に於て、遙かに群を拔くていの名人肌なる長所があつた。

その夏、ひどい暑さのあとをうけて、かりそめの病ひから錺り屋仙吉がつひに忌むべき癆症に犯された。赤貧洗ふがごとき中にあつて、しかし仙吉は決して一日たり共子供達の稽古を怠らすやうなことがなかつた。妻女が又殊の他の賢婦で殆んど女手一つの力を以而、たつきのことは勿論のこと良人の看取りから子供達迄、一通りの世話に事を缺かさなかつたのである。

内憂外患兩つ乍らの肝膽を碎き乍ら、只一意專心良夫の回復と子供の成長を希ひ願つて、そんな中から、毎朝毎朝、惠方詣りのお願掛けをかゝさない位であつた。

九月の惠方は向島の白鬚天神だと言ふことで、その月のお朔日から妻女は毎朝毎朝、未明に床を蹴つて、遙る々々神田のお玉ヶ池から土手向ふの白鬚迄寂しいところを往復したのであつた。

九月半ばのあゝ日のことである。その朝に限つて、どう言ふものか頭が重くていつになく妻女が寝ついたことがあつたお百日間吉例の恵方詣りは僅か一日の缺所故に、むざむざ棒に振りたくなかつたので、止むをえず、まだいたいけな二人の姉妹に代参をいひつけた。初めは姉娘一人に代参を言ひつける考へであつたが、姉が行くと言つたら必ず妹も出かけると言ふ日頃からなる性質をよく心得てゐたので、妻女は承知して仲良く二人に命じたのであつた。

子の刻下りと言ふに、二人の姉妹は物ともしないで手をつなぎ乍ら出かけた。うろ覺えに聞き啣じつた道筋をたよつて、とにかく姉妹は、辛じて土手八丁の所迄辿りついた。渡し一つを向ふへ越せば、すぐに白鬚大神と言ふことは解り切つてゐ乍ら、生憎く曉闇際の、早朝であつたつたので、運良く渡し舟が居なかつた。

その暫くの間をつれづれに姉妹二人は手をつなぎ合つて土手際をなんの所在もなくあるいた、丁度二人が土手八丁を往復した時にすれ違ひざまに、四十格好の田舎侍風な男にばつたり出合つたのであつた。

ふつか醉の酒氣が未だにぬけ切らないのか、或は前夜たしなめる吉原界隈の浩然の氣が完全に醒め切らないのかとにかく醉歩蹣跚として、至極上氣嫌に土手際へさしかつた。

すれ違ひざまに、流石したたか醉つては、ゐたものの二人の姉妹に、何程か不思議の念を抱いたとみえて、突然田舎侍は足を止めて、けげんさうに眼を据ゑたのであつた。

醉漢のことではあり、對手はとにかく二本ざしであつたので、理窟なく二人の姉妹は恐怖を覺えて、そのまゝ一散に土手際について馳け出した。

それを又對手の田舎侍はほんの當座の醉狂からかわあッと一つおどけた一喝を喰らはせると、大手を廣げ乍ら、遮ぎるやうによたよたと追つかけた。

けたたましい悲鳴をあげて、姉妹二人か危ふく土手際で、追つ手の猿臂をすりぬけようと身をひるがへしたとたん、過まつて田舎侍が、はずみを喰らふて逆おとしにどぶり、大川に陷つたのである。

それと氣がつくや否や、只恐怖故に姉妹二人は期せずして一散に走つた、お百日の代參を何の考へもなく、ひた走りに神田お玉ケ池迄走つた。

家へ歸つてほつとすると、流石に姉は年嵩だけに、内心いたく氣が咎めてならなかつた。子供の脚では割合に歸りが早過ぎたので、不審を抱き乍ら妻女がそれとなく容子を訊した時にも、只恐怖故に承知し乍ら姉娘は僞りを吐いた。

前後の容子からおしはかつて、彼女には對手の田舎侍がそ

の場に溺死を遂げたごとく考へられてならなかつた。水に何程の心得もない、又子供心なる彼女の想像に於て、溺死といふ考へは毫末の無理がなかつた。

只一途にそれを想像すると、殆んど一日彼女は恐怖故に心ここになかつた。さす手引く手のお稽古にさへ、いつになく支離滅裂な紊れが見えて、ひたすらに彼女は胸を痛めた。

敏感に姉の苦衷を察したものか、その日に限つて妹娘も一日ぢう口を緘した。心なしかうなだれて、終始默々青ざめ乍ら、姉娘のまなざしを讀んだ。

その翌早朝である。

又母親の命に隨つて、姉妹二人はひそかに、心に脅え乍らも、止むをえず惠方代參に出かけた。兩人にとつて土手八丁が一歩宛近づくことは、又一分宛強く深く恐怖を胸先にきざまれるやうなものであつた。

姉妹二人は一言も口を交へずに默々と上の空で歩を運んだのである。問題の土手八丁につひにさしかゝるや姉娘の方は殆んど喉がからからに干あがる程の脅えをかんじた。

見まい聞くまいと言ふやうに、彼女は殆んど眼をとぢんばかりにそつぽへ視線をそらして、その土手際をよけて通つた。とたんにしかし、彼女の眼は只恐怖故に、丁度きのふ新田舍侍が陷つたと思へるその箇所へ、反對に強く惹きつけられた。

恐る恐るまなこをみはり乍ら、水面をのぞくと、しかし水にはなんの變りもなかつた、又土手際にはなに一つそれらしい跡もなかつた。

だがそれだけに、彼女の想像は一層強く溺死と言ふ閃を持つたのである。水底深く沈んでゐるか、或は遠く已に河下迄押し流されたものか、とにかく平靜魔物のごときその水面の靜けさは、一層彼女に溺死の想像を役立たせるに充分であつた。

殆んど全部的に先の田舍侍は溺死したものと云ふ想像に襲はれると、突嗟の間に彼女は死を以而罪を償はうと言ふ覺悟をつくつた。何んの不自然さもなしに、又おどろくべき平易な決意を以而、しかし兩眼に涙を一杯ため乍ら、突然彼女は水際に降り立つた。

早くも姉の決意を察しえた妹は、又默々として、なんの不自然さもなく、極めて平易な覺悟を以而同じやうにつかつかと并んで水際に立つた。同じやうに、彼女の兩眼にも一杯

涙が光つた。

――子娘同志の相對死と言ふ前代未聞な呼賣りが瓦版に起こされたのは一日おいた翌夜のことである。

事實が珍奇と言ふためか、公儀お目付に迄聞え上つて、死骸取棄てと言ふ嚴しい法度がこの相對死に限つて特にゆるめられ、身元詮索が即日御府內一體に行はれた。

その結果神田お玉ケ池ほとりなる錺屋仙吉の二女であることも即日にして判明、原因理由も立ち所に詮索を進められた。

公儀一統の判斷に從ふと、最初は期せずして兩親の病苦を惱やんでいたいけな相對死に及びしものと言ふ一點に一致したが、別な方の詮索から、端なくも大河に陷つた田舍侍の一件が洗ひさらひたねを擧げられた、件の侍が決して溺死しなかつたことは言ふ迄もないことで、

當の本人がその翌朝又酒蛙々々として、吉原界隈で養へる浩然の氣を嗜み乍ら、本所割下水のお下屋敷へ歸へらうとした時、端なくも、姉妹二人の相對死を發見して、出入りの朋輩に前日の一件を咄したものが、芋蔓をたぐるやうに洗ひ立てられた。

その結果醉後のいたづらに及んだこと迄悉皆糺問に出合つて、前後相對死のあり様一切が判明と同時に、件の田舍侍は即日、理由なくして、二人の孝女を害めしものと言ふ婉曲なお咎を頂戴して八丈島遠流の刑に處せられた。

御奉行樣何ん共不憫に被召思、此者儀老養扶持として一日米五合ヅツの生涯の內被下候間難有可奉存者也。と言ふお有がたい御賞美を錺屋仙吉がちやうだいしたのは同じくその日のうちであつた。

しかし御奉行樣御不憫に基づく一日米五合宛の老養扶持に感奮して、前代未聞の心中を遂げた姉妹二人が、又のこのこと大河を土手八丁へ這ひ上らなかつたことは事實である。

（完）

俳優より女性へ

俳優を慕ひ寄る女性へ

澤田正二郎

世の女性たちへ、俳優といふ背景をもつ私が言葉しようとするのは、如何にも自分をアクチイブするやうであるが、聞かれて答へないのも男として勇なきやうに思はれるので、それも、理論的や概念的な意見は、既に諸大家たちによつて幾度となく繰り返されてゐることであらうから、私は、私一個の極く淺薄な意見を、平易に、簡單に述べてみたいと思ふ。

一

働かずに飯を食つてゆかうとする圖々しい懶け者でないかぎり、人間は誰でもそれぞれの職業をもつてゐる。

軍人も、政治家も、法律家も、實業家も、藝術家も、勞働者も、そこに何ら貴賤、階級のあるべき筈のない職業によつて生活をするものではあるが、その仕事に、自ら「美の」伴ふものと否との差ひのあるのは否むことが出來ない。卽ち、政治家は軍人ほど多くの場合武骨でない。實業家は法律家よりも多くの場合打算的である。藝術家と勞働者とは、その勞働するものに、前者が精神的であるのと、後者が肉體的であるのとの差異がある。と云つて、終日、銃や劍を持つて、嚴めしい兵營内に戰術の練習をのみする軍人にも、算盤と首ッ引で、朝から晩まで利福のことばかりを考へて暮す實業家にも鋤、鍬を手にして田畑を耕す農夫にも、小別すれば幾十種となくあるであらうどの職業にも、それ〴〵職業美のないものはないであらうが、殊更に、多くの人々の心を魅惑し得る職業美を備へてゐるのは、何と云つても藝術家である。而して往々、特別な人種かでもあるやうに誤解され易い藝術家の中でも、俳優ほど、その現れのまざ〴〵しいものはないであらう。それは、小說家や劇作家が、文筆によつて人々の、而も多くは異性の憧憬の的となるのよりも、畫家や彫刻家が、カ

ンパスの媚びや、瞳の使ひ方によつて見る人々の心を魅惑することよりも、もつと〳〵赤裸々である。同じ藝術家としての職業美を有する文壇人や美術家などよりも、比較的直接行動である俳優の舞臺美は、肌と肌とを觸れしめるやうな懐しみをさへもつてゐる。舞臺の俳優と觀客席の婦人との間にあるもの〻接近を見るのは、多くこれから生じるのである。

俳優が、あらゆる社會制度から壓迫されてゐる女性——絶對に夫には服從しなければならぬとされてゐる家庭の妻、金といふもの〻爲には、どんなに厭な男でも旦那と崇めて機嫌をとらねばならぬ花柳界の妓——たちから、充たされないある本能を滿足せしむるに適はしい、たつた一つの「樂しむべき偶像」かでもあるやうに思はれてゐるのは、そのくだけた人間味に於て、文壇人や美術家よりはいくらかでも勝れてゐるからである。彼らよりは智的な點に於て缺けてゐるといふと同業者に對して甚だ濟まないけれども、要するに、誰よりも懐しみやすく、自分たちと同じ階級の人間、も一つ言ひかへれば、話し相手として親しみ易い人間と思はれてゐるからである人間性の種々相を取扱つてゐる俳優は、いつも弱い女性の味方となつて、彼女らを慰めてやる　ことの出來る、仲のよい友達であり、また親しまるべき兒であるといふ氣持をさへもつて交つてゐたならば、決して、何事も、その間に生じることなどはないであらう。けれども、俳優は木偶ではない。多くの人々に憧憬される舞臺藝術家である俳優は、俳優としてのポッシイビリティ(眉目秀麗の謂とは違ふ)はないとしても、その心には、常に輝きのある人間味がなければならない。女性に、これだけの感情をもたせることは許してやつても、時には危險であると見ることも出來るその憧憬を受け容れる道を過ることがあつてはならない。過去の俳優は、その慕はれる目標を誤つてゐた爲めに多くの禍を殘した。舊時代の俳優には、自分たちに對する女性の憧憬とさへ云へば、直にもそれを邪淫とのみ解して受け容れ惡い癖があつたらしい。新時代に活躍する俳優たちの大いに心しなければならない點はこ〻である。

何々優は華族の奧さんと待合入をした。何々優は富豪の妻と溫泉場で密會した。某藝妓は何々優に散々弄ばれた上、男に貢ぐ金が無くなると同時に弊履の如く捨てられて狂死した。——斯ういふやうな忌はしい噂を、私たちはこれまでに耳が痛くなるほど聞かされて來た。また或る時は、さうした事實を眼の前に見せられたことさへもないではなかつた。

何人の罪であらうか。役者買をして得意がつた貴婦人や藝妓たちのみを責めてはならないやうに、男地獄と稱された私たちの先輩、又は同僚である俳優にも罪を着せてはならない。

いづれば、今日まで、俳優といふ職業男子に對する世の中の遇し方が間違つてゐた爲めに起つた過失であると共に、長い間、男といふ者に壓迫されて來た婦女子らの、男子への一つの叛逆であり、復讐であつたのだとも見ることが出來る　是れ、すべて、社會制度の缺陷によつて生ずる罪惡である。

二

或る俳優が、或る女性に慕ひ寄られたとする。さうした時俳優は何うした處置を取るべきであるか、と問はれるならば、私は言下に、「精神的な本能の滿足だけを與へてやればよい」と答へよう。而して又、さうした女性を娘に持ち、或は愛するものにもつた人々に對しては、「俳優といふ職業者との境界に決して垣を立てゝはならない。自由に交際させてみることが一番肝要である」と勸めるであらう。禁斷の木の實は誰しもが犯して食べたいやうに、緊張してゐる時の人間の心持が堰かるゝほど、それを突破したくなるのは、恰も流れを堰かれた水と同じやうなものである。精神的本能を自由に働かせてこそ、そこにいろ〳〵の美をも見出すことが出來る。人間が、その本能の衝動を防止されてしまつた時、その心は墓場のやうに淋しくなるに違ひない。

劇場へ出入する觀客は無論のこと、人は誰でも、男も女も夫も妻も、親も子も、相互ひに理解し合ふことが必要であるやうに、觀客席と、あの薄い布幕たつた一枚をもつて仕切られてゐる私たちの舞臺の上は、何らの罪惡も生み出すものではないといふことをもよく理解しなければならない。それは、觀客として俳優に對する一の尊敬であり禮儀である。斯うした相互の友愛的な理解によつてこそ、初めて演劇を完璧たらしむることが出來るのではあるまいか。も一つ深く考へてみる、劇場外に於ての彼らは、既にもう舞臺美を有する俳優でなく、たゞの一個の人間である。その彼らと異性との間にどんなことがあらうとも、それが双方の心持と心持とから結ばれたものであるならば、私はそれを咎めようと思はぬ。人間としての、劣情と劣情とを滿足させようとするものが何百人あらうとも、それは許されても差し支へない行爲である。但し、選ばれたる人間はそれを愼まなければならぬ彼らは、いつか大洪水に遭つて洗ひ流される組の人々である。その時初めて、殘つた、選ばれたる人間にくつついてゆかなければならないことを知るであらう。さうして救はれもしよう。凡人と非凡人と差異も、そこで決するのである。

三

最近、それは恰度二月十一日の紀元節の日のこと、私の

屋へ二通の手紙を寄せた婦人があつた。女性からの艶めかしい手紙が、私たちの鏡臺に舞ひ込むことは敢て珍らしいことでもないが、さうした惚れた腫れたの手紙など、讀み下す暇をさへ恵まれてゐない私が、それらの手紙に對して、一一返事を出すなどと考へたことの無いのは實際である。多くは直ぐ破り棄てゝしまふのが常であるが、こゝに、一通殘つてゐる此の手紙は、多少とも、私の心に止めざるを得なかつた手紙である。送り主の婦人に對しては甚だ濟まない次第であるが、こゝにその全文を紹介することにした。たゞ斷つておかなければならないのは、この手紙を發表したからとて、私に、手紙を寄せた婦人を侮辱するの意志など、少しも働いてゐないといふことである。

澤田正二郎さま。

一面識もない貴郎さまに、こんな手紙を差しあげます私をさぞ蓮ッ葉な女とお思召すでせうけれど、弱い女の心から常識を失つてしまつて居ります馬鹿者なので御座います。どうぞお嗤ひ下さいまし。

名譽のみを尊重する、昔氣質の失せない父母をもち、若い者の心を理解して呉れる兄姉をもちませぬ私は、理智と、燃ゆるやうな戀との爭ひに、どんなに、やる瀬ない想ひを祕めて惱み悶えたことでありませう。月に一度づゝステージの戀しいお姿に目見ゆることの出來るのを唯一の慰めとして、危く今日まで日を送つてまゐりました。けれども、その慰めも、今はもう絶えなんとしてをります。

人の噂に、貴郎さまは近く東京をお去り遊ばすとのことを耳にして、私は物狂はしくなつたことも御座いました。運命はどこまでも私の望みを遂げさせようとはしないのですもの。あまりに殘酷のやうに思はれます。

私は、私の行動が曝露された時には、死の道を選ぶばかりと堅い決心をして今日、遂々お宅の近くまでまゐりました。無名のまゝ、お屆けして置きました、あの生花をお受け下さいましたでせうか、一分時でもあの花に貴郎さまのお手を觸れて下さいましたなら、私は嬉しうございます。玄關先で可愛らしいお子さまのお姿を見かけました時、私の胸は良心の苛責に戦きました。召使となつてでも、お側に仕へることが出來ましたらなどとも考へてはみましたが、でもでも、それは到底叶へられぬ望みで御座いませう。私のやうな女に、何で貴郎さまがお逢ひ下さいませう。

戀しいSさま！

も定しました途中パレスタインに日月を費
の聖蹟も巡回されます。そして感激多き氏の通信は我が「女性改造」及び「改造」のみに發表されます。五月號以後の本誌が燦然たる一大光彩を放つであらうことは唯今から期待される次第です。此以外、大橋房子氏が本誌の特派として英、佛、伊、獨に、佐藤紅綠氏も佛、獨より得意の劇場通信

谷崎潤一郎作

定價貳圓
送料十七錢
四六版布製

た無造作に投へて　我々の心の奥の　その奥の又奥に潜
む、悩み、悶え、憤怒、悲みをありのまゝに、その

今私は生ける屍となるか、眞劍な自分の心に生きるかの境に立つて迷つてをります。心に戀しい方の俤を描いて、虛僞の結婚をするのは罪惡ではないでせうか？　私は、自分自身を僞り、また二者をも僞つてその苛責に苦むよりは、想ふ方のために二十一歲の生涯を散らしてしまふ方が遙かに幸福ではあるまいかとも考へてをります。

「一度でもお眼にかゝり度い！」おゝさうでした。叶へられぬことを望むのは愚者の常で御座いました。

Sさま！　死出の道を急ぐ憐れな一女性へ、どうぞ行くべき道をお敎へ下さいまし。

十四日は、都も寂しい國葬の日で御座います。私の心に適はしいこの日、私は最後のお別れをし度う御座います。若しも、お宅の前を、夜十二時ごろ、しよんぼりと通りすぎる女をお見かけ遊ばしましたら、憐れな者よと、お思召して下さいまし。

もう二時でございます。ほんたうに何といふ淋しさでございませう。何もかもわからなくなつてしまひました。ではこれでもうお別れいたします。さようなら。

△　△　子

この手紙の出し主が、その前の日、深くおろした俥の幌に身を隱して、わざ〲私の宅まで、一束の生花を屆けて呉れた婦人であることは、この手紙の文面によつても知ることが出來る。例によつて、返事を認めようなどとは少しも思はなかつたが、好意ある花束をもらつたことに對して禮狀を出すことを些かも躊躇しなかつたのは事實である。私は、自ら禮の詞をハガキに認めてそれを速達便で發送して置いた。

その翌朝であつた。私がまだ寢床にゐる時、私の自宅へ訪ねて來て私に面會を申込んだのは、前記の手紙の出し主であつた。私は、婦人を私の居間に招じて會つてみた。女學校を卒業したと云つたその婦人は、まだ年若い故でもあつたらうが、私の前では一言も發し得ず、たゞ恥かしさうに俯向いてのみゐて、容易に面をあげようともしなかつた。私は、俳優と異性との關係を詳しく說いて婦人に聽かせた。「有難う御座いました」と、のみ初めて解することが出來たやうな、只一言の禮を述べて歸つた後でも、最近、その心持がすつかり晴れて、これからは、たゞ盡すべき道の爲に努力してゆく、といふ意味の手紙を受けとるまで、私は、その婦人の上に何事か起りでもしはしなかつたかと、始終、氣がかりでならなかつたけれども、今日では、私の言葉によつて心を飜へして呉れたこの婦人に對して却つて感謝したい心持にもなることが出來たのを悅んでゐる。

何處の社會でも、それがたとひ男女間であつても、相寄らうとするものは、よろしく交らしめた方が好い。その人々の心持と心持とを徹底するまで衝き合はしてみた方が好い。これは私の主義である。若しも、これをよいことにして邪なことを行つたりする者があつたなら、それらは、前にも述べたやうな、救はれざるの徒輩である。倶に、吾人と同等の權利を主張して生きてゆく資格のない憐むべき人々である。

四

まだ私たちの新國劇が大阪を根據地として奮闘しつゞけてゐたころのこと、うら若い私たちの周圍には、幾多の異性が集まつて來た。その多勢の異性の中に、これはまた、連日のやうに東の特等席に妖艶なる姿をあらはす一人の年增の美人があつた。舞臺上に於ける私たちの一顰一笑をも見逃すまいと注視してゐたその婦人が私の樂屋に種々の贈物をし出したのは、初日後、二三日もしてからであつたらうか。昨日も今日も、それは殆ど毎日のやうであつた。その中には、切なる思ひを込めた手紙が俥屋によつて屆けられた。某所のお茶屋まで來てもらひたいといふ使ひも數回にわたつてうけた。果ては、莫大の金子をまでも贈り屆けようとしたのである。金によつて私たちを動かさうとする考への卑しさを私は憫らずにゐられなかつた。私は、私を贔屓にして呉れた某旅館に於て、一度、その女に逢ふことにした。氣を利かしたつもりか、旅館の女中は、私たち二人を、地下室の秘密室らしいところに案内したのである。そこには、燃えるやうな模樣の友禪縮緬の蒲團さへ敷かれてあつた。そこで、私たち二人は、その心に何を感じあつたであらう。聞けば其の婦人は、或る金持の愛妾だといふことであつたが、如何なる人間でもこゝまで來れば、きつと眼を開くものである。私はその不心得を說き諭しただけで、別に深い話もせず、情なくもその婦人と別れてしまつたのであつた。人間慾を充たしてしまつた後の淋しさよりも、お互ひに、滿たさずに終つた時の心持の方が、どんなに豐かなものであつただらう。その婦人には、それつきり、會ふ機會もなかつたし、また逢つて見ようと思つたこともなかつたが、其の後、その女も、すつかり迷ひの夢から醒めたといふ知らせだけを聞いて、私は、どんなに嬉しく思つたことか。その婦人の上に、幸あらむことをどんなに祈つたことか。

人間は、どん底まで來ると心の眼が開けるものである。それでもまだ眠りから覺めることの出來ない者こそ、ほんたうに救はれない人間である。選ばれたる男子に對して、恭ひ寄るなどの資格のない婦人である。私たちは、さういふ人々に對してまで同情しなければならぬ義務を感じてはならない。彼らが、やがてこの人間社會から敗滅してゆくの日も、さう遠い將來では無いであらう。それを見屆けてやりさへすれば、人間としての私たちの義務は濟むのである。

お互ひに、自分たちは選ばれたる人々であるといふ觀念をさへ強くもつてゐたならば、斯うしたことは、絶對に出來ないばかりか、考へても見られない譯である。これは、物質によつて抵抗力のない婦女子を弄んだり、その操を蹂躙したりするやうな男子の、この世の中に多いのと同一理である。魂と魂とを燃燒せしむるほどの強い心持から出發した行爲ならば、如何なる場合であつても、それを咎めようと思はぬ私も幾人かの不見轉藝妓を弄んで得意顏してゐる僞善者の罪惡はこれを憎まずには居られない。

そりや生きてゐる人間である以上、美しい女を見て手折つて見たくなるのは男性としての人情であらう。また、魅せられた男を心ゆくまで愛して見たいと思ふのも、弱い女性たちの人情であらう。私だつて、戀しい、懷しいと思ふ異性はある。しかも、毎日それを眺てゐながら、何うすることも出來ないで暮してゐるのかも知れない。私が想つてゐるやうに、その異性の方でも私を想つて呉れるやうになつた時こそ、どうにでもすることが出來るのだと思ふだけで滿足してはゐるが、けれども、けれども矢つ張り、世の中は、したいことをしずに暮して行く方がほんたうに面白いのではならうかとも常に私は思つてゐる。此の見方は淋しい見方のやうではあるが、そこにまた、云ふことの出來ない力強さを發見することが出來るのである。

これは、俳優としての背景をもつ私の、一般女性へ對するの心持であり、延いては、私一個の小さな人生觀でもある。

（三月一日）

劇中の男性と女性

守田勘彌

しが單なる娯樂物であるとして取り扱はれた時代には、舞臺に立つ俳優も、いはゆる役者として技巧が一と通り出來さへすればよかつたものです。そこには何等の內面的に深く根ざした表現も、また理解も無視されて來た傾向がありました。殊に舊劇といはれる物の多くは、それが悲劇であつても喜劇であつても、舊道德を基調とした約束の上に作られてゐるものが大部分でありますから、その中に出て來る男性にしろ女性にしろ、個性が明確に描かれてありません。

それに引きかへて、今日の新劇に現はされてゐる男性と女性との葛藤や、又は、女性同志の關係などは、その根本的原因となつてゐるものは、相反撥する個性の衝突、卽ち、兩方人物の性格の相違からであるか、或は思想の相異からかであります。最も一般に知られてゐるものとしてはイブセンの「人形の家」に描かれたノラといふ女性とその夫のヘルマーとの離婚などは、思想に根ざす悲劇であるし、昨秋私が文藝座劇として帝劇で演つたショーの「武器と人」の中に現はるゝ人物は、悉く際立つて見える程の個性を有つてゐて、これが接衝することに依つて、苦笑の劇藝術が表現されるのでした。

いはゆる舊劇が舊道德とか、人情――それも安つぽい小感情の上からの――とかを土臺とされてゐただけに、それを演出するには、單に外面的な技巧さへあればよかつたのです。泣くにも笑ふにも、或る技巧の型の中心があつたのもさうした劇には必要だつたでせう。殊に舊劇中に現はるゝ女性の多數は、男性の專橫と非行とがどんなに强からうとも、敢てそれに反抗もしないし、かへつて、さうした男性の暴虐の下に蹂躙されることを、一つの美くしいことゝする種類の者であつたから、それを演出する俳優としては、その女性に對する內面的な理解を必要としなかつたわけです。また、今日でもさうした物をやる時に、さうした女性を理解してやらうとしたならばかへつて、馬鹿々々しい氣分が湧いて巧くゆかないだらうと思はれます。この點は同じ劇の男性に對しても俳優は同じ態度で臨む他はありますまい。そこに遺傳の形の存在が許されてゐるのではありますまいか。

かうした種類の劇にばかり浸つてゐることは、私どもの出來ないことでした。そこで、もつと內面的な根柢のあると、同時に近代人の內外兩面の生活を表現した劇の演出を求めるやうになり、さうした物に入つて行くのは、いはゆる新劇俳優の危險とした境地であつたけれども、新らしい人々に依つて、その大膽が試みられたわけでありました。これは、ち

よつと見たところ大したことでもないやうであるが、この危険とされた新境地へ入ることに依つて、初めていはゆる舊劇畑に育つた人々が、近代人を取り扱つた戯曲を演出し得る劇藝術家としての地位を認められるのでせう。この境地を通過した人々のみが人形でなしに、人間を表現することゝ言はれるのでせう。

しかしこの封建時代から自分自身を解放して新生面に出でた時は、もはや舊い型の技巧では間にあはない。人形の如く動き、空涙を流し、悲しさうな聲で泣いたり、苦るしさうな聲をしたりするだけでは間にあはない。その底には、藝術に對する犠牲的精神と、人物性格や思想等の誤まらざる理解とかつそれを表現する熱心とがなくてはならなくなつた。

要するに私どもは、俳優となる前に先づ人間とならなければいけないわけです。この意味よりして私は、俳優が從來の如く、舞臺に立てばそれで能事終れりとして、他の一般社會の現象に無關心で居ることはよろしくないと思ひます。と言つて、男優に普選運動に參加せよと言ふのでもなければ、女優に女子參政權運動に加はらなければいけないと言ふのではありません。が、俳優も現實の社會に生存してゐる者であります以上は先づ一般社會の思潮や、諸種の社會問題に對して、多大の興味を感じて、熱心に、眞面目に研究して、充分にさうしたものを理解するやうにならなければ、時代を背景とした、劇壇を形ち造ることは出來ないと思ひます。

すべての社會が今日では、改革改造を叫ばれつゝあるのと同樣に、劇壇もまた今ではいろ／＼な改良がなされますが、それは別として、俳優自からが先づ、各自の藝術的内生活の一大轉換といふことが、私たちの目下急とする問題でせう。私たち、自心がもつともつと自己を掘り下げ、築き上げなければなりません。御求めの主意とは大分ちがつてしまひましたが、大へん多忙でゐますので此度はこれで、又後日筆を採らして下さい。

腦力不足の子女を學校はどう取扱ふか

久しきに亙る教育界の懸案である此の問題を今度、東京市内の女學校、小學校十餘校に提出して、次の如き回答を頂きました。

（イ）一級に於て、腦力の優れたる子女と、比較的劣つた子女との間に起る學力の差隔をどう處理なさいますか。

（ロ）腦力の劣つた子女は、何う教育したらいゝでせうか。

東京高師附屬小學校　佐々木秀一

（イ）一級と云ふのは、大體腦力の似たものを集めたのでせうが、それでも各兒童の差隔が甚しいと云ふことになれば、優劣の兒童にそれぞれ個人的に手を加へる樣にして行くのが先づ最も普通の方法でせう。けれどもそれも餘り一級の人數が多い時には、仕方がありません。斷然その學級を二分することです。

又學年が進んで居れば、大體自學―させ、その間に、主として劣つてゐる兒童に手を入れて行くことです。なほ腦力の種類が、その級の兒童を數個の團體に分けることを便利とする樣でしたら、所謂分團的に指導して行くのも一法でせう。

（ロ）腦力の足りないと云ふのは、同じ級の兒童に比してのことでせう。それには他日發達の見込があつても、現在の到達點の低いものと、將來發達の希望の少いものとありまず。前者でしたら、何も心配がいりません。少し年月を待ちさへすればいいのです。後者でしたら、腦力相應のことをさして行くより仕方がありません。假令その仕方に巧拙があつても。殊にこんな兒童には、後れたところを無理に伸ばさうとするよりも、寧ろ比較的でも優れて居る方へ進めて行くのが最も有効と思ひます。

三輪田女學校　三輪田元道

腦力の差は程度の問題で、寧ろ差のある所に

個性を認むることが出來る。故に差は必ずしも憂ふるに及ばぬ。但し甚しい差を生ずると、優者と劣者と共に迷惑するから、勝手が違へば差を少くする爲め標準能力を必要とする。從つて入學試驗をも是認せねばならぬ。併し自分は入學試驗廢止論者である。勿論試驗を廢止せば、一級中に學力の差隔を生ずるは明な結果であらう。幸に近ごろの學校はいづれも二學級以上生徒を募集するから、入學後學校自ら生徒の學力を査定して、甲組と乙組とする風に、略同じ學力の者を集めて、同一學級に編成せば、少しも不利はない筈である。故に生徒の學力に差異のあることは試驗論者の理由とならぬ。どうしても、勢ひ一級中に、多少の學力上、優劣を生ずることは免れまい。然も生徒各自の身長には差別の生ずると同樣であらう。否勢力と體格に止まらず、感情の上にも著しい差別あり、特に品行氣質の上にも甚しき差別がある、必しも勢力のみの差別を以て、教育上の難易を論ずる唯一の標準とならぬ。要するに、教育は生徒の天分即―先天的能力を伸び得る限り伸ばさせば足るのである。必しも畫一的にするに及ばぬ。從つて一級中に十の力と、九の力と、八の力といふ風に差別を生ずるのは止むを得ぬ。否反つて自然であ

ろから要ふるに足るまい。唯教育家たるものは、愛の心を以て深切に生徒を世話し、彼等各自の力を伸び得る程度に發展せしめたら良いのであらう。

東京一橋高等小學校　湯澤直藏

腦力の優劣によつて起るべき學力の差隔を處理する方法

イ、腦力程度の近似せるものを以て學級を組織するは個性尊重の教育方法で學力の差隔を輕減する根本義である

ロ、腦力程度は各人各別ともいふべく假令腦力別學級組織によるも學力に於て相當の差隔を生ずるは免れない、之が緩和法としては個性順應の教育法に基き兒童を能力別に分團して成るべく其個性に適應したる教授を施さねばならぬ

ハ、腦力の優劣によりて起りたる學力の差隔を基礎として直ちに價値判斷をしてはならぬ。よろしく其長短を精査して之を助長し發揮せしむる方法を採られねばならぬ

ニ、腦力缺乏のものに對しては特殊の教育方法に基き個人指導に重きを置きて總ての智識を體得せしめねばならぬ

頌榮高等女學校　沼田笠峰

（イ）これは非常に困難な實際問題であります。私の理想としては、優等生と劣等生と教を別にしたいので嘗て實地に試みかけたこともありますが、或る學科は劣つてゐるものでも他の學科で優れてゐるともありますから、學科と個性との關係上、どうしても理想的には行はれません　そこで、先づ劣つてゐるものな學校なり家庭なりで、個人的に補習せしめるより、他、仕方がなからうと思はれます。

（ロ）個人教授ではそれ〴〵適當な方法があるでせうけれど、一ツの學級では、腦力の劣つてゐるものに對して、出來るだけ注意を與へて、補習せしめるのがよからうと思ひます。併し生徒自身には、腦力が劣つてゐるといふことを、あまり強く知らしめたくありません。

香蘭女學校

（イ）腦力の優れたる子女を甲組に編入し劣つた子女を乙組に編入し別々に教授なさば幾分か其缺點を補ひ得るも此方法は精神的に多少の害を與ふる事故考へ中

（ロ）實用的に女子に必要なる學科のみを撰んで授く

豐島師範學校　井上宗助

（イ）一學級中で便宜優劣の二分團とし、一齊教授をしないで、複式教授の形で教授することがよいと思ひます。此の場合教師はなるべく劣等兒組の方に主力を注ぎ、優等兒組の方は自學自習で行くやうに學習訓練をいたします。優劣の二つに分ける場合、唯機械的に兒童數を二分するやうな分け方ではいけません。劣等兒の方はなるべく少くするやうにしなければなりません。優等兒の方へ入れやうか、劣等兒の方へ入れやうかといふやうな兒童は、優等兒の組に入れておくやうにし、誰が見ても劣等であり、兒童自らも劣等であると自覺してゐるやうな兒童だけで劣等組を作ることが肝要です。優劣兩組の兒童は其の學力の進歩如何によつて、劣組から優組へ、優組から劣組へ、時期を定めて移動させることが一種の獎勵法になつてよろしいことかと思ひます。此の兩分團に分けることは、比較的優劣の差隔が甚しくなる教科例へば、算術、國語、圖畫、裁縫の如きものを教授する時を適用するのであります。

（ロ）腦力の足りない兒童のみを以て一學級を編

應して特別學級を作り、愛と同情の豐かな良教員をして教授するより道はないと存じます。劣等兒のみで特別學級を編成するに當つては家庭の了解を得ることや、適當の良教師を得ることなど、學校としては可成の困難が橫はつてゐますが、此の困難を排して斷行しなければなりません。さうして特別學級の兒童數は多くても三十人を超えてはなりません。

東洋高等女學校　私田鼎

（イ）一級に於て腦力の優れた子女と劣つた子女との間に起る學力の差隔は子女其ものゝ素性によるもので、教授上如何ともし難いものである。劣つた者を標準とすれば優れたものは倦怠に流れる、優れたものを標準にすれば劣つたものはついて行けない、それで先づ中位のものを標準とする外はない、それで一級を編成するに當つては可成同じ樣な腦力のものを以て組織し、優れたものと劣つたものとゝ級を別にするも一方法ではあるが、是にも又弊害は免かれぬが是より外適當な方法は見出し難いと思ふ

（ロ）腦力の足りない子女は別に級を設けてゆるゆる教授するのがよい、級を別にせなければ時間外に足らぬ處を補習してやるがよい。體力の弱い子女と强健な子女と一緒に走らせるやうなことをするのは殘酷であると同樣に知能競爭も又殘酷である。

東京市市ヶ谷小學校　高橋榮七

（イ）腦力の優劣は先天的に定められたものであつて教育は此の腦力を十分に發揮させることを一つの大切な仕事としてゐる、故に教育の結果として當然學力の差を生じての大小は期間の長短によるものであることは教育者の均く認める所と思ふ、そこで教師はよろしく學習訓練に力を入れて一方に於ては兒童が學習に際し全注意を集中して自發的になし得る樣に導き他方に於ては各學科につき學習方法を知らせることが大切である。兒童が斯く訓練をつけられたならば各其の學力に應じて最上の學習をなし得るといふことは明である尙學力の差により座席を別にして指導の便をはかり通ずる各科の參考書を備へておきたいと思ふ。

（ロ）腦力の足りない子女は特に教育の補助を受けて特別取扱の恩典に浴しても尙普通兒童に及ばない所の弱い頭の持主である、一般に心意の發達並に活動に故障を有するもので中には注意集中の不可能な者や感覺器官に故障を有するものや、道德上不良の傾向を有するものなどあることは取扱上注意すべきことである、之を教育するには愛を持つて當り教材を精選の上輕減し其程度を低くして授け石垣を築くやうに一歩一歩かたく進み乍ら反復練習を怠らぬことが肝要である、又常に身體及び心意の實感に訴へて直觀的に教授することが効を奏すると信じてゐる、手工農藝其他の作業は生活の準備として此の種の者に課することが教育上有効と思ふから力說しておく、要するに此の種の子女は普通の者に比し一層平易なことを知らしめて社會に出て弱い乍らも獨立の出來る樣に教育したらよいと思ふ。

青山師範學校附屬小學校主事　櫻井美

（イ）一概に優劣と申しても、一般的にしかるものと、ある學科に限つてのものと種々あるので、その處理も異ならなければならないと思ひますが、要は兒童各自の能力に適合した學習が出來る樣に工夫することが大切である。優秀な兒童に對して、教科の程度を進めることもあるが、その前に、同一程度について一層多く練習事項を課してその能力の啓發につとめること、又は教授事項に關係ある他の材

科を學習させて教科の内容を横に擴充することが更に緊要であると思ふ。

(ロ)能力の低い兒童については、先づその原因を調査することが大切である、原因が判然すれば指導の法も立つものであります。次にこれらの兒童に要求する程度分量は、思ひ切つて減ぜねばなりません。出來得る限り個別的に指導することが肝要で、又教師は寛容であり、これら兒童の何等かの長所について奬勵を加ふることを忘れてはならぬと思ふ。

(ハ)今日の學級教授に於いて個別取扱を徹底させるのにはどうしても、學級兒童を三十名以下に減ずることが必要である。

日本女子大學附屬高等女學校主事　渡邊英一

(イ)學級教授に於ける形式的成績の上に檢出される腦力の優劣には、種々の意味と要因とがありますので、一概には言はれませんが抽象的に申しますと、中等程度の生徒の能力を標準として、優秀なものを支持しつゝ、劣等なものをこれに近づけるやうな、各種の方法をとるといふことになります。而してそれは學科と場合とに應じて、教師の常識と臨機的方法によるので、優秀なものを犧牲にし、劣等なものに無理をさせるといふ弊害を免れ得なかつたと思ひます　將來は更に科學的組織的の方案を措定すること、學校の教育力を豐富にして、分團式教授、個人的指導等を行ふ餘裕を作ること、及び眞の教育に對する家庭の助力と理解とをもつと得るやうにしたいと思つてゐます。

(ロ)生理上、心理上　境遇上から嚴密な科學的診斷檢査を試みて、その原因を明かにし學校と家庭とに於て、それぞれ適當な方法をとる外にないと思ひます。

文化學院　與謝野晶子

(イ)本校では個別的に教へるやうに致してゐます。一級の人數が尠いので、この事が實行されて參ります。但し本校は優良生を養ふのが目的ですから、何かの科目に於て優良な點さへあれば進級させます。

(二)徐々に教育する方が宜しい。一年で必ず進級すべきものと思ふのは大間違ひだと考へてゐます。

讀者諸姉の爲めに

之れから毎號讀者欄を設け本誌數頁を讀者諸姉の爲めに解放したいと思ひます。婦人に關聯する思想問題、社會問題に對する主張、批判若しくは感想等の御投稿を歡迎します。

投稿要項

一、四百字詰原稿用紙五枚以內のこと、
一、締切毎月、二十五日、
一、「讀者欄」と御朱書すること、
一、投稿原稿は返戾せず、

女性改造編輯部

職業婦人の社會への訴へ

悪看護婦會の滅亡を祈る

―併せて自治會の成立を望む―

松原みさを

職業へ――職業へと、嵐に追はれる木の葉のやうに、私は村を出て參りました。小さな村の學校に、ともに机を並べて學んだ幼な友達も今は、皆んな、遠くの工場や、町の素家や又は、港の廓に賣られたものさへあります。相當の地所持ちないかぎり、村に止まつても安い／＼手内職では到底生活はたてられないのでございますもの。人生の中、最も樂しかるべき筈の年頃に、私共もはや生きるために賃銀といふ鎖につながれて、苦役しなければならないのでございます。仕事そのものが苦しいのではなく、自分の意志によらないで、他人に驅使されることが、そして乏しい賃銀を更らに、いゝまへをはねられて、絞られることが不平であり、不滿であるのです。

只今東京だけでも、何々看護婦會といふ様なものが四百からございまして、大抵、各三十人前後の會員(派出看護婦)を抱擁して居ります。これは會長さんが(多くは相當の年輩の看護婦あがりで家庭持ちの人です)統率支配して居ります。この人達は表面相互扶助的な事業のやうに見せても、内實はむしろ資本家以上の搾取者であり確實な營利業者であるのです。(稀れには立派な人格者の方もあるにはありますけれど。)

先づ私達は、普通の病人で大抵日給貳圓で(食費は先方持ち)雇はれて參りますけれども、その中二割を會の方へ差引かれますから、手取り壹圓六十錢になります。尚毎月救濟費又は會費(？)と稱して、貳圓五十錢宛その使途不明なものを徴收されます。尚仕事のない時は食費を六十錢宛納めなければなりません。一ケ月ブッ通しには、仕事はございませんから、毎月の收入は大抵三十圓位なものでございますからほんのやうやく凌ぐといふ程度のものです。

見習の者は、月、五圓か六圓を貰つて、下女代りをしながら學校に行くのですが、それでは到底やり切れないのでございます。それでホッと一息つくべき日曜とか祭日とかいふ時には他の看護婦と、仕事を振り替へたり、特に人手の不足な時などは、學校を休んで病家に派遣されるのです。しかし壹圓五十錢の日給全部は、會長さんの懐に飛び込んで終つて、僅かに別に頂いたこゝろづけを以つて學費や小使の足しにするのでございますが、この辛抱が中々皆が皆んな出

來ないで、大抵途中から方向轉換をやつたり、逃げ出して行つて終ひます。

で、私達はこの收入の削減が嫌やなといふよりも、會長その人の意志によつて（威張つてゐて、ヅゥ／＼しくうら若い姉妹達を支配し、搾取するといふ卑しいその心持ちが不快なのです）動かされることが不滿なのでござゐます。

『――樣、今度はからずも久しく私共の內心に、燃えてやまない不平不滿を、廣く世の人にお訴へ下さいますことは、私個人としても亦、私達同じ職業を持つ人々も等しく、感謝せずにはゐられません。當病院にも多數の會より派出して參つて居ります。二、三の會の方にもよく內狀を伺つてみましたが、矢張り同じ不平を抱いてはゐるけれども、友達同志が陰で語り會ふばかりで、若し會長の耳に入れば退會させられようも知れないし、自分が惡るい目をみなければならないからそんなことを杞憂して、よう發言しないらしいのでございます。でも隨分皆んな憤慨してゐます。どの會がと指摘して言ふことは出來ないとしても、徒らに會長の鼻息のみ窺つて默してゐる時ではないと思ひますから、此時是非共、不平も又希望も大いに書いて、私達姉妹のために絕叫んで下さいませ。――』××傳染病院にて、Y子

かういふ友からの手紙を手にして、ゆるまんとする私の心は、更らに力づけられました。絕えない、かうした、姉妹たちの愚痴や、嘆息ばかり聞いて居ります。私自身もその一人でございますが、いかにもして、この不合理な搾取者、僞善者の手から逃れて、私共お互ひの自治團體を組織して、もつと自由に、もつと愉快に働きたいと、切に願つて居りますが、何しろ、皆んな交互々々に派出して居るものですから、寄り合つてよく相談も出來ませんし、一方には無言の警戒威壓があることでございますから、たゞ思ふだけで、どうすることも出來ません。

今はたゞ、眞にわれ／＼勞働婦人をして、獨立自治の世界へ、補け出して下さる尊き人の手を待つより他は術がございません。嘆息しつつも私たちは、日毎に絞られ、會長さん一族は悠々自適又は人の汗で蓄財に餘念なく、又は其處から其處へ行くにも腕車で飛ばすといふやうな奇現象が、當然のこととして行はれるやうな、この矛盾の世から一日も早やく脫出したいと祈つて止みません。一心に救ひの來る。その日を望んで鶴首して居ります。

一事務員としての願ひ

芝　鶴　子

一事務員としてパンを得る爲めに個人經營の某商店に勤める樣になつてから漸く五ケ月になります。比較的新らしい思想を持つて居ると言はれて居る店主でさへ、事務員に對しての暴君的態度と、利殖の道に鋭い事とは、全く意想外なのです。毎日男子と肩を並べて仕事をすると言つても、それは自分に取つては無趣味な出納簿と珠算とに一日のすべてを費します。生理的に纎弱な肉體を持つ婦人が、男子と同樣に仕事の能率を上げて行かねばならないのです。男子が煙草を喫み談笑して居る時でも女は默々としてペンを握つてゐます。會社銀行

では、一定の休憩時間が與へられ、そして月何回かの休日が定められてあるけれども個人の商店では月一回の定休日以外、一日の勤務時間の中只の十分も自由の時間を持つ事を許されては居ません。斯うして朝の九時より夕方六時迄、晝食の時さへ定まらず働かされ、時には仕事が停滯して居るからと言ふ口實のもとに、夜九時迄も務を强ひられます。それに對しての報酬はと言へば、男子の三分の二にも足りない程です。賃銀の上では明かに男女の差を認めて置きながら、仕事の能率の上では決して忽がせにはしません。むしろ男子より以上に能率を上げるのが當然の樣に思はれて居ます。仕事の停滯するか、或は店主自身の意に滿たぬ事があれば、意想外の嚴重な戎飾と怒聲とを浴せられ冷嘲されるのみです。それに對する反抗、不滿、不平と言ふ樣なものが、胸に燃えながら、奈何ともする事の出來ぬ慘めさ、店主と事務員と言ふ差別のもとに讓歩しなければなりません。イエ皆パンの爲めに忍從を餘儀なくされるのです。私達仕事の幌馬車には、毎日鋭い眼を光らせて長い鞭を手にした馭者が乘つて居て、歩みの遲いのを急げ〳〵と鞭打ちながら、只一條の道——利殖の——を走らせ樣として居ます。私達事務員の日々は斯うした不滿と悲慘との灰色の中に暮れて行きます。

僅かの月給、それはとても女一人の自活にさへ足りぬ程なのに、それでも店主は價値以上に與へて居る樣に思つて居る樣です。その僅かの給料を以て肉體の自由を束縛するばかりでなく、思想をまで支配し樣とする横暴にさへ忍從を守らねばならぬ私共は、パンを得る爲めに生きねばならぬ爲めに、燃ゆる反抗を打ち消しつゝ默々として歩みを續けて居ます。私共職業婦人の持つ苦惱は、之等體驗によつてのみ初めて味はふ事の出來るものであらうと思ひます。

賃銀の桎梏によつて、自由や平等や女らしさを制限された私達は固より店主に對して親しみや情誼を持つ事は不可能であろし、又店主も私達に對しては冷酷であり徒ちに資本の威光を？四散し、金に依つて私共を威壓し樣とし、金によつて私達を飼馴さうとする態度を明らさまに看る事が出來ます。そして時々に與へられる無意味な怒聲と皮肉とは、店主の事務員に對する一つの特權であり、優越であるかの樣に思はれます。

一日の精神勞働に疲勞し切つた體をやつと自分の家に落ち付ける時は、大抵の家庭では夕餉の濟んだ頃なのです。疲れた頭腦では好な本も思ふ樣には讀む事も出來ないし、新聞の二種類位さへも充分に目を通すことが出來ないのです。それ程に頭も心も疲れ切つてしまひます。斯うして毎日幾分づつでも體力を搯り減らさないでは置きません。何と言ふ慘めな事なのでせう。

然し食ふ爲めに働らかねばならぬとしたら、——やはりすべが忍從なのです。

私達食ふために働かねばならぬ境遇にあるプロレタリア職業婦人は、遊んで食べて行けるブルジョア婦人達と比較する時、事實に於て自分達の哀れさ——然しそれには或反抗的な意味の含んだ——とそして小さな嫉妬の芽ざすのを覺えますが、現在の社會組織の下ではそれは如何ともする事の出來ない事柄なのです。私達はいつでもわかり切つた事ではあるけれども、職業を持つ婦人としての苦惱や不滿のすべてを無理に抑へて生きねばならぬと言ふ事を眞個に涙ぐましい程に感じます。

斯うした境遇にある多くの婦人達が各自の體驗で得た苦惱を背負ひながら進んで行くと言ふ事は眞個に如何にかしなければならないと思ひます。少しでも眞實に、そして新しく生き樣としてゐる私達は絕對束縛の覊絆から脫し度いと云ふ事と、能率に對しての相等の賃銀を與へられたいと云ふ事は、誰もが抱いて居る唯一の希望なのです。そこに職業を持つ女性としての眞實の眼覺めがあると思ひます。過去の時はいざ知らず、現在の樣に資本者萬能の時代であるならば資本者自身にも覺醒があつてほしいと思ひます。

タイピストの叫び

佐藤きよ

印字機――タイプライターと一口に云ふが、これにはあひ異なる二つの種類がある。英文及び日本文のそれである。

世界大戰が酣なはになつて日本の產業が世界的に景氣がよかつた頃には、英文タイピストは一時非常にもてたものであつた。然るに國際貿易が下火になつてから、特に英文タイピストを使はねばならぬやうな大會社大商店はほんの指を屈する程しかない、これに反して邦文、即ち日本字のタイプライターは日常の取引が組織化されつゝある我が實業界にあつて、其のヂウプリケイト(二枚目謄本)トリプリケート(三枚目)から五六枚迄一時に寫せる事、字體がはつきりしてゐる爲め其の使用が非常な勢ひで廣まりつゝある。

大正四年十月初めて邦文印字機なるものが世に出て以來今日では三萬五千臺も用ひられて居る相だ。

これに從ふタイピストの數も漸次增加い必要上邦文タイプライター會社附屬の養成部では每月五十名平均の卒業生を社會に出して居る。

このタイピストたらんとする若い女達は、中流まではゆかずとも今日相當な暮しをしてゐる家庭に育ち女學校位卒業して居て、先づ嫁入り前を遊び半分自分の衣服でも拵へようと云ふ樣な不徹底な徒が多いのである。從つてその勤續年限も長くて四五年、短いのは直ぐに嫁に行く、平均二ヶ年位にしかあたらぬさうである。

是等のタイピストは滿三ヶ月の敎練を經て需められるに應じて會社、銀行諸官廳商店等にまはされる。

先づ大抵の會社銀行なれば、重役の一人なり、庶務部長なり、會計なれば主任が會ふ、そして色々の質問や技術の試驗やらに二三日辨當持參で出張する、いよ〳〵お目みへに合格すると大同小異隨分御都合のよい條件を並べた保證書が出來てゐるからそれに保證人二人の判を押て差出す。

俸給は先づ月三十五圓位に平均する。然し養成部を出て一年位實務に苦勞しなければ一人前の腕にはなれない、一人前になつてからでも隨分つらひ仕事ではあるが、修技後紹介狀一本持つて見も識らぬ多くの人の中に入つて立ち働く……それだけが既に容易な事ではないのに仕事は一字一句もおろそかに出來ぬ。取引上の往復文、證書、中には筆にまかせて書きなぐる人もある、それをどうにかして型通りに拵へ上げる迄の苦心、筆にも口にも盡されない、まご〳〵して居ればすぐお拂ひ箱、たまに一字も間違へると大叱言、原稿は後から〳〵と

追つかけて出る、頭は疲れる、胸はおされる、あたら嫁入前の體を痛めてしまふ者も決して少なくはない、かうして精神を人一倍使ひ乍ら他面中は勞働である。然して得る處は男の事務員達に比して非常な差異がある。

これは使ふ方が女であるからといふより外に何等理由の存しない差別待遇である。

こゝでほんとうに殘念なのは斯の如く酷使され二言目には、いやならよせの賣言葉にも忍んで居るタイピスト自身達に、なんの自覺も何んの意識も存しない事である。

只嫁入仕度のためにも位の考へで、其日を送り少しの暇間を盗んでもお化粧ざんまい、貰ふと云へばすぐにも嫁ぎ行く。少し酷評かも知れぬが良い相手を見つけるのも彼女等の一仕事かも知れない。

文明が婦人に與ふる尊い職業、偉大なる任務も斯の如き婦女等の玩弄にまかせて置く間は、何等女性も經濟的獨立、婦人の生活保證と云ふ事に役立つ事が出來ぬ。

私達が今迄通り、單に飢餓をまぬがれるの程度に食つて飲んで生きて行く、そして壓迫されつゝ生殖の器具として、男子の玩具たるに甘んずるならば何にも云ふ處がない。

然し一度、私達の凡てが經濟事情に依つて、決定されて行くといふ事實を知つたならば、どうして斯の如き生活に滿足して居られやう。私達は先づ私達に生存の權利のある事を主張したい、又職業に心から安心して仕へる事の出來る丈の待遇を要求する。更に私達は女性として徒らに蔑げられる事なしに、人として取扱はれる爲めに職業に從ふの權利ある事を絶叫せずにはゐられない。

友よ！　姉妹達よ御身等の其の虚飾と、自己欺瞞を離れて眞實に生くべき道を求むるならば、先づ自己の使命の大なるを思ひ、自己のなすべきの何んたるかを顧みなければならぬ。

私は私達の同じ職業にある婦人達が、又更にあらゆる職業婦人たちが、このめざめに生きるとき、そこに私等の求むる樂園の展開される事を信ずるものである。…………（一九二三、二、二三）

女工生活の一面

山田すみ

貧乏な人の子として、私は、學校に變へて工場へ、教科書の變りに辨當箱を、と云ふ生活を幾年か續けて來た無智な女工です。無論書くべき何者も持ちません。

働く事によつてのみ、私等の幸福は得られるのだ。と誰かが教へてくれました。私は總ての苦しみを忍んで一心に働きました。でも、少しも私の生活は樂にも、亦幸福にもなりませんでした。人によるとなく、本で知るとなく、時勢は、無能な私にも色々の事を教へて來ました。さうして、此の境涯から脫して少しでも樂な生活にとあせりました、だが、それは一層私を苦しめるのみで、後に來る者はいつも大きな悲哀でした。

私の働いてゐますのは、或る大きな時計の工場です。私の入つた當時と違つて今では、温情主義とかで少しはよくもなつて來てゐます。七時から五時迄と云ふ、一日十時間の勞働です。規則的な時間

の制限はもう一分も爭はれません。時間中と云ふものは、男も、女もなく油と塵に包まれて働いてます。

油じみた、骨ばつた、青い顏をして、恐ろしい齒車の音と共に消え行く歌は、人の耳にはひらぬ樣に悲壯な聲で、そこ、ここからもれて來ます。苦しい永い勞働を歌にでも、と、少しの力いせに歌つてます。此の聲こそ私等勞働者の、疲れ切つた血潮の叫びである事を物語つてゐます。

無智な私等女工は、不平をもらすべき口もなく、自由もなく、監督の大きな聲に、どやしつけられては、恐る〳〵機械に手を出してはコツ〳〵働いてゐます。縮み上る樣な思ひをしては、又下駄箱の蔭で、或は便所の側で、油じみた、眞黑な顏に、白粉を塗つたり、髮をなでたりしてゐます。此れが、十七八歳の花の娘だと誰が云ひ得ませう。監督の目を盜んで、自分を飾る、いじらしさは全く哀れです。かうした私等女工を少しも顧み得ないで、どやす事と、おこる事によつてのみ支配しようとしてゐます。丁度、牛馬の樣に、おひまはされてゐる私等は、如何に賃金のためとは云へ、機械には綿の樣に打たれ、又監督の無能な支配には、幾度か泣かされます。少しの同情をも持たぬ奴等は、やつぱり、時には打たれ、泣きもして來た人なのです。それに現在の自分に變つた時は、お前達とは人間が違ふと云つた樣な風でゐるのです。私は思ひます。どうした事だらうと。だが此は何と云ふ、憐れむべき事でせう。呪はれた、虐げられて來た、私等と同じ人間だつたのです。今に〳〵と期待してゐた時に腰を下したので、一時に伸びたのです。私等はかうした時にも明かに、階級のある事を見せられます。小さな、一工場の中の階級的に立つた時でも、私等仲間は、ほんとうに、苦しんでゐるのです。明かな階級意識に向つて私等は、爭つて行かなければなりません。

女だから、と云つては私等女工は、尙一層苦しめられます。私等の勞働によつて得る賃銀、それは、殆んど生活し得ない有樣です。男工と同じ仕事であつた時でも、三割位いは少いのです。女工の一人前は、十二三才の男工にも劣つてます。生活費を得る爲めに私等は、働いてゐるのだとは、少しも思はれません。止むなく、私等の勞働力を、何者かに提供して、否、奪ひ取られてゐるのだと、より思はれません。總ての自由を奪はれた、工場内で、油と塵とに樂しみたい者があるでせうか。私等女工は、男工以上に絞られてゐる事もわかります。奪はれた者は、全力を出して驅逐しなければなりません。あらゆる、不平をもらしつゝも、少しの金を握らせられた時には、苦ほゝゑみをして、力ない喜びを現はしてゐます。さうして苦しみの中にも、少しの樂しみでもがなと、あさつてゐます。これ程まで、意氣地なしと私等は呪はれてゐるのです。虐げられてゐるのです。總てを打つけて、私逹女工は不平、不滿に反抗して行くべく、起たなければならないと思ひます。

休みは、一ケ月二回です、經濟力の乏しい處に、時間の無い私等は何も出來ません。切りつめた、生活に、疲れきつてゐる、私等は出來得る譯もありません。

かうした、女工と共に働く多くの、男工も同じく、虐げられてゐるのです。

百千年來、虐げられて來た我々勞働者は、男工も女工も一緒に起

つて私等の安全に生活し得る社會を、造らなければなりません。
　私等の力は、只ハンマ振る兩腕にあるのみです。此の強い生命たる腕を持つて爭つて行く事が、私等勞働者の急務です。

女中生活より受けた實感

西原妙子

一般に、育兒や家事の整理は、婦人の天職だと言はれて居りますが、しかし家計の豐なブルジョア階級の婦人は、自分のことさへしないで、女中の五六人も使つて、遊んでゐます、たゞ身を飾ること、夫の機嫌を取ることの外に、園遊會とか、音樂會とか云つて、衣裳比べに出掛るのが關の山です。

　一方に女中は、かうして遊んで贅澤をしてゐる人達の身のまはりの全部の世話をしなければなりません。如何な種類の職業婦人でも相當にいやなことはありますが、まして女中として一つの家庭の中に奴隷となつて、働いてゐる者ほど哀れな、悲慘な境遇に泣いてゐるものは、他にないと思ひます。

　私が此の二三年の短い生活の間に、受けた侮辱は、どんなことがあつても忘れません。

　隨分理解のある方でも、女中を使つてゐる人は同じやうに、だらしない使ひ方をして、女中に休息の時間を與へません。そして無理な要求をしたり、目の前にある物まで取つてもらふと云ふ仕末で、言葉も侮辱をした使ひ方をして、まるで女中は異つた人種のやうに取扱つて居ります。何故女中は、人のいやがる後仕末や、きたない勞働をして、人間並の待遇を受けられないのか知らと、朝夕頭をなやましました。

　始めて女中をされた方は、誰でも、主人に對して使ふ『遊ばせ』言葉と、女中に對してされる命令の言葉との差がいかに區別されてゐるか、亦、人格を無視されてゐるかに驚かないものはないでせう。三つ四つのやつと口の開ける子供にも、同じやうに、何々や『これをしてくれ』『あれをおし』と命令されます、それがどんなに無理であつても、聞かなければならぬ時ほど、實に殘念なことはありません。食物は、料理をするだけで、女中は別に不味物で拵へるか、さもなければ、主人が箸でつゝいた殘りをいただくのです、御飯も煮立ての暖い時に、食べることはありません。奥の方が終つて、私共の食べる頃には冷たくなつてゐます。家によつて違ひますが、たいていの處では、女中の食室はなく臺所の板の間ですませます。食事中も落着くことはできません、御用聞きの商人が來ますやら、奥から呼ばれるやら一寸も自分の時間はありません。其上掃除の仕方が惡いとか、蒲團の疊み方が惡いとか、顏洗ひの準備が遲いとか、實にくだらない小さいことで、お叱言を受けます。他の職業ならば、一定の時間中働けば後は自由な身となりますが、女中は目の開いてゐる間追ひ使はれます。肉體上に一番苦しいのは、夜の遲いことです。いくら眠くとも寢ることが出來ず、それからと言て朝寢も晝寢も出來ません。睡眠不足は補ふことなしに增すばかりです。今まで居眠をしたことのない人でも女中に來ると居眠をします。

　私は女中に入る時、小間使をしながら餘暇に勉強する約束で來ま

た。しかし前言つた通り晝間は暇がありませんので、勉強しました。けれども一日の疲と睡眠不足で二三頁も讀めば眠くなります、その原因は、主人に對して始終氣を使つて、精神を疲勞さしてゐるせいもあります。また何時呼ばれるかも知れないといふことに、朝から寢る迄身體を賣切りにしてゐるやうなもので、自分だけ本を讀んでゐるといふことが、朋輩に對していやな感じをもたせることで、落着いた氣持になりません　從つて讀んだことも頭に入りません

私はかうした生活を續けて行くことが、非常に苦痛になり、ブルジョアの生活に多大の反抗を持つやうになりました。私は一生主人の支配から脱することが出來ないと考へました　儉約して、貰つた給料を全部貯金したところで、資本家にはなれないし、かうして勉強した位では、出世することは到底望まれないことです。私は其内社會問題に關する本を讀んで、自分達の境遇の惡いのは、社會組織が惡いのだといふことを知りました。社會組織が變なければ、解放されることは出來ません。

それは今のやうな個人々々が財産を持つてゐることがやがて、共有財産の社會になることです、共有社會が出來さへすれば、財産の權利で人を使ふやうなことは出來ません。從つて平等な樂しい社會生活が營まれます。私共壓迫されゐる階級の人々は、一致協力して新社會の建設に努力しなければなりません。

表紙圖案入選發表

一等入選
賞金　貳百圓

中島五郎　名古屋市中區榮町

二等入選
賞金　五拾圓

加藤綱三郎　東京府下上戸塚町一一四

森田佳鳳　東京府下日暮里元金杉町一三四

附記

意外に思つたほど多數の應募圖案の中右三氏が入選されました。

本號の表紙は一等入選者中島五郎氏の圖案です。選外のものにも圖案としては入選圖案以上に優れたものがありましたが何れも永續使用の性質に缺けて居た爲め採用出來ませんでした。

女性改造編輯部

私の尊敬する作家

——入選五篇——

應募原稿は、机上山をなすの多數に上りましたが、遺憾ながら優れたものはありませんでした。それで、作家の人物には依らずに、原稿の内容如何に依つて社中で嚴選しました結果、左の五氏が入選と決定し、薄謝金貳拾圓づつ贈呈することに致しました。

谷崎潤一郎氏

磯貝總子

過去には少しく變遷があつた。現在では私は谷崎潤一郎氏を最も尊敬して居る。未來のことは知らない。しかし私が、『おぼろげに私が持つて居る、あこがれと同じやうなものを氏は私よりもはるかに高い程度に洗錬し、淨化して持つて居るから。』かう信じて居る間は、氏は私の最も尊敬する作家である。『あこがれを知る人ぞ我がなやみを知る』と言つたゲーテのミニヨンと同じ心で私は氏を尊敬する。『愛すればこそ』にしろ『お艶殺し』にしろ又は『法成寺物語』にしろ、その他時々發表される雜誌の短篇にしろ、とにかく氏の作品に對しての世評は所謂唯美派、惡魔派の作風といふ定評である。そしてそれが又一派の嘆賞である。

なるほど氏の文章字句は艶麗である。空想は自由奔放である。それ故に、たとへば夏の眞晝の太陽の下に、眞紅のばらの花瓣が微かにゆらいで、殘忍な雌蜘蛛の姿を花の香に醉ふて眠つて居る蜂の後に音もなく吐き出すと云つたやうな技巧は、或は一部の人々からは作り過ぎて居るといふ非難もあらう。然し私は氏のさういつた技巧なり文章なりをとほして、さまざまの事を考へさせられる。氏の性格や人生に對する態度も亦そこから考へて見たいのである。

第一に——。

あの空想的な唯美派の作風に依つて、氏が何かしら現實を離れた世界へのあこがれを抱いて居ることを感じるのである。氏の尊敬すべき

そして又うらやましい程に豐富な空想が大きく翼をのばして、空想の世界の中にも尙現實と同じ位の强さと、眞實さを以つてせまつて來るさま〴〵の現象を描き出す手腕は、自分のあこがれをスラ〳〵と發表し得ぬ私にとつて最も崇拜すべき點である。唯美派であるといふ世評が起るのは氏の人格中に現實に見えざるものに對する、あこがれがあるからであらう。

幻影として心に浮んだものも、實際に自分の身に體驗したことも、今になつて考へて見ると私にとつては判然とした區別はない。自分が確かに體驗したことでも、もう薄くぼんやりと消えかゝつて居るものもあるし、ずつと昔不圖したはづみに幻影として心に描き出した小さな、きれはしのやうな一場が反つて、いつまでも濃く生き〳〵と彩られて殘つて居ることがある。夢よりも淡く消え去らうとして居る現實の經驗は、私の歷史から何時の間にか除かれてしまふだらう。たとへ古めかしい色褪せた日記帳の中からその經驗が見出されやうとも、それを自分の經驗だと云ふことが、不可能なほどその記憶は薄れてしまふかも知れない。日記に書かずとも又現實の經驗はせずとも、今も尙はつきりと不思議になやましい程の力强さを持つて心の中に展開さるる幻影の圖こそ、何時までも消えない眞實の過去ではなからうか。そこで、

幻影に浮んで來るものを眞實として感じる力、描き出す力、理解する力を氏は充分に持つて居るのである。そしてそれを自分の生活の內容へ飽くことなくとり入れる力を氏は持つて居る。實に尊敬すべき力だ。

私のあこがれて居る幻影の世界は美しく薄絹に包まれて居る。薄絹の中には澤山の蕾がほゝゑんで居る。何かしら私の求めるものはないかと一つ〳〵摘んでは中をあけて見る。不思議な色をした光が私の幻想の世界を照して吳れる。その色は赤？靑？黃？紫？　そんなはつきりした色ではない。灰色？淡紅色？そんな容易に發表の出來る色でもない。私は心に浮ぶ幻影をはつきり發表しようといつもあせるのだが常に無益な努力に終つてしまふ。私がこんなとりとめもない話をはじめると氏だけは『わかつて居る。わかつて居る』とうなづいてくれるやうに思はれてならない。

第二に――。

惡魔派であるといふ氏の作風によつて私はどんな尊敬の念を起したか。

唯美派であるといふ批評が前述のとほり、何かしらこの現實の肉體の眼に見えざるものに對する、氏のあこがれが原因になつて居るものとすれば、惡魔派であるといふ批評は非常に原始的な潛在勢力に對するあこがれを求める心が氏にあるからだと思ふ。私は人一倍原始的であることが好きな女だ。氏の作品を見るとその中に出て來る人物は技巧的で幻想的で空想的な特色を持つて居るが、又思ひ切つて殘忍な動物的な色彩を帶びて居ることがある。そしてそこにある深みが感じられる。また何かしら自分の探して居るものにぶつかつたやうな氣がする。

原始人の生活に比べたら、所謂文明的な生活、進化した生活と云ふべき現今の人間の生活があまりに人爲的に栽培された、温室の花のやうに思はれることがある。野生の時に持つて居たとりつくろはぬ色、力強さ、新鮮味といふものが温室の花には欠けて居ることが多い。勿論温室の花には又特有の美點？がないではないが――。

同様に原始人の持つて居た潑剌たる美、溢れるやうな力、身體の強い抵抗力、さういふものが文明に進めば進む程失はれて行くやうな氣がする　一面から言へば粗野な亂暴な性質は影をひそめて、上品なおとなしいおだやかな性質が文明人の特長となつて行くといふ長所？も認められるが――。

けれども原始時代の性質が根本的に全然影を消したとは云へない。否むしろ潜在的勢力として確實にひそんで居るにちがひない。人爲的に外に表すまいと努力すればする程その反動としてますます強い、潜在的勢力となつて居るのかも知れない。私は自分の身體についてよくそれを體驗する。女の昔ながらの欲望はやつぱり消えはしない。不用意の間にその衝動はつよく表れる。女の本能の力　。それを私も持つて居る。原始時代を遠く離れた今の人類のしかも比較的文明に進んだ現代の生活の中に居て、すべてのものが原始時代の面影を失つたやうに見える時、私はまだ確か　殘つ　居る自分のその強い昔ながらの本能の衝動に驚き、かつまた何だか探して居るものにめぐりあつたやうな感じを抱くのである。それが、いやしいとか、惡いとか、動物的だとかいふことを判定する權利を持つて居ると思ふのは人間の思ひ上つた高慢な心であるやうにも思はれる。

氏の作品は時によつては温室の花のやうに美しい。しかしその花は野生の時の面影を全然失つては居ないといふ、ハンデイキヤツプをつけることが出來る。そこに氏の作品の價値があると思ふ。時によると氏は石垣の間の青草を偲ばせる様に氣持よく　その原始的のあるものを暗示して居る。石垣の間にも春が來れば青い草はつい〳〵と伸びて非常に原始的な何物かを暗示するものである。

戀愛を描かうと、殺人を描かうと、社會現象、自然現象を描かうと氏の作品は技巧こそ凝らしてあるが、所謂人爲的の善良さでもつて作品をぬりつぶしては居ない　原始的の高い香りがそこからもこゝからもなつかしく立ちのぼつて居る。

岩窟の中に裸體を恥ぢずに住んで居た原始人の生活、そこに偽らざる自然の姿がそのまゝ純眞の價値を表して居たのではなからうか。高高と澄んだ青い空に輪を描いて飛んで居た、荒鷲がだん〳〵に舞ひ下つて、餘念なく光をたのしんで居る女の肌をひき裂かうとした時男は如何に強い抵抗力をもつて女を守り鷲を追ひ斥けたことだらう。恐れと感謝に身を震はせ　、強い男性の胸に女はすがつて泣いたことだらう。

こんな遠い遠い過去の姿を今描いて、原始的色彩を濃厚に示してくれといふのはけだし無理な注文であらう　私はそれを要求はしない。現代を描いてその中に原始的の何物かを示してくれればいゝ。あまりに人爲的な善良、柔和、忍耐といふやうなもので作品をぬりつぶすこ

とは好ましくない。
氏はたしかに原始的なるものに對するあこがれを持つて居て、巧みにその作品の中に織りまぜて居る。
最後に言ふ。
單に原始的なるものに對するあこがればかりを如何に多量に持つて居やうと私はその作家を尊敬する氣にはなれない。同時に幻影に對するあこがれがあつて、自分を何か現代を超越した久遠のものに結びつけようとする努力をも共に有するが故に私は氏を尊敬する。
二つのはなはだ矛盾したものに對するあこがれを共につよく持つが故に、私は氏を尊敬する。

有島武郎氏

中川しげ子

現代日本の作家の中で私は有島武郎氏を一番尊敬します。凡てに貧しい私はその作品を片つ端から、讀破しつくしたわけではありませんのに、貧弱な讀書によつて得たところから氏の性格思想の一半を解しその藝術の殿堂をのぞき得たかの如く、きめてしまふのは僭越な氣持もしますけれど、『惜しみなく愛は奪ふ』のやうな思藻の中からはつきり掴んだ氏の性格なりその他によれば、氏は何といふ尊さを魂の奥深く持つ人でせう、尊敬せずにはなれません。
私の目に映じた氏は心を靜め思をひそめて、自分自身のほんとうの姿を見ようとする眞劍な人に思はれます。しかも氏は何といふ謙遜――神の前に價高き眞の謙遜をもつて、自身の醜さを恥ぢ悲しむ人なのでせう。そして此上なく自分自身を愛するが故に幾度かつまづき幾度か後もどりしまたながい廻り道をしながらも、完き自分を創り上げることにやはり思ひをひそめる人なのでせう。
これだけでも充分私はひきつけられますのに更に氏は自他の醜さの上に弱さの上に深い思ひやりをもつて、その弱さ醜さから來る人知れぬ傷を情け深くながめる人なのです。さう思ふ時醜い賤しい分子を多分にもつてゐる私にとつて氏は何とも云へぬ親しみ深い人であります、ことに『神を知つたと思つてゐた私は神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた』と云つてゐる氏の中に私自身の姿を見出してなつかしみをさへ呼び起します、キリストの教會を我れから離れて何かを探し求めながら、しかも何をも探りあてないでいら〳〵した氣持の中に其日暮しをしてゐた私に『外界の凡ての標準から目を反けてたゞ個性の扉を開け』氏のかうした言葉はどんなに私を深く省察させたことでせう、新たに元氣づけられて氏の歩んだその道をたとへ牛のやうにもせよたゞ眞直に歩んで來た、私は初て自由を得ました、かくして深く氏の人生觀に共鳴したわけなのです。
しかもつゝしみ深い氏は讀む者に深い、暗示を與へないではおかないこの尊い表現をも、一人の平凡な僞善者の僅かばかりな誠實が叫び出した訴へにすぎぬと謙遜してゐる。其の奥ゆかしさがそこにもほの

に香ふてゐるではありませんか。

氏のおもかげはまたその作品の中に遺憾なく表はれてゐます、立派な性格をもつ作者だけがよき男よき女を描き得るのです、氏の作品の中に表はれる人物に憎まずに居れないやうな惡い人賤しい人を私はあまり見ません、そしてそれ〴〵の人がすなほに書き現はされてる中に讀者の心を清めるに、充分な美はしい表現と技巧がまたしても私の心を捉へ去ります、そこにも氏自らの美はしい魂が秘められてゐるのではないでせうか。

『星座』の圓、『死とその前後』の夫、『平凡人の手紙』を書く人、それらはどうしても氏自身である氣がしてなりません。

私の友達はかう云ひました、『或女』を讀んでから有島さんが厭になつたと。なるほどあれは隨分思ひきつた行の女を主人公として取り扱つてあつた、然し彼女が死に向して『私は間違つてゐた、人生をかう歩くんぢやなかつた』と深い悔を殘して死んでゆくその最後の頁を讀む時彼女の罪――彼女を包むいまはしい、噂の數々に心を亂しながらもなほ信と愛とに燃えて異郷の地にさびしく狂ほしく彼女を待つた夫、僕はエヴンゲエリンのやうにいつまでも、あなたを待ちませうとさへ思ひつめた夫、かくして愛に惱みながら一方生活苦と鬪はねばならなかつた夫、その夫を終りまで欺き通した彼女の恐ろしい罪も、この心からの悔によつてゆるされはしないだらうか、そんな風に思はれてほつと救はれた氣持さへするのはやはり、彼女が惡い女といふよりは間違つた方へずん〳〵進んで行つた女だといふ氣持が、彼女を憎ませないのぢやないでせうか、そして夫木村のもつ力強い愛、古藤のもつ正しい理性、岡の純な感情、それらのものだけが讀者の胸にいつまでも輝かしく殘るのぢやないでせうか。(欲目かも知れませんが)

それから『クラヽの出家』、それは何といふ深い感銘を與へる尊い作品であるでせう、くりかへし〳〵味ふてみました。もう一度あのやうな作を出してほしいとさへ願つてゐます。

『宣言』は痛ましく、そして眞劍な作でありました、私はあの女主人公のまじめな惱みを充分に味ふことができます、男の惱みも察しられます、思へばあゝした事實は私共の周圍に數多くあるのぢやないでせうかしかも彼等の如く眞劍である者は幾人あるでせう、胡麻化して生きてゆく男女が如何に多いことか。私は宣言によつて尊いものをしかと握らされました。『愛のあるところには常に家族を成立せしめよ。愛のないところには常に家族を分散せしめよ。この自由がゆるされることによつてのみ男女の生活はその忌むべき虛僞から解放され得る。自由戀愛から自由結婚へ』宣言は氏のかうした思想から生れでたのでせう。氏はまた階級文學の導火線であることは事新らしく云ふ迄もありません。私には既成文壇が行きつまつてゐるのやらならんのやらわかりませんけれど、勞働者が知識階級指導者の手をはなれて自らの力自らの運動によつて進まうとしてゐる、此頃プロレタリア文學の興つたことは眞劍に考へさすことだと思ひます。

稼げども稼げどもなほ貧しかり
じつと手を見る

貧しき詩人啄木によつてすべてのプロレタリアートのもつ等しき嘆きが如實に歌はれたやうにプロレタリアのほんとうの叫ほんとうの思想はブルヂョア作家によつて描かれ得べきではありません、惨苦なプロレタリアによつてのみ眞のプロレタリア藝術は輝でせう。來るべき社會が決してブルヂョア文化の存續でないことを知り、經濟的無階級とも云ふべき、合理的な社會が現出されるだらうことを信じ待つ敏感の人によつてのみ第四階級の運動は進捗するでせう。有島氏は極印づきのブルヂョアではありました、しかし氏が如何に貧しき者に深い理解と、同情をもつかまた如何にブルヂョア的生活の嫌厭を感じてゐたかは氏の財產放棄によつて明かに見ることができると思ひます。

氏は四百五十町歩の所有地を開放し凡ての舊籍を手放しました、かくて一資本王國の國王として、純然たる支配階級にあつた氏が今や私共と等しき無產階級の人となつたのです。そこから生れる氏の藝術は私共を更に深い感激に導くことでせう、私は氏に多くを期待してゐます。

それはかりではなく、氏のブルヂョア生活の放棄は同じブルヂョア階級を刺戟して第三階級の崩壞を早からしめるに力あるものでせう、第三階級の崩壞を助けることはとりもなほさず、第四階級の建設を助けることです、だから氏は來るべき社會の現出に不斷に努力してる人とも云へるでせう。

しかるに氏は『第三階級にのみ主に役立つてゐた敎養の所產を第四階級が採用しようともそれは、第四階級の賢さであるとは云へても第三階級の功績とは云ひ得ないではないか』と云ひ、『今後私の生活が如何やうに變らうとも、私は結局在來の支配階級の所產であるに相違ないことは黑人種がいくら石鹼で洗ひ立てられても、黑人種たるを失はないのと同樣であるだらう。從つて私の仕事は第四階級者以外の人々に訴へる仕事として終始する外はあるまい』と云つて自身がどこまで行つても第四階級には無緣の衆生であると述べてゐる。

それがたとへクロポトキンのやうな立ち優つた人であつても、クロポトキンが勞働者そのものでない以上、彼は勞働者と活き勞働者と考へ勞働者と働くことはできなかつたのだ、彼が第四階級に與へたと思はれるものは第四階級が與へられることなしに始めから、持つてゐたものに過ぎなかつた。としか信じてゐない氏の言として尤なことに思はれます。私はそこに氏の透徹した自己反省と眞劍とを見出して更に引きつけられて行きます。

たゞ利益の爲めにまた名を成す爲めに、プロレタリアをかつぎまはす所謂自稱プロ作家なるものがあるのだ、と云つて大に憤慨してる人を見ましたがさう云ふさもしい、作家は一度氏の眞劍さを見上げるがいゝ。また一かどの思想家の如く主義者の如く自任してるおめでたい人達も氏の謙遜の前に恥ぢるがいゝ。氏こそはまこと階級意識にめざめて虐げられたる無產者の爲めに涙と力とを惜しまぬ人なのです。私はこの點でもまた厚く氏を尊敬します。●

倉田百三氏

平塚政子

一

數多い現代創作家中私の心に最も近いのは倉川百三氏である。敬慕の情を傾けてゐるといつてもいゝ位である。

然も私は不幸にして氏の私生活について何の知る所もない。僅に作品を通して失戀と肺患？に悩める青年であること、病床に侍する貞淑な女性のあること位を知るにすぎぬ。

けれども私が傾倒してゐるのは私生活に於ける氏ではなくして、創作に表れた氏であるから私にとつて、氏の私生活は餘り重要なる問題ではない。

二

氏の私生活に疎い私は、氏の創作をも悉くは讀んで居らぬ。目を通した氏の作品は『出家と其の弟子』『愛と認識との出發』『歌はぬ人』『父の心配』だけである。

作品を通して氏の性格を想ふ上に重要な地位にあるのは『歌はぬ人』であるは言ふまでもない。『歌はぬ人』の主人公恭助は作者自身であり、お村は現に氏に侍する女であり、西上が西田天香氏であることは言ふまでもあるまい。で恭助に表れた性格の多くは作者自らの性格であると觀て大した誤はないと思はれる。恭助は『歌はぬ人』である。木村文學士の如く輕く樂しく歌ひ得ぬ人である。然も遂に歌はずには居られぬ人である。歌ふのではない泣くのである。生命の歔欷を禁じない人である。

倉田氏の性格は純一な生一本な性格である。人生に對して極めて謙虚な、敬虔な態度を持して居られる。強烈な自己罪惡感の上に宗教的精進の途に上つて居られる。

其の性格の反映たる氏の作品に輕い、ほほゑみの影だにないのは當然である。作品のすべてに通じて壓せられるやうな遣瀬なさがある。どこかに人間の慟哭の聲をきく。寧ろ死を希ふやうな淋しさが漂つてゐる。然もその慟哭の聲の中に、死の淋しさの底に湧き上つてくる隣人の愛がある。人間愛が光つてゐる。

私が木村文學士流の片々たる現代作者—自然主義派といはず、耽美派といはず、後浪漫派といはず——の中に唯一人氏に傾倒する所以も亦實にここにある。歌はぬ人の歌こそ眞に人間の聲である。詩である。人生そのものである。

三

倉川氏が私の心に忘れ得ぬ人となつた、その最初は大正六年八月であつた。私は其の頃長男をなくして悲歎に暮れてゐた。不調和な人生に呪ひの眼を向けずには居られなかつた。丁度その折であつた。偶然手にした倉田氏の『出家と其の弟子』は暗い人生の底に彷徨してゐた私の心に一條の光明を投げてくれた。私は夕日の翳つた薄暗い窓によつて、熱い涙にぬれながら幾度讀み耽つたか知れぬ。

あの人間味に徹した淋しい然も温かい親鸞聖人の一つ一つの言に涙を流して感謝したか知れぬ。そして聖人を通じて作者に欽慕の誠心を致さずには居られなかつた。

『出家と其の弟子』に表れた思想が眞宗の教理と相容れぬ所があり、親鸞聖人の信仰と反する點のあること、無神論の上に立つ佛教が一神教の教理たる審判の思想を容れぬこと、眞宗が祈禱の思想を許さぬこと等は高楠博士の所說の如くであらう。『出家と其の弟子』が全く基督教的思想の上に說かれてゐることは私達も首肯する所である。けれどもそれがために『出家と其の弟子』の藝術的價値に寸毫の狂ひもないことは言ふまでもない。

親鸞聖人を題材とした作品の亂出にはあきれられる。然も『出家と其の弟子』の上に出づるものは遂に認められぬ。

四

氏の作品に讀む者の靈魂を搖がす力の籠つてゐることは氏の性格に根ざすことは言ふまでもないが、一は氏の創作の態度と理想とに職由すると言はねばならぬ。

氏は自ら創作の態度について次のやうに語つてゐる。

『自分の心のなかには表出の道を外に求める内面の壓力がある。名譽心のためでない。パンのためでない。純粹な表出欲がある。自分はその力に壓されて創作する。……自分は實に動物が尿を排泄し汗を分泌する如くに、自分の靈魂が生き成長してゆく時に生ずる有機作用の如く表現するのである。』

即ち氏の創作は歌はざるを得ずして歌うた詩である。氏には創作が生命の營みである。蛇が其の皮を脫ぐが如く創作することによつて一段づつ高く成長し得るのである。されば氏の創作は單に内部經驗を如實に描寫するための表現ではない。表出によつて自己の相を確實に認識せんとするためでもない。自己の經驗感情を他人にインフエクトするためでもない。又自己の内部經驗を味ひ返すためでもない。止むに止まれぬ成長の一過程である。この態度こそ藝術家に最も重んずべき眞の態度であることは言ふまでもない。創作の生命は實にこの態度の上にのみ贏ち得らるるのである。

五

氏の創作は成長の過程に於ける必要なる一つの營みである。成長には必然的に方向と到達點とがあるべきである。

氏はその方向と理想とについても自ら下の如く言つてゐる。

『耶蘇や釋迦は人生の悲哀と不調和を感じ拔いてゐる。しかも其の言葉には勝利の朗々たる響がある。弱々しい哀音はない。自分もかかる大音聲を發し得るやうになりたい。自分の創作的努力はかかる一念發起の願心より生ずる。自分は自分の成長のために創作すると言つた。然しその成長とは自分にとつては解脫することである。自由になることである。――自分は此の世界を調和ある一つの全體として胸に收めて生き得るやうになりたい。かかる境地は成長の極點である。自分の最上の理想である。併し見かけのまゝにては世界は不調和に滿ちてゐる　自分は自分　創作に於て此の不調和の眞相を、

其の情態原因に淨化したい。而してその不調和の奥に調和を見出し得るまでに自分の眼を深め、淸めて行きたい。實感として何等の誇張も無理もなく此の世界を調和の世界と此の眼に觀、この心に感じ得るやうになることは自分の藝術の目的である。」

不調和な世界に調和を觀じ、靈魂の悩みを根柢から除き去ることはすべての人の至願である。深い宗教的生活がそこに見出される。（實生活と乖離せざる）私の終生の本願も亦そこにある。私は藝術も亦そこに根ざさなければならぬと信じてゐる。ここに根ざした創作のみが私の要求する所のものである。これ倉田氏に共鳴し傾倒する所以である『出家と其の弟子』が不調和な世界に調和相を見ださんとする努力の一過程にある所產たることは何人も首肯する所であらう。善鸞と父親鸞との關係は人生不調和の最たるものである。互に愛し合つてゐる親子が義絶しなければならぬ、これ人生の不調和でなくて何であらう。喧嘩とかへでの戀も亦不調和の一つである。作者は戀の不調和をば戀と隣人の愛との區別によつて、調和を見出さんとしたが親鸞父子の信仰の不調和は遂に一致點を見出さずに局を結んでゐる。然もすべての不調和な絶對他力に沒入した報謝の生活 まかせたる生活によつて窮局の調和を見ださんと努めたのである。然して親鸞のまかせたる報謝の生活と作者の祈禱の心境との矛盾が、一部論者から親鸞劇として批難さるる所以である。

六

最後に一言言したいことがある。それは、倉田氏がその藝術に於てアクチュアルな人生を調和あるものと感じ得るために死後の世界『彼の世』を認めることを辭さぬといふ一事である。氏はかく言つてゐる。『人間の死や不幸や不調和を生かす力は「彼の世」に秘められてゐる。人生の重要なる問題は悉く「彼の世」に亘る問題である。――「彼の世」の神祕な光景を想像力の限り描きたい」

藝術に於て想像力の重んずべきことは言ふまでもなく、死後の世界を描くことが惡いのでもない。然れども『彼の世』によつて『この世』の不調和を調和せしめんとすることは輕々になすべきことではない。宗敎に於てさへも靈魂の慰安を『彼の世』に需めることは多く失敗の歷史を有してゐる。平安朝末の無智の世に於て開かれた淨土宗さへ親鸞によつて一轉して現世敎たるかの觀を呈するに至つてゐる 親鸞宗の眼目たる報謝生活は現世卽淨土と觀ずるのである。

氏は『出家と其の弟子』中親鸞の臨終の場合に於て淨土の光景を描くに力を盡してゐる。

『皆跪いて三寶を禮拜してゐる 金色の樹の實が枝を離れて地に落ちた。皆それを集め十方の諸佛を供養するのぢやあ、花がふる。……』

臨終の親鸞にかうも叫ばしめてゐる。然も親鸞は、京都に於て將に死せんとせし時、

『それがし閉眼せば賀茂川にいれて魚にあたふべし』

と悲痛の語をはかれてゐる。親鸞は淨土の莊嚴に安價な慰めを得て滿足してゐる者ではなかつた。

私たちはあくまでこの世の不調和を不調和として痛感し、不調和の

ままの調和をこの世に見出さねばならぬ。そこにすべての人を繋ぐ人間愛――倉田氏の隣人の愛が醱酵するのではなからうか。私共は最後まで忍ばねばならぬ。生活に於ても、藝術に於ても輕々しく『彼の世』に遁れてはならぬ。

倉田氏はその藝術に於てもつと人生の不調和に苦しむべきである。想像の『彼の世』へ墮してはならぬ。私は氏の藝術のすべてに傾倒してゐるが故に敢てこの苦言を呈する次第である。

武者小路實篤氏

若狹　きよ

人間は理想を有つ。然し人間が人間であることを棄てゝ人間以外のものに成らうとする事は、火をして水に代へしめようとするのと一緒である。

我々は神といふものを概念的に考へて居るが、それは人間の有つ總てを放棄したとき見られるやうなものである。修養といふものが己を欺くものでない限り、我々は如何に醇化しても、神(概念的な)の領域には達し得られないものと思ふ。いや神に生れ代らうと思ふべきではない。この見地から理想や理念のみを標的として、神に生きんが爲めに、修養によつて自己を欺瞞しようとするやうな人生觀をもつ人は什麼にそれが美しさうに見えても尊敬する氣にはなれない。

何かしらそこには空虚がある。悶えても苦しんでも解決されない矛盾を感じる。

我々は人間の與へられたものゝ總てを肯定しこれを點檢しつゝ、人間として人間を最上に生き度い。

現今文壇の人氣者は實に十指に餘る。然し理想の爲めの理想を追うて人間を忘れて居る者、而して理想と現實との不調和に苦しみ乍ら、自己辯護に終始する作品を、美しき幻想に名を藉りて藝術の神秘を瀆す者などの如きはまことに顰蹙に價する。

トルストイが其晩年『藝術は美しき虛僞に過ぎない。』と言つたといふが、かゝる作者に下さるべき皮肉なる讃詞かも知れない。

我敬愛する武者小路氏その人の作品は全くかゝる欺瞞がない。それは絢爛眼を奪ふの華さはないであらう。然し徒らな誇張がない。

有るがまゝの姿を有るが儘に寫して居る。どの作品を見ても非人間的なものは一つだつてない。而も美醜に對しては、又善惡に對しては極めて敏感であるから、無氣味な位突込んで書くけれども、すなほに現はれて居る爲めに不快ではない、尤もだと頷ける。而して反省させられる。

鋭い官能と透徹した頭腦とによつて、物事の本質をつきつめなくては止まない性格から、心理描寫の精巧さは驚くばかりであるが、少しの衒もない。而も最も直截簡明に自由に表現して居る。

脚色の如きもかまへて拵へ上げようとするやうな不自然さがない。その間何等の技巧をも弄して居らぬ。無技巧の技巧とは、かゝる作品を云ふのであらう。

全く氏の作品には人間の血が躍動して居る。だから氏の作品に接すると、自分といふ人間も生きてゆけるのだ、さうだ、人間として生れたことを感謝しなければならぬのだ、と思ふ。

昔日の浪漫主義に騙された頭が、此地上に呼吸づいて居る人間に返つて來た時、何とも言へない心易さを覺える。而して總ての物が完全なる調和を保ち乍ら、それ自身を樂しんで居るかのやうに見えて來る。

氏は人間が人間に與へられたものを本當に歡びを以つて、活かして呉れるものは藝術家だと言つて居られるが、この平凡にも見える一句の裡に絶大の眞理を含んで居ると思ふ

この人こそ我々に本當の幸福を齎して呉れるであらうといふ氣がして、人類の誇とす可き天才の一人が我日本に在ることの幸福を感謝せずには居られない。

思索の爲めの思索に耽つて、これを　行しない人があるが、實行することによつてその思想は値打づけられるものと思ふ。いや本當の思索は實行と二元になり得べき筈のものではあるまい。

この意味に於て氏は將に眞の思想家であり、眞の藝術家であらう。

氏が階級意識の最も甚しい華胄界に生れて、放恣と懶惰と倦怠との生活の中に置かれ乍ら俊敏なる其理性は絶えず内省を怠らなかつた。思想と實行との矛盾を糊塗すべくあまりにも道徳的潔癖であつた。

止み難きその内的爭鬪は人道主義の旗幟を樹て、『白樺』により、白樺派藝術として文壇に新生面を展開するに至つた。

日向の一寒村に『新しき村』の創設。

當時世人の耳目を如何に聳動せしめたであらうこの企も、思想即實行の氏にとつては當然かくあらねばならぬ、良心の欲求であつたのである。

さて氏の主意には共鳴しても、氏の心境にまで到らぬ村民同士の間には幾多の折衝があつた、加ふるに經濟上の窮迫にも幾度か惱ませられたのであつた。

しかし氏はよくこれ等の艱苦に堪えた。

これによつても如何に氏が、藝術に生きて居るかゞ覗はれるやうな氣がする。

『藝術家は決して オリンピアの高所に彷徨して居るものではない。』と言つた杜翁の言葉を憶うて、私は武者小路氏に感謝したい。

私は藝術的作品の生命といふやうなことを深く考へて見たことはないから判らないが、丁度トルストイやシエクスピヤの作品が今なほ不朽のやうにいや永劫に不朽であると豫想されるやうに、武者小路氏の作品も亦何百年か何千年か、それは判らないが兎に角後世にまで傳はるであらうことを信じる。

我天才武者小路氏に祝福あれと祈る 而して永く我々のよき指導者であることを希ふ。

里見弴氏

角田まさえ

其の短篇なり長篇なりを讀み進むうち『うまいなあ!!』と思はず膝を叩かせる作家が現文壇に幾人居るでせう、强ひて擧げようとした所でやつと四人か五人位のものでせう。その數少ない人々の内の第一人者とも云ふ可きものは我が里見弴氏だと思ひます。氏を除いては他にこれを求める事は不可能ではありますまいか。それ程氏の作品には冴えがあります。うま味があります　完璧があります

氏のうまさは實に名工のそれです。氏が鋭利なペンを紙面に當てた時其處に削られるものは何でせう。削り上げられる彫刻は如何なるものでせうか。

ロダンのそれの様な雄壯なリズムを持つたものではありません。ゴオグのタッチの様な目まぐるしい、狂ほしい叫びを叫んでゐるものでもありません。ルノアールの線の様な溫い艶めかしさを持つものでもありません。例へば支那の中世期に勃興した細かい線を自由自在に使驅する美術か、日本中古の彫刻のそれです。あの恐ろしく緻密な透し彫か、くつきりとした浮き彫りか乃至は毛彫りにも比すべき技巧を持つてゐるのが我が里見弴氏の作品では無いでせうか。一絲亂さない所の最近の名文を讀んでほろりと感じ入らないものは、おそらくありますまい、うまいなあと双手を擧げないものはおそらくありますまい。それ程澄み切つてゐると思ひます。

そのうまさも唐突に輝き出したのでは勿論ありません。ずつと以前から然うした芽生えは見えて居りました。氏が白樺を乘りすてゝ兄の生馬氏よりも、その兄の武郎氏よりも、もつと早く文壇的に有名になつて間も無かつた頃の作『俄あれ』や『妻を買ふ經驗』などに早くも現在のうまさを思はせる丈けの或るものが吹き込んでありました。前者の深刻な描寫に於て、後者の眞劍な觀照に於て….。

それから幾變遷はありました。けれど主流一貫して益々雄渾な境へまで進展して來たものはあの頃芽生えて居た所の、うまさに外なりません。改造の新年號の作やサンデー毎日の新年號の『暗い夜空』と云ふ小品や改造三月號の『操り逵摩』などは誰が何と云つても完璧な作品です。こゝろみに『暗い夜空』といふ小品を讀んでごらんなさい。實に渾然とした傑作です。

『……ぶら〳〵歩いてゐるうちに、ひとりでに浜町堀の方へ足が向いてゐた。左衞門橋を渡りかけて、中ほどで立ち停つて、欄干に凭つて眺めた。暗い晩ほどこゝの夜景は映える(中略)

右はズボンの衣嚢のなかに、チヤラリ〳〵錢を弄び、左の肘で身を支へて、組み違へた足の爪先で、橋板をコツ〳〵蹴つて調子をとりながら、口笛で、ハイドンのセレナアドをふいてゐた。暫くさうしてゐるうちに、出してゐた方の手先が冷くなつて來たので緩く握つて口にあてがひ、丁度喇叭でもふくやうな工合に、息をくれた。』

と書いてあります　其れから十一月になつて夏の麥稈帽をかぶつて

ゐる人の氣持が書いてあるのですが、その氣持の推移などは吟味に値するうまさだと思ひます。改造新年號のは藤森氏だつたか小島氏だつたかゞ時事の文藝欄で書きましたし、その他の諸氏にも問題にされた樣でしたが今度の『操り達磨』もあれにまけないうま味をもつてゐると思ひます。

氏は兄さん達と異つて非常な通人だと思ひます。その作品にも隨分さうしたものを見受けます。而し氏の通人としての性格にはキザな所がありません。厭味がありません。何となく親しみやすい通がり方です。と云つて平凡なのではありません。むしろユニークなんです。

何時頃だつたでせう。五六年前にもなりませうか。新潮だかへ夫人が月評や何かを解る樣になつた事を書いたのがありました。その中へ武郎氏夫人の和歌『世より世を照る大きさに似て』と云ふ下句の何でも婦人といふものが子供に對して持つ愛情をたとへた歌でしたが、それを引いて來て夫人への自分の氣持を書いてゐました。が夫人の前身が前身丈けに私達には興深いものでした。あれに依つて私は弴氏の人格の大要を把握し得た樣な氣持さへしました。それと同時に敬愛の念をもより深めたので御座います。實に重厚な人格を底の底の方へ湛へてゐる方だと思ひました。

『里見弴に二本さゝせてちよん髷を結はせたなら、さぞ立派なものだらう。瀟洒して置くのはもつたい無い風格だ。』とはあの頃の文壇の専らな取り沙汰でした。さうです。氏は實に立派な容貌を備へて居ます。あの聰明らしい額ぎは、律々しく整つた兩眼、落ち付きをもつた眼光艶かに引きしまつてゐる口元、ノーブルな鼻の格好、それから頬や顎のあの彫刻の樣な曲線——誇大して云ふならば實に、男子の美點といふ美點を集めたかの感があります。あれで更に澁味があつて而も剛々としてゐたなら何んなでせうと何時も私は思つてゐたものでした。が未だに面接の機會を得ませんので殘念に思つて居ります。でも茶氣のある方が文壇好男子番附でも、作製なさる樣な事があれば勿論弴氏は大關でなければなりますまい。

その整つた克明な風貌——それは取りも直さず、作品の上に再現して居ります。人がよく云ひます。品格は作品に滲み出ると。實際でせう氏の克明な風貌はその儘作品の上に露はれて居りますから、あゝ。あの技巧の冴え、一片一片に降り積つて行く雪の樣な緻密な書き方、それは舌に載せて何時までもくる〳〵と廻して味ひたい程なうま味です。如何に菊池寛氏が騒いだ所であの荒削りな筆致がこの緻密なものに及ばうとするのには一生かゝつても未だ足り無いでせう。恐らく及びますまい。名工里見弴氏。あゝ、私の心は自由な筆致に誘はれてしまひさうです。

氏と菊池寛氏との論爭には見る可きものが多分にありました。あれに依つて氏は氏の藝術家としての立場を闡明してゐます。里見氏には里見氏としての藝術觀がある筈です。菊池氏には又菊池氏としての信念がある筈です。その兩者の主觀といふものは或る類似點はあるにした所で當然一致は見得られません。若し合一する樣な事があつたら私

理はつまりません。より個性を尊重しなければならないものは藝術家ではありませんか。より自己を浮き出させるものは藝術家ではありませんか。ブルジョアジイのプロレタリアートの人道主義の耽美主義のと云つた所で要するに、一人一黨でなければ眞の藝術道とは云へませんもの。其處に於て兩者間に爭ひを生じたからとて何の不思議がありませう。あゝした場合にはお互ひがほんとうに眞劍になつて自己を凝視します。ほんとうの血から出る叫びを叫びます。あれは眞に尊い藝術です。それを兎や角横槍を入れたり、けしかけたりするのはいけないと思ひます。血みどろになるまで二人を鬪はせるのが本當でせう。

何と云つても里見弴氏の腕は冴えて來ました。白金の獨樂の目に見えぬ廻轉にそれは澄んで來ました。あのコツ〳〵と削つて行く細かな細工、複雜な離合、まあ何といふ立派さでせう。プロレタリア黨と稱して粗雜な、藝術であると呼ぶのさへ躊躇される樣な作品を發表されてゐる人々に、我が里見弴氏の爪のあかでも飮ませてやり度いと思ひます。

あゝ名工里見弴氏。あの秋の樣な觀照を棄て給ふな。冬夜の樣な靜觀を棄て給ふな。そして現在の妙技をより洗練なさつて私達を陶醉させて下さい。

（十二年、二月二十四日）

「私の尊敬する作家」の應募原稿の中、比較的優れたものの選外佳作として、その氏名だけを掲載しておきます。

兵庫	矢部たれ	滋賀	杉澤子
大阪	田村露子	北海道	萩村千惠
神奈川	荒谷はま	宮城	樋渡きよし
東京	櫻井榮子	長野	持田元
東京	無名人	東京	井伊梅子
秋田	栗林妙子	富山	愛場たな
東京	今川あくり	東京	橋本久子
東京	三久保茂子	神戸	後藤夏野
佐賀	杉木花子	京都	三上ふみ
山形	日向ふみ子	大分	溝部喜代子
福岡	たけ代	愛知	內海啓子
富山	水島黎子	鳥取	田中春野
熊本	河野カヱ	兵庫	原田しのぶ
長野	土屋好子	熊本	永田久仁
新潟	森井フミ	大阪	植田たみ
長野	彌津みゆき	京都	横江みれ
秋川	石塚津和	東京	久江鈴子



室伏高信

流行の社交と流行の女性

社交が流行すると云ひます。流行する仲間だけで流行します。如何なる流行でもさうであるのです。流行が一般の人たちの間に行き亙つた時にはそれはもう流行ではなくなつた時であるのです。だから流行することが一般的であることだとか、民衆的であることだとか云ふことと同じもののやうに考へたら大きな誤謬であるのです。

社交が流行すると云ひます。社交は流行するにきまつたものであるのです。流行するから社交であるのです。社交であるから流行するのです。社交は流行の舞臺の中央に立つてゐるのです。

一切の流行は社交から出てきます。モオデがゲゼルシャフトを産むのではない。社交が流行を産むのです。一切の流行は社交の派生であるのです。社交に鑑賞される文藝が流行の創作であるのであるのです。社交の間にもて囃される俳優が流行の役者であるのです。社交は流行の俳優、流行の創作家流行の音樂家を製造します。創作家、俳優、音樂家が流行してゐると云ふことはその人が社交界の玩弄物であることを意味してゐるのです。その人たちは如何なる場合にも民衆的であつてはならない。民衆的となつた時は流行家の名簿から削りとられる時であるのです。だから流行の藝術は常に階級的な藝術であるのです。

社交は人間の社會性から生れてくるのではないのです。人

間の社會性が滿足される社會では社交のための特別機關は必要てはないのです。近隣愛の行はれてゐる社會では社交はありえないのです。無階級の社會では社交はありえないのです。

社交の行はれる社會は階級の存在する社會です。階級の存在する社會とは金の支配する社會であるのです。甲と乙との關係が人と人との關係である場合には社交なるものはありえないのです。それが金と金との關係である時に社交は必然的に生れてきます。

だから社交は冷めたいのです。暖かな人と人と、愛と愛との關係の代りに、冷たい金と金、ダイヤモンドとダイヤモンドとの關係であるのです。社交場に集まる人、ダンス場に集まる男女を見よ。彼等の最大の苦心は、彼等ができるだけありのまゝの人間であることを隱すことである。首飾りを見よ。エメラルドを見よ。毛皮を見よ。フランス型の踵を見よ。人間はどこにもゐはしない。社交とは人間の社交ではない。金の社交である。金が安樂椅子に腰かけてゐる。金が舞踏場に舞つてゐる。

社交の流行につれて、いろ／＼な噂が新聞で傳へられる。何々子爵夫人がダンス場荒らしのある外人青年と醜くい關係に入つたとか。若しくは某々の貴婦人が賣淫的な稼業をしたとか。若しくは某の外人が日本の貴婦人は金で買へると云ふたとか、かうしたいろ／＼なことを新聞に書き立てることさへも一つの流行にまで高められた。しかも私たちは問はねばならぬ。金で買へない貴婦人があるだらうか。金で買へない貴婦人なるものが一人でもあるだらうか。金で買はれたから貴婦人であるのではないだらうか。金で買はれなくなつた時は貴婦人でなくなつた時ではないだらうか。ダイヤモンド、首飾り、フランス型、それが貴婦人の凡てゞあるのです。ピカ／＼したものによつて人間が押しこめられてゐる狀態を貴婦人と名づけるのです。だから貴婦人とは常に買はれた婦人であるのです。

魂は裸體である。魂に首飾りは入らない。裸體の美しさは魂の美しさである。買ふことのできるのは首飾りである。買ふことのできないのは魂である。だから貴婦人とは買ふことのできる女である。買ふことのできなくなつた時は裸になつた時である。從つて貴婦人でなくなつた時である

金で買はれた女を貴婦人と云ふ。その人たちと、その人たちの周圍に集まつてくる拜金家と性慾人との一團を名づけて社交界と云ふのである。それがブルヂョア社會の必然の要求なのである。それが流行の社交なのである。それが流行の女なのである。彼等をして夜を徹して舞踏せしめよ。黎明の悲しみを心ゆくまで味はしめるために。それがプロレタリヤ階級のせめてもの復讐であるからである。

小作爭議の解決策

小作爭議は何故起るでせうか。日本では勞働問題の中心が小作爭議に移つてゐるかに見えてゐます。都會の工場勞働者にばかり目をつけてゐた社會主義者がだん〲と農村に入り込んで行きます。ボルシエヴヰキの國際團體、第三インタナショナルの第四回會議でも農民のことが重大な問題として論議されました。そして結局社會革命をなしとげるためには農民とともに行くこと、從つてボルシエヴヰキが農民運動の中へ入りこんで行かなければならないと云ふことを決議してゐます。日本の共產黨の諸君が農民運動の中に割り込んでからもう半年以上にもなりませう。そこで小作爭議の起るのは社會主義者が煽動するからだと云ふやうな議論が出てきても決して丸つきり種子無しのことだとはいはれないのです。社會主義者の運動が無知な農民の心を動かして小作人を團結させることは日本でも外國でもその例はいくらもありませう。そつとして置けば從順なること犬のやうな小作人が社會主義者の運動のために昨日までは自分等のありがたい主人、自分等とは一段と種子の違つた人間であるかのやうに思つてゐた地主階級に對して一朝にして敵對的の態度をとるやうになることも決して珍らしいことではないでせう。だから地主の階級、ブルヂョアの階級または、これ等の階級の番頭役である政治家、敎師、新聞記者、僧侶牧師などの人たちが社會主義者を非國民扱ひにしてゐるのも無理のないことであるのです。社會主義者は慥に非國民であるのです。ほんとうの社會主義者は慥に非國民であるのです。國家は社會主義者の味方に立つてゐないからであるのです。これに對して國家は資本家や地主や政治家や敎師や新聞記者や僧侶牧師の類の所有物となつてゐます。そこで國家が非國家を憎むやうに資本家や地主や敎師や記者や僧侶牧師、浪花節語り、博徒、上杉愼吉、佐藤鋼次郎と云ふやうな人たちが社會主義者を憎むのが自然の成行であるのです。しかし社會主義者が煽動したために小作爭議が起るのは何のためでせうか。

社會主義者が金持を煽動して見たところで別に騷動は起りますまい。金持は知識のある人もない人もともに社會主義嫌ひです。知識がなければないほど社會主義を嫌ひます。金持本能が社會主義を嫌ふのです。女は男に比べるとより多く本能人であるのです。でブルヂョア女は一層社會主義を嫌ひます。社會主義は女のために首飾りも指輪も帶も買つてはくれないからであるのです。だから社會主義者がいくら金持の男女の間に社會主義を宣傳して見たところで、ごく少數の卓越

したブルヂョア——例へば有島武郎君のごとき——でない限り、そんな煽動に乗りつこはないのです。そこで社會主義者の宣傳の力には一つの限界のあることが分るでせう。貧乏線がこれであるのです

太古の時代を除いて、私たちの社會には常に貧乏線が引かれてきました。今日の社會には勿論都會にも農村にもこの貧乏線が引かれてゐます　都會ではこの線は社會をブルヂョア階級とプロレタリア階級とに分けてゐます。田舍では大體地主と小作人とにそれを分けてゐます。

何故に小作人は貧乏であるのでせうか。小作人は惰けものと決まつてゐるのでせうか。恰度その逆であるのでせう。今日の世の中では働く人は貧乏します。惰けてゐる人は富んでゐます。金持でなくては惰けてゐることはできないのです。それなら働く人は何故に貧乏するでせうか。それには直接には絞取りのためだと云ふのほかありますまい。小作人が何故に貧乏であるかは地主が何故に金持であるかを考へれば直ぐに分りませう。小作人の手で造られた米が金持の土藏の中に入つてゐるからであるのです。勿論今日の農民のうちで小作人だけが貧乏であるのではない。自作農も貧乏してゐます。地主でさへ貧乏なものが幾らもありませう。だから地主の絞取りのためだけで、農民が困つてゐるのだといふては言ひ過ぎであるのです。私はさうした煽動家の口調は眞似たくない。しかも地主の土藏の中に入つてゐる米が小作人の作つたものであることだけは疑ひの餘地がありますまい小作人が一年間汗油を流して稼いだものの半ば以上のものが自分の家にではなくて地主の土藏の中に入つてゐます。それだけ小作人が貧乏になつてゐることも疑の餘地がないのです。で農村における貧乏線の原因は直接にはこの小作米制度が存在してゐるためだと云ふのほかはありますまい。小作米とは搾取米のことです。小作米と云はないで搾取米と云ふのが適當だと思ひます。

小作爭議の起るのは搾取米があるかであるに外ならない。搾取米の制度のある限り小作爭議は絶えますまい。搾取米がなくなつたら小作爭議は起りえないことも勿論でありませう。で金持階級の側の人が小作爭議を起したくないとしたら浪花節をたのんで時代錯誤を人の心に織り込もうとしても、國粹會にたのんで干渉してもらつても、若しくは警察の力をもつてしても、小作爭議の避くべからざる勢を如何ともすることはできないのです。さうした行動は一時的には爭議を押へることができるにしても、被壓迫階級の階級意識を益々强めてゆきます。從つて階級鬪爭を益々遍在的にし、且つ深刻化してゆきます。

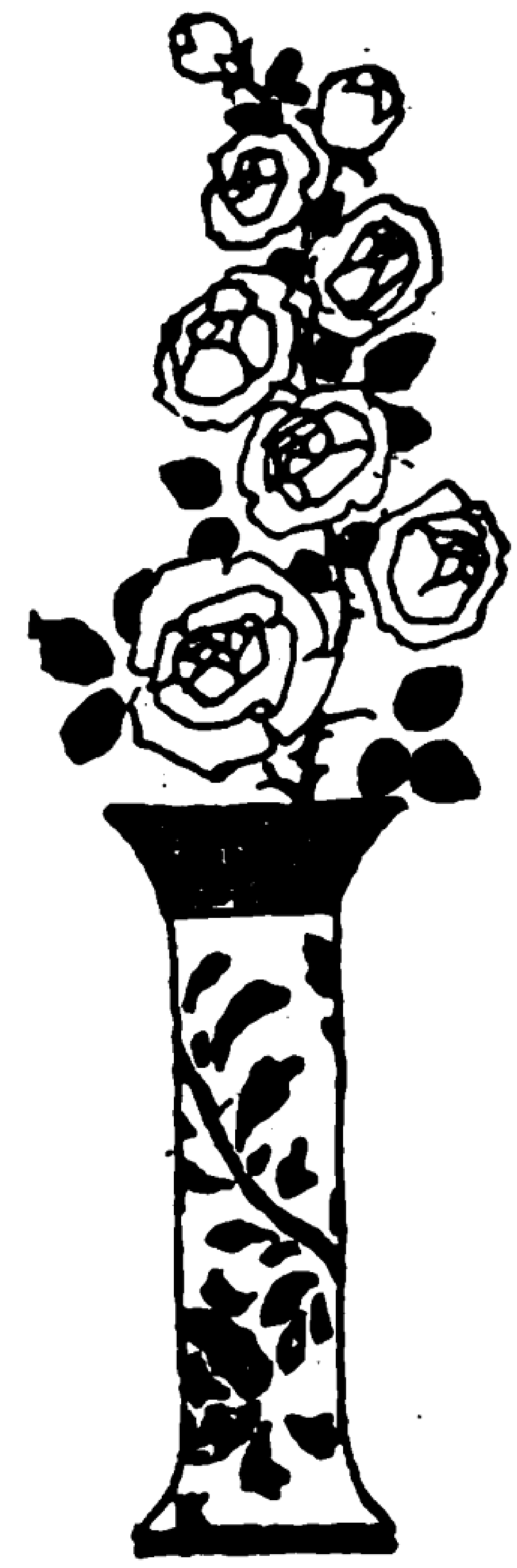
小作爭議をいくらか延ばしてゆくことはできます。それは農民に賄賂を贈ることです。賄賂は小作人の階級意識を弱めるだけの働きをもつてゐます。賄賂、尙ほ阿片のやうなものです。人間の腸を腐らせます。私は先きに教師や僧侶や記者や浪花節語りや博徒や上杉愼吉や佐藤鋼次郎等をブルヂョア階級の人たちのやうに云ひました。しかしそれは階級の嚴密な意味から云つてブルヂョア階級に屬すると云ふことはできないのです。その人たちはたゞ阿片を吸うてゐるに過ぎないのです。彼等に階級があるとすれば阿片階級であるのです。

小作人に與へられる阿片と云ふのは小作料を幾分か引下げることです。それによつて小作爭議を幾分か延ばしてゆくことはできます。しかし小作料がある限りまだ勞働の搾取が存在する筈です。搾取が存在する限り地主の土藏が滿ちて小作人の腹が減つてゐます。腹の中に入るべき米が土藏の中に入つてゐます。で小作爭議の種子はこゝに存在をつゞけてゐるのです。地主の土藏に一俵、搾取米でもある限り小作爭議は絶えることはできないのです。

地主は土藏に小作米がなくなつた時は地主そのもののなくなつた時です。從つてまた小作人のなくなつた時であるのです。つまり農村に階級のなくなつた時であるのです。

トルストイの「地主の朝」を讀んだものは慈善的（從つて僞善的）地主の慈善的な政策が農奴の幸福に何ものも加へることのできなかつたことの例を知つてゐるでせう。農奴の最後に求めるものは賄賂ではないからであるのです。農奴が廢止されてからも半世紀を超えてゐます。農奴が小作人になりました。しかも小作人が農奴よりも幸福であると見るべき一つの理由もないのです。そこで農奴制度のあつた時と同じく、小作制度のもとでも農村に不平と貧困と爭議とは絶えることはないのです。

トルストイに自分の地主としての生活を回顧して寄生蟲の生活であつたと云ふてゐます。地主は一つの寄生蟲であるのです。農村寄生蟲であるのです。有島武郎君が所有地を解放したことはこの寄生蟲生活から逃れたことを意味します。一疋の寄生蟲としての有島武郎が、一個の人間としての有島武郎になつたのです。從つてまた有島武郎なる寄生蟲に血を吸はれてきた小作人——奴隷が人間になつたことを意味します凡ての地主が有島武郎となつた時に小作爭議はこの地上に跡を絶つに至るでありませう。その意味で、少くとも日本では、有島武郎の名は、農民運動の歷史のうちで永久に美しい一つの光であらうと思ひます。



花に題して

たんぽぽ

白鳥省吾

エギゾチックな西洋草花も好きだが、ありふれた野の花にも無限の情があるものだ。西洋草花は人工、室內もくは温室といふものと關聯して照り映える。そし可なり高價である點で私達はさう自由に愛玩出來ない。私の知つてゐる或る園藝家が、『花屋は儲かるものだが、高い金を出して花を買つて行く者に、ほんとうに花を愛する心のあるのは少いことを考へると、花屋になるのも馬鹿らしくてやめた。』と言つて花を賣らうとせずにたゞ造つて樂しんでゐた人があつたが、それも一理であらう。今のところ西洋草花は堂々たる邸宅の客間や、安樂椅子に凭れて通俗小說を讀む貴婦人にふさはしくされてゐる。それは都會生活のいろいろな情景の中に一つの役割を勤めてゐるものだ。

東北の田舍生れの私は、春になると與ろありふれた野の花が想はれる。永い數ヶ月間、深い雪に掩はれた大地が斑らな雪溶けの間から黒く覗き出る。暗い空は呪文を解かれたやうに眩しく輝く、蕗の薹、土筆、すみれ、たんぽぽが競つて咲く。鶯や雲雀が啼く、蜂がうなる。蝶々が飛ぶ。まるで明るい童話の國だ。東北では櫻、梨、桃、等の樹木の花は四月末から五月にかけてから咲くので、春といふかつきりした輝やかしい印象はどうしても先づ野の花から始まる。

さうなると私達は毎日、野外でのみ遊んでゐる。一里ぐらゐ遠くの野原や沼べりまでもゆく。傾斜面の草原に野火をつけては踊るやうにして騷ぐ。松原山にちかい畑中に石斧や矢の根石を拾ひにゆく 昔の土族はこの邊に狩獵をしたことを明らかに示してゐる

野の花を思ふことは、大地の正しい韻律といふやうなものを感ずる。秋に一たび枯れたやうでも春が來るといつも其處から萌えてくる。此の奇蹟のやうな微妙に對して、ワルト・ホイツトマンも「草の葉」の讃を書いてゐる。

野の花はまた人類と共に始まつてゐるやうな永遠さがある。おそらくは、この邊に昔の土族の棲んでゐた頃も、今年の春のやうに、すみれ、たんぽぽが咲いてゐただらうと想像出來る。

そしてまた、いかなる寒さにも負けない抵抗力がある。生存の力強さがある。種族の傳播がある。

たんぽぽはそれ等の野の花の最も代表的なものだ。それは野の花ではあるが、土筆や菫のやうに餘りにさゝやかで內氣ではない。どこからも誰にも氣付くやうに光つて咲く。素朴で快活だ。まるで地上の小さい太陽だ。神の置き忘れた金貨だ。

私はいつか八月のそれは大正の初朝に太平洋海岸を歩るいてゐた、その時、偶然にも足下の沙地にたんぽぽの咲いてゐるのを見つけた。海は晴々しく青く凪いでゆつたりと呟いてゐた。八月にたんぽぽの咲いてゐるのに驚くと共に或る奇遇を感じた。そして私は直ぐに少年の日の故鄕の春を思ひ出したのである。たんぽぽは私にとつてなつかしい春の野の象徴である。

梅の花

櫻の花

若山牧水

きさらぎは梅咲くころは年ごとにわれのこころのさびしかる月

梅の花が白くつめたく一輪二輪と枯れた樣な枝のさきに見えそむる。吹きつめた北の風西の風がかすかな東風(こち)にかはらうとする。その頃になるときまつて私は故のない憂欝に心を浸(ひた)されてしまふ。

眼をあけてゐるのもいやだが、而かも心の底は明るく冷やけく澄んで居る。爲事(しごと)のいやになるのもこの頃である。煙草のいゝのゝ喫(す)ひたくなるのもこの頃である。

あたりの木々も、常磐樹ならば金屬の樣に黒く輝き、落葉樹ならばたゞ明るく靜けく枯れた樣に立つてゐる。根がたの草はみなひとしく枯れ伏してうすら甘いその頃の日ざしを含んでゐる。さうしたなかに一りん二りんと咲き出づる梅の初花を私は愛する。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花を今日見出でたり

梅咲けばわかきその日もけふの日もなべてさびしく見えわたるかな

梅の花はつはつ咲けるきさらぎはものぞおちゐぬわれのこころに

然し何と云つても春は櫻である。それもお花見場所の埃つぽいのは花のおもひがせぬ。靜かな庭に咲き出でた一本(ひともと)二本(ふたもと)、雨の後(あと)などとりわけて鮮けく、照り澄んだ日ざしのなかにほくらほくらと散り澄んで輝いてゐるのもいゝ。

夕鮮(ゆふあかり)暮れおそきけふの春の日の空のしめりに櫻咲きたり

雨過ぎししめりのなかにわが庭の櫻しばらく散らであるかな

ひややけき風をよろしみ窓あけて見てをれば櫻しじに散りまふ

春の日のひかりのなかにつぎつぎに散りまふ櫻かがやけるかな

さういふうちにも私はほんとうの山櫻、單瓣の、雪の樣に白くも見え、なかにかすかな紅ゐを含んだとも見ゆる、葉は花よりも先に萌え出でて眞紅色の滴るごとくに輝いてゐる、あの山櫻である。これは都會や庭園などには見かけない、どうしても山深くわけ入らねばならぬ。

うす紅(べに)に葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれのうへに笑み傾ける山ざくら花

かき坐る道ばたの草は枯れたれやすわりてあふぐ山ざくら花

うらうらと照れるひかりにけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

刈りならす枯萱山の山はらに咲きかがよへる山ざくら花

山吹

荻原井泉水

お寺の庭には築山があり池があり、崖があり、木立があり植込があつて、下町のせゝこましい所に生ひ立つた私達には珍らしい遊び場であつた。さつきから二三人で隱れん坊をしてゐた私は、崖に一ぱい垂れて咲いてゐる山吹の中にいゝ隱れ場所を見出した、山吹の株と株との間に身を潜ますと、上から長い枝がふつさりと幕になつてくれた。顏のまはりにぢかにくつついてゐる花が强く匂つてむせつぽいやうであつたが、惡い匂ひでもなかつた。——然し、餘り誰も探しに來ないので、私はもどかしくなつて、わざと枝を少しゆすぶつて見た、初めは風にでも搖れるかといふ風に……それでも鬼になつてゐたお光ちやんはまだ氣がつかぬらしい。それがちと可哀さうでもあるので、今度は此處にゐるぞといふ風に大きくゆさぶつた。すると、いきなり名を呼ばれたのは母の聲であつた。皆もう支度をしてゐるから、早く御座敷に來なければいけないと云はれた。私はけふ此寺の練稚兒に出る爲めに連れられて來たのだ。座敷にはお神樂で見るやうな赤や青の上にピカ〳〵とした金のぬひとりがしてある直垂のやうなものが取り散らしてあり、衣裝方や二十人許りの子供の親達が忙しさうにしてゐた。私は先づ母の手で白粉をつけられると、衣裝方が硯を持つて來て額の上に二つ、豆のやうな形に墨を塗つてくれた『まあ、女の子さんのやうにお綺麗に白粉がのりましたこと』『えゝ、これはきめが細かいものですから』。知らぬ女の人と母とがこんな挨拶をしてゐた。すつかりお雛樣のやうな風になつてしまつたお光ちやんは私の側に來て『ねえ、並んで歩きませうね』と云つたが、隱れん坊の私を置いてきぼりにした事を少し怒つてゐたから、私は默つて居てやつた。

篳篥の音が始まつた、鼻のつまつたやうな憷つたいやうな音だつた。坊さんの行列が先に立つた。私達練稚兒は、中啓といふ扇を持つた兩手を胸の所で合せたまゝ、靜かに歩かせられた。外はまぶしいやうな日ざしで氷川樣の櫻がホロ〳〵と散つてゐた。稚兒達の冠に垂れてゐる金の鎖のやうなものが、皆が歩くたびにチリ〳〵と鳴つた。其冠が私にはだん〳〵重たくなつて、首が少し曲るやうにも思つた。

一巡が濟んでから、重苦しい裝束を脫ぎ捨てると、私達は又小鳥のやうにお庭に出て遊んだ。山吹の枝から白いしんを拔き出すことをお光ちやんが知つてゐた。其のしんを一寸許りにちぎつて脣に啣へて、すつと息を吸ふと、喉の前でスポン〳〵と音がするのが面白い。私達はうちへも持つて歸る爲めに、山吹の枝を折つては長いしんを出した。しんは燈心のやうで白く、へなへなとして彈力があつた。

是は私が五つか六つの時の事である。今、私の家の狹い庭に一株の山吹がある。每年淋しい花が咲くが、私は其花を見ると、もう春も行くのかと思ひ、而して此の三十年餘も前の記憶が不思議に蘇つて來るのだ。かの時には中啓と小さな書付を坊さんから貰つた。中啓は濃い紫色のものだつた。書付には稚兒の功德を讃へた末に「善哉善哉」などといふ字が書いてあつたのを、其後蟲干の時見出したことがあつたが、それもとうの昔になくなつてしまつた。お光ちやんとは小學校にも一緒にゐたが、其後の消息などはわからない。

梅の花

生田春月

四五日の間、大磯にゐる友人の家 たづねたり、熱海の方に行つたりして、私は今日自分の家に歸つて來た。東京の大雪と同時におちらの方でも多少の雪が降つたので、折角樂しんでいつた美しい早春のおもは十分これを眺める事は出來なかつたが、それでももう湘南では梅の花が、そこここの村々の春趣を飾つてゐた。去年の丁度今頃、名古屋から岐阜の方に旅行した時、岐阜の若い人達の催しで舟を長良川の上流に棹さした事がある。その時にも舟の中から岸に咲いてゐるこの梅の花の白いのを望んで、いかに忘れがたく思つた事であらう！ いろんな花の中で、どんな花が一番好きであるかと特に問はれると、どんな小さな花にも、どんな色の淡い見ろかげもないやうな花にも心はしみじみと惹き附けられる私には、その名を云つて特に何が好きであるといふ事は出來ないが、眼を眩惑するやうな紅紫の色彩た、かの造花のやうにこつてりと染め上げてゐる西洋花よりも、やはり眞白な寂しい梅の花とか李の花とかが、その場かぎりでなく、長く長く後々までもその印象をのこすやうである。

四五日の旅ではあつたが、さすがに我家近くになるとおもはず足も早目になつて、霜どけの泥濘をふんで、竹の垣根のところまでくると、旅に出る時は、さして目立たなかつた隣家の古い梅の木の南に伸び出した枝には、もう固い蕾が目立つてゐる。温かい南の方で白く咲いてゐた梅を見てかへつた自分の眼には、それが、いかにも寒さにいぢけて、咲けばよいのに咲けないでゐるかのやうに見えて氣の毒である。けれども今に咲くであらう、さうして高い香が、風につれて漂つてくるであらう、去年は、この花の咲いてゐた間は、どこからか鶯がとんで來て、枝にとまつて、いい聲で啼いたのだ。こんな家と家との建ちこんだ町の中にも春は鶯が來て啼くのだ、それは、多分目白の森の方から來るのであらう。それとも戸山ヶ原の林の方から來るのであらうか、愛禽家の籠からはなれたものででもあらうか、さまで拙い鳴音でもない。

『おお、鶯がないてゐる』と呟いて、南縁に出た時分には、かの灰青い小鳥はもう梅の枝をはなれて、私の家の小さな庭に立つてゐる一本の細竹をゆるがし、入口のガラス戸の横にかるくとまつて、そ、そ、そ、と家の裏の方にまはつて行つて、そこで、もう一度高く啼く。今年もあの鳥が來ればよいと思ふ。

青い窓かけの小さい書齋には、留守中の新聞雜誌や、手紙などが堆積してゐる。そして机の上には、いつかの夜、美しい詩を書く若い人の持つて來てくれたチユウリツプの草花鉢が、まだその眞紅の花を開かずに立つてゐる。

『東京はまだ寒いのですもの』

家の者はかういつて、火鉢に炭を澤山にこしらへて、湯をわかし私のすきな紅茶を注ぐ。

おしろい草の花

松原至大

私はおしろい草の花を愛す。あの濃い緑の葉の中に、ところどころ寂しくつけた白い白い謙遜な姿を見ると、私の心はいつどんな時でも、少しの反省もゆるされないある緊張した寂しさにおそはれて、涙ぐましさをおぼえる。なぜなら、私の花は私の初戀と結ばれてゐるから。

この廣い世の中には、私たちに與へられたたつた一つの初戀に生きることのできた人も、決して少くはないであらう。何人がいかに詭辯をつくつて説くとも、ひとりの男性に與へらるべき女性は、二人とあるべき筈はないのである。私は人間としての至上の幸福は、そこに總てがつゝまれてゐるのだと信ずる。

しかしながらその至上の幸福を得るためには、どんなに苦しまねばならないのであらうか。各自がみんな思ひ思ひに、その苦しみを知るであらうが、私の場合は唯神のみがしろし召す涙であつた。

もうそれは十何年も昔のことである。私に惠まれた唯一つの愛は、私が長男であり、そして彼女が父亡き家の一人娘であると云ふことによつて、様々な悲しみが數へられたのである。私は八年の間、ひたすらその悲しさに悶え暮した、その八年の間を私に忍苦と云ふことを教へて、世間知らずの幼い心をむちうつてくれた唯一つのものは、あの謙遜なおしろい草の花であつた。

悲しい戀を知つた年の夏のある夕暮、私は私たちの周圍に纏る一切の因襲と傳統とに氣も狂はんばかりになつて、夕飯もたべないで、ぢつと庭の片隅にうづくまつて居たことがあつた。いつ降りだしたのか、夕立のあつたことさへも知らずに、唯一つを思ふ心が、そこに石のやうになつて居た。

かたくなな心ではあつたが、寶玉のやうな風にいたはられて、ふと私が顔を上げた時、すぐ前にどこから流れてくるのかわからない灯を、花瓣の中の滴にいつぱい含んだおしろい草の花のあるのに氣がついた。

それに眼をとめてゐると、花は夕風にたわわになつて、瓣の中から滴と灯とがいつしよになつて落ちた。そして花はまた夕暮の沈默の中につゝまれた。

その時私は何ぜとはなしに、それが唯の花であるとは思へなかつた。なんといふ靜けさであらう。なんといふさびしさであらう。なんといふ美しい謙遜な姿であらう。私は自分のいらだたしい心に、不思議な涙ぐましさを覺えたのであつた。それから八年の間、私は年毎に夏の來るのを心待ちにして、その花の靜かな姿を見つめた。——彼女は今私の側に居る。

風信子一語

室生犀星

三四年前から私のところへしばしば訪れてくる若い男がゐて、その訪れてくるごとに、必らず花をみやげに持つてきてくれるのだ。

わたしが美しい閨秀作家ででもあつたらその花をもつてくる人も、持つて來甲斐があるであらうに、私しは半分老ぼれで半分若いもので花なんぞ咲いても咲かなくともいいぐらゐに考へてゐるのに、その男はいつも美しい西洋草花をもつてきてくれる――わたしはそのたびに、

「毎度どうもありがたう。」

と行つてそれきり茶の間に置かして、まだ仕事部屋に置いたことがない――人が折角持つて來てくれるのに斷はるわけにいかないが、しかし私しは庭には花の咲く樹は一本も植えてないし、それよりも常磐木の方がよほどよいのだ。花はあきやすくて脆くて弱々しくて庭に置く氣がしない――と言つても、あゝまで花を嫌ふわけではない、そとで見るならいつだつていいのだ。だが鉢物の花をながめてゐることそれ自身が、はかない氣がする――色のさめた土と素焼の鉢のなかに咲いた呼吸切れのしてゐる花を見るといやな氣がするのだ。

それにも拘はらず私の、親切な花好きな、そして詩もかくこの男は此間來た時に、玄關へ出て見て又花かと思つたが、ふしぎに花をもつてゐなかつた――が、かれは袂から新聞紙の小さい包みを取り出すと、それを私の机の上に置いた。何？　と、私はその男のかほを見つめた。

「球根です――。」

かれはさういふと羞かしさうに微笑つた。なるほど包みのなかに、球根が二株きれいに洗はれて入つてゐた。わたしもそのとき不思議な羞恥を感じた。全く人間といふものはをかしなときに羞恥をかんじるものだ。――そして男はかう言つて、それの植え方ををしへた。

「風信子(ひやしんす)です、ひやしんす――」と。

私はそれからこの球根を去秋十月に土の中に埋めた。ことしになつて芽を吹いたので、わざわざ鉢にあげて部屋に置いて、なるべく日光をあてたりすることを怠らずにゐたが、このごろになつて葉に守られたうすい綠色のつぼみを覗かして來た。――これだな、と、私は私の育てた風信子を火鉢のわきにおいて、扨、それのだんだんふとつてゆくのを樂しんで、花をそだてる面白さをよく人人が經驗するやうに、私もそのきもちを經驗した。――そしてその男がきたらさつそく此の風信子を見せてやらうと思つたが、何か劇壇に關係してゐて忙しくて來られないのか？　それとも何か身邊に事でも起つたのか？　しばらく姿を見せないでゐる。

風信子は葉のなかから花の蕾を擡げて、そして二週間もしたら咲くだらう、――

白き花

佐藤春夫

花癡といふ言葉も支那にあり　我が國の俚諺にも「阿呆の花好き」といふ。われらは淺ましくも小ざかしく生れて、かの生れながらに聖暗の雅徳を具へ得たる人に劣れるを歎けども、ただ花を愛する時われも亦、花癡にちかし。されば千紫萬紅とりどりのなかにわきていかなる花をか好だと問はるゝ時は、幻をつぎつぎに描き出しつゝさて採びまどひては終に、皆よし彼等いづれも花なればとのみ答へまし。されどなほつぶさに考へては、なべて五月の花こそわがこゝろにはかなひたれ。五月の花のうちにも白色なるもの一きはよし。

まことにソロモンの榮華もものかは。されど必ずしも百合とのみは言はじ。

あはれ北方人は知らざらん。わが故郷の柑子の山、さつき待つ花橘の香ぞめでたき。

さてはまた霏々たる細雨のうち消ぬがにも散る梨花の風情も亦殉情のあはれ深からずや。われは忘れがたなき人のいまだをとめなりしころのうつし繪を筐底に秘めたるが、そのうらにはひそかにその面影を梨花にたとへたる小曲を記しつ。悲しみきはまれるつれづれのよすがのみのそのこゝろ、そのつたなさ、もとより人に示すべきには非じ。

卯の花もよし。

くちなしの花もよし。わが父が蕙雨山房のはづれなる崖の一端に高く懸りて自づと生え出でたるその花ありき。今いかに。われは少年のころその崖によぢてその花を採り水車水車と呼びて遊びし思ひ出あり。

野うばらの花も亦床しさの限りなり。わが二十のころの詩は

紀の國の五月なかばは
椎の木のくらき下かげ
うす濁る流れのほとり
野うばらの花の一むれ

云々といひてこの野花を心やさしき遊方の人の溜息になぞらへたり。わが歌は調べをのみ重んじて、またかの花のこゝろをも忘れしとは思はれど、ただかの花は小暗き椎の木かげには咲かず。わが歌は繪そら事のみ。細流行くところ土橋のあたりに、徑に沿うて初夏の光あかるき方にこそあれ。花むらがりて香もゆたかに、花のさなかゆ愛らしき蜂のうなり聞えたる夢心地ののどかに、長餘いと長きものはその尖端、折から水嵩（みかさ）増せる水の面にしたされて、流水はためにせせらぎを生じ、枝自づからは戰き搖れて顫音（とれもろ）のごとし。

花うばら古さとの道に似たるかな

口誦みて趣ふかく、他奇を衒はずして自らこの花のなつかしく甘美なる面影をさへつたへたるは心にくき句なり。かすかに西詩の趣にかよひ得たるも亦この花にふさへり。さて何人の句なりしや今さだかに覺えぬを憾みとす。

五月の花のうち薔薇のみは、餘人は知らずわれには色赤きものぞうれしき。純白のもの淡黃のものもとよりめでたからざるにあらねども、所謂高尙げに見ゆるところ世の貴婦人といふものに似たらずや。かの眞紅にして小輪なるものに到りては然らず。何となく古き石版刷に見ゆる少農婦のすがた可憐にして心ざま素直なるもの若者をただに賴みて胸をののかせつゝ近き未來に希望の日を憬るゝごとし。百合に就ても亦ほゞ同じ事を言はん。

ああ花を思へばよきかな、すべてこの田園の家。わが父祖の田園の家。蕙泉小堂をめぐりて皆花なれ。身は他鄕に流寓して、白日の夢は故園に通ふことしげきに。

興未だ盡きずして殘は既になし。

世界三大偉人評傳と學說

山川均著　忽九版

レーニンとトロツキー

曠世の大偉人ーー世界歷史に一大記錄をつくつた彼レニン、プロレタリアートの爲めに萬丈の氣を吐いた彼レニンは戰中漸く病の篤きを傳ふ。鬱日遲々として慨歎きとき我々は本書を携へて彼レニンの偉業を瞑想しよゐるで

定價一圓九十錢　送料十五錢　四六判上製

文學博士鹿子木員信、鐃平名智太郎共著十版發賣

ガンヂと眞理の把持

東洋が現代に有する最大の哲人として、又た印度革命の大立物としてレニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる『眞理の把持』と最近印度に橫流する理想主義的革命の本體を明にす。

定價貳圓卅錢　送料十九錢（四六判）

鐃平名智太郎編　第六版發賣

ガンヂ審判の日

定價壹圓五十錢　送料十五錢（四六判）

理學博士石原純著　三十六版

増補　アインスタインと

相對性理論

ニユートン引力を否定して全科學界を革命せる氏の人となりと、「相對性理論」とを知ることの出來る一番評判のよい書籍は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です。

定價貳圓貳拾錢　送料十七錢　四六判上製

モスコウスキー原著　高橋誠譯

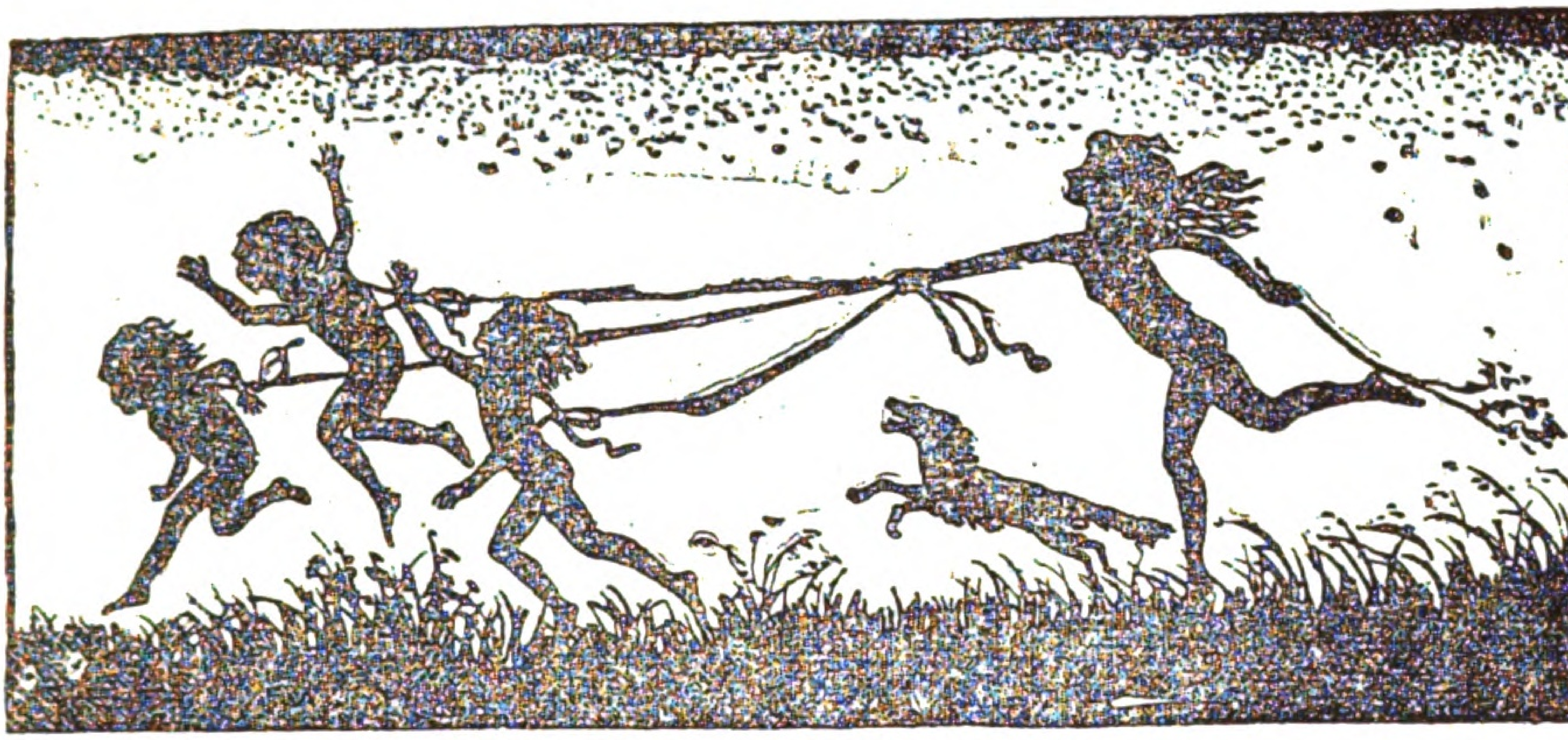
アインスタイン

（四版）

定價壹圓六十錢　送料十五錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

創作



ぢやんぽん廻り

宇野浩二

初に表題の説明をしておくと、ぢやんぽんと言ふのは、普通佛式の葬式の場合に棺の前を歩いて行く一組の坊さん達に依つて鳴らされる鐘の音を意味するので、この物語の起つた××縣の岩――村では、轉じて一般に葬式のことをぢやんぽんと言ひ習はしてゐるのである、が、ぢやんぽん廻りと言ふ時のぢやんぽんは、更に轉じて人の死んだこと、或ひはそれを知らせること等を意味するのであらうと思はれる。何故と言つて、こゝでぢやんぽん廻りといふのは、或家で人が死んだ時、その家の親戚や知己に知らして廻ること、或ひは知らして廻る人のことを意味するのであるから。そして、この物語の主人公の桶屋の勘作の副業が即ちその岩――村のぢやんぽん廻りなのであつた。

だが、昔と違つて、この開化の世の中にそんな古風な風俗が殘つてゐるといふことは賢明な讀者が想像されるだらう如く、それはこの岩――村がどんなに鐵道線路や或ひは大きな町から掛け離れた、不便な地勢にあるかといふ證據に違ひないのである。その通りで、この村は或山の麓にあつて、五十年前と今日とでその戸數が二

十軒と增えてゐないと言ふやうな、文字通り僻地の寒村であつた。その村の東に聳えてゐた山はそれほど高いとか險しいとかいふ山脈ではないのだが、可成り入り込んだ深い山であつた。反對の方角の鐵道線路は、村から五里ばかり西にある下――といふ町まで來てゐた。が、岩――村の人たちは着物の反物とか、帽子とか、嫁入の道具とか、さういふ何年に一度とかしか要らないものを買ひに行く時か、或ひは遠い所へ旅に行く時かの外には、滅多にそこ迄行くことはなかつた。そしてそんな事は一年に一度か、二年に一度しか村には起らない出來事であつた。中で一番多かつたのは、電報を打つとか、爲替を組むとかするところの郵便局の用事で、それにはどうしても今だに自動車も通つたことのない、細いでこぼこの五里の道を、下――町まで出て行かねばならなかつた。

ところで、この岩――村が東に背負つてゐる山の中には、どういふ譯か、これも昔から一向增えも減りもしないところの、二三十戶位の小村が彼方の山懐や此方の谷合やに散在してゐた、中――村とか、元――村とか、成――村とか。そして、それは多分地勢の關係からであらうが、岩――村の人たちは大抵西の方の平地の村々よりも、その東の方の山の中の村々に多くの親類や知己やを持つてゐた。言ふのは、それ等の山の中の中――村とか、元――村とか、その他の村々の人たちが平地に出て來る爲には必ずこの岩――村を足場にしなければならなかつた、山の人々は一旦岩――村に出て、そこから先は銘々の用事に從つて、銘々の方角に散つて行くのであるが、再び銘々の村に歸る時は、必ずこの岩――村を通つて行くのであつた。自然、それ等の村々の人たちと岩――村の人たちとが最も懇意な所以であつた。何故私がこんな些細な地理の話をするかと言ふと、これが矢張り表題のぢやんぼん廻りの說明の爲に外ならぬのである、卽ちこゝで岩――村に誰か死んだ人があるとすると、その家で早速その知らせを親戚や知己にしなければならぬ段になつて、私たち都會、でなくても普通に便利な土地に住んでゐるものゝ考では、取敢ず手紙なり電報なりを利用するであらうと思はれる、が、今言つたやうな地勢にあつて、又今言つたやうな他の村々との關係にある岩――村で、例へば電報を打ちに行くとすれば

わざ〳〵五里の道を西へ下——町の郵便局まで出かけなければならない、ところがその電報の宛先はと言へば大抵今言つた東の山の村々なのであるから、下——町の郵便局にしても電信の打ちやうがないのである、つまり下——町から五里東の岩——村を通つて、山の中のそれ〴〵の村に誰かゞ配達する外方法がない譯なのである、即ち今だにぢやんぽん廻りが岩——村にはどうしても必要な所以である。

さて、ぢやんぽん廻りの桶屋の勘作はこの話の起つた時は六十五歳の年寄であつた。息子の勘太郎でさへもう四十二歳で、無論何人かの孫たちもあつた。だから、勘作爺さんは謂はゞ隱居の身分であつた、村の人たちは口癖でぢやんぽん廻りの勘作さんと言ひ習はしてはゐたが、事實この二十年來彼はそれを勘太郎に讓つて、彼自身は本職の桶の仕事を、店の土間の仕事場の奥の方の席は息子に明け渡して、土間の端の方の往來に近い日當りのいゝ所へ、嫁の襦袢の古切でこしらへたメリンス友禪のつぎつぎの座蒲團を持出して、その上に坐つて、朝から晩まで、桶の箍にする竹を切るのを專門に勵んでゐた、而もさういふ身分になつてから最早や二十年經つのである　彼も彼の息子もその二十年の間に殆ど病氣らしい病氣をしたことがなかつた、だから勘太郎が店の奥で桶の木を削つたり叩いたりすると、勘作は店の端で街道の埃を浴びながらシユー〳〵と箍の竹を割つたり削つたりする日課に少しの變りもなかつた、唯ぢやんぽん廻りのある時だけ勘太郎が留守にするのである。

「勘作さん、今日は、」と使の者が來て言ふのである。「到頭お前さんのお世話になることになりましたよ、家の病人も今朝がたお目出度くなりました。」

「それや御愁傷だな、音無しい人だつたのに、」と勘作は答へた。「それで何處と何處と廻るのかね？　勘太郎、控へおきな。」

又、他の時には、

「勘作さん、頼むよ、ぢやんほんを一つ、」と使の人が言つた。「うちの親父さんもやつと年貢ををさめたよ。あゝなつてからも三年からになるからな、人間といふ奴は案外ねばり強いもんだね、然し一日も早い方がお互ひの爲に樂だからな。元――村の佐吉と、中――村では、さうだな、五郎兵衛とおしん婆さんと……。」

「勘太郎、」と勘作は奥の方に向つて叫んだ、「控へておきな。」

こんな風で、誰が定めたともなく、誰でも店の端に坐つてゐる勘作爺さんにぢやんほん廻りのことを頼んで行つたが、それに出かけるのはこの二十年來勘太郎の役目になつてゐたのである。

さて、この話の起つた年は大正第何年と告げるよりは、有名な西班牙風といふ惡性の寒冒が流行つた年と言つた方が、讀者たちに十分記憶されるだらう、この目に見えない病菌はどんな飛行機や自動車よりももつと自由自在に活躍したもので、今も言つた未だ一臺の自動車さへ見たこともないといふ交通の不便な、他所とは掛け離れてゐる岩――村にさへも容赦なく襲つて來たのであつた。五百軒に足りない村の家々では悉くその入口に神社のお札と注連繩とを張りつけてその病氣の侵入を警戒したが、それも何の效目もなかつたと見えて、彼方でも此方でも病人が增えて行つた。が、流石に不斷から身體を鍛へてゐる人たちだけに、町でのやうにそんなにばた／＼と死ぬ人もなかつたが、兎に角それは村始まつて以來の大變な出來事に相違なかつた。村一番の大金持の地主の庄左衛門が死んだのが、丁度その時分でその病氣の爲であつた。

その庄左衛門の死んだ時分に、桶屋では勘太郎が矢張り風にやられて寢てゐたのであつた、殊にそのぢやんほん廻りの日は、四十度からの熱があつたので、どんなに辛抱しても枕から離れることが出來なかつた。そこで、六十五歳の勘作が二十年振りで、朝早く腰に握り飯の辨當をぶら下げて、草鞋で足を固めて、ぢやんほん廻りに出かけたのである。庄左衛門の死んだのはその前の晩の十時とかで、勘作のところへぢやんほん廻りを頼みに來たのは十二時頃だつたが、流石に大

身代の家のことだけに、その朝早く、まだ夜が明けぬ時分に新しいぢやんほん廻りの法被をとゞけて來た。もつとも、ぢやんほん廻りの法被と言つたところが、普通葬式の人足が着てゐるやうな白木綿製のものに過ぎなかつたが、ぢやんほん廻りを頼みに來る時に、わざ／＼自分の家でそれをこしらへて屆けて來る家などは、十年に一度もない位であつた。勘作はその新しい法被を着て、ぢやんほん廻りの式をして、彼の家に代々傳はつてゐるぢやんほん鐘を、紐に依つて首に引つかけた、そしてこれも亦型通り自分の家を出る時から村を外れる迄の道を行く間だけ、ぢやらんぼーん／＼とその鐘を鳴らしながら歩いた。秋のことで、露に濡れた草を踏んで歩く氣持と、二十年振りに自分の手で磨り鳴らすぢやんほん鐘の音と、肌寒い早朝の空氣とが何とも言へぬ心地よい刺戟を彼に感じさせた。彼は自分の年も二十年若くなつたやうな氣がした。

庄左衛門と言へば、先代の庄左衛門が卒中で亡くなつたのは勘作がまだ三十五六歳の働き盛りの時分だつたから、もう三十年も前のことであらうか。さうだ、さう言へば、今の、今度死んだ庄左衛門と勘作とは確か同い年か一歳違ひかであつた。その日暮しの桶屋で、そして唯のぢやんほん廻りである勘作にとつて、その一生のうちで三十年前の先代の庄左衛門のぢやんほん廻りをした時のやうな愉快な晴々しい思をしたことは二度となかつた。兵隊に行つて勳章を貰つたこともなく、村長の代理で使に行つたといふやうなことも夢にもなく、元より人に大金を貸したこともない勘作にとつて、その時ほど行く先々の家で大事がられ、叮嚀にされ、持てなされたことはなかつた。それは彼の一世一代のとつて置きの話であつた。それは三ヶ月に一度か、半年に一度か、それからもう長い年月が經つた此頃では一年か二年かに一度位心地よく酒に醉つた晩など彼は息子の勘太郎に思出し思出し話すところの唯一の彼の氣に入りの話題だつた。

「中――村のお力さんとこへ行つたら、お前……」と彼は飮めば飮む程にこ／＼笑ふ癖の酒で、顏を眞赤に染めながら言つた。一言毎に「お前」と附けるのは彼の、殊に醉つた時の、言葉の癖であつた。「お力さんはその時分二十一か二だつ

たかな、それや全く綺麗な女だつたよ、下——町へ行つてもあの位の別嬪は一人もゐないといふ女だつたからね、お前。庄左衛門さんはそんな卒中で突然亡くなつたのだらう、お前、だから俺がぢやんぽん廻りで行くと、さあ、そのお力さんが俺にしがみついてさ、嘘だらう、嘘だらうと言ふぢやないか、お前、いゝ女だつたからな、お力さんは、お力さんが俺の身體にしがみついて泣き出したよ。今ぢやな、庄左衛門さんとの子がもう兵隊になつて西比利亞へ行つてるんぢやからな、俺も年取つた筈だよ、お前。」

「その次は竹屋の助さんですか、」と勘太郎がもう何度となく聞く話なのでひやかすやうに相槌を打つた。

「さうだよ、何しろ助さんは庄左衛門さんのお蔭であれだけの身代になつたんだからな、お前、」と勘作はつゞけた。「私がいつでも竹を値切る上に、拂を始終延ばすもんだから、私は助さんの怒つたやうな顔の外は見たことがなかつた。それが、庄左衛門さんのぢやんぽん廻りだと聞くと、見る間にあの七輪見たいな四角い顔がきゆッと子供が泣く時にするやうに歪んだかと思ふとぼろ〳〵と泣き出してさ、鬼が泣く顔は屹度あんなものだよ、お前、そして俺の手をとつてずる〳〵と奥の方に引張つて這入つてさ「私は旦那のお蔭で、私は旦那のお蔭で……」と泣いてるもんだからよく物が言へないのさ、俺がつまり庄左衛門さんの代りになつたやうなもんだね、俺の手をとつて、ぺこ〳〵お辭儀しながらさう言ふんだもの、お前。」……

ぢやらんぽん〳〵と自分の鳴らす鉦の音に自然と足を合はしながら、勘作は甚た爽快な氣持で村外れを出た。村を外れたところからはぢやんぽんを鳴らす必要がないので、それを兩方の胸にだらりと垂れたまゝにして、先づ順序として中——村へ一里半ばかりの道を、勘作は足を早めて歩き出した。今言つた、先代の庄左衛門の妾であつたお力の家が最初の道順なのであつた。その道すがらも、勘作の思出には、他のどの時のぢやんぽん廻りの事も浮かんで來ないで、庄左衛門の時の事で一ぱいだつた。そしてその思出の中のどんな部分でもが悉く、さういふ人の死んだ知らせといふやうな性

質のものであるにも拘らず、悉く平和穩かなものばかりであつた。如何にも、さう言へば村外れの笹藪も、やがて山り道になつたところで、中——村への道と元——村への行く近道との追分道に立つてゐる三尺足らずの石地藏も、それから三町松原の松の木の一本一本も、その中に殊に首縊りの松と呼ばれてゐるそれに丁度誂へ向きのやうに街道の方へ一本突き出てゐる枝のそれ〲の屈曲の模樣さへも、二十年前と少しも變つてゐないのである、それ等のものも悉く平和で穩かに見えた。つまりそれ等の景色はその二十年の間、彼がそこに坐つて桶の箍の竹を割り削りしてゐるところの、彼の日當りのいゝ店の端の光景と姉妹のものに違ひなかつた。すると、庄左衞門が死ぬことも、彼が生きてゐることも、息子の勘太郎が病氣してゐることも、悉く暢かで平和で從つて感謝すべきことのやうな氣持さへするのである。どんな西班牙風も、どんなコレラ病も、これ等の笹藪や、石地藏や、松の木の姿や、さては彼の日當りのいゝ店の仕事場やを改めることは出來ないだらう、よしその爲めに庄左衞門が死んでも又代りの庄左衞門がゐるし、勘太郎が死んでもその坐つてゐる後には子の作藏が坐つて桶の木を割り削りするだらう、そして西班牙風もコレラ病も嵐のやうに一夜吹いてその翌日は歸つてしまふだらう。……

　これを西洋流に言ふと「萬物をしろしめすところの主はほむべき哉！」と勘作は思つた。彼は用もないのに胸の前にぶら下つてゐるちやんほんを樂隊のやうに鳴らしたくなつて來た。だが、生憎彼はそれに合はす爲め、或ひは又その時の彼の氣分に相當したところの、どんな唄をも知らなかつたので、いつも竹を割りながら時々うたふ唄をうたつて見た。

〽わしが死んだ——とオて、誰が泣いて——くれよかね、山のかァらァス——と親ばかり、山のからすと親ばかり。

ちやんほん、ちやんほん。(鉦の音)〽こんどわァかれた——ら、ちやんほん、ちやんほん、(鉦の音)……

　そして彼はそのちやんほんをつゞけたまゝで中——村にさしかゝつた。

　お力の家はさういふ山中の村では珍しい、町風の小ざつぱりした構へであつた、即ち又それは定つた夫を持たずに、人

の世話になつて世渡りをするといふ、この邊では珍しい彼女の身の上を語るものでもあつた。この家の千本格子の入口の戸を開けるのは、勘作にとつては先代の庄左衛門が死んだ時以來の出來事であつた。「御免なさい」と彼は通り庭になつてゐるので、つか〳〵とその家の中の間、卽ち茶の間になつてゐる部屋の前の土間まで這入つて行つて、「御免なさい、お力さん、」と、も一度呼んで見た。この前來た時は夏の初だつたので、そこの障子が空いてゐて、小さい子供と二人で何か食べてゐたお力が、彼の姿を見て、庄左衛門が死んだと半分聞かないうちに土間に裸足で飛び下りて來て、そしてわッと言つて泣きながら勘作にしがみついたのであつた。勘作は今改めてその事を思出して、その時から今日までの間に彼自身の顏にも相手の顏にも三十年間の皺が寄つたことを忘れてしまつて、變に胸がどき〳〵するのを感じた。

「どなた、どなた?」と障子の中から確にお力に違ひない、然し何かあわてゝ聞える聲が叫んだ。誰か、彼女の外に人がゐるのか、次の間に立つて行く氣配が聞えた。

「ぢやんぽん廻りの勘作ですよ、」と勘作は少し苛々して叫んだ。

その時がらりと障子が開いて、五十歲のお力の年にも耻ぢない變に若々しい作りをしてゐる顏が現れた。勘作は直に我に返つて、月に一度位彼の坐つてゐる店の前を通る度に、顏を合はす事のある今のお力を思出した。すると、どうして、三十年前のお力のことなど考へてゐたのだらうと却つて不思議な氣がした位であつた。然し、さう思ひながら、彼女の變にぴか〳〵した光つた、ところ〳〵綿がはみ出してはゐるが、贅澤な丹前の寢間着姿が蟲酸が走る程厭な氣がした。彼女は半分開いた障子と障子の間に、中を見せまいとするやうに立ちふさがつてゐた。が、それにも拘らず、部屋の中の有樣が勘作に見えない譯に行かなかつた。長火鉢が見えた。そしてその前には、彼が店の仕事場に嫁の襦袢の古切でこしらへて貰つて敷いてゐるところのものと、同じ友禪メリンスの座蒲團は座蒲團でも、乞食と王樣と程に違ふのが敷かれてあつた、そしてその長火鉢の向ふ側にも同じものが敷かれてあるのが、ちらりと見えた、そこには誰もゐなくて、妙にがらん

としてゐる感じが、確に今の今まで誰かゞ坐つてゐることを、現に見た以上に想像させるに十分であつた。勘作はすつかり今迄の何とも言へぬ一種の樂しい氣持を打破られたことを殘念に思つて、

「庄左衛門のちやんほん踊りに來たんだよ、」と稍々荒々しい口調で言つた。「明日と明後日の晩がお通夜で、十八日がお葬ひだ。」

「まあ、いけ好かない大きな聲で、お爺さんたら、」と相手もひどく不機嫌な態度で應じた。

それで勘作はすつかり失望してしまつた、何故と言つて、彼はまだその瞬間まで何と言ふ譯もなくお力から優しい言葉を期待して居たのであつた。

「お爺さん、それは誰から頼まれて來たの？」とお力はつゞけた。「私は今の庄左衛門には恨みこそあれこれつぱかりの恩も受けてないんだからさ。誰がけふ日二十圓ばかりの仕送りで一軒の家が持つて行けるか、考へたつて分りさうなものぢやないか、女だつて子供だつて食べることに變りはないんだからね、三十年前の二十圓と今の二十圓と、ね、考へたつて分りさうなものぢやないか？　私が今から二十年餘り前に、どうにもやり切れなくなつたから、今の庄左衛門にせめて五圓でも增して下さいつて頼みに行つたのさ、さうだね、まだ市太が小さい時分だつたから、あの子を背負つて、二里半の道を何度通つたと思ふの？それにさ、あの野郎と言つたら、この上一文も出せないつてさ、それから留守ばかり用つて會ひもしないのよ。それがお米が十錢しなかつた時分の話だからね。それから今日になるまで、二十圓でどうして暮してたと思ふの？　私は癪だから、あの時からどんなに困つても庄左衛門の敷居をまたいだことはないのさ。そりや月々二十圓だけは缺かさずとゞけてくれてはゐるけれども、そんなものは當り前を通り越して圖々しいよ、鼻紙でも買ふ足しに貰つてやつてるのさ。阿房らしい、何がお通夜でお葬ひだい、お葬ひ面を蜂がさすわよ。それで、やれ男をこしらへてるの、隱し亭主を持つてるのつて、よく言へたもんだよ、二十一の年から毎月二十圓位の端た金をもらつて、誰がけふ日一人暮

め遊者な女が一人身で辛抱してられるもんか？　さう言へばな、今だから言つてやるわ、家へ歸つて御隱居さんにでも、庄左衛門の嬶にでも倅にでも誰にでもいゝから、大きな聲でそれこそ觸れ廻つておくれよ、鐘でも太鼓でも叩いて。――太市はあんな鼻まがりの爺の庄左衛門の子供ぢやないんですつてよ、誰があんな鼻まがりのよぼ〳〵爺の子供を生むものかい！……」

然し、何もお力にしても、そんな事までぢやんほん廻りの勘作に言ひ罵る譯がないのであつた、多分生憎血の道でも起つてゐたか、それとも、今し方勘作が這入つて來た時までそこの長火鉢の前に坐つてゐて、彼の氣配を聞いて奥の間に隱れたところの男にそれを聞かす爲か、何かそこに譯があるに違ひなかつた。が、何は兎もあれ勘作はもう不機嫌も落膽も通り越して、唯呆然とその場に突立つてゐた。

「……さようなら」お力は言つて、ぴつしやりと障子を閉めた時に、彼は初めて我に返つて、夢中で、

「さよなら」と應じた。そしてそこ〳〵に表に出たが、それから一二町の間、ぢやんほんを鳴らすことも、これから何處に向つて行くかといふ事も何も考へないで、唯無暗に足を前に動かしてゐた。

ふと氣が附いた時には、彼は次の道筋であつたところの竹屋の助さんの家を通り過ぎてゐた。彼は氣を取り直して、新たな元氣でぢやんほんを鳴らしながら、助さんの家に向つた。助さんの家は遠くから見ると、枝と葉のない竹の林のやうに見えた、と言ふのは、多分家の中は悉くその爲に光線が遮られて眞暗だらうと思はれる程、その周圍に太いのや細いのや、雄竹や雌竹や、種々雜多の竹材が立てかけられてあつて、辛うじて出入りの口だけ一間ほど空いてゐるだけであつた。その前に立つて、片手に帳面を持つて、片手に錐を持つて、頻りに竹を調べてゐる男があつた、彼は近附いて行く勘作のぢやんほんの音にも容易に耳をかさなかつた程仕事に熱中してゐるやうに見えた。丁度三十年前に勘作が同じぢやんほん廻りでこの家へやつて來た時には、主の助さんは五十歳であつた、その助さんはもう十五六年前に死んでしまつた筈

だから、今そこに立つてゐる同じ九十歳位の助さんは彼の息子の助さんに違ひなかつた、が、その七輪のやうに円かな、赤面の、鬼のやうな顔附は勘作に三十年前の彼と今の彼と別の人のやうには思はれなかつた。

「今日は、助さん、」と勘作は呼びかけた。

「今日は、」と相手は初めて帳面から目を離して、此方に向つて應じたが、一寸の間怪訝さうな目附を投げ返した。

「此頃はさつぱり顔を見せないぢやないか、若い衆ばかり寄越さないで、ちつと話しに來なさいな、」と勘作は言つた。

「おゝ、桶勘のお爺さんか、暫くだつたな、」と助さんは無愛想な調子で答へた。

「ところで、庄左衛門さんのぢやんほん廻りぢやが、庄左衛門さんは昨夜亡くなつたんで、明日と明後日とがお通夜で、十八日がお葬ひで……」

「何、あの庄左衛門さんが、」と助さんは急に頓狂な聲で叫んだ「私は十日程前にお目に掛つて來たが、その時は別に何處も悪いやうぢやなかつたのに、えゝ、本當か？」

「嘘に來るもんかい、」と勘作は言つた。

「あの庄左衛門さんが、あの庄左衛門さんが……」と言ひながら、助さんはその鬼のやうな顔からほろ／＼と涙を流したその様子が、三十年前に矢張り庄左衛門が死んだ時に親父の助さんがもした通りだつたので、勘作は忽ち親みを感じ出した。

「さうだよ、本當に氣の毒な事をしたよ、あのこの此頃はやる流行寒冒とかいふ病氣でだよ。」

「あんないゝ人が死ぬなんて……」と助さんは今迄帳面つけをしてゐたので、墨の着いた手で涙を拭き拭きするものだから、悪戯小僧のやうに顔を汚しながら「私の家はお前も知つての通り親代々あの家のお蔭を蒙むつて斯うして餓ゑもせずに暮ましてもらふやうになつたんだ。先代の庄左衛門さんも本當によく出來た人だと私の親父が始終言ひ言ひしたが、今の庄左衛門さんも親父さんの氣質を受け繼いでると見えて、本當に涙の出るやうないゝ人ぢやつたがえ……。私は十日程

前に會つたばかりだのに。その時も庄左衞門さんは私に言つてくれたのに、お前の家も段々手を擴げて行つて結構だ、前代の事で金が入るならいつでも貸してやるつてね、お前の家は親代々人間が固いからいゝつてね、その時私は御馳走になつてな、庄左衞門さんは親父さんもよく飲んだ方だつたさうぢやが相變らず強いな、お前は酒が飲めないんでいけないと私に言ひ言ひ、獨りで飲んで居られたが、それが亡くなつたなんて、亡くなつたなんて……。桶勘さん、そしてそれからお通夜は今晩とそれから……？」

「今晩ぢやないよ、」と勘作は言つた。相手が餘り自分の述懐に一生懸命になつて、ぢやんぽん廻りの自分に酒どころかお茶を一杯どころか、家に這入れとも言はないで、先から突立つてゐたまゝなので、勘作は少し苛々して來た。「明日の晩と、明後日の晩だよ」

「だつて、亡くなつたのは昨夜だらう！」と助さんは言つた。「ぢやあ、お通夜は今晩からだらう？」

「そんな事は知らんよ、私は頼まれた通りに言つてるんぢや、」と勘作は言つた。「今晩は屹度身内の人だけが勤めるんだらうよ。」

「いや、私はそんな事を言つてられない、」と助さんは叫んだ。「私は今から直にくやみがてらに行つて來る。……」

後の言葉を助さんはもう家の中に向つて駈出しながら言つた。が、もうその時は、勘作も口の中で舌鼓を打ちながら、くるりと助さんの家に背中を向けて、やけにぢやらんぽん〳〵と鐘を鳴らしながら、歩き出してゐた。言ふ迄もなく勘作の心持は掻き亂されたやうに苛々してゐた。それはお力のところでは庄左衞門の死んだことは蟲が死んだ程にも受取られなかつたばかりか、自分が庄左衞門の身代りにされて散々惡口を浴びせかけられたから思ふと、助さんのところではまるで親が女房でも死んだやうに嘆かれて、その知らせの使に來た自分は全然眼中におかれなかつたといふやうな、それとこれとの餘りの違ひに仰天したといふよりは、その何方にしても彼自身が餘りに無視されたといふ不快さが主な原因に

相違なかつた。確に二十年前はこんな筈ではなかつたのである。

中――村から元――村への道は一里ばかりであつたが、それはこの山の中で一番阪の多い嶮しい道であつた。だから荷車などを引いてゐる者は一旦岩――村の方へ下りて、例の石地藏の立つてゐる追分道まで來て、そこから又二里もある道を通つて行くことになつてゐた。そんなに細い路で、嶮しい阪になつてゐる上に兩側は大方森になつてゐた。折から雲が出たと見えて、日かげがなくなつたので、さうでなくても不斷からじめ〳〵した路なので、勘作は二度ばかり嚔が出た程肌寒さを感じた。

「ハクション(嚔の音)――あゝ、縁起でもねえ、」と彼は獨言つた。「これで風にでもとつつかれたら申分なしだ――」

實のところ、勘作の豫定ではこの道にかゝる時分には、中――村のお力の家と助さんの家とで振舞酒を御馳走になつて十分いゝ機嫌になつてゐる筈だつたのだ。それが何といふ反對だらう――彼の氣持は不機嫌の極に達して、蝸牛のやうにとほ〳〵とその陰氣な細道を辿つた。これから行く元――村の石松(石屋の時松)だつて、多分死んだ庄左衛門と從兄弟同志だと思ふが、どうせ碌な事はなからうと勘作は考へた。殊にあの石松といふ男は怠け者で、一寸見には庄左衛門の親類だといふので大きくやつてゐるやうだが、家の中はからくりで大變だと言ふことだ、我々その日暮しの貧乏人よりは餘程苦しいといふ話だから、……などと考へて來ると、勘作はもうぢやんぽん廻りが厭になつて來て、歸れるものならこのまゝ家に歸つて寢てしまひたいとさへ思つた、すると、今迄至極呑氣に考へてゐた息子の勘太郎の病氣のことまでが氣になつて來るのである。と言つて、このまゝ止めて歸る譯には行かないし、仕樣がないからそれ〴〵の家の前で披露目屋のやうにぢやんぽんを二つ三つ大きく鳴らして、言ふことだけを呶鳴つてどん〳〵行つてしまはうかなどと考へた。ぢやんぽんと言へば、阪道が嶮しくなると、自然身體を前に曲げるので、兩方の胸に垂れてゐるそれが宙に浮くものだから、ひとりでぢやらんぽん〳〵〳〵と煩さく音を立てゝ鳴るのまで、それも亦勘作の舌皷の種になつた。

この道に二時間近くもかゝつて、やつと元——村に着いたところで、こゝでも亦勘作の豫想が外れねばならなかつた。然しそれは悪い豫想が外れたのだから、謂はば思ひの外いゝ目に遭つたといふことが出來るだらう。その次第は、勘作はこの村にはもう何十年振り來なかつた上に、彼の記憶にある石松の家は、それは石屋といふよりは寧ろ砂利屋であつたが何でも往來に面して大小樣々の砂利を積んだ圍ひが小山のやうに幾つか並んでゐて、住居の家は奥の方に引込んだところにあつた筈だつた、が、それは今から何年か前にそれ等の砂利の置場を奥の方に引込めて、見たところ中——村のお力の家を大きくしたやうな變に凝つた住居を往來の側に建て替へたのであつたから、それが勘作には容易に見付からなかつたのである、それで彼がぢやんほんを鳴らすことも忘れて、その邊をうろ／＼してゐた時、

「おい、ぢやんほん廻りの勘作さんぢやないか？」と突然後から聲をかけるものがあつた。すると、今度は一寸の間此方が忘れてゐたのであるが、それが石屋の時松であつた。

「庄左衛門さんが死んだんだよ、」と勘作はいきなり言つた。

「何、庄左衛門が！」と時松は叫んだ。「占めた、占めた、庄左衛門が死んだんだね、確に？」

斯う駄目を押してから、時松は「御苦勞樣、御苦勞樣、まあ、一ぺん這込つて一服して行つておくれ。勘太さんは達者かい？……それにしてもどうして勘太さんが廻つて來ないで阿父つさんが來たんだい？」

「勘太の奴、例のはやり風で寢てるもんだから、」と勘作は今日のぢやんほん廻りで初めて持てなされたのにひどく滿足しながら、時松の後に附いて、格子戸の入口を潜つて家の中に這入つて行つた。

「お島！」と時松は奥の方に向つて叫んだ。「お客だよ、早速一本つけてくれ。おい、お島！」

「どうしたんだよ、騒々しい、」と女房のお島はそんな大聲で叫ばれる迄もなく、暗いのでよく見えなかつたが、直傍の土間の臺所の隅で何か用事をしてゐた。「何を呑氣な事を言つてるんだよ、お金の工面がついたのかい？」

「これがだよ、」と時松は餘りの嬉しさに、十分よく物が言へないやうな發音で、「今、福の神が舞ひ込んで來たんだよ。⋯⋯
―の庄左衛門が死んだんだよ。」

「何を言つてるんだい、この人は、人が擔ぐにも程があるぢやないか？」彼女はまだ入口の隅におづ／＼しながら立つてゐた勘作には氣が附かなかつたのである。彼女は言つた。「現に先一昨日あんな厳しい催促をして來たぢやないか？」

「それが死んだんだつてば、」と言ひながら、時松は後を振り返つて、「ねえ、勘作さん？」と促した。

「え〻。それでお通夜は明日と明後日の晩で、十八日がお葬ひで⋯⋯」と言つて、勘作は何と思つたのか、ぢやらんぽん／＼と突然胸のぢやんぽんを鳴らし始めた。

「あゝ、魂消たー」とお島は頓狂な聲で叫んだ。が、それでも彼女は未だ暫くの間は容易にありのま〻の事を本當にしなかつたが、漸くそれが冗談でない事を知ると、「まあ、よかつたわね、」とがつかりしたやうに言つた。「捨てる神あれは拾ふ神だわね。ぢやんぽん屋さん、あなたは福の神さんだから、御馳走しますよ。」

そして見る見るうちに酒が運ばれた。

「まあ、そんな堅苦しいものを首から外したらいゝでせう、」とお島は勘作の後に廻つて、ぢやんぽんを外してやりながら言つた。「このぢやんぽん襦袢は一度脱いで、まあいつ時寛いでお出でなさいな。」

「これから未だ何軒も廻るのかい？」と時松が勘作に盃を與へながら尋ねた。

「成―村の伊助といふのは何處だらうな？」と勘作が聞いた。

「ふゝん、」と時松は鼻の先で言ふには、「伊助といふのは仙人足だよ、まだ若い男だからな、お爺さんなんどは知らないだらうが、その伊助の妹こいふのが死ンだ庄左衛門のこれ（小指を見せて）さ、御苦勞だな、伊助のとこ迄行くのかい？それから？」

「それから山下の猟師の平造のとこへ行つて、」と勘作は遠慮なく何杯も盃を干しながら「帰りは廻ろ、——川の方へ廻つて粉屋の甚兵衛、とそれだけだ。」

「おやあね、お爺さん、断うなさい、」とその時傍からお島が口を挟んで「伊助のとこへは私の方から直に使を出しといたけるからね、さうしたら山本と堤の甚兵衛さんとこだけになるだらう、二時間から時間が助かるわよ、ゆつくりして晩飯を食つて行きなされ。ね、あんた、それがいゝわね？」

「それがいゝ、それがいゝ、」と時松は上機嫌で言つた。「まあ、兎に角足を延ばしてゆつくり飲んでつておくれよ。……なアに、元を洗へば従兄弟同志だ、貸すとか借るとか言ふのが間違つてるんだ、さうぢやないか、ねえ、桶勘のお爺さん、お互ひに餘つてるものが貸し、足りないものが借りるのはこれは當り前の話さ。庄左衛門の家だつて、彼奴の親父の若い時分には俺の家に始終一兩二兩と金を借りに來やがつて、終ひには借りる言ひ譯がないもんだから贋の慶長小判を持つてこれを抵當に貸してくれなんて言つて來たもんださうだよ、まだ俺の爺さんが生きてゐた時分でな、婆さんはそれを知りながら、可哀さうだからつて貸し貸にしてやつたものださうだが、今の庄左衛門の奴つたらそんな事は夢にも知らんやうな顔をしやがつて、僅か二百兩や三百兩の金に高い利子をとつてさ、おまけに返す期限が一寸でも遅れると、此方の村へ次手があるたんびに矢の催促の手紙なんだからね、その催促状も便利屋や家の若い者などの次手の時に届けて寄越すのならまだ分つてるが、山人足であらうが、富山の薬屋であらうが、誰にでもことづけて寄越すんだからかなはないよ。あんな因業な奴だから、やはり風位で命を落すやうな目にあふんだ。……おい、お島、お銚子の代りを！」

「だつて、庄左衛門さんが死んだと言つても、拂はないで濟ます譯には行くまい、お前、」と勘作は空腹に飲んだので、眞赤に顔を染めながら言つた。

「なアに、そこが天の助けと來てるんだ、」と時松は額を叩きながら、「あんな慾張りにも拔け目があるんだよ。妙なきつか

けがあつてな、柿勘さん、そんな事は後にも先にもない事なんだが、それが證文を入れずに借りた金なのさ。その代り、二百五十兩借りて、今日、つまり十五日に三百兩にして返すことにしてあつたんだが、……なアに、神樣はいゝ方に味方なさるんだよ。おい〳〵遠慮なさんなよ、飲めない口ぢやないだらう、さあ、熱いとこをもう一杯……」

だが、流石にそんな事をして時を潰してゐるのが、醉つ拂つてゐる勘作に少しづつ氣が咎めて來た。のみならず、そこへ段々とお島の手料理が運ばれて、時松が見る見るうちに腹の中に五合六合と酒が這入つて來るにつれて、死んだ庄左衞門のことを今罵つてゐるかと思ふと、直と次には氣の毒だ一生これといふ面白い目を見ずに金の番をして死んだやうなものだと言つて泣き出したり、かと思ふと、三百兩の金を坐つてゐて儲けたやうなものだ、お爺さん、お前に十兩やらうとか、お通夜は明日の晩にして、兎に角これから岩――村まで行つて、料理屋でこつそり飲み明かさうかとか、次第に狂態が甚しくなつて來るのを見てゐると、その反對に勘作の酒は段々と醒めて來た。勘作は何度ももじ〳〵と尻を浮かして立上りかけては止められたが、やつと時松の家に別れを告げて、外に出た時は丁度正午時分であつた。生憎、今度は雲が晴れて、秋らしい赤い色の日がかん〳〵照つてゐるのも、彼には都合が惡かつた。帽子も何も被つてゐないので、酒に醉つた赤い顏を隱すことが出來ないのである。彼はちやんぽんを鳴らすどころか、元――村では外に寄る所がなかつたのでこそ〳〵と泥坊のやうに、ともするとひよろつく足を踏みしめて、大急ぎで村を通り拔けた。そこから目指す山上までは成――村の方は時松に賴んで來たので、近道を行くと、これも矢張り道は嶮しかつたが一里餘りであつた。が、その道に彼は二時間以上かゝつた。途中で息切れがして、谷川の水溜りを見付けては一服して水を飲んだ。山上に近くなつた邊に來た時は醉ひは大體醒めてしまつたが、時松の家でそんなに食べなかつたので空腹を覺えたので、三十分ばかり路傍の木の根に腰を下ろして、持參した握り飯の辨當を開いた。そこは今迄通つて來た道の中では一番見晴らしのいゝ所で、目の下に大きな谷が口のやうに開けてゐて、岩――村の方は見えなかつたが、遠く下――町の方が見はらされた。秋の日の

ことで、空氣が澄み切つてゐるので、何處も彼處も畫にかいたやうにはつきりと眺められた。下——町の邊であらう、一本の白い煙が長々と横になびいてゐるのは汽車のそれであらうか。勘作の心持は再び暢びやかになつて來た。ちゝゝゝと頭の上で百舌の鳴く聲が聞えるのである。——だが、私はこゝで勘作と共に、いつ迄も山の上の眺望を縱にしてゐる餘裕を持たないので、これから少し先を急ぐと、やがて、彼が山上の獵師の平造の家が見える、そこへ行く迄の二町ばかりの急阪を上つて行くと、どうしたのか平造の家の前に大勢の獵師が集まつて、何か頻りに相談してゐるらしい樣子が眺められた。

この山上といふところは、外の村と違つて一ところに村らしく何軒かの家がかたまつてあるのではなくて、十軒餘りの獵師の家が彼方此方に散らばつてゐるのを總稱して斯う呼ぶのであつた。そしてそれ等の獵師の中で、平造が言はゞ頭株であつた。その平造の親の平太郎が以前先代の庄左衞門の家に奉公してゐたのが、その後庄左衞門の世話でこの山上に家を建てゝもらつたり、獵したものを買上げてもらつたりした縁故があるので、つまり庄左衞門の家と平造のそれとは全然主從のそれであつた。從つて、平造を頭株に戴いてゐるその邊の獵師たちは、矢張り庄左衞門の家來筋になる譯で、現に彼等の獵したものは悉く平造が一纒めにして、これも亦庄左衞門の家來筋に當る吉右衞門といふ男があつて、その男のところへ金に代へに行くといふやうな仕掛になつてゐたのである。

「だから、皆の衆、もう一兩日待つてくれ、」と群衆の一足前のところに立つて、彼等に向つて平造が叫んでゐた。「俺はいつ迄も吉右衞門を相手にしてゐても埒があかないと思つたものだから、この前岩——へ行つた時に庄左衞門さんにお目にかゝつて、これ迄よりも二割方增して買上げてもらひたいと言ふことを賴んでおいたんだ。その時庄左衞門さんの言ふのには、私は大抵どうにかお前たちの望み通りにするつもりぢやが、何分その方は吉右衞門に任し切りぢやて、吉右衞門にも色々都合があるだらうと思ふ、お前たちから高く買つたら、自然高く賣らなければならない、さういふ事も私の一存で

行かぬから、兎に角、一應吉右衛門と相談して、なるべくお前さんの爲になるやうにする、と斯ういふ話だつた。然し、今日はもう遲いから、明日、俺が岩――まで行つて來るよ、何もみんなで押しかけて行く事は入らんぢやないか？」

「みんなで行かなければ駄目な事だと俺は思ふ。」と群衆の中の一人が言ひ返した。

「さうだ、さうだ、と又別の者が叫んだ。「いつも此方があんまり音無し過ぎるもんだから、それを向ふにいゝやうにされるんだ。今度こそうんと此方の腰を強くして掛らなければ駄目だぞ！」

「明日なんて、そんなぐづ〳〵してる事はない、」と又他の者が叫んだ。「今日これからだつて遲くない。これからみんなで行つて、此方の言ひ分が通る迄歸らない覺悟で行け行け！」

おや〳〵、又何か庄左衛門の家の話だな、と山道を上つて行きながら勘作は思つた。あり餘るやうな金持になりたくないな、矢張り我々のやうなその日暮しの者が一番氣樂でいゝんだな。――そして、今に誰か自分の來たのに氣がついてくれるだらうと思つて、勘作は彼等の半町ほど近く迄來たが、

「庄左衛門は少しは分つてるとしても、あの吉右衛門の奴が因業たから……」などと彼方では相變らずつゞけて、一向誰も振り向かないので、そこで彼は思ひ切つて突然ぢやらんぼん〳〵と鐘を鳴らして見た。すると、獵師たちは一度に勘作の方を振り向いた。

「何ぢや、何ぢや？」と平造が叫んだ。「ぢやんぼん廻りか。や、桶勘の爺さんぢやないか？」

が、勘作はわざとゆつくりと、鐘だけは出來るだけ力を込めて鳴らしながら、彼等の方へ近づいて行つた。

「誰ぢや、誰ぢや、誰が死んだんぢや？」と待切れないやうに平造が聞いた。

そこで、漸く彼等の前まで歩いて行つて、勘作は老人らしくうんと一つ腰を延ばしてから、

「庄左衛門さんが昨夜亡くなつたんで、明日と明後日の晩がお通夜、そして十八日がお弔ひぢや、」と言つた。

「何、庄左衛門が死んだ？」「本當か？」「爺さん、今の俺たちの話を聞いてゐて、からかふんだらう？」「本當か？」

「庄左衛門が？」といふやうな言葉が何人もの口々から一時に吐出された。

「庄左衛門さんは昨夜亡くなつたんだ、明日と明後日の晩がお通夜で、十八日がお弔ひぢや、」と勘作はもう一度繰返した。

わーッ！ といふやうな聲が起つた。勘作は誰かに突飛ばされたのを覺えた。そして今度起上つた時は、山の下の方に向つて、獵師の一團が口々に叫びながら走つて行く後姿が眺められた。

獵師たちが口々に叫んで言ふには「さあ、こんな事があるから言はんこつちやない。」「今のうちに何とか話をつけなければ吉右衛門の奴がどんな事をしてしまふか分らん。」然し肝腎の庄左衛門に亡くなられたんでは、幾ら騒いでももう後の祭ぢやないか。」「ぐづ〳〵言つたら吉右衛門の家を焼討にしてしまへ。」「次手に庄左衛門の家もやつてしまへ！」

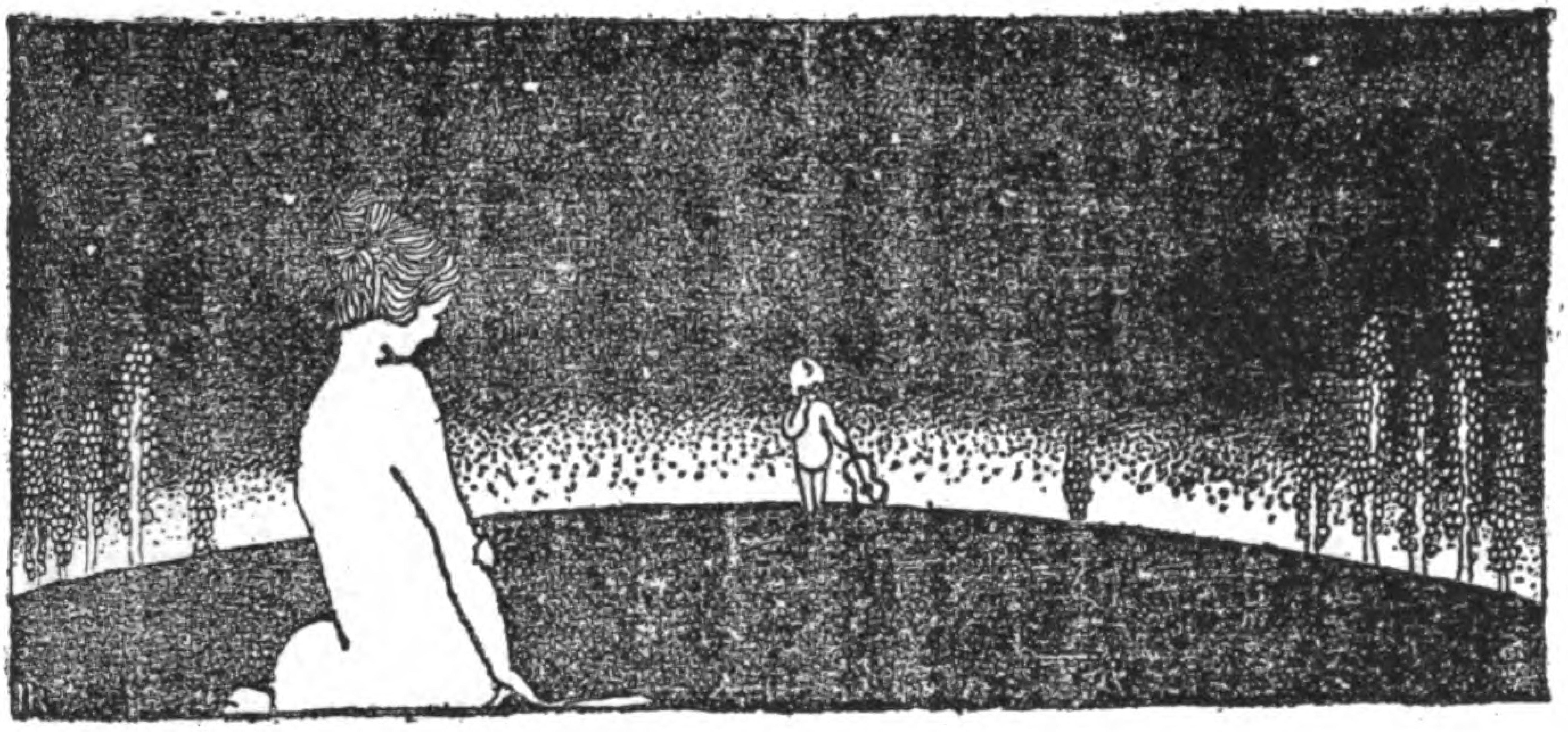
勘作は今突き轉ばされた時、手を突いた拍子に可成りひどく磨り傷を負はされた、その手の傷を口で嘗めながら、一方の手で着物の埃を拂つてしまつた時には、最早や遙かに獵師等のわい〳〵叫ぶ聲だけで、彼等の姿は彼方の岩の出つ張りの蔭に隠れて見えなかつた。

「畜生、畜生！」と彼は唾を吐きながら叫んだ。それと共に身體の疲れと、未だ幾分か酒の醉ひの殘つてゐたのと、突き倒された時の痛みとで、急にがつくりとその場に尻を突いて蹲んでしまつた。そして、その時初めて、今日の朝から次々に遭つた出來事を一緒に思出して、彼が日當りのいゝ土間の仕事場に坐つてゐた二十年の間に、世の中が随分變つてしまつたことがつく〴〵感じられた。彼は長い間膝を突つ立てたまゝで、兩手をだらりと地面に突いて、ぼんやりしてゐた。それと並行して、首の兩側から紐に依つてぶら下つてゐるぢやんぽんの鐘も、矢張り疲れたやうに地面の上に俯伏しになつてゐた。

やがて、彼れ此れ三十分もしてから、彼は氣の抜けた人のやうに立上つて、元來た道とは違つた方角の、廣——川の岸に出る方の細道に向つて歩き出した。さて、それから、堤の粉屋の甚兵衛のところに行つて、彼がどんな目に遭つたか、最早や豫定の枚數が盡きたので、私はそれを讀者に語ることは出來ないのを殘念に思ふ。いづれ又稿を改めて、別のぢやんぽん廻りの一日を述べる事がある時、次手に書くことがあるかも知れない。

ぢやんぽん廻りの勘作はまだ生きてゐて、私は外に色々の話を彼から聞いてゐたのである。

神よ、彼の餘生に平和を與へ給へ。（三・二）



波の音

田山花袋

一

「何うもあれは變だね？」かう大學生の小畠はそこに入つて來た旅舍の中年の女中に言つた。それは廣い海に面した室で、長い緣側と、スロオプになつてゐる廣場とを隔てゝ、向うに波の白く凄じく岩に當つて碎けてゐるのを目にするやうなところであつた。

「え？」

頷で客の指す方に眼を遣りながら女中は訊いた。

「あの女さ？」

「あ、あの岩の上の？　本當ね？　何うかしてるのね？」女中もぢつと其方の方を見た。

岸に近く、大きな岩の突立つてゐるその一角には、さつきからその女――十八九の女學生風の庇髮に結つた女がさも大海のどよみに引込まれてでも行きさうに、ぢつと長い間立ち盡してゐるのをかれ等は目にした。さつきまでは立つてゐたのが、

今はいくらかこゝみ加減に岩の一角に身を寄せるやうにしてゐた。

「さつきから、あそこにゐるんですか？」

「さう——」

小畠は答へた。

「いやねえ！さつきも向うでそんなことを言つてゐたんですけどもね。誰か言つてやつて呉れると好いのねえ！」女中はぢつと其方を見詰めるやうにして、「もしものことでもあると、それこそ本當に可哀相ですからねえ？」

「家の客？」

小畠は訊いた。

「いゝえ、家のお客ぢやないんですけどもね。何でも、K館に來てる客ださうですよ。昨日からですよ、あゝしてあちこちに立つてゐるのは、何でも昨日の夕方とか、向うの松原の中を泣きながら歩いてゐたのを見たものがあつたので、それから皆なが氣が附き出したんですツて？　何でも、家の番頭さんがK館に言つてやつたさうです？」

「ひとりつきりなの？」

「さうですつて。…………あとから誰か來るやうな話で、一昨日から來てゐるんださうですけども——。そのつれなんか來やしないんですつて？」

「可哀相だな」

「本當に誰か言つてやつて呉れると好いと思ふのねえ。あの若さで、間違ひでもすると、それこそ可哀相ですからねえ」

女中はまたその岩の上の方をぢつと見た。

大學生の小畠には、しかし何うすることも出來なかつた。自分で言つてやりたいやうな氣持もしないではなかつたけれ

ども、さうか言つて、餘り輕率に、果してさうか否かもわからないところに出て行くわけにも行かなかつた。かれは弱い胸の故障を治すために半月ほど前から此の海岸の旅舍に來てゐるのであつたが、そのわかい心には波の音も、雲のたゝずまひも、松原を透してさし込んで來る夕日の影も、微かな音を立てゝ沖を通つて行くエンジン仕かけの漁船も、すべて情緒を惹くの材料とならぬものはなかつた。かれはレクラムのハイネの詩集を手にしつゝ、いつも裏の松原から燈臺の方へと出て行つた。時には、日の暮れ果てゝ了ふまで、その燈臺の丘の上に立つてゐることなどもないではなかつた。かれも昨日の夕、歸つて來る松原の一角でその女學生風の女が向うから歩いて來るのにふと出會したことを思ひ起した。青白い、何方かと言へば丸顏の美しい顏が浮き出すやうに薄暮の海岸の空氣の中に見えてゐたことを思ひ起した。

「駐在所では知つてゐるのかね？」

「何うですかね？　知つてゐても、あそこにゐる巡査はのんきですからね？」かう女中は言つたが、しかしいつまでもそんなことに取り合つてゐるわけには行かないといふやうに、そのまゝすたすたと長い縁側を向うの方へと行つた。

二

暫く經つた後には、その岩の上には、最早その女の姿は見出されなかつた。いつ下りたともなしに――いつ下りて磯を通つて行つたともなしに、その空しい岩の上には、唯白く寂しく波が打寄せてゐるばかりであつた。

不思議にも小島には、その女のことが氣になり出した。かれは立つて縁側へと出て行つた。そしてあたりを見廻した。そこからは遠く長崎の鼻の方まで見える筈であつたけれども、しかも何處にもその姿を見出すことは出來なかつた。かれは其處にあつた草履を突かけて磯の方へと出て行つた。

まさかにあのまゝ身を投げて了つたとは思へなかつたけれども、また、そんなことを氣にして見たとて爲方がないとも

思つたけれども、しかもかれは磯から磯へ、松原から松原へと行つて見ずにはゐられなかつた。かれはさうした不仕合せな娘の涙がそのまゝその身に迫つて來るのを何うすることも出來なかつた。かれは日の暮れるまで松原の中をあちこちと歩いた。

三

夕飯の時に、同じ女中がそこに來て坐つた。

小畠は訊いた。

「さつきの女は何うしたね？」

「よく知りませんけれども、K館でも家で知らせてやつたり、何かしたもんですから、注意してゐるさうですから、大丈夫でせう。あれから、家に歸つて、手紙か何か書いてゐたさうですよ」

「ふむ――」

「今夜あたり危ないんぢやないかね？」

「大丈夫ですよ。何でも向うの番頭がかゝりつきりで氣をつけてゐたさうですから……。」かう言つたが、盛つた茶碗を盆に載せて戻しながら「何うなすつたの？　大變氣になさるのね？」

「だつて？」

「それは死んでは大變ですけどもね。大丈夫ですよ。そんなに、わけなく人間は死ねるもんぢやありませんよ。本當に死ぬ氣なら、あんなに彷徨してゐはしませんよ。」

「それはさうだらうけども――」暫し默つて、「でも、死なうにも死ねずにゐるのが可哀相ぢやないか？」

「それはさうですけどもね？」

「よくかういふのがあるのかねえ？」

「え……時々ありますよ。いつかなんか、飛び込みがけたのを後から押たことがありますよ……。死にたくなくつて死ぬものは、成るたけ人目のあるところで飛込みますね？」

「さうかな」

「ですから、あの娘なんかも大丈夫ですよ」

「さうかな」

かう言つたけれども、しかも小島は安心することは出來なかつた。夜の空氣は餘り體に好くないと思ひながらも、かれは海岸をそここゝと歩いた。

岸に打寄せて碎ける波が白く線を成して見えた。燈臺の灯は、廻轉する度に、その幅の廣い、大きい、長い光芒を夜の闇に曳いて行つた。海は眞暗で、船の灯らしい灯も見えなかつた。

かれは深く人生を思はずにはゐられなかつた。かうして立つて歩いてゐるかれすらも、來年はもはやこの世にゐるかゐないかわからなかつた。その女は勿論、かれすらもこの世の中にゐなくなつて、波ばかりが高く鬩つてゐるやうに思はれた。かれは松原の夜露に濡れながら裏口からそつと自分の室へと歸つて行つた。

四

ぽつかりと眼が明いた。ドウ、ドウー波の音が凄しくきこえる。と、その波の中にその女の浮びつ沈みつして漂つてゐるのがはつきりと眼に見えるやうな氣がした。瞬間！　今の瞬間……それがあの女の生の終極―もはやその荒波の中にもま

れて虐まれてそして呼吸も絶え果てゝ了つてゐる。その長い黒髪が海水の中に藻のやうに亂れてゐる。着てゐる着物も脱けて、白い肌があらはに水中に漂つてゐる……と、かれは一種の深い衝動を總身に感じた。かれは身が縮まるやうな氣がした。かうしてはゐられないやうな氣がした。昨日の中に言つてやれば、言つて慰めてやれば、さうしたことはなかつたのに、思ひ返して生きてゐて呉れたかも知れなかつたのに――と、今までそれと知つてゐながら默つて見てゐた自分の罪が許すべからざるもののやうに思はれ出して來た。かれは床から起き上つた。そして溜呼吸をついた。

否、そればかりではなかつた。かれは廊下へと出て、裏口の戸を一枚そつと明けて見た。遅く月が出たと見えて、しんとした松原が明るく銀色に光つてゐるのをかれは目にした。かれは晝間はとても見ることの出來ない他界の光景をそのまゝそこに發見したやうな氣がした。かの女ばかりではない、自分すらも波の音に誘はれて行きはしないかと思つた。松の葉が一枚一枚はつきりと數へられるかと思はれるほど、それほど明るく銀色に月はさし込んで來てゐた。かれは祈るやうな心持で、（あしたまで生きてゐて呉れ！　何うかして生きてゐて呉れ！）かう深く自分に言つた。（さうしたら――あしたまで生きてゐて呉れたら、屹度俺が救つてやる、屹度救つてやる！）で、かれはそこに立ち盡したまゝ、暫しは身を動かさうともしなかつた。

波の音が屋を撼すばかりに高く高くきこえて來た。

五

女中の顔を見るや否、いきなりかれは訊いた。

「何うしたらう？　あの女は？　死にやしなかつたかしら？」

「何うですかしら？」

女中は晴れやかに笑つて見せた。かの女に取つては、そんなことは何でもないといふやうに見えた。朝日は明るくあたりに照つた。昨夜、夜中に見たやうな光景はもはや何處にもその面影を留めてゐなかつた。岩の上には白く波が打寄せて來た。

かれがその娘のことをその女中から詳しく聞いたのは、それはもはや晝近いころであつた。娘は昨夜も手が離せなかつたといふことであつた。夜中にそッと裏口を開けて出やうとするところを、隣に寝てゐた番頭に見出されて、幸ひに何事も起らなかつたけれども、今だにその危険は除かれないので、K館では困つてゐるといふことであつた。駐在所にも届けるには届けて置いたけれども、さう厳しく言ふことも出來ず、またさう厳しく言つたために、却つてその死を促すやうなことがあつてはならないと言つて、唯、陰ながら保護してゐるぐらゐなもので、それ以上には何うすることも出來ないといふ話であつた。

「そして家にゐるのかね」

「何うですかね」

「まさか、さうかと言つて、外に出さないッていふわけには行かないだらうからなア……」

「困つてゐますよ。K館では――」

「可哀相だな」

小畠に取つては、何うしても自分が出て行くより他爲方がないと言ふやうな氣がして來た。(さうだ――俺が行かう――そしてやさしく言つてやらう――さうしたら、わかるだらう。わからないことはあるまい。もし、俺が出て行かないために、そのまゝ死なせるやうなことがあつては、それこそ遺憾だ……。それこそその罪――それははつきり罪とは言ふことは出來ないかも知れなかつたけれども、しかし救ふことの出來るものを救はなかつたといふ心苦しさが一生自分について

迎るにきまつてゐる」と、その美しい青白い女の丸い顔がはつきりとかれの眼の前に浮び出して來た。

かれは出かけて行つた。磯から磯へと歩いた。Ｋ館の前をも行つたり來たりした。と、丁度よくそこにその番頭がゐたので、それとなしに、その女の家にゐるかゐないかをたしかめて見た。番頭の話では、女はさつき燈臺の方へと出かけて行つたとのことであつた。

番頭はかれの方をじろじろ見ながら、

「あの方をあなたは御存じなんですか？」

「いゝえ……」

「ぢや、何うしてそんなことをおきゝになるんですか？」

「いや、ちよつと――」

「貴方はＫ館のお客さまですね？」

「さうだ――」

番頭はもう少し何か言ひ度さうな顔をしてゐたけれども、かれがそのまゝ此方へ來て了つたので唯ぢつと此方を長く見送つてゐた。彼は一番先きに燈臺の方へと出かけて行つた。

そこは石工達が深く石を掘り下げたために谷のやうになつてゐるやうなところであつた。かれは燈臺の前からぢつとその裏の胎内くゞりの方へと行つた。そこにも女の姿は見當らなかつた。

かれはそこから燈臺の反對の方に出て、石切谷の向うからひろびろと連つてゐる砂濱の方へと歩いて行つた。波濤が白く線を成して打寄せて來てゐるのが見えた。

六

たうとう松原の角のところで、小畠は女の姿を發見した。

女は下に展げられた海をぢつと見詰めてゐたやうだつたが、かれの近寄つて行く足音を聞きつけて、そのまゝ青白いる

びしさうな顔を此方に向けた。

すぐ縫は立つて向うへ行かうとした。

「ちよつと、ちよつと……」

小畠は聲をかけた。

「…………？」

女は迂散臭さうに、また聲をかけたものの何者であるかを探すやうに、疑深い眼をかれの方に向けた。

小畠は近寄つて行つた。「少し、お話したいことがあるんですがね？」かう言つただけで、あとは何も言はないでも、縫にはそれが何であるか、敵であるか、味方であるか、かの女を捉へるためにやつて來たのか、かの女を慰めるためにやつて來たのか、それともまたかの女を死の淵から救つて與れるために、否、或はそれ以上に傷いたかの女の心を蘇らせて與れるためにそこにあらはれて來たものであるのかといふことがひとり手にわかつた。女はいきなり枯れた草原に身を突伏した。そして夥しく泣いた。二人は始めて口をきゝ合つた身ではなし、既に深くその苦しさを知つて與れてでもゐるものか何ぞのやうに、心も體も此方に寄せかけるやうにして泣いた。午後の日の光線のさしあたつてゐるしんとした松の林の中には、女の泣聲が微かに微かに顫へるやうにきこえた。

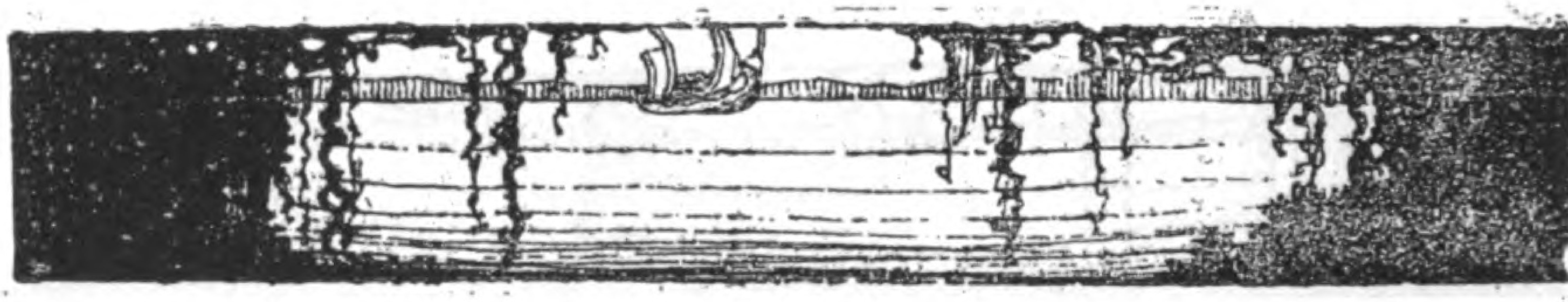
「本當に、本當に……もう泣かなくつても……泣かなくつても好いんですから、ね、ね、ね……」男の劬はる聲が靜かにした。

女は打伏しに袖で顔を蔽つたまゝ、暫しは泣く音をとゞめなかつた。小畠は小畠で、何をきかなくとも、その悲哀が、苦痛がはつきりとすべてわかつたやうな氣がした。

「本當にもう泣かなくつても……何うにでもしますから……。ね、ね、してあげますから」

男は女の背を撫でるやうにして小聲で言つた。

泣き止ないのをやつとなだめ賺した時には、女はもう袖を面に當てゝゐなかつた。涙に泣き濡れたかの女の顔には、死ばかりか、心の傷痍をも救つて與れた男に對する感謝の色がはつきりと上つて來てゐた 頭上では松の音が微かに鳴つた。



渚

澤ゆき子

おびたゞしい花をのせて
いつからかこの沼におくりだされた舟
若い深紅の舟は
到着した渚がせきとめる事の難い春のため
花がさきくるつて
青々しい風がここには舟の休めない事を私につける。

悲しい命から
この舟一つを死におくり出してくれ、
春の孤獨をふりあふいで、このしゆんかんの女杭業者は



空の涯をつきぬくまでに長泣きする。
友よ沼べりの花は
たつたひとつの哀憐のこころをもとめて咲くのだ。
みごとな厚い花びらを
ぬまの深代に頸にす淡影に
生れ乍ら埋れたならば
沼にしみてゆく心ならば
たゞさすらつてゐる丈で私はいい…………
壯な愛の沼にたゞよひつくした香。
なめらかな花粉にたゞせぶ森よ、
私ゃ自巾で…………いつもひとりだ。



ピノチオ（童話）

佐藤春夫

それからの事だが、諸君、氣の毒なゲペット爺さんが何の悪い事もしないで牢屋へ曳かれて行つた間に、悪戯もののピノチオは、逃がして貰つたものだから、家に歸るに就いちやもつと近道をと思つて野原の方を指して勢一ぱい大急ぎで突つ走つた。急ぎにまかせて彼は跳び越した——高い土手であらうが、茨の生籬であらうが、水たまりの濠であらうが——まるで獵人に追つかけられた時の兎か鹿かを見たやうに。

家の門口まで來て見ると、往來のところの戸は閉め切つてはゐなかつた。それを押開けて部屋へ這入ると、彼はぴつしやり閂を支つた。さうして床の上へ身を投げ出してホーッと大きく安堵の溜息をした。

だがこのやうな元氣さもさうさう永つづきはしなかつた。といふのは部屋のなかで誰かがこんなことを言つて呼んでゐたからである——「クリッ、クリッ、クリッ。」

『誰だ、僕に話をしかけるのは？』ピノチオはさう言つた。びつくりして。

『私ですよ。』

ピノチオが振り返つてみると、大きな蟋蟀が壁の上をのつそりと歩いてゐるところだつた。

『やい蟋蟀、いつたい君は誰だい？』

『私は物言ふ蟋蟀ですよ。もう百年あまりもこの部屋に住んでゐる者です。』

『ところで今日は、此部屋は俺のものだぞ。』と操人形が言つた『だから俺のお氣に召したいと思ふなら、とつとと出て行くことだ。一度だつてふり返つたりすることはないぞ。』

『私はここからは動かないつもりです。』と蟋蟀は言つた。『或る大へん大事な事を君に聞いて貰つた上でなくちや。』

『それを話して行けばいいさ。』

『氣の毒なのは、兩親に逆つたり家から突つ走つたりする馬鹿な子供です。そんな子供たちは世の中へ出たつて滿足なことはありやしない。さうしておそかれ早かれ自分のした事を後悔するでせうよ。』

『けちな蟋蟀めが。好きなだけほざくがいいや。だがな、俺は明日の朝になれや、夜の明けぬ間に出て行くわい。こんなところにいつまでもぐづぐづして居た日にや、僕も他所の子のやうな目に遭ふのは知れ切つてゐら。今に學校へ行かなけやならないやうなはめになら、——本當のことは僕てんで勉強なんぞさせられたくはない。蝶々を追つかけたり、木へ登つたり、巣から小鳥をつかみ出したり、そんな事をして遊んだ方がずつと增しだよ。』

『氣のどくなぼんくらさん！　そんなことをしてゐて、しまひに驢馬になつてから、みんなの笑ひ草にされるとは氣がつかないのですね？』

『默れ！　辛氣くさい蟋蟀め！』と、ピノチオがどなつた。

けれども蟋蟀は、我慢強い哲學者だつたから、このやうな不躾にも怒り出したりなぞはしないで、同じやうな聲音でさとしつづけた、『學校へ行くのが厭なら仕方がない。それぢや正直にして生計が立つやうに、職でも何か習つてみちやどう



です。何故さうはしないのです？」

『聞きたけや聞かしてやらあ！』そろそろ堪忍仕切れ〳〵なつたピノキオが答へた。『いろんな仕事のなかでも、俺の性に適ふのはたつた一つしかないんだよ。』

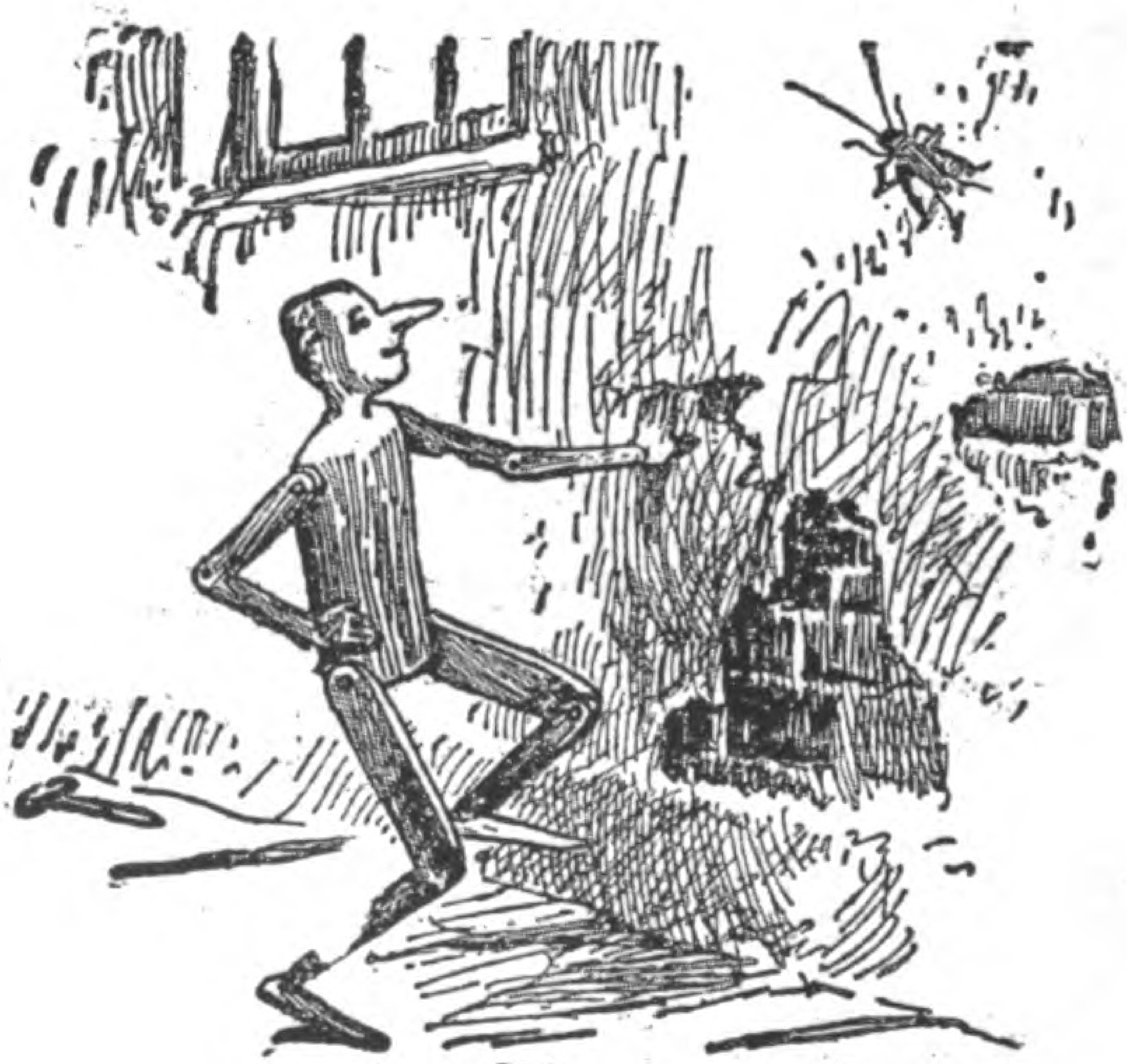
『といふと、一たい何でせうね？』

『飲んで、食つて、寝て、わがままをして、朝から晩までのらりくらりと暮らすことだい。』

『そんなふうにして暮らす人は一』と物言ふ蟋蟀は相變らず落着いた口調で言つた。『みんな、いづれは養老院か監獄で果てるにきまつてゐます。』

『何を？　蟋蟀。いいか！　僕を怒らせたりすると、今に氣の毒な目を見るぞ。』

『可哀さうにピノキオ！　君こそ氣の毒なものだなあ。』



『何が氣の毒だい！』

『といふのはね、君は人形だからさ。その上もつと氣の毒なことには、君は頭腦まで木で出來てゐるね。』

かう言はれたピノキオは、奮然と跳び上つた。ベンチのうへから槌を取上げると、いきなり物言ふ蟋蟀を目かけて投げつけた。

おほかた、ピノキオはそんなことをしでかすつもりはなかつたのだらう。が、運悪くも槌はちひさな蟋蟀の頭にあたつて、可哀さうに蟋蟀は死んでしまつた。

5

そのうちに夜になつて來た。ピノキオは何も食べなかつたことを思ひ出すと、なんだか食べたさが腹のなかで暴れまは

つてゐるやうな氣がした。いつたい子供の食慾といふものは實に急速に募つて來るもので、九六分もたつと食べたさはもう飢じさになるし、それがまたおしまひには狼の餓のやうに猛烈になつて來るものだ。

氣の毒なピノチオはやにはに竈のところへ駆けつけて行つた。そこには鍋がかけられてあつて湯が煮え立つてゐる。そのなかをのぞき込まうとしてふと、氣が付くと、それはただの繪ぢやないか、ピノチオはどんなにあつけに取られたらう？ 彼の鼻は、元々大きいところへ持つて來て、おかげでまたしても延びはじめたが、たうとう手の指四本分ほどにもなつてしまつた。さて、彼は部屋中を駆けづりまはつて、抽出しといふ抽出し、函といふ函、物かげといふ物かげ、一つのこらず掻きまはしてみた。――どこかに食べもののかけらでもないかと思つたのだ。ほんのちつほけなコチ〳〵に、干涸びたパンのきれでも、それの皮でも、犬にやる肉のこまぎれでも、馬にやる乾草にも、魚の骨でも、さくらんぼうの種でも、實際食べられさへすれや何でもよかつた が、そんなものはてんで見つからない。絶無であつた。

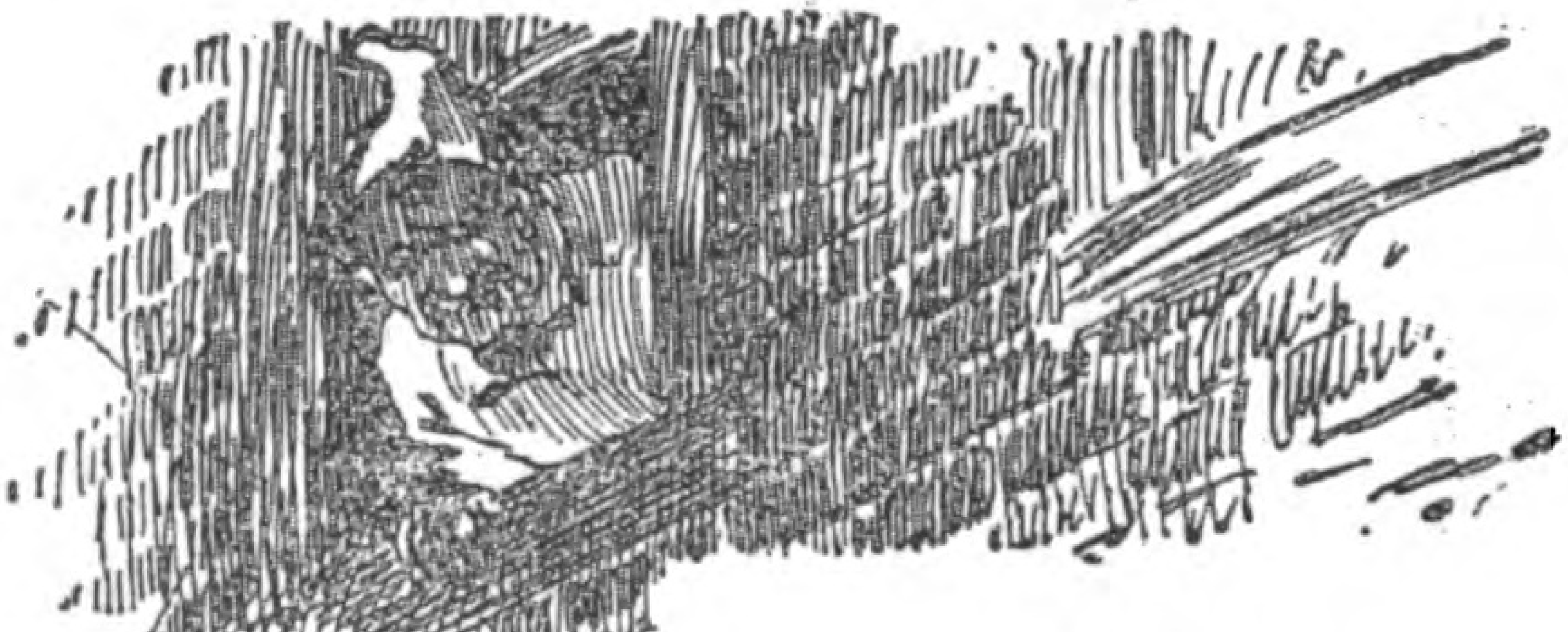


そのうちにも彼の飢じさは間斷なく切迫する。可哀さうなピノチオは、今はもう欠伸でもするよりほかに氣の紛らしやうもないことになつた。彼は滿身の元氣をしぼり出して大欠伸をしたが、あまり大きかつたから口の兩端が耳までとゞいたほどだつた。と、そのあとで氣がとほくなつて頭がポーとなつて來た。がつくりとしてしまつて泣き出しながら彼は考へた――「物言ふ蟋蟀が言つたとほりだ。お父さんを見向きもしないで逃げ出して來たりしてまつたく僕が惡るかつた。たつた今お父さんさへここに居てくれたら、お腹がすいて死ぬなんて僕、そんな目になんぞ遭はなくたつてよかつたものを。ああ！　まあこれは何といふ切ない恐ろしい氣持だらう！」

不意に彼はいいものを見付けたやうな氣がしてはッとした。山のやうに積み上げたがらくたものの上に何だか雛の卵にそつくりのやうなものが乘つてゐるではないか。一瞬間の後には、そこへ飛んで行つてみた彼は、おほきな素晴らしい、それこそまぎれもない雛の卵を見つけ出してゐた。

操人形の喜びやうときたら何ともお話の仕樣はない。その時の氣持が知りたくば是非とも一ぺんこの時の操人形に生れ代つてみる必要があらう。全く、夢ではないかと思つて、彼はおつかなびつくりで手のなかの卵をころがしてみた。撫でてみた。頰ずりをしてみた。さて頰ずりをしながら彼は言つた。『それにつけても、これを一たいどんな料理にしたものだらう？ オムレツにしようか？ いや、茄でた方がいい。それとも、バタで揚げた方がおいしがらうか知ら？ いつそのこと料理なぞはよしてナマで飲んでやらうか？ さうだ、ソース鍋へ割り込んで燒くのが一等だ。』

言ふが早いかもう取りかかつてゐた。木屑に火をつけてその上へソース鍋を掛けた。鍋の中へは、油でもないバタでもない、水をちよつぴり差した。そろそろ水から湯氣が立ち出すと、コトッ！――彼は卵のからへ罅を入れて、そいつを煮え立つて來た湯氣の上へ持つて行つた。さていよいよ卵を落し込まうと二つに割つたと思ふと、中から飛び出したのは卵の黄味どころか、實に元氣のいい慇懃な可愛いい雛兒なのだ。そいつが綺麗にお辭儀をして、さて言つた、『おや、有難うございますこと、ピノチオさん。お蔭さまでわたし殼をやぶる手間がはぶけましたわ。御免あそばせ。御機嫌よろしう、どうぞ皆さまにもよろしくね。』



かう言ひながら、この可愛いい雛兒は羽根をひろげたかと見るまに、いきなり開いてゐた窓から飛び出して見る見る影も形も消え去つた。

莫迦を見たのは操人形で、彼はそこに取殘されたまま、目を見据ゑて、口を開けて、また兩手には卵のからを持つて、しばらくの間はきよとんとしてゐた。けれども、彼はすぐ我に返ると泣き出した。わめき出した。ぢだんだを踏み出した。さうして泣きながらに彼は言つた。

『ああ、本當だ！ 物言ふ蟋蟀が言つたとほりだ。もしも僕さへ逃げて來なかつたら、お父さんさへだつた今ここにゐて下さつたら、僕、お腹が空いて死ぬなんてそんな目を見るのぢやなかつたに。ああ！ 飢じいといふのはまあ何と怖ろしい病氣だらう！』

そこで彼は今のさつきよりももう一層心細くなつてきて、それに外に方法も分らなかつたから、ともかくも出かけて隣

りの市へ駈けて行つてみたら、誰かもののわかつた人でもゐて、パンのかけらぐらゐ自分に恵んでくれまいものでもないと考へた。

6

神鳴は一面に轟き渡る。稲光ははためく、空はまるで火事だ。おまけに氣味の悪い風か嘯きながら吹きあばれて濛々と沙塵の雲を捲き上げる。

ピノチオは神鳴や稲光も怖しくはあつた。が、その怖しさに負けぬぐらゐ飢じさの方が強かつた。彼はほんの三四百も跳ねるともう市の端れまで來てゐた。息が切れさうであつた。飢じさと怖ろしさとでへとへとに弱り果ててゐる。それだのに市はといふとてんで眞黒闇でがらんとしてしまつてゐる。どの店もみんな休んでしまつたし、家家の戸口は閉めきつてあるし、窓はみんな錠を下してゐる。往來には犬の子一疋さへ居ない。市は死んだも同然である。



そこでピノチオは或る一軒の戸口の鈴の紐を自棄くそになつて引ぱつた。根かぎり鳴らした。『誰か出て來さうなものだがなあ』とひとり言を云ひながら。

と、直ぐに、寝帽子をかぶつたお爺さんが苦りきつた顔で窓から首を出して呶鳴つた。『いま時分、いつたい何が用だ!』

『どうぞパンをちよつぴりやつて下さいませ。』

『歸れ』お爺さんは答へた。お爺さんはピノチオのことをただ、夜なかによくよその門のベルを鳴らしまはつて人々を迷惑させるあのいたづら小僧の仲間だと思ひ込んだものだらう。

可哀さうにピノチオはまた家へ歸つて來た。飢じさで弱り果ててぐんなりと疲れきつて、今はもう立つてゐるだけの元

氣さへもない。彼は椅子へどつかりと崩れ込んだ。木屑がいつぱい燃え盛つてゐるストオブへ足を乗せてゐると、彼はぐつすり寝込んでしまつた。と、彼が眠つてゐる間に、彼の足――木で出來てゐる足へ火が燃えついて、だんだんとそれが灰になつてくる。ところでピノチオは自分の足をまるで他人のものか何ぞのやうにぐうぐう高鼾を立ててゐた。

あくる朝、彼は誰かが戸をたたく音で目を覺ました。

「誰だい？」彼はあくびをしながら目をこすりこすりかう問ふてみた。

「わたしだ」と聲がした。

その聲はゲペットの聲であつた。

7

ピノチオは、まだほんとうに目が覺めきつてゐなかつたものだから、自分の足が焼け落ちてしまつたことには一向氣がつかなかつた。彼は反動をつけて椅子から飛び下りた――駈けつけて行つて戸を開けようと思つたので。ところが二度か三度よろめいたかと見ると彼は床の上へぺしやりと倒れてしまつた。倒れざまに、そのひどい物音はまるで木を入れた袋が家の五階から落つこちて來たのかと思ふばかりであつた。



「戸をお開け。」ゲペットは外からさう呶鳴つた。

「だつて、僕、駄目なんだもの」操人形は泣きながら床の上をのたうちまはつた。

「なぜ？」

「だつて、誰だか僕の足をたべてしまつたんだよう。」

「誰にたべられたのだ？」

「猫だよ。」ピノチオは折からそこで猫が木ぎれにじれて付いてゐるのが目についたものだから、さう答へた。

「戸をお開けと云つたら！」ゲペットはまた繰返した、開けなけや、なかへ這入つてから打つよ。」

『僕、立てないんだもの。嘘ぢやないよ。ねえ！　僕、ねえ！　もう一生、膝子僧で歩かなけやならなくなつちやつたのだもの。』

　ゲペットはこれは何もかも自分をだます狂言だとばかり思ひ込んでゐたから、そんなことは早く打切りにさせなけやと考へた。そこでゲペットは家の横側へ廻ると窓を拔けて飛込んだ。

　はじめゲペットはひどく立腹してゐたがピノチオがほんとうに足無しになつて床の上に反くり返つてゐるのを見た時にはもう可哀さうになつてきて、この操人形の首をやさしく抱きかかへて、なだめにかかつた。ゲペットはこみ上げてくるい、い、い、泣きじやくりを嚥み込みながら言つた。

『これ、ピノチオや。お前はまあ、いつたいまたどうした譯で足なんぞを燒いてしまつたのだえ？』

『知らないんだよ、僕、でも、お父さん昨夜はそれや怖い晩だつたの、ねえ、僕はきつと一生わすれませんよ。神鳴がするし稻光りがするし、それに僕、お腹が

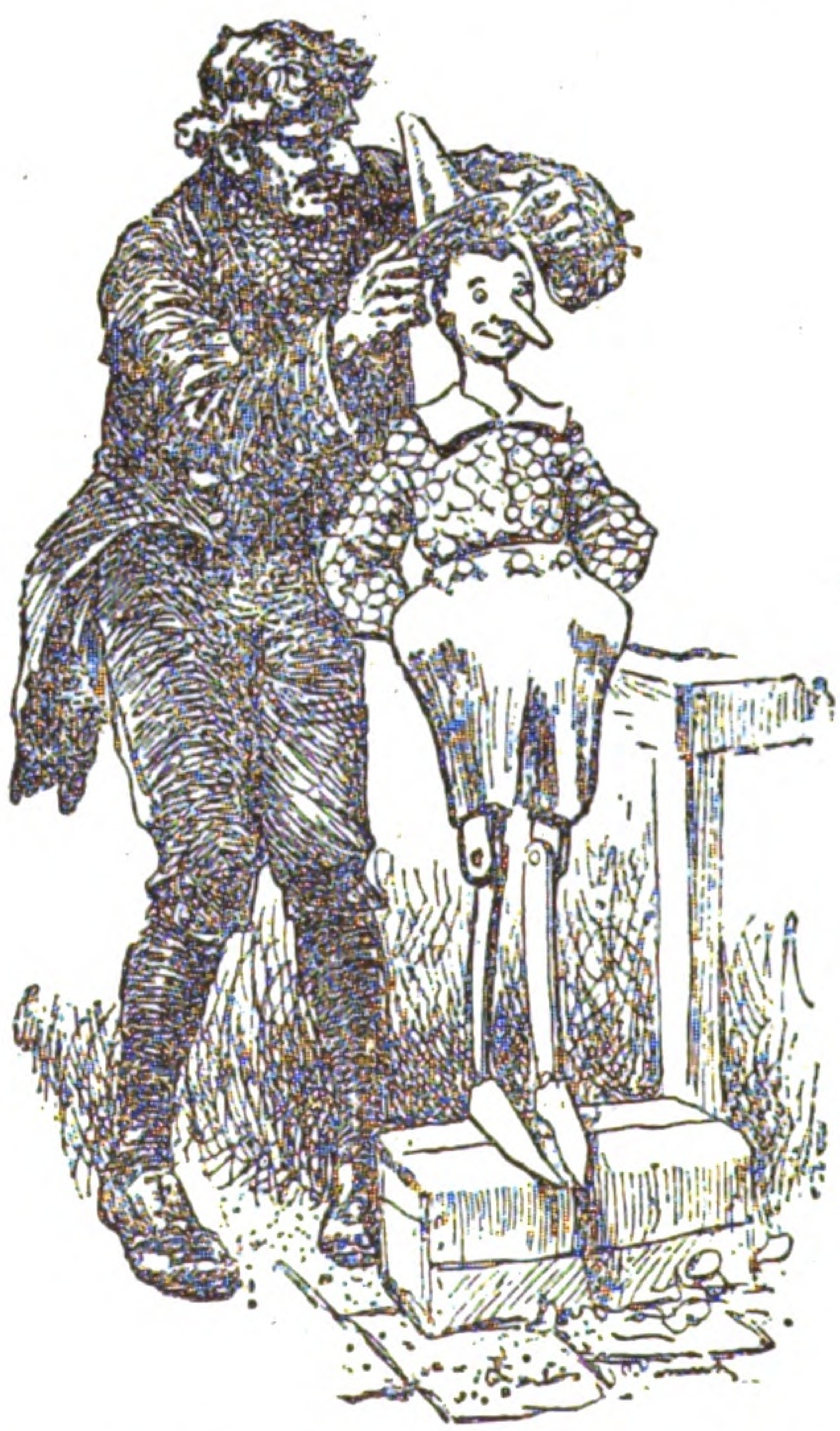


空いてたまらなかつたの！　それからね物言ふ蟋蟀の奴が僕にこんなことを言ふの——（それ見たことか、お前は惡いことをしたからみんな罰が當つたんだ）つて。だから僕は言つてやりました。——（何を！　蟋蟀め）。すると奴がね、——お前は操人形で頭まで木で出來てゐるんだ）つて、さう言ふの。だものだから僕、槌を振り上げて投げてやつたらそれが當つちやつて蟋蟀が死んぢやつたの。それからね、火を焚いて鍋をかけて僕、卵のお料理をしたのだよ。でも僕が卵を破ると殼のなかから小ぽけな雛兒が飛び出して——（さやうなら、小僧さん）だつて……。そんなことをしてゐるうちに僕、だんだんお腹が空いて來てたまらないから、よその家へ駈けて行つて助けて下さいと言つて鈴を鳴したの。寢帽子をかぶつたお爺さんが出て來てね、行け！　と言つたの。子供にそんなことをするなんていけないんだよ、ねえ？　僕すぐにうちへ歸つて椅子へ坐りこんでストオブのうへへ足を乘つけたの。そこ

へお父さんが歸つて來たら僕の足は無くなつてゐるたの。僕ね、今だつてお腹が空いてゐるのだよう。ヒー、ヒー、ヒー、ヒー。』

可哀さうにピノチオは泣き出したが、その聲があんまり大きいので幾哩四方にも聞えるほどだつた。

この悲しい話のあひだ中、ゲペットは、ピノチオが今にも餓死しさうになつてゐるといふただそのことばかりを案じきつてゐたのだが、慌ててポケットから三つの梨子を引き出すと、それを操人形に持たせてやりながら言つた。『この三つの梨子はわたしが朝御飯にと思つて持つてゐたのだ。けれど、さあさ、お前に上げるよ。おあがり、お腹のすいたのが癒るからね。』



『食べさせてくださるのなら、皮をむいてよ、ねえ。』

『皮をむけだつて？』ゲペットはおつそろしくびつくりして答へた。『わたしはまた、お前がそんな氣むづかいし屋さんだと思ひも寄らなかつたわい。困つた奴だ。お天道さまの下ではね、子供といふものは當てがはれたものを默つて食べなくちやならないんだよ。』

『そんなことは分つてゐます。』とピノチオが言つた『だつて僕、皮をむかない果物を食べるなんて出來つこないんだもの。皮なんか食べられやしないよ。』

そこで氣のいいゲペット爺さんはポケットのなかから小さなナイフを取り出すと、せいぜいむしを押へながら三つの梨子をむいてはやつたが、その皮は全部、テーブルの片わきへ置いておいた。

ピノチオは第一番目の梨子を二口で食べてしまふと、その芯を棄てさうにした。とその時、ゲペットは操人形の腕を押へて言つて聞かせた。芯を捨てちやならない。世の中のものは何だつてそれぞれ役に立つのだ。

『だつて僕には、芯なんか食べられやしないよ。』操人形は大聲で言つた――蛇のやうに身をくねらせながら。

『さうか！』ゲペットは別段におこりもしないで言つた。

結局、この三つの芯は棄ててはしまはないで、テーブルの片わきへ皮と一しよに置いておくことになつた。

三つの梨子を食べてしまふ――いや、もつと本式に言へば、呑み込んでしまふと、ピノチオは長い欠伸をしてからかう言ふのだつた『僕、まだお腹が空いてゐるの。』

『でも、お前、上げようにももう何もないよ。』

『無いの。ほんとう？』

『無いよ、この皮と芯とだけだ。』

『そんならいいや。』とピノチオが言つた。『もう無いのなら、僕、皮をたべらあ。』

彼は皮を食べにとりかかつた。最初はちよつと口を皺めたものだが、皮は一つ一つと無くなつてしまつた。皮を食べると彼は芯まで平げてしまつた。何もかもやつつけると彼はやつと堪能したやうに兩方の手で小さなお腹のうへをたたいてさて言ふには

『やあ、これで氣がすんだ。』

『どうだ、分つたらう。』と、ゲペットは言つた『わたしのさつき言つたのは此處のことだて――何でも當てがはれたもので濟ませるやうにしてあまり贅澤は言ふまいと云つたのはね。いいかい。この世では誰だつてあとでどんな成り行になるものか知れたものではない。だからして、常々から一等不運な時のことを心掛けて置きたいものだ。』



（つゞく）



名實（輕喜劇）

久米正雄

人物（第一幕に登場するもの）

入江光四郎。　青年畫家。　二十七八歲

同　光藏。　その父。　實業家。　六十歲位。

內山英太。　その友。　青年畫家。　二十五六歲。

小島辰夫。　創作家。　その友人。　三十歲位。

鈴木みどり。　モデル。　十九歲位。

召使の婆や。

時代

現　代

場所

東京の山手なる入江光四郎の畫室。

第一幕。

第一場。　入江が畫室の內部。或る晴れたる初秋の朝。

（入江光四郎は室の一隅なる卓子の傍に坐して、朝餐の麵麭を喫め居る。そこへ召使の婆や紅茶を持ちて入り來る。）

婆や。おやまだお濟みにならないのでございますか。

入江。うむ。今濟む所だ。食べかけて繪を見てゐたものだからな。（一と通り傍にある自分の繪を見巡して）いくら見直したつて出來上ッてるのは一枚もありやしない。

婆や。展覽會までに新らしくお描きになれば宜しいではございませんか。

入江。處がさうおいそれとは行かないんだよ。俺は今そんなことで中々描く氣が起らないんだ。

婆や。だつて他の皆樣は急にせつせとお描きになるぢやありませんか。

入江。皆は皆、俺は俺さ。俺にはどうしてもさう云ふ手廻しのいゝ事が出來ないんだ。俺にはどうしても神興が要るんだ。えゝと……その……物に深く感じた時でなくちやいけないんだ。

婆や。ではそれは何時起るのでございます。

入江。かうやつて話してる中に猛然と起つて來るか、一ヶ月後に起るか、一年經つたら起るか、十年經つたら湧き出るか、或は一生起らないか、それは全く解らないんだ。

婆や。ではそんなものを當になさらないが宜しいではございませんか。

入江。ところがさうは行かないのだよ。

婆や。何故ですか。

入江。さうさな。それはまあ俺が藝術家だからさ、藝術家と云ふものはそれが無くては仕事が出來ないものなんだよ。

婆や。私なんぞは何ですかよくは存じませんけれど、油畫でも墨繪でも描いて居る中に上達するのだと思ひますわ。旦那樣のやうに描かないで怠けてばかり居らしては、私までが何だか心配ですわ。毎日何となく氣が沈着かない御樣子で、

外へお遊びにお出掛けなすつてばかりゐらつしやるのですもの。

入江。（苦笑して）婆やにはいつも一本參るが、まづ其御心配は有難く頂戴するよ。併し俺が此頃家にゐないのはね、今だから話しをするが、畫なんぞよりよほど大切な事が俺に起つてるからなんだ。

婆や。大切な事と仰るのは。

入江。俺に女の人が出來たんだよ。俺は其人を細君にしようと思つてゐるんだ。

婆や。まあ。

入江。對手は誰だと思ふ。

婆や。そんなことが私にわかるものですか。

入江。婆やの知つてる人だよ。

婆や。存じません。

入江。あのモデルのみどりさ。俺はあいつの涙のモデルつて云ふ渾名さへある、物悲しげな處が氣に入つたのだ。

婆や。まあ眞實でございますか。

入江。眞實とも。俺はもうあれと深い約束をして了つた。

婆や。旦那樣。あなたもほんとにお坊ちやんですね。あんな女を奥樣になさらうなんて飛んでもない事ではありませんか。奥樣になさるには他にいくらも女の方があるではございませんか。伊澤樣のお孃さんでも御親類の綾子さんでも。又いつかお父樣と御一緒においでなすつた水上樣のお孃さんでも、いくらでも候補者がおありなさるぢやございませんか。

入江。それあゐるかも知れん。併し皆少し遠すぎて手が届かないんだよ。どうしてもみどり程手つとり早く行かないんだ。

婆や。それやあの子は氣立も優しいし、器量もよろしうございます。だけどあなたの奥さんになさるには、何か足りない處があるやうに思ひますよ。あなたは他にいくらも立派な奥さんを貰へるんですもの、あの子はいけませんわ。可愛い子ですけれどあなたの奥樣にはいけませんわ。

入江。（微笑し乍ら）婆や、おまへ妬いてゐるね。

婆や。まさか。此年になつてあなたの奥さんを妬いてどうするんです。私は只あなたの爲ばかりにさう云ふんぢやございませんか。ほんとに飛んでもない。

入江。だつて餘り反對のしようがひどいからさ。僕の氣に入つたものなら、おまへも氣に入つて呉れなくちやいけないよ。何もあれを細君にするからつて、おまへを追ひ出す譯ぢやなし、邪魔物扱ひにする譯ぢや猶更ないんだからね。おまへだつて僕のほんの少さな時からの婆やぢやないか。ね、ほら、おまへもまさか覺えてゐるだらう。俺が畫をやりたい一心で家を離れて茲へ來た時、おまへは俺の世話ならどこへ行つてもすると云つて一緒に來て呉れたぢやないか、俺はあの時から陰乍らおまへには涙の出る程感謝してゐるんだ。今でこそさうでないがあの時俺のほんの味方になつて呉れたのは全くおまへ一人きりだつたからなあ。その恩を忘れてなるものか。（間）俺は早くからお母さんを亡くしてゐるんで、おまへをほんとにお母さんのやうに思つてゐるんだよ。だからね。今度の事も贊成してお呉れ。いゝかい。ね婆や。

婆や。（涙を溜めて笑ひ乍ら）まあ若旦那樣も大變お口がお上手におなんなさいましたこと。さう仰れると婆やも否とは云へませんがね。

入江。ぢや贊成して呉れるんだね。

婆や。ほんとにあとで御後悔なすつても、婆やは知りませんよ。

入江。それは心配しなくてもいゝよ。

婆や。でもあなたはほんとに移り氣ですからね。吳々もようくお考へになつての上になさいよ。
入江。俺も此度と云ふ此度はよく考へたよ。
婆や。それでお宅の方へは御相談なすつたのですか。
入江。いや、まだだ。がすぐにもしようと思つてゐる。
婆や。大旦那樣は何と仰いますか。あなたもかう怠けてばかりおいでになつて、そんな事を仰つては、きつとお叱りを受けますよ。
入江。なあに其時は又其時で、どうにでもしようがあるさ。親父だつてさうつけ〳〵俺に反對もしまいよ。俺はもうどうせすつかり見限られてゐるんだからな。
婆や。見限られてゐればこそ、確かりして偉らい畫かきになつて、皆さんを見返しておやんなさいと云ふんです。
入江。僕だつてその中にはきつと傑作を出すよ。いつ迄もかうしてゐるものか。あの女の手で愛の庇護を受けたら、俺の荒んだ惰けた心にも、神來が湧くかも知れない。だからね婆や。おまへもどうか俺達の面倒を見てお吳れよ。
婆や。それあ貴方の事ですもの、御面倒を見ないでどうするものですか。（間。卓上を見て）もう宜しいので厶いますか。
入江。（紅茶の餘滴を飲み了つて）あゝもういゝ。
婆や。（食器を持つて去り乍ら立留つて）ほんとに今の事はよくお考へなさいましよ。
入江。婆やもほんとに苦勞性だねえ。
婆や。だつて……（と云ひかけたが、やめて靜かに首を振り乍ら出てゆく。）
（一人となつて入江は、卷煙草に火を點け、立上つて自分の繪を見分する。そして絕望の身振りをして、又卓子の處へ戻り、腰をかけてぢつと物思ひに沈む。）

小島。（創作家。庭の方より入り來り、畫室の硝子戸をコツコツと叩く。）おい入江君、差閊ないかい。

入江。やあ君か。（戸を開ける）さあ入り給へ。

小島。仕事の邪魔にはなるまいね。

入江。御覧の通りだ何もしちやゐないよ。今も舊い製作に何かいゝのがあるかと思つて出して見た處だが、どれもこれも物になつちやあゐない。

小島。大抵僕も一度見た畫だね。（二三枚を見乍ら）それで今年の展覧會物にはまだかゝらないのかい。

入江。あゝ、やればこれから一瀉千里でやるつもりだがね。先づ神興の到るのを待つてると云つた譯さ。

小島。神興か。けれどもそれに就ちやあロダン翁でさへ云つてゐるぢやないか。インスピレーションなんぞをあてにしてはどうなるものでもないつて。

入江。ロダン所ぢやない。うちの婆やまでさう云つてゐるんだが、さて俺にはどうしても怠け癖がぬけないんで困るよ。此二三ヶ月と云ふもの、うか／＼と飛び歩るいてゐて何一つしやしない。前の冬のやうな元氣はまるでなくなつて了つた。せめてあの半分も製作欲が湧いて呉れるといゝんだがなあ。

小島。さう／＼。あの時は君はまるで狂ひのやうに描いたつけな。其癖作品の大半は未完成の儘だつたが、どの一枚にも相應な生命があつた。さう／＼、あの時の「切り崖」はどうしたい。

入江。（左方にある額を指す。）あすこにあるが、大したことはないよ。

小島。（近よつてみる。）今見るとそんなでもないが、君のでは佳い作に相違ないね。尤も、今描いたらこれよりはうまくなつてるだらう。

入江。どうだか。僕にはさう大して自信もないよ。

小島。困るねゝさう萎縮しちあ。(間) 餘り怠け過ぎた罰だよ。

入江。製作が思ふやうに行かなければ、遊び歩きもするさ。遊び歩けば怠け癖がついて、筆を取る元氣もなくなるさ。僕はもう今年は投げたよ。

小島。まだ〳〵投げるには早いぢやないか。是から一つ踏張つて見給へよ。二三十號位のものを仕上げるのには時日は充分あるぢやないか。(間)俺も實は大方こんなだらうと思つたから、今朝は散歩の序でに刺戟に來たんだがね。(間)どうだい、一つ氣を換へて人體でもやつて見ちやあ。

入江。まあやれば僕もさうする考へだがね。

小島。ぢや早速さうし給へ。併しさうとするとモデルが要るが、此頃は皆が使ふんでいゝモデルが拂底だと云ふさうぢやないか。

入江。さうださうだね。北村なんかも困つてゐると云ふ話だ。

小島。ぢや君も早く手を廻さなくちやいけないね。

入江。うん。その心配は無いよ。毎日あの鈴木に來るだけは來て貰つてるんだ。

小島。(一種の表情をして)あの可愛いゝ「涙のモデル」かい。ふむ、さうか。(間)して見ると世間の噂はほんとうで、君は今人生の製作に忙しいと云ふ譯だね。がまづそれもいゝさ、決鬪と姦通をし乍ら、あの偉大なる製作をしたゴヤなんぞもゐるんだからね。併し君はゴヤぢやない。そんな處へ餘り精力を使ふのはよす事だね。僕等に取つては第一が創作。人生は其次だ。

入江。(考へ込んで)さうかなあ。此頃僕はそれを疑ひ出して來た。

小島。そんなことを疑つてどうするんだ。僕等は要するにどん〳〵創作をすればいゝんぢやないか。まあ君も畫架を一つ

立てゝ、パレツトと筆を持つてみるんだね。而して何かしら描いてみるんだ。するときつと何か描き度いものが生じて來る。それは僕等だつて同じことだ。書けない書けないと思つても机の前に坐つて、原稿紙に向つてゐると何かしらが湧いてくる。

入江。どうせそんな時のは碌なものぢやあるまい。

小島。處がさうとは限らないんだ。却つて浮ついた神興めいたものに任せた書きなぐつたのよりも、沈着で堅實なことゝへある。而して根強い力がその中に滲み出す事さへある。だから君も此時を利用して沈着に筆を取つて見給へ。どうせ出陣に間に合はなかつたら、それでもいゝぢやないか。兎に角やれるだけやり給へよ。

入江。有難う。それぢややつてみるとしよう。何だか君と話してると、今にもやれさうな氣だけはする。やつてみなければ解らないが……。

小島。それで僕も安心した。友達が勉強してゐないと寂しくていけないからね。ぢやしつかりやり給へ。失敬又來るよ。

（卓上の帽子をとりあげる。）

入江。あゝもう歸るのかい。早いね。

小島。ぐるりとそこを散歩して歸る。歸れば恰度十時だ。僕の創作に取りかゝる時間になる。

入江。鳥渡待ち給へ。そんなら僕もそこいら迄話し乍ら散歩しよう。何だか今朝は君とまだ話し足りないやうな氣がするから。

小島。そいつは猶結構だ。ぢや出掛けよう。

（二人は帽子と杖とを持ちて畫室の戸より庭の方へぬけて去る。長い間。小鳥どこやらにて鳴く。）

婆や。（手に二通の電報を持ちて登場。）旦那樣。電報でございます。おやゐらつしやらない。今迄お話の聲がしてゐたやうだ

つたが。どこへお出掛けなすつたんだらう。(電報を卓上に置いて、一旦引込み、手に箒と叩きを携へて登場。凡べての戸を開け放して、掃除を初める。)

みどり。(可憐なるモデル女。手に草花をもちて庭の方より入り來る。)おばさん。お早うございます。

婆や。(鳥渡見返したが、冷淡に)おや。おまへさんかい。今日は又大變早くおいでだね。

みどり。えゝ。(間)あの入江さんは。

婆や。急にどこかへお出掛けなすつたんだよ。何とも仰らずに。

みどり。あのお遠くへですか。

婆や。さうぢやなからうと思ふんだがね。(一種の技巧を以て)何時お歸んなさるやら。……おまへさん何か御用なの。

みどり。いゝえ。さう云ふ譯ぢやないんですけれど、あの入江さんがお描きになるかと思ひまして。

婆や。どうして此頃は何だか傍に惡るい人がゐると見えて、怠けてばかりおいでになるんでね。ほんとに困つて了つてるのだよ。みどりさんも少し勉強なさるやうに云つてあげて下さいよ。

みどり。あの私も御勉强なさるやうに毎もお勸めしてゐるんですけれど。

婆や。あのお前さんが? おやまあさうですか。おまへさんがさう云つて呉れあ少しは効目がありさうなものだがねえ。

みどり。何だか私の處へおいでになつてはよく「近頃はあの外の凡べての仕事に興味を失つた」なぞと心細さうに仰るので、私陰ながら心配してゐるんですの。

婆や。おまへさんがですか。それはまあ有難うございますがね。では何ですか、こちらの旦那がそんなに度々おまへさんの處へおいでになるんですか。

みどり。度々つて譯でもないんですけれど、よそで時々お目にかゝつたりするものですから。

婆や。よそつて何處で？

みどり。（幾分まごついて）あの北村さんや川田さんのお宅なぞで。

婆や。まあさう。（間）ですがねみどりさん。これはほんの私一人のおまへさんだけにのお話ですがね。あのどうかおまへさんも氣を附けてうちの旦那と間違ひのないやうにして下さいよ。あのお方もいろ〳〵な反對を押しのけて、折角此處迄漕ぎつけておいでなすつたんですからね。此處でつまらない事から、又御本家との關係が面白くなくなりでもすると大變ですからね。

みどり。（下を俯いて）

婆や。それにねえみどりさん。おまへさんもよく考へなほしてお見んなさいよ。それあおまへさんの事だから、此方の旦那樣の御本家に、お金があるからなんぞとはまさかお思ひぢや無からうけれどね。……

みどり。（手に持つてた花を床上に落として）まあおばさん！。

婆や。いゝえ。おまへさんはさうぢやなからうけれど、世間と云ふものはよくさうした事を考へるものですからね。そんなことを他人樣から云はれるやうな事はなるたけしない方がようござんすよ。第一こちらの旦那樣は何と云つても御身分がおあんなさるのだから、おまへさんもよく〳〵前後の事情を考へていないと、虻蜂取らずの飛んだことになりますからね。だから私は餘計な心配だけれど、こんなこと迄おまへさんに云ふんですよ。

みどり。ええ。よく解りましたわ。（低く）ですけども私ももうその位の覺悟はして居りますの。

婆や。え、覺悟だつて？

みどり。いゝえ。何でもございませんの。私ほんとにたゞ穢ない心からでなく此方の旦那樣の爲めを思つてる事がお解りになつて下されば本望ですの。私たゞほんとにさう思つてる事だけが通れば澤山ですのよ。だから、もう餘り此方へお

上りしないやうに致しますわ。（急に悲げに）今日だつて、私もうお目にかゝらずに歸りますわ。

婆や。ほんとにおまへさんよく怒らずに聞いて下すつたわね。ほんとにおまへさんの氣立の優しいのには私陰作ら感心してゐるんですよ。よく聞いて下すつた。さう云つて下さると私が一時でも劍のある物云ひをしたのが恥しくなりますよ。ぢやどうかなるたけさうしむけてお呉れでないかね。おまへさんにもほんとにお氣の毒だけれど。……

みどり。いゝえ、私なぞはどうせ不幸に生れついてゐるんですから、こちらの旦那樣が幸福になつて下さればそれでいゝんですわ。（靜かに花を拾ひ集め作ら）ぢやどうか宜しく仰つて下さいまし。（悲しさを隱くして）さよなら。

婆や。ぢやさよなら。ほんとに私の云つた事は氣に掛けないで下さいよ。私もお二人のためを思つて云ふんですからね。

みどり。（悲しげに）えゝ。わかりましたわ。さよなら。（花を持ちたる儘靜かに庭の方から去る）

婆や。（後を見送つてぢつとしばらく立つてゐたが、姿が見えなくなると急に嫉妬に似た惡感を彼女に對して感じてくる。）えゝ、ほんとに口のうまい娘つたらありやしない。あれで家の坊ちやんを欺さうとしてゐるんだよ。（と行つた方を睨みつける。）お陰ですつかり云はなくてもいゝ事を云つて了つた。（再び掃除の後片付にかゝる。卓子椅子なぞを適宜になほしみどりの落とした花のこぼれなぞを慳貪に掃き出す）

入江。（しばらくして庭口から歸つてくる。）あゝやつと淸々した。今小島が來たんでね。二人でそこいらをぶら〳〵歩いて來た。

婆や。まあさうですか、あの電報が參つて居りますよ。

入江。どこに。

婆や。そのお机の上にありますわ。

入江。あゝこれか。（急いで開封して讀む）

婆や。何か又御不幸でもあつたのでございますか。
入江。いや。信州の山の中に引込んでゐた内山が今日來るつて云つて來たのだ。
婆や。あの髯のある内山さんでございますか。
入江。いや。キング白粉の圖案部にゐる内山ぢやない。今日來るのはあの痩せた内山だ。去年の冬僕と一緒にゐて、間もなく信州へ歸つた男さ。
婆や。あゝあの方でございますか。あの變つた所のある……さうですか。今日つて云ふともうすぐおいでになるのですか。
入江。十時に上野へ着くと云ふんだ。あの男の事だから電車の乘りやうを忘れたかも知れない。間に合ふんなら迎へに行つてやりたいが、もう駄目だらうね。
婆や。さうですね。もうかれこれその位の時間でせうね。
入江。ぢや放つといても來るだらう。迷子になつた處が知れたものだ。
婆や。ぢやあのお晝の支度はしなくちやなりませんわね。
入江。うむ。して呉れ。
婆や。ぢやさうしませう。(行きかゝる。)
入江。えゝとあの婆や。(婆や立止まる。)あの留守中にモデルが來なかつたかね。
婆や。(躊躇して)いゝえ。存じませんでした。尤もお留守の間に來て歸つたのかも知れませんが、私向ふにばかりゐたものですから。
入江。あゝさうかい。そいつは可怪しいな。確かに約束だつたんだが。
婆や。(又戻つてくる)あの旦那樣。今朝お話しのみどりさんの事ですがね。婆やもよく考へて見ますから、貴方もよくお

考への上になさいましよ。

入江。いゝよ、いゝよ。あれはおまへになんぞ指圖して貰はなくてもいゝんだ。(間)がそれはそれとして、今何だか急に構圖が湧いたんで、あいつが來て呉れなくちや困るんだがねえ。婆や、まさか留守中に來て誰もゐないんで歸つたんぢやあるまいね。

婆や。ひよつとするとさうかも知れませんよ。

入江。婆やもほんとに氣を附けてゐて呉れなくちや困るぢやないか。ほんとに――。

婆や。ではお電話をおかけなすつたら如何でございます。學校かどなたかの畫室にゐるでせうから。

入江。ひよつとすると川田の家にゐるかも知れない。ぢやおまへあとで角の自動電話をかけてみてお呉れ。

婆や。私ぢやどうも自動電話は……

入江。さうか、よし〱。ぢや俺がかける。ぢや又紅茶を濃くして置いて呉れ。(出かけようとする。其途端に此家の前で自動車が止まつた音がする。)おや。誰だらう。自動車なんぞへ乘つて來るのは。なんだ親爺か。(庭の方へ出て迎へる。)お父さん。此方からおいでなさい。其方が便利です。(父あたりを見巡し乍ら庭の方から現はれる。)

光藏。大變いゝ處だな。

入江。だから一度來て見て下さいと云つてるんです。

光藏。(畫室內に入つて見巡し乍ら)俺は何しろお前のやうにいつも暇のある人間ぢやないんだからな。處が今日は恰度駒込の岩木さんを訪問して、歸りに鳥渡此處を通りかゝつたから寄つて見たのだ。

入江。ほんとに恰度いゝ時においでなすつて下さいました。

光藏。(畫などを見乍ら)又丁度金がなくなつた處だと云ふんだらう。お前に會つちや敵はん。(一つの畫を見て)うむ。こい

つは少しうまくかけてる。

入江。ええ、金も金ですが……他に話もあるんです。

光藏。こいつを一つ俺の應接間へ持つて行かうかな。こいつは先づ甲の部だ。

入江。お父さんにその畫がわかりますか。

光藏。解るとも、海の畫ぢやないか。俺は海の畫が大好きだ。

入江。船の株で儲けたからでせう。

光藏。馬鹿を云へ。もとから俺は好きだつたぢやないか。今迄應接間に在つた奴だつて怒濤の畫だ。第一海の畫は壯快でいゝ。見てゐて胸がすく。

入江。さうですね。お父さんの持つてるあの畫ゝ先づラムネを飲む位の價値はありますね。處が僕のそいつはさうは行かんでせう。第一ほんとの海はさう黄色つぽくはありませんや。

光藏。併し俺も一度位はこんな色の海を見たやうな氣もするよ。さう〳〵あれは確か九州のどこかだつた。俺は汽車の中でぐつすり一寢入りして、ふいと窓外を見ると、太陽が海を照らして、こんな風に見えた事があつた。ほんの一秒間ばかりだつたがな。

入江。へゝえ。お父さんでもそんなことに目をとめる事があるんですかねえ。中々偉らいもんですねえ。

光藏。さうとも。たまにも俺だつて景色位は見らあな。兎に角此畫は先づ此處にある中ぢや逸品だ。傍で見るとポチ〳〵ばかりで何だかよく解らないが、離れると波頭の光つてるのが仄やりわかる。こいつはおまへのでも傑作の中だらう。

入江。なあに、そんなのは點描派の影響を受けてる時分の、舊るい作ですよ。つまらない作ですが、私には一時期を劃したといふ意味で、此處へ掛けて置いたのです。

光藏。さうか。まあそれはどうでもいゝ。兎に角俺は一つこいつを持つて行かう。

入江。ほんとに持つてゐらつしやるのですか。

光藏。うむ。持つて行つてやる。

入江。ぢや勿論代價を置いて行つて下さいますね。今からお禮を云つて置きます。

光藏。際どい處で一本參つたな。一體幾らだ。

入江。五百圓です。

光藏。篦棒に高いな。

入江。なあに安いもんです。ほんの額緣と畫布と顏料の値段ですよ。出して下すつてもいゝでせう。その代り一二ケ月はねだりに行きませんから。

光藏。そんな金の持ち合せは無いよ。

入江。ぢや小切手を書いて下さい。實は僕もこれから展覽會の製作をやらなくちやならんので、材料を買ふのに金が要るんです。

光藏。（話頭を轉じようと思つて）おまへなんぞはどうせ落選だらう。

入江。あの展覽會なんぞ落選したつて別にかまひませんが。通るつもりなら、すぐ通りますよ。

光藏。ぢやあかうしようぢやないか。おまへがあの展覽會に通つたら、お前の云ふ通りに出してやらう。いやもつと出してやつてもいゝ。が、今は只此處にある二百圓だけ置いてゆくから、それで當分我慢して呉れ。

入江。かう云ふ取引になると矢つ張りお父さんの方が老巧ですね。ぢや今日の所はそれで我慢しませう、其かはり僕が通つたらきつといくらでも下さいますね。

光藏。うむ。やるとも。幾らでもやるよ。展覧會へ出れば、まあお前の繪にも市價が生じたと云ふ譯だからな。幾らでも市價さへ出れば、幾らお前に金をやつても、資本を注ぎ込んだと思へば、俺の心が濟む。いざとなれば、お前の繪をみんな取上げて了へば、滿更損失と云ふ譯でもあるまい。

入江。成程。さう云ふ見方も、繪畫を實業と同じに見る意味で、お父つあんらしくて結構ですな。さう迄徹底的に仰有られると、いつそ痛快で、寧ろ同感と云ふ氣がしますよ。

光藏。一體お前たちは、すぐそんな事を云つて、一と廉の皮肉らしく、馬鹿にするやうな顔をするが、第一市價を輕蔑するなんて、そんなに社會に對して、いや、又、お前たちのよく云ふ、人生……とやらに對しても、失禮な話はない。第一市價と云ふものは、當にならない、思ひがけないやうに見えてゐて、あれで存外正直な、無理でないものだ。少くとも一般の人たちに、その品を見る標準を與へるだけでもいゝ。お前たちも稍々、市價と云ふものに對して、もつと素直な考へを持たなくちやあ、偉大なる人物にはなれない。

入江。さうですかなあ。だつて今西洋で一番高い、レムブランドだつても、生前、殊に晩年は一向市價が無くて、窮死したさうですがねえ。それから、……と、お父つあんだつてお好きな、大雅堂だつて、京都の郊外の草庵か何かで、紙を着て寢るやうな貧乏な生活をしてゐたさうぢやありませんか。あんなのはどうなるんです。

光藏。そんなものは、昔の封建時代の、社會的認知の缺けてゐた時分の話さ。大雅堂だつて、其時分展覧會があれば、きつと一等賞を取つてゐたに違ひない。展覧會に出さなければ、出さなくたつてきつと誰かゞ、市價は幾らかつけて呉れたさ。所謂不遇の天才とやらがある事は、不遇の凡才どもに取つちやあ、大變都合がよからうが、お父つさんはさう云ふ不遇の凡才と云ふ奴が、世の中で一番嫌ひでね。其點からしてもお前は、一應展覧會なり何なりへ通つて、一般に少しでも認められ、俺に不遇の凡才でない事を、知らせなくちやならん、どうだ。それが出來るか。眞正にいゝ畫家なら、

展覽會へ通る位、何でもない話さ。お前にそれが出來るかね。

入江。（少し悄氣ながら、反抗的に微笑を浮べて）出來ますとも。通る位何でもない事です。

光藏。ぢやあやつて御覽。そして通つたら、お父つあんはお前の望みなら、聞けるだけ何でも聞いてやる。俺の鼻も少し高くなる譯だからな。

入江。宜しうございます。それぢやあ展覽會へ通れば、何でも無理でない事なら、望みを容れて下さるんですね。

光藏。うむ。さうとも、俺に首を縊れとか、臺灣で出來る砂糖をみんな海中へ棄てろとか云ふんでなければ。——いや、併しそれでもいゝ。どうせ通りつこはあるまいからね。はゝゝは。

入江。よし。其お言葉を忘れちやいけませんよ。きつと通つて見せますから。——尤も御安心なさい。通つたからつて、お父つあんの持ち株全部を、私に呉れとも云ひやしませんから。毎月相應な金と、それから、或る人と結婚を私に許して貰へればそれでいゝんですが。……

光藏。結婚？　お前がか。誰と結婚するんだ。

入江。まあ展覽會へ通つてからに致しませう。

光藏。さうだな。それもよからう。だが、展覽會はお前、矢つ張り官設展覽會だぜ。いゝかい。分つたかね。

入江。分りましたよ。そんな點、誰がお父つさんを誤解すもんですか。

光藏。ぢやあ宜しい。いづれ展覽會が開かれてから、お前に改めてお目にかゝらう。

入江。はあ、さうしませう。だが、差し當つてその海の繪の、後の三百圓は貰ひに出ますよ。

光藏。うむ。それはまあ、俺のお前に對する　最後の見込のない支出として出さう。若しそれで、今度の展覽會へ通らなかつたら、それがまあ謂はゞ最後の手切れ金　涙金だからな。——ぢやあ又來るよ。ぢやあない、うまく行つたら、展

宴會場で會はう。

入江。え〻、お目にか〻りませう。左樣なら。どうぞ〳〵お茶も差上げないで。

光藏。お前ん所の茶なんぞ、どうせ飲みたくはないよ。——ぢやあ後で、その海の繪を取りによこすからな。

入江。え〻。お金を忘れないで下さい。

(父の光藏、入つて來た方から悠然と葉卷をふかしながら出て行く。入江は其後姿を一種の反感を以て見送つてゐたが、其儘永い間入口の所で物思ひに沈む。やがて急に身を振り動かして畫室の中へ入つて來たが、ぐるりとか〻つた自作の額を、一々ずつと見渡し、それから又一方の帷樣のもので隱した、押入れの中を開けて、中から大小さま〴〵の古いカンヴアスを取出し、出品出來さうな作品を點檢する。そして一種失望の身振りをして、其處の椅子に沈み込む。畫室の戸突然開き、畫家、内山英太入り來る。黒顏長身、朴訥らしく又才人らしき青年。飛白の筒袖に、釜の如き破帽を冠る。手に畫布を卷きたる、可なり大きな棒狀のものを攜ふ。)

内山。おい。やつて來たぜ。

入江。(驚いて振向く)やあ、來たね。さあ入れよ。(二人近寄つて互に肩に手をかけ、久闊を叙する)よくやつて來た。電報は先刻受取つたが、受取りようが少し遲かつたんで、迎ひに行けなかつたよ。でも、よく此の家が分つてよかつた。

内山。何、電報! そんなもの打ちやしないよ。

入江。だつて來てゐるぜ。そら、こ〻にある。見給へ。

内山。(卓に腰を下ろし、電文を見る)うむ。成程。ぢやあ打つたつけかな。いや、さうぢやない。それぢやあきつと昨日まで、鳥渡泊つてゐた友人の奴、心配して打つて呉れたんだ。

入江。さうか。どうりで君にしちやあ、ちと氣がき〻過ぎるとも思つてゐた。

内山。だが、氣がきいたと云ふだけの効果もないぢやないか。

入江。それはさうだね。――だが、其後どうしてゐたい。相變らず信州の山の中でも、内山式に漂渺たる生活をしてゐたんだらう。

内山。（人の好さゝうに、併し鳥渡悲しげな可愛い微笑をして）なあに、さうでもないさ。尤も大部分は、岩魚を釣つて遊んでゐたがね。

入江。（内山の畫布包みに目をつけ）それにしちやあ、大分大きな製作があるらしいぢやないか。

内山。うむ。是か。これは島渡歸る前、十五日ばかりかゝつて、一枚妙なものを描いて見た。三十號と云ふ、なか〳〵大作だがね。俺の一生に一枚しか描かない積りの、まあ通俗畫だよ。

入江。ふうむ。君の通俗畫？　そいつは又面白いな。どうして又君が、そんなものを描いてみる氣になつたんだい。

内山。うむ。――此間佛蘭西にゐる小林から、長い手紙が山の中へ來てね。急に俺あ佛蘭西へ行きたくなつたんだ。それで旅費を作らうと思つて、今度も急に出て來る事になつたんだが、實はその爲に一つ賣りたい畫を描いて見たんだがね。なか〳〵うまく、素人受けがするやうに、三色版の瑞西風景とでも言つたところで、客間へでも飾つて置けるやうに描かうと思ふと、相應に苦心が要るんでね。一二度はどうもうまく行かなかつたが、結局、うんと古風な、ビチウム澤山の細描で、思ひ切つて寫眞めいた描き方をしたら、素人好きもするだらうし、一方では少しは描寫慾も滿足するだらうと思つて、一生懸命やつて見たんだよ。するとね、妙なものが出來上つた。――一つ見せようか。

入江。うん。見せ給へ。そいつは面白さうだね。

内山。（畫布を其處へ斜に繰り擴げて）どうだい。こんなのは。――題は「高原の人」つて云ふんだ。

入江。成程。ね。（と、ちつと畫面に見入つたが其儘いろ〳〵畫家的な態度で畫布を充分鑑賞したまゝ、魅入られたやうに默つて暫らく見凝め入つてゐる。）

内山。どうだらう。そんなことで　素人は騙せないものだらうか。

入江。（感心して）ふうむ。……

内山。どうだらう。駄目だらうかね。……　何處かに賣込む口はないだらうかね。……　俺はそれで差し當り、行きの旅費さへ出來れやあ、充分なんだがね。……

入江。（やうやく畫面から目を離して。）内山。君もなか〳〵味をやるね。これだけデッサンを確に、これだけカッチリ、アカデミックに描けてゐれば、ちよいと玄人だつて騙されるよ。この半分猟師みたいな服裝をした百姓爺と云ひ、後ろの背景の殘雪が光る高山と云ひ、ぴつちりした高原の空氣と云ひ、どうも申し分なく出てゐるよ。これなら官展の審査員だつて、大抵及びもつかないだらう。中山六郎だつて、吉村弘だつて、こんなにうまくは描けやしない。こんな手が君にもあらうとは、僕は今迄ちつとも思はなかつたよ。

内山。さうだらうか。ぢやあ何處かへ賣り込む見込みは、幾らかあるね。――　だが困つたなあ、賣込みに歩くのは。描く中はこれでもまア繪だから、可なり愉快に、一種の嬉しい畫工氣分で描きはしたけれど、賣込みに歩くとなると、さすがに厭だからなあ。どうだらう。君の知つてゐるところで、何處か直ぐ買つて呉れるところはないだらうか。買つて呉れさへすれやあ、料理屋の食堂でも、停車場の廣告でも、何でも關はないんだがなあ。……　どうだらう。心當りはないだらうか。……　俺はどうかしてそれで、佛蘭西へ渡れやあ、いゝんだからなあ。もう信州の山ん中も、飽きつちまつたからなあ。どうせ、東京を離れて、引込んで居る位なら、もつと遠く行つちまつた方が、まだ面白い事がありさうだから。……

入江。（鳥渡沈思してゐたが、突然思ひ切つて、少し顔を赤めながら）おい内山。君は僕が、こんな事を申し出したら、輕蔑するかも知れないが、どうだらう、此畫を一つ俺に讓つて呉れないか。俺にすつかり賣つて呉れないか。

内山。なに、君が買つて呉れる？　それぢや誰にだつて賣るよ。だが、君がこんな畫を買つて、一體どうするんだ。どこかへ仲介しようつて云ふのか。

入江。いや、さうぢやない。僕が要るんだ。

内山。君が要る。何に要るんだ。丁度此の上へ描き潰したいやうな、何か古カンヴアスでも要る構圖があるとでも云ふのか。

入江。いや。それにしちやあ五百圓では高い。實はそんな事ぢやないんだ。俺が買ふとすれば、君から此畫ばかり買ふんぢやなくて、此の畫の作者としての權利迄すつかり、讓つて貰はなくちやならないんだ。

内山。ふうむ？　さうして一體どうするんだい。

入江。内山、まア物は相談だから、俺のさもしい心根を、輕蔑しないで聞いて呉れ。いゝか。——僕はこの畫を君から買ひ取つて、實は僕自身の作品として、今年の官展へ出したいんだ。そして是が非でも通りたいんだ。……此の畫なら、大抵八九分迄、俺は彼處でも通るだらうと思ふ。だから、是を讓つて貰ひたいと思ふんだ。

内山。（さすがに鳥渡不服さうな、併し不審の勝つた表情をぼんやり浮べて）ふうむ？

入江。俺だつて何も、人の褌でまんまとこんな角力を取らうとは思はないんだが、今日ふいに親爺が此處へやつて來てね、俺がどうしても官展へ通らなければ、金も送つて呉れないし、どんな望みも容れて呉れないと云ふんだ。で、俺も行きがかり上、きつと通つて見せるつて云つたんだが、是から俺がどんなに厭な思ひをして、無理に彼處向きの畫を描いたところで、迚もうまくは通りさうもない。僕にはそれだけの手固い腕なんぞある譯はないからね。それで君の話を聞いてゐる中にふと、こんな事を思ひついたんだ。是を僕がすつかり秘密で讓つて貰つて、厭だけれど自分の署名をしてさうして出したら一擧兩得ぢやないかと。——君は君で佛蘭西へ行けるし、僕は僕で官展を通りさへすれば、もつと

親爺の庇護で自由に、畫を描いて暮すことも出來る。其上、君も知つてゐる通り、例のモデルのみどりとの結婚も、思ひ通りになると云ふ譯なんだ。

内山。ふうむ。成程、一種の感慨を以て君は「涙」と結婚出來るし、僕は佛蘭西に行く。……さうだね。（悲しげに微笑して）たしかに一擧兩得だね。——で、此頃みどりちやんはどうしてゐる。丈夫かね。

入江。うむ。彼女も思つたより、ずつと感心な可憐な女でね。僕と正式に結婚が出來なければ、田舍へ歸つて工女になるつて心配してゐるんだがね。僕此儘にしつちまつちやあほんとに可哀さうだからね。

内山。（鳥渡それ迄顏を曇らせてゐたが）さうだね。是であの子が君と結婚が出來、僕が佛蘭西へ行けれやあ、僕も嬉しいやうな氣がするよ。（突然少し大聲で）よし。此の繪は君に賣つた。未來永劫君に讓り渡した。役に立つなら、どうか役に立てゝ呉れ給へ。——此畫だつて、いざ、すつかり君に作者の權利まで、讓り渡して了ふとなると何だか未練みたいなものが出てくるが、そんな事關やしない。いゝよ。讓るよ。そして決してそんな事他人に云はないで、何處迄も君のものにしつちまふから、君も安心して役立てゝ呉れ給へ。

入江。難有う。内山。僕を蔑まないで、よく承知して呉れた。難有う。僕。一生御禮を云ふよ。

内川。なあに、どうせ賣る氣で、描き初めた畫だ。俺の名で發表しない方が、寧ろ俺にも幸せかも知れない。——だが、うまく通つて呉れゝばいゝがなあ。

入江。大抵大丈夫だよ。惡くすると二等ものだ。

内山。俺も君とみどりちやんの爲にも、僕は通るのを遙に祈つてやるよ。

入江。有難う。其代り君の佛蘭西行きの旅費は、充分用立てるやうにするから。若し向うへ着いて、何か要るやうな事があつたら、遠慮なしに云つて來て呉れ給へ。ね。君の爲にはどんな事でもして上げる積りだから。……

内山。併し、若し此畫が通らなくつたつて、俺は知らないぜ。

入江。あゝ、いゝとも、さうなれやあ、僕がこんな事を企んだ當然の罰として、此位の物質上の損失は、甘んじて受けるよ。

内山。ぢやあ、此の畫は確に君のものだ。さあ、署名し給へ。

入江。有難う。それぢやあ誰も見てゐない中に、僕の署名をして了ふ事にしよう。(急いで繪具箱を探り、筆を取り出して署名すべく畫に近よる)だが、僕にはさすが、何か良心があると見えて、筆を持つ手が厭に戰へるよ。

内山。度胸のない奴だなあ。

(入江サインを終ろ。内心微笑しながら、覗き込んで見てゐる。モデルのみどり、再び庭より入り來りしと見え、署名の終ろ頃靜に庭の入口のところへ現れろ。)

―(幕)―

校正室から

○自分の尊敬すべき作家應募で、尤も應募數の多かつた作家は倉田さんと有島さんでした、それから武者小路、谷崎吉田さんの三人でありました。

○私どもは、讀者のための『女性改造』としたいのです、皆さんのための雜誌としたいのです、かかる擧によりて不圖讀者諸姉の念とせらるゝことが判然したことを幸福に思ひます。

○私どもは、倉田氏の自分の體驗から流れ出づる血のにじみを每號本誌に寄せて下さることは非常に希望してゐました、しかし靜思の人、寡作の人多病の人としての倉田氏は每號執筆して下さることが到底不可能だらうと信じました。

○しかし、何事も當つて摧けろです、背水の陣を敷いて氏の每號執筆を懇願いたしました、氏は本誌の希望と、讀者の希望とが合致したことを喜ばれて遂に每號四十枚內外の長篇を寄せて下さることになりました、本社は讀者と共に此事を喜びたい、そして倉田氏にも本社の乞ひを納れて下さつたことを厚く御禮申し上げます。

○それから武者小路氏、谷崎氏も長篇を寄せて下さることになつてゐます。なほ久米氏の劇曲も今月から三ヶ月間續きます。

○も一つ、玆に讀者とお喜びしたいのは賀川豐彥氏の每號執筆です、賀川氏は四月二十九日渡歐されます、その渡歐記念は我が『女性改造』と『改造』とのみに執筆して下さいます、基督、釋迦等の聖蹟に立たれた敬虔なる氏の態度―希臘、羅馬等の詩の國に於ける詩人と―その氏の態度―私どもはその第一信の來ぬ前から何等かの鼓動を感じます。

○我が『女性改造』はそれ以外、五月號では可なり讀者の滿足と驚異とを感ぜられる或事も發表し得ること丶思ひます、かくして我が『女性改造』は我が婦人雜誌界の一大燈明となり、一大先覺となり、何雜誌も模倣し得ざる大膽なる道を悠々と濶歩したのです、紛々たる雜誌は鎧袖一觸です眠れる獅子は醒めました。今後の本誌を刮目して下さい。

○それから、讀者欄も設けます、どなたでも、社會に對し婦人問題に關し公の憤りのあつた場合は可成直截に簡單にその事由をのべて下さい。一人で可成原稿紙五枚以內として下さい。私人の怨、私人の行爲に亙る中傷などは本社の大嫌ひとするところであります。

○本誌は本號より上村淸敏が主任となりました。それから本社の出版部に廣田義夫が主任となりました。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十二年三月十三日印刷納本
大正十二年四月一日發行
（四月號金五十錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷者 平田貿一郎
東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝 一六三八 一八五四 二三〇三 四四〇二
振替東京 八四〇二

戯曲 愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の悩みがいた〳〵しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ傑著だ。

本書は大正文壇の藝術的代表作として國民文藝賞を授與さる

第七十版

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番



THE JOSEI KAIZO

A LADY'S MONTHLY REVIEW OF SOCIAL AFFAIRS, LITERATURE, EDUCATION, POLITICS, ETC. PRICE. FIFTY SEN A COPY.

OFFICE: KAIZŌ SHA, 1, ATAGOSHITA MACHI SHIBAKU, TOKYO.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年三月十三日印刷納本
大正十二年四月一日發行(毎月一回一日)
第貳卷第四號

四月號 定價五拾錢(送料二錢)